
脇役の分際

猫田 蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

脇役の分際

【Nコード】

N0126R

【作者名】

猫田 蘭

【あらすじ】

『フェザー文庫』（発行：林檎プロモーション）で書籍化します。今後ともよろしく願います。

基本スペックは高めなはず。なのに私は「特別」になれない。主人公たちに囲まれた、何もかも「惜しい」私の脇役生活。しかし脇役といえども、異世界トリップにスーパー戦隊、らぶこめついでに魔女つ娘モノと、ジャンルをいくつも越えて兼任すると主人公より（精神的に）大変です、というお話。

書籍化に関するごぼれ話などは、ブログ『チエシヤ猫はニヤリとわらう』にて。

春休みの脇役

子供のころから、可愛いわね、美人さんねと言われてきたが、スカウトされるような華はなかった。

子供のころから、賢い子ねと言われてきたが、天才児というわけではなかった。

子供のころから、くみちゃんちはお金持ちだよ、いいなあと言われてきたが、別に大財閥の家系というわけではなかった。

私は、昔から自分が主役になれない事をちゃんと知っていたけれど、全てを諦めるには、（運動以外は）なんでも適当に器用にこなせるから、やっぱり悔しい。

そして、悔しいと思う自分がまた情けない。いいかげん早く諦めて、現実を受け入れねばなるまい。

ああ、そうだ。振り返ればいつも、事件を外側から眺めるだけの日々だったではないか。

中学一年の頃は、県の合唱大会出場を目指してやたら燃える先生による指導の下、伴奏者や指揮者、ソロ役のスランプ、葛藤、ソプラノ組とアルト組の争い、男子達のエスケープ、種々の問題を解決しようと奔走しているうちに芽生えた恋物語など、なかなか熱い展開があったが、それらをただ、「大変だなあ」と見ているだけであつた。

そもそもソプラノとアルトを、よく声を確かめもせずに名簿で振り分けたのが一番問題だったのではないかと思うのだが。

高いうえに変に響いて困る声（というかアニメ声一直線）の私がないぜアルトなのか？　そこに苦しんでいたのも、はつきり言ってクラス全体の大騒ぎに関わる余裕が無かった。

中学二年の頃は、何故かドラマも真つ青な、種々の問題児を多数抱えるクラスの中にいてただ一人何もトラブルを起こさず、当然クラスで起こる細かい争いにも関わらず、それらを乗り越えて作られてゆく友情物語にも入り込めず、かといって孤立するでもなく。ひたすら適度な緩衝材として過ごした。

こんな荒れた学校にいて私の将来は大丈夫なのかと不安に駆られ、勉強に打ち込んでいた気がする。でもよそのクラスは問題なくほのぼの過ごしていたようなんだけど。なんで私のいたクラスだけあんなことになったんだろう？

結局あのクラスの荒れっぷりは未だにあの中学の伝説になっているという。先生お疲れ様でした。私はほとんどお世話になってなかったと思うけれど。通知表に毎回「大人しい子です」と書いてくださったけど、そりゃ比較対象があんまりだったからだと思っただけです。

中学三年の頃は、前半はほぼ平和であったものの、夏休みを過ぎず受験をはつきり意識しだしたあたりから色々おきだした。

中学最後の大会に賭ける運動系の部活の青春モノやら、高校推薦枠をめぐる裏取引のエトセトラやら、恋人同士が志望校の違いで葛藤する姿やら、やりたいことが分からないと突然行方不明になった誰かさんが大切な心の何かを見つけて帰ってきたハートフルストーリーやらが。

ところが私はなまじ素行も成績も良かったために受験関係のお悩みはすんなりとスルーしてしまっただし、部活は適当だったし、そこそこ親しかった友達も、近場の高校に進学が決まっただし、もともと

人情が薄いのか卒業式でよく見られる号泣もしなかった。だってむしろ清々したもん。

中学校生活は、まあこんなもんかと過ごした。きつとあの学校は熱い人々が集まる所なのだと。私がちよつと人より冷めてるせいで傍観者でいるしかなかったのだと。

高校に入ったら私だって！ 我ながら見た目は捨てたもんじゃな
いと思うし、かるく猫かぶっていれば優しい恋人の一人くらいは
できるに違いない！ と、がんばってテンションを上げて新しい校
門をくぐった。

高校一年生。春の陽だまりの下、不意に吹き上げた強い風が桜を
散らし、その恋は始まった。いや、私じゃなくてね？ クラスを巻
き込む壮大なすれ違い恋愛ストーリーを繰り広げた二人組の事であ
る。

最初のうちは普通に、ただじれったいだけのくっ付きそうできつ
付かない二人をクラスのみんなが応援しているストーリーだったと
記憶している。

しかしやがて、転校してきた彼氏の幼馴染の超美少女（結婚の約
束をしていたらしい）の出現とか、それに悩む彼女を励ますうちに
本気で惚れてしまったクラスの男子によるちよつとした暴力沙汰と
か、その男子に心を寄せていた女生徒の自殺未遂とか、その親友た
ち（事件発覚後に突然増えた気がする）による少々ずれた激しい抗
議（という名を借りたいじめと肅清）なんかがあって、クラスの雰
囲気は一気に悪化してしまった。

更にその自殺が、実はクラスの調和が乱されに乱されたことに甚
く腹を立てた一部の女子達による狂言であった事を見破る推理話へ

と展開し、最終的には振られた同士、幼馴染の子と横恋慕の男子が慰めあつてくつつくとか、いやはや、もう。

あんまり激しく展開したので記憶がおぼろげになるほどである。風呂敷広げすぎだろうとも思ったが、きつちり年度末までに畳めて何よりである。

そんな恋の嵐の中で私が何をしていたかということ、いろんな人たちから相談されたり、愚痴を聞かされたり、情報源として扱われたり、していた気がする。モブ以上脇役未満みたいなポジション？

あくまで一歩引いて観察していた（ちがうんです、ほんととは勢いのありすぎる展開に滅茶苦茶ビビっちゃって仲裁にさえ入り込めなかっただけなんです）私はどうやら「こういうことに興味の無い落ち着いた人。でもいつも話を聞いてくれる」と、好意的に認識されたいらしい。

誰が言い出したか知らないけど、平和な役割を与えてくれてありがとう、ありがとう！

高校二年生。一年時のトラウマで、恋愛恐怖症になった気がする。そもそも人間って、生き物なんだから子孫を残すのがお仕事で、つまりその前振りである恋愛というのはきつと本能を刺激するととても重要な儀式なのだろう。だからあんなにみんな殺気立ってたんだ、きつとそうだ。私にはまだ十年くらい早いなあ、アハハ。

と思った私は、ますます自分の殻に引きこもった。

幸い前年のイメージで、私はあまり人と接しない物静かなタイプだと認識されていたので、休み時間は本または教科書を広げておけば「真面目だねえ」とか、せいぜい「ノートみせて」「宿題教えて」くらいのコミュニケーションで過ごせた。

が、かといって全く平和だったかと聞かれたらそんなことは、な

い。ない。（大事な事なので……）

まず、起こったのは怪奇現象であった。といっても、不可思議なものを見た、とかではなく、教室内の物がやたらとなくなる事件。

消えたのは大して金銭的価値は無いと思われる、筆箱とか、ノートとか、シユシユとかだったので、始めのうちは「どこかに置き忘れたのかな」で済んでいたのだが、頻度が尋常じゃなくなって被害者じゃないほうが珍しい、というレベルに達してとうとう事件認定された。

犯人は「相手に無視をされた」という被害妄想に駆られた生徒であった。新しい学年になって、仲の良かったグループと離れて、ちよつとノイローゼになっていたのだと思われる。

この時、一度も被害にあったことのない私は容疑者の一人だったので、ちよつとドキドキした。でも私がほんとに犯人だったら、自作自演の被害くらい申告するからね？ そんなに能天気じゃないからね？

次に、一年の頃不登校だった男子が登校してきて、同じクラスの何やら因縁のある男子とモメて、教室内で刃傷沙汰を起こした。

近くにいた生徒も数名まきこんでの大立ち回りで、かく言う私も運の悪いことに、吹っ飛んできた机に腰を強打し保健室に連れて行かれた。

翌日には紫を通り越しどす黒いほどの痣になって、数日間はスカートをはくのさえ痛かった。

その次は、中学校時代のいじめの被害者が、加害者に真綿で首を絞めるようなやりかたで復讐をする、という、サスペンスのような事件。

自業自得というか、お互い立場を交換すれば今まで見えなかったものも見えてくるのではなからうか、と思わなくも無かったのでは

まちまと元被害者が工作してまわるのを「は見た！」的ポジションで静観させてもらった。

怖かった。イジメ、カツコワルイ。イジメ、ヨクナイ。ってゆーかなんで私に見られてるの？もつと周りに注意を払った方がいいと思うの。私まで巻き込まれたらどうしてくれる！復讐は計画的に。

更に、別れ話がこじれてストーカーになった子が警察に捕まったり、かと思えば、節度あるお付き合いの範疇を越えて無計画に妊娠してしまったカップルが墮胎のために学校中で寄付を募って先生にバレて退学になったり……。

私にもしつこく要求してきたが、「そんな事に出すお金なんか一銭も持ち合わせておりませんのよ、うふふ」とは言わずに、「ごめんね、ちよつと思いついた買い物したばかりなの」とお断りした。

アレか、私にとって2学年というのはすさむ年なのか。大学2年は銃撃戦でもおこるのだろうか。不安だ。

とにかく、こうも色々起こると流石に、なんだか私っておかしくない？と感じるようになった。もしかして私は、トラブルを引き寄せてしまう性質なのかもしれない。いや、体質と言おうか。むしろ才能？

「一人の人間が、もしかしたら一生に一度くらいは出くわすかもしれないようなちよつと変わったできごと」を周囲に頻発させる、というのは、立派に才能ではないのか？いや、起こしたのは私じゃないけどさー。関わるだけでおなかいっぱいなんですよ、神様。

年々エスカレートしてゆく気疲れするイベントを、なんとか止める術は無いものだろうか。と、明日の始業日を恨めしく思う私なのでした。

4月の脇役そのいち

4月。私はこの月が一番憂鬱だ。
なぜかというと、新しい人間関係を構築しなおさねばならないからだ。

何せ知り合いが増えるほど面倒ごとが起こる。高校3年間くらい、ずっと同じクラスでいいと思うんだけどな！ ダメですか、出会いがほしいですか？ そうですか。

そんな私はとうとう三年生。クラスの人数は33人。男女比は16:17である。おおっと、早速良い具合の比率だ。主に私だけあぶれそうという意味で。

今年是最終学年なので、高校生活最後の思い出作りにとカップルが乱立する可能性が十分にあるわけで。どう引いても足しても、女子が多い。

うん。まあ、いいだろう。クラスメイト同士のほのぼのした青春恋愛モノばかりで済むなら、大いに結構。平和が一番だ。爽やかな、若者らしい交際で済めば何よりだ。一年の頃のトラウマよさらば！
私は清く明るい男女交際を歓迎する！

復讐劇とかバイオレンスとかはもうたくさんです。心がすさむから。

とにかく今年は開き直ったので先手必勝である。

名付けて「物騒なことになる前に全部学生の恋愛モノでお茶を濁しちゃえ作戦」である。要は、積極的に脇役の役目を果たす事で周りの事件をコントロールしてしまおうという試みだ。

今年受験なのだし、なるべく穏便に過ごさせてください、と、ご近所の神社にも願掛けをしてから登校した。

教室を一通り見回して気が付いたが、このクラスはなかなか濃いメンツが揃っている事が分かった。恐ろしい事に、一年の時のあの四人組が揃っている……。 (クラス多いんだからちゃんとバラしとけよ、こじれたらどうする！)

あー、そこに座っているのは学年一の有望株の生徒会長ではないですか。ちっ、忌々しい。お金持ちでイケメンで文武両道とか、全部中途半端な私にケンカ売ってるとしか思えない。 (嫉妬)

おっと、あそこでイチヤついているのはかの有名なツンデレカップルか。

その他、お嬢様とその従者っぽいのか、現代に生きる武士、みたいなのとか、ものすごく個性的な人々が揃っているようでちょっと前途多難さに顔が引きつったかもしれない。

このクラス、ただの恋愛ものだけじゃ収まりつかない気がするんですけど。どこかに普通のほほえましい二人組みはいないのっ？

と、焦っていたら自己紹介のときに見つけた。見つけてしまいました。

出席番号1番、青井 恵子さん。サッカー部マネージャー。出席番号2番、赤井 圭介君。サッカー部所属。わかりやすい。

あれでしょう、名前もなんか似てて親近感覚えるし、部活も一緒そんな彼女(彼)が気になるけれど、せつかくのこの関係が壊れちゃったら怖い……。みたいなの？ けっ。(やさぐれ)

一週間ほど観察して分かったのだが、赤井君は、爽やかスポーツ少年という言葉を実現化したようなコだ。笑うと歯がキラッとするような気がする。きつと幻覚だけど。苦手だ、私あの人苦手だ。

対する青井さんは、ちょっとトロそう、失礼、おっとりした印象の、普通の女の子。ぽーっと笑う、タンポポみたいな子だ。すげえ。私はあんな風にできねえ。しかし意外と積極的な一面を見せてくれる。

赤井君が面倒な緑化委員（お外で草むしりをさせられる、現代っ子に大変不人気な委員）をジャンケンで押し付けられたとたん、「あの……みんながイヤなら、わたしやってもいいよ……？お花とか好きだし」と言い出す青井さん。

女子達からは「ああ、なるほどね」と生暖かい視線を受けている。そうだよ、露骨だよ。

どうやらお互い「圭介君」「恵子」って呼び合ってるみたいだね。これはもう、ちょっと背中を押してやれば一気に告白まで漕ぎ着けそう。そうと決まれば早速青井さんに接近せねば。

幸い今は4月。我が家の庭は花盛りである。お花が好きという理由で緑化委員に立候補した手前、花を教室に持って行けば何かの拍子に話題も芽生えよう。

私はその日からせつせと、チューリップ、すみれ、アイリス、桜、遅咲きの桃、木蓮、果ては菜の花や大根の花まで、まさに「そこまでするか？」と突っ込まれるほど花を運び続けた。

その甲斐あって、青井さんだけでなく、瀬名さん、氷見さん、由良さん、と、花を通してオトモダチが出来上がったのであった。やれやれ。青井さんはともかく、あとの3人がどうも、花が好きというよりは我が家の庭に大層興味を持っているようなのが気にかかるが。

ガーデンパーティー開くほど親しく付き合う気は今の所無いんですよ、誰とも。

花の話題から強引に（春の花って、幸せな花言葉が多い気がするんだ。特に恋愛関係でね。やっぱり春だからねえ。青春っていうくらいだもんね。そういえば青井さんって赤井君と付き合ってるんだよね？え、違うの？でも、好きなんでしょう？いや、見てれば分かるから。たぶんみんな知ってるよ、わかりやすいもん。なんで付き合わないのー？ぐいぐい）恋愛相談をもちかけさせる形で、私はまず青井さんの口を割らせた。

思っていたとおりのお悩みで、ちよつといらつときたけれど（すみません、そういう甘酸っぱい記憶が無いのでひがみましたゴメンナサイ）、勤めて真摯な態度で聞く。

「圭介君は、誰にでも優しいの。だから、勘違いしないようにしなきゃ、って思ってたけど、やっぱりどんどん好きになっちゃって…」

中高生モノの恋愛小説によく見かけるけど、これって大抵、実はとつくに両想いパターンだよ、王道だよな？ 事實は小説より奇なりといえども、そんなにこの思考は外してない、よね？

「でも、赤井君が女の子を名前と呼んでるのなんて、青井さんくらいじゃないのかなあ。それって、やっぱり特別な事なんじゃないの？」

それにお互いケイタイの着メロ特別に指定してるみたいだしなつ。あからさま過ぎるだろう、自重しろ。なーんて言いませんよー。

しかし、これで予想が外れて「お前とはこれからもいい友達で」とか断られたらもしかして私、すごく恨まれたりする？え、やだ。「ごめんね、余計なお世話だったね。今だってちゃんと仲良いし、楽しそうだし、別に無理に関係変えなくても良いよね」

とっさに保険とブレーキをかける小心者の私を笑うが良い。

しかし、この言葉が何故か彼女の琴線に触れたらしく、スイッチが入ってしまった。一体彼女に何が……。もしかして天邪鬼なの？人に「今のままでいいじゃん」って言われたからカチンときたの？

その日から本気になった青井さんは今まで以上にあからさまに赤井君にアプローチし、そしてそのままとん拍子に二人は、あっさりくっ付いた。お礼にチョコを奉納された。

あんまり順調すぎて、この後血で血を洗うような第二部が展開されるのではないかと心配になる。もしかして私、かえって余計な事しちゃったのかもしれない。

もしかしてここは、むしろ赤井君とちょっと仲良くなって（クラスメイトとして）、青井さんの危機感を煽るキャラになるべきだったのだろうか。いやしかし、無駄に憎まれ役をするのは辛いなあ。まあ、終わった事は今更どうしようもない。チョコもらったし。（もぐもぐ）

と、ひとまずの達成感で調子に乗っていた私は、ちょっと油断していた。らしい。

4月の脇役そのに

突然だが、私は文芸部員である。

文芸部といっても部誌を発行したりお互いの作品を批評しあったりするような活動は廃れて久しく、現在の主な活動は図書室での読書で、必ずどこかの部活に所属しなくてはいけないと決められているこの高校において幽霊部員を大量に抱える隠れ帰宅部となっている。

そんな中、純粹に本が好きで文芸部に所属しているのは私と、うちのクラスというなら根岸さんくらいだろう。

部活動ついでに委員会活動の評価が得られるので、私は3年間図書委員に立候補することになっている。この学校はやたら委員会活動の種類が細分化しており、クラスのなかでどこにも所属しないで済む人間は数人しかない。

よって、なるべく楽な委員か、そうでなければ活動期間がごく限定されている委員をさっさと引き受ける方が結果としてお得なのだ。

一石二鳥のおいしいはずのお仕事現場で、その事件は起こってしまっただ。

図書委員には、今月入った新刊に綺麗にカバーを貼り付けて、管理用シールを貼る仕事がある。

私はこういう仕事が好きだ。大好きだ！ねちっこい性格なので、誰よりも綺麗に仕上げる自信がある。

3年目の実績を買われ、現在これは私専用のお仕事と認識されている。4月の新刊は雑誌を含め15冊。まあ、春休みの間にリクエストとか無かったから、こんなものか。（ところで、毎月入れてい

る雑誌がやたらマニアックなのは何故だろう)

と、それは今更どうでもいいのでお仕事お仕事。カバーの在庫はまだ十分にあるはずだな、といささか浮かれつつ、何の疑問もなしに図書室カウンター奥の書庫の扉を開けた。

さて。扉の奥は書庫とは名ばかりで、主に図書及び何故か生徒会関係の倉庫と化している。

置き場所の無い書類の山が彷徨い、ここにたどり着いたのだと思うと感慨深い。さぞ色々な場所をたらいまわしにされて来たのだろう……。過去の役員選挙の集計票とかがな！

お陰で古い書籍などをためておく事が出来ず、過去5年貸し出しの無かった娯楽系の小説は年に一度、文化祭でバザーに出されるのだ。売り上げは新刊の購入に充てられるので大変効率のいいシステムと言えまいか？

そう考えれば、このいかにもゴミである書類の束とてそれなりの貢献をしているわけだ。

しかし、いかに生徒会関係資料といえども、所詮は現在の活動に不要とされている準ゴミであるからして、本来ここに生徒会の役員が入りする必要はないと思うんですよせんせー！

だから図書委員以外がこの部屋の鍵を持っていて、勝手に出入りするのはおもしろくないんですよ、わかってくださいせんせえ！

果たして書庫で遭遇した、見てはいけないものとは、決して生徒同士や先生達のきゃーいやんえっちな光景ではなかった。

むしろそうであれば、わたしはそーっと扉を閉じて、やがて来る「お願い、誰にも言わないで」やら「違うんだよ、誤解なんだ、あれは……」みたいなあほらしい言い訳に備えているだけで済んだのだ。

ああ、気づかれない、つてのはナシ。何せ私は他人様のストーリーのスパイス役なので、スリルやらお悩みやらの種として機能せざるを得ないのだ。納得はいかないが。

で、そうそう、いい加減何を見たのかはつきりしよう。それはいかにも魔方陣の上で浮いている、光をまとった生徒会長であった……いやいやいや。ちょっと待ってよ。まさかのファンタジー？とつとつそつちまで行つちゃうの？ 今までの人生が平凡だったと思えるような事態に発展しちゃうの？

もう頭はパニックである。パニックではあるが、この場合「ありえないものを見てしまったことによるパニック」ではなく、「私の生活に新要素が加わってしまった事に対するパニック」だ。

頭の中の大混乱に反して、私は表面上冷静であった、と思う。だって、もう予想外のできごとに慣れきってるから！ 私は強い子、私は大丈夫。と、暗示をかける。

にしても、だ。せいぜいハーレクイン物のヒーローだと思っただのにファンタジーとは……。敵ながら天晴れだ、出席番号5番、

光山 海人君！

それで、ファンタジーの、何なの？ 悪魔なの？ 魔法使いなの？ 異世界人なの？ たしかに、同じ人間にしては何もかもでき過ぎだから、おかしいと思っただのよ。日本人離れた外見だし、カイトとか、とつてもグローバルなお名前だし。

やがて光が薄れ、足が床に着くと、やっと生徒会長は目を開いた。そこで私を見つければちぱちと瞬きをする。私がいるのが信じられない、というように。むしろそれはこっちのセリフだ！

しかし、ここはなるべく穏便に済ませねばなるまい。下手すると、

「知られたからには生かしておけぬ」とか言われちゃうかもしれないし。

レギュラーではない脇役には主人公補正どころか主要脇役補正さえ無いので簡単に死んじゃうんですよーう。

「……やあ、盛沢さん」

素早く立ち直った生徒会長がうさくさくにつこり笑って、長めの前髪をそつと払うのを、私は警戒しながら観察した。

この、うさくさい、というのは私の敵対フィルターのせいなのかもしれないが。

私はこの男の劣化版の型落ちみたいな人間なので、どうしてもこいつがいけ好かないのである。仕方ないじゃない、にんげんだもの。「見つかつちやったまいたいだね」

大して危機感が感じられない口調だ。帰り道で猫に話しかけてるところを見られちゃった、てへ、恥ずかしい。位の。

あ、でも、ちっちゃくて可愛い女の子だったらともかく、こういうパーフェクト系の男子高校生がやったらどうだろう、人としてドーン引きするべきだろうか、でも案外キュンとしそうだ、ちくしょう！

「ああ、うん、すごく綺麗だったね？」

とりあえず差し支えないと思われる受け応えで、なるべく、動揺してませんよ、言いふらしたりしませんよ、こういうことに異常に寛容な不思議ちゃんですよ、むしろ憧れてましたよ、という印象を作るべく努力する。

こんな時、童顔で背が低くて声が可愛らしいという私の武器が役に立つはずだ。

首をちよつとかしげで、心持ち感動を秘めたような声で、と意識する。左手を軽く握ってそつと唇に当て、惚けた様に。私は女優。

「盛沢さんは、文芸部だったっけ？ ファンタジー小説とか、よく読むの？」

それはあれか、どんな非現実でもすぐに信じちゃいそうなおめでたい頭の作りしてるなあと言っているのか。

私がいまどんなにがんばって演技していると思う！ そもそもおめでたい登場をしたのはお前の方だ！ なぐんで、言いませんよ、ええ、言いませんとも。

「そうね、ファンタジーは好き」

「でも、びっくりしたでしょう？」

「うん、でも、なんか、そんな違和感無くって。ああ、そうなんだ」
「って思っちゃった」

これは本音。光って浮く男子高校生が違和感無いとか、いい加減にしてほしいが。

ちょっと色素が薄くて、手足もすらりと長いので、なんだか許せてしまう。(ビジュアル的に)

「実はね、オレ……」

きゃああああ、いいから！ 内情とか知りたくないから！ この先この件に関わる気はないからあああ！ てゆーか「見られてしまったからにはもうこの世界にはいられない」とか言ってくれないだろうか。もしくは、記憶を消すとかで穏便に済ませてもらえないだろうか。

「一年の頃から、ある場所に召喚されて、色々問題を片付けてるんだ。バイトみたいな感じかな」

……へえ。

ってことはあなたは地球人の普通の人間で、そのスペックは自前なんだ。っていうか、「召喚」とかふつーに言っちゃうんだ。

「今日はどうしても、急いで来てほしいって連絡があったから。こつて滅多に人が来ないと思ってただけど……」

まあ、図書委員としてしょっちゅう出入りする部屋ではないからね。埃っぽいし、狭いし。

鍵を持っている生徒は、私と、あとはこの会長くらい？ なるほど、私もだが会長も間が悪かったというわけだ。こういう隠れヒーローって、慣れてくるとウツカリ正体がバレるよね……ヒロインとかに。

んん？ヒロイン？

え、うそ、もしかして私、とうとうヒロインになった？ よりによって相手が（一方的に）目の敵にしていた相手だけど、あれ、うれしいかも。外見は好みだし！ それに最初は嫌いだったけどだんだん……とか、それはそれでアリだよな！

「まあ、姫君の誕生日で、どうしてもエスコートしてほしいって用件だったんだけどね」

苦笑するこの男の顔を蹴り倒してやりたい。

期待させやがって、なんだ、あつちで既によくやってるんじゃないか。他人の物件にはこれっぽっちも興味ねーよ！ べっ、別に残念だなんて思っていないんだからねっ！ コイツむかつくし。

あとは、会長がペラペラと事情を説明するのを聞かされた。きつと、一人で秘密を抱えていいい加減ストレスが溜まっていたのだろう。

彼は高一の春、たまたまよくわかんない星の並びとか魔力の暴走とかのきっかけでなんとかっていう世界に召喚されてしまい、たまたま刺客に襲われていた姫君を救った。

しばらく帰り方が分からなくてその国で過ごすうちに、何故か政治の陰謀やら近隣諸国との軋轢やらを、こちらの世界ならではの柔軟な考え方で次々と解決してしまい、今では国王の政治アドバイザーみたいな地位についている、らしい。

おいおい、若干18歳にして宰相ですか。あんたがすごすぎるのか、それともその国がダメすぎるのか。

幸い、そうこうしているうちに帰り方が確立し、更に自由に行き来できるようになった、と。

いつでも連絡が取れるように、と魔法具をもたされて戻ってくる、なんとあちらに一ヶ月いたはずが、こちらでは数時間しか経っていないかった。うわぁ、なんて都合の良い設定でしょう。

以来、緊急時以外は金曜の夜から日曜の夕方を目安に、あちらとこちらを行き来しているのだそう。どつりで他の生徒より老成しているわけだ。異世界で過ごしている時間分、余計に年をとっているに違いない。

しかしそんな生活でいつ勉強してるんだろう……なんて聞くと思っただか！ どうせ「一回教科書読めば理解できちゃうんだ」とか、そういうタイプだろう。きい、くやしい。

最近姫君達（3人もいるそう）のわがままに振り回されがちで苦労しているようだ。「女の子の心理って、よくわからなくて、相談できる友達がほしかったんだ」とか言われちゃったよ？何でお前のハーレム管理の相談役をせねばならんのかと小一時間……。

そゆわけで、今度は異世界トリップ（チート気味）の主人公の、事情を知っている友達、というお役目をいただいてしまいましたのでございませう。

結局、脇役の分際で主人公達をコントロールしようなんて、無謀

だと思ひ知りました……。

5月の脇役そのいち

5月。この月も先月に負けず劣らず憂鬱である。そもそも5月病という心の病があるのだから、無理も無かるう。

私が5月を嫌う主な理由は、新しいクラスメイトとの交流を目的とした男女混合球技大会が毎年行われるからである。運動は苦手だし、嫌いだ。私は純粹なインドア派なのだ。

それに、普段はノートやら宿題やらで頼れる人認識されているのに、こういう行事では唐突にクラスのお荷物になってしまうのも居心地悪い。やめて、そんな目で見ないで！「どうしよう、これ」みたいな目で見ないでええ！

球技大会じゃなければちよつとは活躍できるから。綱引きとかで。体育祭でがんばるから許して！

とはいうものの、実施される競技の必要人数に比べ、クラスの頭数に若干名余裕があったので、私を含め戦力外通告された数名はそれぞれのチームに「補欠」として配属された。

私はバレーボールの補欠である。私以外のチームメンバーは、例の生徒会長と、出席番号13番、中山 飛翔君、17番、根岸 きららさん、22番、福島 樹君、26番、水橋 奈々枝さん、33番、竜胆 宗太君の6人。

幸い皆さんイキのよさそうな人たちなので、私は補欠として安心して見学していただけるだろう。しかし全く我関せずでいるのはさすがにちよつと心証が悪いので、中山君がノリノリで「土曜の夕方コート予約できたから自主練しようぜ！」と言い出したとき、欠席したいとは言えなかった。

さて、ある晴れた土曜日。嫌々ながらバレーの練習に向かおうと、割とギリギリな時間に家を出た私は、生徒会長からのメールに足を止めた。

F r m : 光山 海人

S b : 悪いけど

ゴメン、緊急で呼び出されました。

なるべく早く戻るけど、オレは遅刻か、もしかすると行けないって伝えてください。

P . S . お土産買ってくるよ

お分かりだと思うが、光山というのは生徒会長のことである。

先月の書庫の一件で、何故かメアドを交換する羽目になっていた。なんか良い様に便利な連絡係として認定されてしまった気がするんですけど、被害妄想でしょうか？

土産はいらんからあんまり気軽に話しかけないでほしい。

最近一部で私たちが大変仲良しだという誤解も甚だしい噂が流れつつあるのだ。これでまた、嫉妬に駆られた誰かに襲撃されるなんて事件が起こったら末代まで祟ってやる。

自分の運動神経とか運を過信していない私は、きちんと道の端っこで立ち止まってメールを読み、「了解」とだけ返信した。歩きながらこんな作業して、転んだり自転車に轢かれたりしたらどうする！

さて、これだけなら大したタイムロスではなかったのだが、うっ

かり青信号を逃し、やたら長いと有名な赤信号に捉まってしまった。これで5分遅刻は決定だあ……。

そしてこの5分が私の明暗を分けた、らしい。どうせなら30分遅刻すれば良かった。

私がやっと学校に到着したとき、ちょうど第二体育館の真上に何か見えないものを見た気がした。なまじ動体視力に優れていたらばっかりに！

「それ」は言うなれば直径3メートルくらいの空気の塊みたいなもので、周りの風景を歪にゆがめながらもものすごい勢いで落下した。これで私が全く普通の人間なら見間違いだと完結できるのだろうけど、残念な事にこの身は厄介ごとホイホイである。

むしろ厄介ごとだったからこそ私が気付いたのだとも言える。

第二体育館は、もともと目的地であった。つまり、あそこでバレーの自主練をしようということになっていた。ということは、あの中にはチームメイトの5人がいるはずだ。ああ、とても嫌な予感がある。

体育館自体に損傷はなさそうだったし、大きな音も聞こえなかったけれど、人体に無害だなんて保障はないじゃないか。紫外線だつて目に見えないけど浴びすぎは皮膚癌の元なんだし。

とにかく、引き返すわけにも行かないのでおそろおそろ中をのぞいて見ると、倒れ伏している5人の姿があった。あーあーあー、トラブルだあ……。

5人の真上に、ふよふよ浮いている、なんか白い毛玉みたいな、点滅する物体はなんだろう。ケセラランパセランとかですか？ 幸福を授けて早くこの場から去って下さい。できればその5人が五体満

足で生きていられるという保証を下さい。

毛玉はふところ（？）から棒みたいなものを取り出してみんなに翳した、しばらくすると5人とも「うう……」とか言いながらなんとか上体を起こしたので私は心底ほっとした。で、あれはなあに？

「許すなう。＃％＆＄を追って、この星におちてしまったなう。巻き込むつもりはなかったなう」

アレ、毛玉がいまなんか脳天から突き抜けたようなとんでもない高音でしゃべった？

「残念だが、今君たちは厳密に言うて死んでしまったなう。でも、@％装置で君たちを修復したなう。この星にはない技術なう。感謝するなう」

なうなうつるせえええええ！ しかも用法が微妙だ。

現在進行形と現在地を表すのに使ってるだけでも多用されるとなんかイラっとくるのに、なんだその無茶苦茶な乱用は！ っていうか星ってことは宇宙生物か。先月はファンタジーで今度はSFか。何なんだこの無節操ジャンル。

あと、自分で巻き込んでいて感謝しろとか言ったよ。最近ああいう強引で一方的に偉そうなキャラが多いよね。あれ、ところで私の存在って認識されてる？ 部外者としてそつと立ち去っていい？

5人という人数と、一回死んで未知の生物に生き返らされた、となったら、たぶんアレだろう。5人戦隊。

あの毛玉が追っかけてきた、発音不能な何かから地球を守るために戦うんだらう？ うん、そうだよ。生命維持用の特殊な装置を取り付けられて、それについてる変な機能を使って変身したりするんだね。ガンバレ。

できれば巨大ロボとかは出さない方向で、ぜび。なるべく海の上

とか空の彼方で戦って、地上の建造物に被害を出さないようにお願いします。

毛玉は、概ね想像通りの説明をしてくれた。

今の所予算の都合で大掛かりな武器などは支給されないそうだ。

そもそも、あの謎の腕輪で体力のありそうな現地生物を適当に捕獲して手駒としてこき使うのも、元々の予定通りだったらしい。

5個持ってるの変だと思っただ。にしてもなんてひどい話だろう。

良かった、脇役体質で、と心の底から思った。

5月の脇役そのに

敵対する宇宙生物を見事捕獲し終わったら、きちんと元通り生き返らせて任務から開放してやると、脅迫にしか思えない申し出をされて何とか立ち直った5人は、色分けまでさくつと決めてしまった。どうせやるなら童心に帰ろうという半ばやけっぱちなハイテンションなのが丸分かりで、見ているこっちは気の毒すぎていたたまれない。

中山君がレッド。

野球部の熱血少年にはふさわしいポジションだ。レッドといえば基本は熱血正義漢（ちょっとバカ）だもんね！

日焼けしたつり目気味の顔は向こうっ気が強そうで、いかにも考えなしに無茶な事しますって感じ。レッドは無計画に突っ走ってトラブルメーカーになるものだもんね。

根岸さんはホワイト。

イエローはどうしても嫌なのだそう。カレーが嫌いだからという理由で。今時イエロー⇨カレーと直結するのって古くない？ いや、分かる私も古いんだけど。

彼女とは同じ文芸部で、珍しく実体のある部員なので少々交流がある。

メガネをかけて髪をキツチリ編みこみ三つ編みにしている知的美人で、全く隙がなさそうな人と常々思っていた。マニア受けしそっうだ。

この5人組はきつと彼女が仕切ることになるだろう。

福島君はブルー。

普段から制服は着崩してシルバーアクセじゃらじゃら、茶髪にた

れ目、しかも左目の下に涙黒子まである、もうホストになったらしいんじゃないかな、みたいなチャラい外見の、みるからにダルそう。な彼にはまあ、似合う色だろう。

私の個人的な先入観では、5人戦隊のブルーって知的クール系なんだけど、それだと根岸さんとかぶっちゃうもんね。それに、あのやる気の無さをクールと表現すれば……。う、ううむ。

そもそも彼みたいなのが練習に遅刻もせずやってきたことも意外だ。もしかしてチャラそうなのは見た目だけなのか？ 実は真面目？ ギヤップ萌え狙い？

水橋さんは、髪の毛ふわふわで、ちっさくてかわいい。

テニス部所属で、その割にあまり日焼けしていない。いつもコートで元気いっぱいボールを追っかけている。理想的な小動物キャラで、もう、当然ピンクである。

ピンクは可愛くなくてはいけないと世界の法則で決まっている。よかった、水橋さんがいてくれて。

そして5人戦隊モノとして一番意外だった竜胆君は、始終無言であっただけども、ブラックということになった。

この竜胆君は、私が今年の初めにチェックした「武士っぽい人」である。

どう武士っぽいのかと突っ込まれると説明し難いが、今時の若者にそぐわぬほどキリっとした顔つきと、全体的にしつかり身体が出来上がっていきそうなところが武士っぽい。ほら、現代っ子って、結構甘やかされて育ってるから顔つきも甘いイメージじゃないか。

いやあ、てつきり彼は剣道関係のイベントを起こすと踏んでいたのだが……。剣道部だし。戦隊モノのスーツとか着て欲しくないというかなんというか。

「で、盛沢さんはどうしよつか？」

え。なんて言ったの水橋さん。私の存在に気付いてた？今まで空
気みたいな扱いだっただのに今更？

「え、わ、私？ 無理だよ、戦うとか。そもそも私……」

死んでないし、とはいかに無神経でも口にするべきではなからう
と飲み込んだ。

私にとっては、彼らの身に起こったことは「主人公イベント」だ
が、わが身に起きた立場では少なくとも喜ばしい事ではない。でも、
あの、脇役業もご遠慮したいんですう。

あと、物語の途中から追加される6人目の助っ人的立場はもつと
御免こうむります。

「盛沢さんは、私達のサポートをしてほしいの。何か起こったとき
のつじつまあわせとか、アリバイ作りとか。ね？」

根岸さんが意味深に微笑む。いや、正義の味方だよね？犯罪みた
いな言い方しないでほしいな！

まあ正義の味方って、色々偽装して身分を隠すものだもんね、必
要な事だね。あの変な語尾の毛玉さえ押し付けられなければ、5人
戦隊のサポート業務くらい引き受けても、いい、かなあ……。ハハ
ハ。

そう、毛玉であるが、名前は地球人には発音が難しすぎるので「
ケセララン様」と呼ぶことになった。様を付けるのはご本人（？）の
希望である。

うっとうしさがレベルアップして握りつぶしてやりたい。せめて
しゃべり方を矯正しようとしたのだが……。

「む、言語が間違ってるなう？語尾に『なう』とつけるのがこの地
域の言語じゃないなう？」

それは限られた世界での話だと思う、通常会話では止めた方が良く

と進言したが、「今更設定を変えるのめんどくさいなう」と却下された。ああ、叩き落としたい。

てゆーか設定って、翻訳機とかですか？その身体のどこについてるんですか。あと、さっきの棒どうやって使ったんですか、手足無いのに。超能力？

……ケセラシ様は、厳正なる押し付け合いの結果リーダー（＝レツド）が引き取るべきだということになりました。

さて、ところで私は異世界トリッパーの相談役に加え、5人戦隊のサポート係まで兼任する事になったわけですが、これはやはり、別個に秘密にしておくべきことだよねえ。

ああ、やつぱりめんどくさい。「おうさまのみみはるばのみみいいいいいい！」と叫んだ人の気持ちが良い分かる。そもそも、それぞれに対して私は微妙に人格を変えているので、今後混同してボクを出さないように注意しなくてはいけませんな。

一々ころっころ人格変えて演じるのは面倒だから、差し障りの無いようになんとかすりあわせなくてはなるまい。片や不思議好き天然風、片や引け腰の気弱系（むしろこっちが地に近い）、さてどうやって融合させたものか。

週明けて月曜日、会長からお土産として鍵つきの宝石箱をもらった。たぶんこれ、装飾自体が宝石だよ、価値ちゃんと分かってんの？ 異世界でどんな暮らししてんの？

会長から土産をもらっているところを、例の、我が家のお庭に興味津津らしい3人組に目撃され、こそばゆい勘違いをされた。

付き合っただけなんかないから。ヤツはあっちで3人の姫君に囲まれてハーレムよろしくやってるから。って、言えないいいいいいい！「

本の貸し借りしてるだけだよ」と誤魔化すのが精一杯だ。とても悔しい。

何が悔しいって、私が照れて否定してると思われてるところが。なんだその甘酸っぱい設定。

にしても、お土産はちよつと人目に付きにくいところで渡されたはずなんだけど。ストーカーか？見張ってるのか？ そんなにガードンパーティがしたいのか？

どうやら会長のファンというわけでもなさそうだし……。という事はこの子達も厄介ごとなんだろうなあ。（遠い目）とりあえず次の厄介ごとは中間テストが終わってからでありますように。

球技大会？ 我らがヒーロー（けっ）光山君と、スーパー戦隊（涙目）の大活躍で、バレーは見事無敗で優勝した。

私？ 私は補欠仲間の7名マイナス1名、つまり6名で雑用のようなことをさせられて大活躍でしたよ？

全員女の子（マイナスの1名はエスケープ常習犯の男子なのでノーカーント）だったのでチアリーダーでもさせようかという話も出たけれど、元々全員運動が不得意ゆえに補欠なのでそんなキビキビした動きはできまい、と、めでたく却下になった。

でもスポーツドリンクの配達も、グラウンドや体育館がやたらと多いこの学校では、なかなか疲れるお仕事だったのですよ……。

6月の脇役そのいち

6月。相変わらずこの月も憂鬱だ。空気がじめつとして鬱陶しいから。

巷では生徒会の選挙とやらで騒がしく色々やっているようで、昼休みの放送も完全に選挙演説一色。

たかが高校の生徒会で何でそこまで熱が入るの？

しかも、今の生徒会長が絶対的なカリスマみたいに君臨してるから、後継者は無駄に比較されて大変そうだ。なのに、なんでそんな苦勞を自ら背負い込みたいんだ？ マゾ？

そういえば生徒会長は、これでお役御免になるんだなあ。会長って呼べなくなったらどうしよう。名前で呼ぶとか、そんな無駄に親しくなりたくないなあ。いいや、このまま会長で。それとも宰相様とでも呼んでやろうか、もしくは次期王様？（くすくす）って、そんな呼びかたしてるの他人に聞かれたらむしろ私が痛い人じゃないか。却下。

相変わらず彼はどうでも良いことしよっちゅう呼び出される日々のようで、私にバレたのを幸いに図書室の書庫を便利に利用している。

お姫様方の我侭はエスカレートする一方で、こちらの菓子やら服やら本やらを御所望するだけでなく、最近はこのちに留学したいとまで言い出したそうだ。どうやらこちらに物を持ってくる事はできるので、人を連れてくることも理論的には可能だそうだ。

しかし、留学って。住む所とか戸籍とか生活費とか学費とかその他諸々を全て、こちらでは一学生に過ぎない会長に丸投げですって。

すごいなあ、お姫様。

さすがに会長も無理だと断り続けているみたいだけど、実現したら面白い事になりそうだ。「謎の転校生美人3姉妹（肩書き多い）」と生徒会長が一つ屋根の下で同居するらぶこめ」みたいな。

会長は必死で隠そうとするのに、空気の読めないお姫様たちがどんどん余計なことを暴露。そのたびに振り回される彼の姿とか、うわあ、ちょー見たい。でもそこに巻き込まれたくは無いなあ……。

それはともかくいい加減3人のお姫様たちの写真とってきてくれないかな、どれに婿入りすべきか品定めできないから。

長女がオットリで次女がシツカリで三女がチャツカリ、しか情報がないよ。名前は上からレミア、ルビア、リリアと、適当につけたんじゃないかという疑惑を生じかねない姉妹だが、王族の名前はラ行発音でつけるのが慣例だそう。うん、どうでもいいこと聞いた。あれ、あっちって、あいうえお表対応なの？ 言語どうなってるの？ 自動翻訳どころか日本語しゃべってたりする？ ああもう気になる。

いやいや、そんなことを気にしてちゃダメだ。むしろそろそろ彼からフェードアウトすることを考えるべきだ。だっているんな人の誤解を招くから。特に4月からやたら構ってくるあの3人。

悪い人たちじゃないんだけど、なんか、うん。多分あの3人も何か大きなトラブルのネタを持ってる気がする。だからこそ私に関わろうとするんだ。

やたらと観察される事にそろそろ腹が立ってきたので、私も負けじと観察しかえす事にした。するとあからさまに怪しいのなんの。

休み時間に鞆の中に向かって何か話しかけたり、いきなり大慌てで鞆抱えて教室から飛び出して行ったり……。

ああ、うん、わかった。ありやあ、なんかいるね、あの中に。人語を解する、人ではない何か絶対居る。そういうイキモノは既に一匹知ってるので、これ以上増えないでいいんだけどな。

せめて可愛くて性格が穏やかな何かだといいなあ。（は、増える事と関わる事を無意識に受け入れてる感想だった）

一方、可愛くなくて性格も穏やかでない人外にとり憑かれている5人戦隊はなんとか軌道に乗ったようで、何を基準にしているのかはよくわからないが「わるいうちうじん」達と戦って捕獲しているらしい。

ケセラン様はいわゆる宇宙警察（失笑）みたいな役割で、こっちの辺境の惑星を守って下さっているそうだが、どうせお前中央でとんでもないミスしかして飛ばされたんだろうと言ってるやりたい。みんなの命を人質にして強制労働させているケセラン様のほうがずっと実害のある「わるいうちうじん」だと思うんだ。

気の毒に、5人は中間テスト直前にも呼び出され、勉強もろくにできない有様だとかで、私のノートを半泣きでコピーしていた。幸いな事にヤマが当たっていたので、うち3人はなんとか追試を逃れた。

流石にテスト中は「これを受けられなければ死ぬ！」とケセラン様に迫り、免除してもらったらしい。あのケセラン様が折れるなんて、よほど鬼気迫っていたんだろうなあ。

追試に引っかけってしまったのはレッド（中山君）とブラック（竜胆君）である。中山君はさもありなんと思っただが、竜胆君はまたもや意外であった。

や、ブルー（福島君）が試験通ったのもビックリ（失礼）だった

けど。彼はもしかすると本当に、努力してる所とか真面目に頑張ってる姿を人に見られるのをよしとしないタイプなのかもしれない。だとしたら相当な恥ずかしがりやさんだなあ。

逆に竜胆君はいかにも真面目そうなので、なんだかお勉強もそれなりなんだろうと勝手に思っていた。おうちが剣道道場で、そつちの稽古のほうに力を入れているそうだ。

なるほど、道場の跡継ぎ息子ですね、わかります。ほんとにミスキャストな気がするな！

彼には是非とも、剣道場の跡継ぎをめぐる決闘とかで雄雄しく戦ってほしかった。「どちらが正当な跡継ぎか、いざ尋常に勝負！」とか時代錯誤な事言い出すライバルとか出てきたら面白いのになあ、なーんて妄想していたら

「盛沢さん、福島君知らない？」と、声をかけられた。

選挙管理委員の葉月さん。いいなあ、この上から下までストイックそうな体型。理想的だ。とか声に出したら睨まれそうだから言わない。

でも背が小さいのにEカップあると、無駄にポツチャリに見えるしほんとに肩が凝るんだよ。マラソンすると千切れそうになるんだよ。

「福島君？ 知らないよ」

何で私に聞くのか。5人戦隊と最近交流があるのもバレてるのか？この学校の情報網はどうなっているんだ。

「彼も選挙管理委員会なんだけど、なかなか会議にもきてくれなくて困ってるんだ。見つけたら、会議室に絶対来てって伝えてね」
見つけたらね。

たぶん彼は今青い特殊スーツに身を包み、お空の向こうっていうか、大気圏外（これなら地上に影響は出まい）で戦ってると思うけど。

終わったらそのままおうちに帰ると思うけど、万が一見つけたら伝えるよ……。とはみなまで言わずに「うん、分かった。大変だねえ」とねぎらっておいた。

正義の味方は大変だ。地球の平和は守っているのに自分の立場や社会的信頼度は守れないんだ。

そういえばああいうヒーローもので普通の会社員とか見たこと無いなあ。探偵とか自営業とかフリーターとかは見たことがあるけど、私が知らないだけで、あるのかもしれないけどね？

ところで、私が葉月さんのストイックな体型（とくに胸）に惹かれたのは、やはりちょっととした理由がある。あの忌々しい事件……。

それは中間テストの追試期間もおわって、みんながほっと一息ついた頃に起こった。

6月の脇役そのに

私のクラスには、校内に知られたツンデレカップルが一組。出席番号3番、桂木 蓉子さんと、15番、新渡戸 哲夫君である。

この二人、デレるときは周りが引くほど甘ったるい空気をかもし出すくせに、普段は寄ると触るとケンカが絶えない。「もう別れよっかなあ」が桂木さんの口癖で、「ぺたんこのクセに」が新渡戸君の口癖である。

ぺたんこって、アンタ……。確かに桂木さんの胸はペツタンコと言って差し支えない。

体育の授業の時、着替えて何度か見たが、本人も開き直ってブラさえつけていない。タンクトップ一枚である。

私に言わせてもらえばものすごくうらやましいが、逆にうらやましがられるのだからやりきれない。

ツインテールでぺったんこ、猫目ときたら、これもまたマニア垂涎じゃあないか。スーツ着たら社会人にしか見えないような、大人びた新渡戸君と歩いている姿は思わず「おまわりさああん」と叫びたくなるほどだ。

実際私服のデート中に何度か警察に呼び止められたこともあるらしい。ロリコンの誘拐犯とか、小学生の援助交際と間違われて。

傍から見ている分には新渡戸君は桂木さんにベタ惚れで、でも素直になれなくて意地悪しちゃう、という小学生みたいなパターン（つまり中身の年齢は釣り合ってるんだな）なのだが、両方ともとてもおこちゃまなのでうまく愛情の疎通ができないらしい。もう18歳なのに……。

そんな二人にとって、ケンカも愛情表現の一種なのだろうと周囲は認識しており、本人たちとていつもの「別れよっかなあ」「ぺたんこのクセに」が、どちらも全く本気ではないことなど承知の上であつたはずだ。

ケンカして、どちらともなく謝って、そしてデレる、というのがこの二人の儀式のようなものであつたはずだ。

なのにその日は、桂木さんが爆発してしまった。

「なによ、てっちゃんのバカっ！ どうせわたしは盛沢さんみたいに、胸おつきくもないもん！ そんなにおっぱいおつきい子がいいなら盛沢さんと付き合ってもらえばっ！」

ある、晴れた日の。昼休み、教室の、真ん中で。

私はポカンと、読んでいた本から顔を上げた。え、今私の名前叫んだ？ 何て言った？

流石に思考は麻痺していた。一斉に、クラス中の視線が私の胸に集中したような気がした。（被害妄想かもしれないけど）そして、次に桂木さんへ。

桂木さんは真っ赤になつて泣きながら教室を走り去っていった。

……足、速いね。

おいおい、待ってくれよ子猫ちゃん。私がキミの気に触るような事をしたなら謝るよ。でもだからって、これは無いよ。どんな羞恥プレイだよ、殺す気か！

あと、悪いけど新渡戸君は私の好みとチガウ。私、見た目は会長みたいな正統派が好みなんだ。新渡戸君みたいな、苦虫の噛み潰し世界記録に挑戦中、って感じの渋い魅力は理解しがたいんだ。

新渡戸君も、多分私は好みじゃないよ、だって彼は真性のろりこんだもの。（たぶん）

逃げ出すタイミングを逸してくたりと机に突っ伏した私の頭を、誰かがポフッと撫でてくれた。慰めてくれてありがとう、誰かさんでも放っておいて。

その日から桂木さんによる、新渡戸君なんかだいつきらい攻撃（内容は主に、彼だけをいないものとして扱う。つまり無視）が一週間ほど続いた。

私はあのとんでもない発言について謝罪さえしてもらえずに、なんだか居心地の悪い思いで毎日それを観察していた。

ううむ、つまり今回は、私の役割は当て馬、なのかなあ。赤井君と青井さんの時なんか、ちょっとお話しただけで、チョコまでくれたのに！ 今度は大恥かかされた上にまさかのボランティア？ 「二人の元通りの姿が見られてなによりだよ」、とか思えと。うがぁ。

4月に、「積極的に脇役としてのお役目を果たそう」と誓ったけれど、すでにレギュラー脇役のお仕事（レギュラーになったと思っ
ていいんだよね？ 流石にもう、モブじゃないよね？）を2件抱えているわたしは、これ以上自分から動く気にはなれなかった。

なるようになるがいいさ、あはは！ 壊れるものなら壊れちまえー、といささか乱暴な気持ちになっていたので、罰が当たったのかもしれない。

結論から言うと、雨降って地固まる、といういつものパターンであった。ただ、今回は規模が大きすぎただけで。実質とぼっちりを受けたのは私だけで、あとはみんな多少ハラハラしたものの、大きな影響は無く元の鞘に収まったわけだ。ヨカツタデスネー！

詳しく思い出したくもないような仲直りイベント（ベタ甘）のあと、桂木さんと新渡戸君がやっと私に謝りに来た。遅いよ。はつき

り言ってもう君たちどうでもいいよ。

「ゴメンね、いつもうらやましいなーって思ってた、つい名前出しちゃったの。ほんと、わたしって無神経だったね」

と、にゃんこが目をうるつとさせながら謝るのを前に、「うっせーばーか、一生根に持ってやる」とか言える人間がいようか。

例え本音の所がどうであれ、受け入れるしかあるまい。

私は肅々として謝罪を受け取った。手作りのクッキーだった。確か桂木さんの家庭科の腕はむしろマイナスだった気がするので、これは……どうしよう。砕いて植物に肥料として与えても枯れるんじゃないだろうか。(言い過ぎ)

お手手つないで遠ざかる二人を見送りながら、私の地獄耳は聞こえなくていいセリフを拾ってしまった。

「残念だったね、てっちゃん。ほんとのはあのくらいのおっぱいがいいでしょ?」

「ばーか。過ぎたるは及ばざるが如し、って言うだろ。俺はお前の方が良い」

……。てめええええ新渡戸ええええ！ いや、むしろ桂木いいい！
！ 謝りに来といてまだ人をダシにするか！ なんなんだその無神経さはコンチクショー！

てゆうか、「過ぎたる」とか、きいいいいいい、呪ってやるうう！
！ 貴様ら二人とも、「絶対遅刻してはまずい時に限って必ず交通機関に乗り遅れる呪い」をかけてやる！ 一生タイミングの悪さに苦しむがいい。もしくは「子孫が代々若いうちから毛根死滅する呪い」か。

まあ、心で思うだけですけどね。どうせ不思議な力なんて無い脇

役の私には、幸せなお二人を生涯苦しめる呪いなんかかけられませんけどね。どーせ馬に蹴られるからねっ。畜生、悔しい。

いつか私も主人公になってやるんだ……。あ、これってもしかして死亡フラグ？

7月の脇役そのいち

7月。うん、憂鬱ですよ？ 先月に引き続きジメっとしてるうえに、暑いから。しかもほら、期末テストがあるし。蚊も鬱陶しいし。

特に我が家の庭は、やたら植物が植えられているせいか虫や鳥がすごい。外から眺める分には美しい庭かもしれないが、手入れをする方は大変だ。

こんな日差しの強い季節に庭仕事なんて、私にはできない。無論、母にも無理なので、人をお願いして定期的に手入れに来てもらっている。

学年始めに張り切って教室に花を持って行ってしまったので、それからもずーっとその習慣が続いている。頻度は低くなったけど。

先月からかなり気になるあの3人組も相変わらず我が家の庭に興味津津のようだ。あの、鞆の中の謎の生物（決め付け）に関係があるのだろうか？

私もあれから良く考えてみた。新渡戸と桂木（腹が立ったので心の中ではもう呼び捨て）への呪いのバリエーションを一通り考えているときに、ふと思いついたというのが本当のところだが。（ねちっこいですよ？）

キーワードは「女の子」「鞆の中に謎のイキモノ」である。この場合人数はあんまり関係ないと思われる。人語を解す謎のイキモノを連れた女の子といえば、思い当たるジャンルがある。それは……魔女っ娘モノだ！

私も幼稚園の頃は夢中になってテレビにかじりついていたものだ。

普通の女の子が魔法の国からやってきたふわふわした生き物に頼まれごとをして（大抵は探し物）、とにかくそのお願いをかなえるために魔法の力をもらう。

その力で変身したりして、身近なお悩み事なんかを解決していくのだ。

ああ、懐かしいなあ。いいなあ。コンパクトとかペンダントとかステッキとかバトンとか、私もおもちゃをいくつか持っていた。

お話の途中で一回、我侭のために魔法の力を使ったりして、罰として力を失うんだけど、改心してバージョンアップしちゃったりするのだ。

だから魔法のグッズは1作品につき複数発売されるのだ。今思えば大人（おもちゃ会社）の都合だね！ 女の子の夢台無し！

夢の無い話は置いといて、魔法少女かあ、それはいいなあ……。ああ、でも、私脇役だからな。自分で魔法使えるわけじゃないもんね。ちえつ。

展開した切っ掛けは、私が薔薇を持って教室に入った事だった。連日早めに教室に来て、私を待ち構えている（被害妄想）出席番号8番、瀬名 くるみさん、21番、氷見 良子さん、32番、由良 明子さんが、いつものように鞆を覗き込んでなにやら話していた。

当然、見ない振りをして、というか全く不自然さを感じていないような振りをして、「おはよう」と声をかけ、横を通り過ぎようとした私の鳩尾に、緑色の何かがめり込んだ。

それはもう、すごい威力であった。思わず「ぐふっ……！」とか声出ちゃったよ。女の子の声じゃないよ。時代劇で袈裟懸けに斬られた浪人みたいな声だよ。

うづくまつて咳き込んでいると、あの3人ではない声が聞こえた。
「女王様の匂いがするきゅぴー」

声だけなら、鼻が詰まりっぱなしみたいやしやべり方をする女の子のようだったが、「きゅぴ」って。なんだ、きゅぴって。

いや、それより私今ものすごく苦しんでるんだけど。心配してよ、気遣ってよ。

「ちょっとキュピル、なんてことするのよ！ 大丈夫？ 盛沢さん」

一番しつかりしていそうだと、と前々から感じていた由良さんが、真つ先に私の状態に気付いてくれた。信じてたよ。で、キュピルってなに。キュピルだから語尾がきゅぴなの？それとも語尾がきゅぴだからキュピルなの？って、ああ、どうでもいい、苦しい。

「女王様の匂いきゅぴ！ この花から、今までで一番強い匂いがするきゅぴ！」

おそらく加害者と思われる声が、私のことなど全く眼中にないと言わんばかりのセリフを吐いた。よし、いい度胸だ。そこへおれ。（なんて言えない言えない）

やっと呼吸が整ってきたので、私はそつと顔を上げた。異世界の勇者様も変身するヒーローも、浮かぶ毛玉も見慣れた私に怖いものなど無い、と言いたいところだがそろそろ「最悪と思われる事態は更に悪化する可能性がある」と学習したので（主に5人戦隊の悲惨さを間近で観察していたおかげ）あくまでそつと、だ。

予想通りの魔法少女モノだったとして、最近の過激なブームにのっとり、殴り合い、殺し合いをしないと限らないではないか。

「もー、キュピルったら。学校で鞆から出ちゃだめでしょう？ 戻って戻って」

瀬名さんが鞆に収納したものの、それは……。

「キャベツ？」

「キャベツじゃないきゅぴ！春の妖精きゅぴ！」

春の妖精さんはキャベツであった。

うわあ、なんて期待はずれな……。せめてモフっとした小動物で行こうよ。猫とか犬とかウサギとかリスとかハムスターとかさあ。

まあ、緑色をしていた時点で、アレ？ っとおもったけどさあ……。
「盛沢さん。あとで説明するから、とりあえず、えーっと、保健室いこっか？」

氷見さんの申し出は大変ありがたいが、保健室で一体何と言ったらしいのか皆目見当が付かない。

朝っぱらから、学校で、鳩尾にキャベツを喰らいました、とか？意味がわからない！むしろ朝食べたキャベツに中りました、の方がまだマシな言い訳だ。でもキャベツで食中毒とか、あんまり聞いたことないな。

結局、保健室には行かずに昼休みまで過ごした。

放課後、屋上にて。「あのね、ちよつと信じられないお話なんだけど……」と瀬名さんが始めた話を要約するとこんな感じだ。

春休み、中学から仲の良かった瀬名さん、氷見さん、由良さんの3人は、一面に広がる菜の花畑で有名な観光地に旅行に行った。もちろん、菜の花畑を見るのが目的だったので、存分に楽しんでいると、何故かキャベツが転がっていた。

不思議に思っただけで氷見さんが持ち上げてみると、そのキャベツには胴体が付いていて、顔らしきものも付いていた。

キャベツは、キュピルと名乗り、自分は春の妖精で、今年生まれるはずの女王を探しに来たという。女王の種が、悪い妖精によって

人間界に流されてしまったからである。

女王の種は、どこかの花の中に潜み、迎えを待っている。だが人間界に不慣れな自分では、どこをどう探したら良いのかさえ分からなくて、行き倒れていた。ここでこうして逢えたのも女王のお導きかもしれない。どうか協力して欲しい。

そうして3人は、悪い妖精と戦いながら女王様を探すため、妖精界の宝玉を授かり、女王親衛隊となって春から頑張っていた、と。

なんて……突っ込み所の多い話だろう。なんで女王の種とやらが盗まれるような杜撰な管理をされていたのか。なんで女王の種を探すのにキャベツ一つだけが派遣されたのか。

更に指摘させてもらうと、旅行先で見つけて連れ帰ってきたというなら、キャベツの着地地点に何ら意味はなかったということか？

女王がどの辺にいるのか見当さえつけずに適当な場所に降り立ち、そこには未練もないとばかりにこっちに移動してきたのか？ いや、女王様のお導きですね、きつと。ハイハイ。

お話の都合上、どうも私の家の庭があやしいんでしようよ。

どつりで、「お庭みてみたいなー」としつこかったわけだ。4月からずーっと目をつけてたのね。早く言えばいいのに。4月の初めの頃だったらちよつと受け入れにくかったかもしれないけれど、下旬にはもう、光って宙に浮く男子高校生さえ許容したんだから。

ちなみに悪い妖精は、人々の心の隙間に忍び込んで犯罪などを誘発するらしい。

地味に嫌だ。我が家に女王様がいるのなら、それを嗅ぎつけた悪い妖精（言つたばいに半笑いになる）が、ご近所に増殖するかもしれない。それは困る。

一刻も早く女王様を連れ帰っていただきたい、と真剣にキャベツ

に訴え、そのまま3人を我が家に連れて帰ることにした。

7月の脇役そのに

帰り道、なんとなく予想はしていたが敵の攻撃に出くわした。攻撃と言っても、ええと、精神攻撃？ みたいな……。

4人と一個（キャベツの単位が分からない）で、我が家の2ブロツク手前まで歩いて来た時だ。いきなり電柱の影からこの暑いのに、黒いマントにすっぽり頭から足元まで身を包んだ若い男が飛び出し、行く手を遮った。

勇者様とか5人戦隊に慣れ親しんでいる（うわ、イヤだあ）とは言っても、直接の戦闘経験など皆無な私は、即座に女王親衛隊（綺羅綺羅しいネーミングだなあ、宝塚みたい）の後ろに引っ込んだ。

だってマントとか怪しいもの。絶対トラブルに決まっている。

わー、生戦闘だ、わくわく、などと不謹慎に喜んでいて、男がマントの中でニヤリと笑った。そして……。

「きゃああああ！」
「変態っ」

瀬名さんと由良さんが悲鳴を上げて目を覆う。そう、マントを脱ぎ捨てた男は、全裸であった。うわあ、どうしよう。

相手は裸体をチラつかせながらジリジリとこちらに迫ってくる。

二人がパニックに陥ってしまったお陰で逆に頭が冷えたので落ち着いて観察してみると、男が被っていたのはフード付きのマントなどではなく、黒いカーテンのような、一枚布であった。

ああ、最近ファンタジー的展開に毒されすぎて勝手に脳内変換し

てたんだなあ。なんだか負けた気がする。誰に、とか何に、って訳ではないけれど。

「これは……ダークフェアリーの気配きゅぴ！ 変身きゅぴ！」
靴からキャベツが飛び出してきて、くるくる回転しながら叫ぶ。

目の前には全裸の変質者がうれしそうに踊る。所謂力オスという状態である。

おもちゃ会社の陰謀より夢の無い展開に、そろそろ眩暈を起こしそうになっていると、氷見さんが左手を高く突き上げ、叫んだ。

「スクランブル！ フルーツバスケット！」
緊急出勤果物籠……？

いやいやいや。フルーツバスケットって、あれだよな、数人で集まって、それぞれ「みかん」「ばなな」「りんご」とかのグループにわかれて椅子を取り合う遊びだよな？ それ、変身呪文なの？

キャベツが「るー、ちゃらちゃら、らっらっ」とかBGMらしき曲をアカペラで歌いだした。氷見さんの左手のブレスレットがオレンジ色に光る。

おー、魔女っ娘の変身だ。まぶしくて見えないけど。さてどんな衣装になるんだろう。

「女王親衛隊、一の騎士！ フェアリーオレンジ！」
「……えー」

思わず不満の声を漏らした私を誰も責められまい。

だって、せっかくBGM付き（アカペラだけ）で、ブレスレットから派手に光を撒き散らしたくせに、セーラー服（学校指定）の

ままなんだもん……。

「な、なんでそんな不満そうなのっ？」

「変身するのかと思っただから……。」

「したよ、変身！」

スカートと、襟の色がオレンジになっただけじゃん。ぶーぶー。

それはともかく、氷見さんの光に、パニックから立ち直ったあと
の二人も「スクランブル！」とやりだした。

「女王親衛隊、二の騎士！ フェアリーストロベリー！」

「女王親衛隊、三の騎士！ フェアリーピーチ！」

瀬名さんが苺で、カラーは赤。由良さんが桃で、ピンク。

共に学校指定のセーラーの色違いになっただけだった。うう、私
の子供心を返して……。

そして3人は全裸で楽しそうに踊っているだけの変質者に、己が
鞆を振り回し、殴る蹴るの暴行を加えたのであった……。

あんな、よく見れば骨と皮だけのような肋骨が浮き出た細い身体
にそんな事をしては、運が悪ければ死んでしまう。

そうでなくとも過剰防衛だ、やりすぎだ。と、止めようとしたが
「こっやってダークフェアリーを身体から追い出さないといけない
らしいの」

と由良さんが困ったように答えた。変質者の頭をぐりぐり踏みなが
ら。

あれー、由良さんって家庭的で優しい子って聞いたんだけど、あ
れー？

やがて気を失った男から黒い霧のようなものが浮き上がり、キャ

ベツがおもむろに掲げた筒状のものに吸い込まれていった。こうなると、取り付かれていた犠牲者はやがて正気をとりもどし、また、今のように常軌を逸した行動をとっていた記憶も消えてなくなるのだそうだ。

ああ、よかった、少なくとも傷害罪で訴えられずに済みそうだ。当人も、そんな記憶は無くした方が幸せに決まっている。道端で女子高生相手に全裸で踊りを披露してたなんて、覚えてたらトラウマものだ。

「あ、でも、この人の服……」

「その黒い布かけとくしかないよ。大丈夫、その家の影なら見えなそうだし」

にこつと笑って、氷見さんが何でもないことのように言った。やばい、この子達、もう感覚がマヒしてきてるんだ。どうしよう、はやくなんとかしないと。

結局、可哀そうな被害者は黒い布で巻かれて家と家の隙間に押し込まれた。

全裸で踊った記憶が消えても、これが新たなトラウマになるのではないかと思う。なんて恐ろしいんだ、悪い妖精めっ！

7月の脇役そのさん

そんなこんなでようやく帰宅できた。

聞けば、彼女たちは春からこちら、しょっちゅうあのような変質者を退治しているらしい。露出狂、痴漢、ストーカー、覗き、下着泥棒エトセトラ。

なんで性犯罪に偏ってるのか知らないが、それだけ出くわしているならあんなにキヤーキヤー騒ぐ事もなかるうに。

ああ、でも慣れたらそこで何かを失ってしまう気がするんだね、きつと。うん、私も慣れてはいけないことに慣れちゃったから気持ち分かるよ。

基本的に、日中の我が家にはあまり人がいない。

父は仕事だし、母は習い事やら旅行やらでよく家を空けるからだ。（家族仲は良好なのでご心配には及ばない）だからキャベツが庭を飛んでいても、塀の外から覗かれない限りは何の差支えも無い。無いが、これきりにしてもらいたい。

キュピルは一直線に薔薇……の隣に植えてある牡丹に突進した。

つて、ええー、牡丹？ 牡丹はもう咲いた後ですよ？ 5月前後のお花ですよ？ アレ、もしかして女王様、枯れちゃった？

ここまで引つ張ってまさかの展開に私の顔も青ざめる。どうするんだ妖精界。いや、妖精界がどうにかなると人間界もどうにかなるの？

「女王様は、力を蓄えるためにもう一年の眠りを必要としてるきゅ

ぴ。来年また咲くまでここで待たせてもらっきゅぴ」

「お引取り下さい」

あんまり差し迫った問題がなさそうでは何よりである。

だが、キャベツがここに居座っては堪らないので、もう一度3人に持ち帰ってもらう事にした。女王様の護衛がどうのとか、ダークフェアリーがそのうちかぎつけて来るとか脅されたけど、断じて断る。

というわけで、妖精の女王様親衛隊、フェアリーオレンジとフェアリーストロベリーとフェアリーピーチの戦いはこれからもしくはらく続くのである。

主に我が家の平和を守るために。行け！ 戦え！ あ、手加減は忘れないようにね。

で、脇役業を兼任している私は普段どおり他の主役の皆様とも関わらねばならないわけで。

普段どおり、会長のご相談という名の愚痴スレスレのお話を聞かされ（最近、会長も遠慮しなくなってきたよね、図々しい）、普段どおり、5人戦隊の期末対策のノートを作り（納得行かないけれど同情はするので）、赤井君と青井さんのちよつとしたノロケを聞かされ、ああ、こうして考えてみるともしかして私、人脈広がりつつある？ おかしいな、狭く浅い人間関係しか築けなかったはずなのに。

会長のお悩みはとうとう本格化してきたようだ。王様が「わが娘たちのうち一人を娶り、あとを継いで欲しい」とか言い出したとか。真面目な彼には難しい問題だろう。そもそも彼は、どこかの会社社長の息子で、なにせ優秀なのであとを継ぐのが決まっているし、

両親に対して別に不満も含む所もなさそうだ。

一方、トリップ中は身体の成長も止まっているという大変都合の良い仕組みがあるとはいえ、お姫様と結婚して王様になると、今のように気軽に行き来しにくくなる。

会社を継ぐならこちらでも結婚の話が持ち上がったってくるだろうし、そうすると重婚する羽目になるかもしれない。彼の性格では「ラッキー」と受け入れるわけには行かないだろう。

つまり、彼は今、世界の選択を迫られていると言っても過言ではない。

王様、焦るあまり下手を打ったな。もっと「こっちを選んでくれないと国が滅びる」みたいな危機的状況で縋れば、会長のことだ。見捨てはしないだろうに。

姫君達の我侭のせいで、ハーレム状態と言えど食傷気味になりつつある今、彼が首を縦に振るとは思えない。お姫様たちがもうちょっと賢く立ち回って彼を籠絡してくればおもしろいのだが……。

しかし、あつちに腰を落ち着けるとしたら苦勞三昧は間違いないだろうな。いくら出来が良くてもまだ高校生の彼に舵取りを任せなくてはいけない国に未来など無さそうだし。

人材が全く育たない国って事だものね。
年をとれば賢くなるってものでもないのは重々承知だけど、国外どころか世界の外から人材調達しなくちゃいけなかった時点で相当終わってると思う。

別に、日本の政治が素晴らしいとかこれっぽっちも思っていない
せんけどね。

まあ、会長はある意味贅沢なお悩みなので放っておけばよろしい。

問題は、可哀そうな5人戦隊だ。なんと言っても現在進行形で死んでいる。

そう、文字通り死に続けているのだ。

あの腕輪で回復されてはいるのだが、敵と戦うダメージを受ける。大怪我が蓄積される、という悪循環に陥っていて、このままだと一生ケセラシ様から逃げられなそうな予感。

あの毛玉、分かって取引を持ちかけたんだろっなあ。本当に、ケセラシ様が一番悪い宇宙人だ。いつか倒せるといいね。

そろそろ根岸さんから毛玉暗殺計画なんかが発令されそうな気がするんだけど。でもケセラシ様自身から支給された武器で、果たして倒せるんだろっか？

いつだったか「兵器とは自分を殺せるものを指す」と聞いたことがあるから、多分ケセラシ様にとっても正しく作用するとは思っただけれど。

自分にとっては無害だけど、他者にとっては脅威であるという仕組みになってたり、反逆した時点で腕輪の機能が凍結するとか、そういうズルイ自衛策は万全そうな気がするなあ……。

授業中でもケセラシ様の呼び出しはあまり容赦が無い。音が鳴る訳ではないが、あの腕輪がぎゅーぎゅー締め付けるのだそっだ。

ああ、たまに授業中みんなが右手をおさえてぷるぷるしてるの、痛みを堪えてたからなんだね……。くっ、ちよっとな涙が……。

いつそこっこの5人にこそ、時間が止まる特典とかつけてあげたらしいのに。運動系の部に所属する中山君、水橋さん、竜胆君は放課後や朝練もあるので益々気が休まらないという。

でも部活はやめないんだ？ ああ、竜胆君はスポーツ推薦組らしいからやめられないよね、そうだよね。

一方美術部幽霊部員の福島君は、その辺は大丈夫らしい。選挙も終わったから委員会ももう無いしね。どうせサボってたけど。そして根岸さんは文芸部なので、放課後の融通は利く。

しかし、正義の為にわが身と時間を削っているので、お勉強の時間や睡眠時間も一緒に削られていくのだからやりきれない。

いつそカミングアウトして色々免除してもらってはどうか、と思うほど追い詰められている。できない相談だけど。

だからこそ私は彼らのために試験対策ノートなるものを作る事にしたのだ。自分でも、こんな情け深い心が眠っているとは思わなかった。思わぬところで新しい自分を発見、である。

今回こそ、追試組がでませんように。(なむなむ)

赤井君と青井さんに関してはもうほんとにただのノロケなのでどうでもいい。むしろ私に日々報告しなくていいから。勝手に幸せにやってくれればいいよ……。でも貢物はまだまだ受け付けるよ。

ただ贅沢を言えば、実はチョコより薄塩煎餅のほうが好きなんだけどなあ……。 (もぐもぐ)

8月の脇役そのいち

8月。蝉がうるさくて憂鬱だが、学校が無い。

この開放感は何にも勝るので、何年も土の中で過ごして地上では一週間で終わる命の叫びにも寛容になれる。だって学校に行かなくて良いんだもの。

学校に行かなくて良いということは、家から出なくても良いということで、ということは会長の愚痴を聞かされないし、5人戦隊が突然挙動不審になって走り出した理由を説明しなくても良いし、最近あからさまに増えた不審者も女王親衛隊の結界のお蔭で敷地内には入って来れなくて安心だし、本当はこれっぽっちも興味の無い他人の恋愛の行方について相談されたりもしないし、当て馬にされる心配も無いのだ。

ああ！ 夏休み！

なんて浮かれながら本を読んで転がっていたらメールがきた。

F r m : 光山 海人

S b : ちょっといいかな？

相談したい事があるんだ。

今から図書館で会えない？

……はい、ナメられてますよね。どうせお前なんか友達も彼氏もいないんだし家で暇そうに転がってるんだろつと言われてますよね？ お察しの通りなんだけどね？

ついでに両親は私を置いて旅行に行っちゃってるけどね？ でもわたしさびしくないもの！ おうちからでたくないんだもの！（は、幼児退行していた）

とにかく、年頃の女の子に突然呼び出しのメールとか、絶対私を馬鹿にしていると思うんだ。こんな不条理な呼び出しに応じてたまるものか。

To：光山 海人

Sb：Re：ちよつといいかな？

今、人が来てるから…。
メールじゃだめですか？

ぼちつと。え、嘘じゃないよ。我が家は私と父が散らかし屋なので、母がキレて、以来週に一回家政婦さんをお願いしてお掃除に来てもらってるのだ。まあ、彼女は鍵も持ってるので、勝手に施錠して帰ってくれるんだけどね。

どうだ！ この、何一つ嘘をつかずに「無理そうだ」と勝手に想像させるメール。

ちなみに、タイトルが「Re」なのはわざとだ。

以前見た番組で、「狙った男の子にメールするときには、メールごとにタイトルを付け直す事 こうする事で、あなたに気があるのよってアピールできちゃうゾ」とかほざいていたためである。その逆の効果を狙っている。

できればフェードアウトしたいんだゾ みたいな。

Frm：光山 海人

Sb：できれば直接。

メールだとちょっと。

じゃあ、家に行つていい？

なにが「じゃあ」だコラあ！ お前、ちょっとモテるからつてあんま調子のるんじゃないぞ。呼び出しよりなお性質が悪いわ！

あー、もう、メールに気付かなかった事にして無視すればよかった。馬鹿だ、私。旅行に行つてゐる事にすればよかった。しかし、家か図書館かの二択なら……。

To：光山 海人

Sb：Re：できれば直接。

2時になつたら出られます。

2時半に図書館で。

緑公園の図書館ですよね？

くっそー、負けた。送つてから気が付いたけど、絶対今、いいように操られた。

確か心理トリックでこんなのあったね、「すごく無理」なお願いをして、断られてから「ちょっと無理」なお願いをすると、最初に断った罪悪感で二つ目を了承してもらいやすい、っていうの。ああ、やられた、負けた。

8月の午後2時半というのは、一番暑い時間なのではないか、と気が付いたのは家を出て5分程歩いた頃だった。

日傘は大した慰めにならず、アスファルトが照り返した熱は容赦なく私を茹だらせる。私の馬鹿馬鹿馬鹿まぬけ、何で夕方にしなかつたのさあ、と自分一人でケンカしながら公園への道をたどった。

蝉は親の敵のように鳴き続ける。熱でゆがんだアスファルトの上
に陽炎が見えた。

ああ……夏休み。

8月の脇役そのに

家から15分ほどの場所に、緑公園はある。

その敷地内に市民図書館があつて、学校の図書室には無いようなジャンルの本を借りるために、うちの学生がよく利用するらしい。

学校から歩いて5分程なので、便利なのだ。

ちなみに、我が家と学校と緑公園は、結ぶとほぼ二等辺三角形になる。学校、公園間が短い線だ。

とにかく、せっかくのおろしたてのサマードレスに汗を滲ませながらも何とか公園にたどり着いた。待ち合わせの時間まであと5分ほど有るが、おそらく会長はもう来ているだろう。そつが無いから人を呼び出しておいて遅刻するとか、ありえないから。

さあ早く冷房の効いた館内に入ろう、と玄関に足を踏み入れた所で「盛沢さん」と、呼び止められた。出席番号24番、穂積 万理さん。放送部所属で、たまに放送用の台本を借りに図書室にやってくるのでそこそこ面識はある。

「あの、ちよつと今良いかな？」

だが、挨拶以上の会話を、学校の外でするほど親しい覚えは無い。

「あー、ちよつと用事があるからごめんね？」

これからもそんなに親しくする予定も無いので（今の人間関係だけでも手一杯です）さらりとかわして逃げようとしたら腕をつかまれた。ひい、何？

「光山君の事で、聞きたい事があるの」

……うわあい。とうとうきたよー。

やっぱり勘違いによる嫉妬なのかなあ。でも、穂積さんはどっち

かつて言うとおとなしめで、悪く言うと地味で目立たない子だからなあ。

うらやましいほど真っ黒な髪を、それは今時なかるうというくらいきちつと三つ編みにしている。すごく真面目そうだ。

こんな子が嫉妬に駆られて自分の意思で来た、と考えるよりは怖い人たちに脅されて、私を連行するための使いつ走りになされてるだけって言うほうがしっくりくる。

これで、人目の付かない所に連れて行かれて、複数の女の子に囲まれて「ちよつと調子に乗りすぎじゃない？」とか理不尽な事言われたらどうしよう。わかんないけど。

しかし待てよ。これはもしかすると会長の恋愛イベントの一種なのではないか？ 彼女こそ会長にとっての真のヒロインである可能性が高くないか？

だって地味っぽくて自称平凡な子（でも実はいつも着ない系統の服を着たりちよつと髪型変えたりするだけで滅茶苦茶可愛く変身したりするんだ）って、ハーレクイン系ロマンスのヒロインの典型例じゃないか。

は！ てことは今私の立場って、ヒロインの想い人とやたら仲の良いクラスメイト？

一見そこそこつりあって見えるからヒロインは不安になるんだけど、実際は本当にただの「異性の友達」に過ぎず、ヒロインの気持ちを知ってやたらと世話を焼いてくれるお節介な人ポジション？

うっわあめんどくせえ。

「会長の事なら、ちよつど良かったね、今から会つとこなの。一緒においでよ」

「え、今から？ もしかして中にいるの？」

「うん。本の貸し借りするだけなんだけど」
罪の無い嘘について勧誘する。

だって、これは一石二鳥ですよ？ うまくすれば面倒な相談事とやらもうやむやになるし、さつさと会長に関する疑問を解消すれば物語の展開がスムーズになる。

加えて、二人がくっ付いてしまえば、秘密を共有する相談役からも逃れられるってえ寸法だ。私、冴えてる！

「え、でも、あの、本人には聞き辛くて。どうしようって思ったから、盛沢さんが通りかかったから、つい……」

「うん、でもそういう大事な事ならなおさら、私が勝手に答えるより、本人から聞いたほうが良いんじゃないかな？」

いいから遠慮するなって。多少なら恋の後押しとやらもしてあげるからさあ。うふふ。

いきなり尻込みし始めた彼女を何とか言いくるめて連れ込もうと（犯罪っぽい）頑張っていたら、

「盛沢さんと、穂積さん？」

と、私の姿を発見したらしい会長が、図書館から出てきて声をかけてくれた。

今ヒーローっぽかった。とてもヒーローっぽかったよ会長。

「あ、こ、こんにちは、光山君」

「お待たせしました」

「こんにちは。穂積さん、どうしたの？」

穂積さんは何故か私の後ろにさつと隠れて、うつむきながら会長に挨拶した。照れておるのか？ 愛いヤツじゃ。（なんちゃって）

「穂積さんが、会長に聞きたい事があるんですって」

「え、あ、あの、違うの」

この期に及んで往生際が悪い。

会長はしばし首をかしげて（だから男子高校生がそんな可愛いしぐさしても……畜生絵になるな！）いたが、頷いた。基本的にノーと言わない男だ。ち、いい子ちゃんめ。（私もだけど）

「とりあえず、中に入るう？ 自習室とつてあるから」
確かにこの炎天下、外で長時間お話し合いなんてしてられない。ありがたいお申し出に、私は喜んで館内に足を踏み入れた。

この図書館は、学校が近所にいくつもあるため、小さな個室が数部屋設けられている。グループ学習などで使えるように、との心遣いだ。

ある程度の会話は許されているのでちょっとした集まりに便利なのだ。

平日も人気があつて、予約もできないのでなかなか取れない。本来の目的通りに使われているかは別として。

携帯ゲーム機の持込は一応禁止されてはいるものの、監視カメラもないし荷物検査もされないので、放課後小学生たちが集まって遊んでいたりで、ちょっと問題になっていたりもする。

こんな人気の場所をよく確保したものだ。さすが会長。どうやったかなんて聞きませんよ。どうせ主人公特性だもの。

私がさっさと入ってしまったので、穂積さんも諦めて付いてきた。会長は最後である。レディファーストとは、お若いのに紳士ですと。

8月の脇役そのさん

自習室に入ると、穂積さんは思い切ったように切り出した。

「最近一緒の所よく見るけど、二人って付き合ってるの？」

おー、直球。

「そう見える？」

にこっと笑って会長が聞き返した。

質問に質問を返すのはマナー違反だと思うが、煙に巻きたいならこつするのが最善だ。

会長としては、私との関係は隠れ蓑として色々便利なので曖昧にしておきたいんだろう。ああ、利用されている……。

会長は決してただのいい人じゃないんだな。でなきゃ宰相役なんて務まらないか。でもこれ、あんたの恋人イベントかもしれないんだからもうちょっと慎重にお願いしますよ。

「……図書資料室で、わたし、見ちゃったの」

資料室で見られちゃった、私達のまずい秘密など一つしかない。

「光山君が、光に包まれてた。盛沢さんが、おかえりなさいって……」

それだけ聞くと、なんだかトリップ系物語のエンディングみたいじゃないか。

言っとくけど会長のトリップは下手すると一生続くんですよ？

たまたま帰ってきた所に居合わせたらおかえりなさいくらい言うわ！

しかし、いつの間に見られてたんだろう。気配を感じなかったんだけどなあ。いやあ、失敗失敗。

「新刊のリストが欲しくて、盛沢さんが資料室入ったの見て追いか

けたの。勝手に入っちゃってごめんなさい、でも……」

それは多分会長の主人公特性「ヒロインにはれちゃったイベント」が発動したんだよ、きみのせいじゃない。世界の約束だよ。抗えない運命ってやつだよ。

「光山君って、もしかして別な世界に行ってたの？」

「……うん」

会長は正直に答えた。まあ、うまいごまかし方が無いし、穂積さんは確信を持つてる感じなのでほかはどうしようもないんだけど。

「盛沢さんは、知ってたの？」

「うん、それでたまにお話するようになったの」

つまり秘密を知ったが故に結ばれた縁であって、それ以上ではないのですよ。

「そうだったんだあ」

そうだったんですよ、だから安心してヒロインの座に納まると良い。

穂積さんはそれはそれはながーいたため息をついた。胸のつかえが取れたように。だが、次に彼女の口から出た言葉は私の想像とは90度程ずれていた。

「実は私、昔から不思議な夢をみるんだけど……」

つかえつつつかえ穂積さんが語った話は、次のような内容である。

子供の頃から、彼女は繰り返し夢を見ていた。こことは違う世界。アラビアンナイトに出てくるようなお城と、こちらの世界にはありえないほど色彩の豊かな人々。空に輝く太陽は常に頭の上であり、月がその日差しを遮る事によって夜が来る。当然、夜の時間はかなり短い。

人々はその短い夜を尊び、闇を愛しむ。よって、黒は高貴の色と

されている。

そんな世界を、時には空から眺め、時には誰かの目を通して、ずうっと見ていた。

ところが最近、起きているときもそちらの光景が目には浮かび、誰かが呼んでいる声を聞くようになった。その声は彼女を「月の巫女」と呼び、しきりに、こちらに来てくれと懇願する。

間隔はどんどん短くなり、自分が今起きているのか、寝ているのか区別がつきにくくなってきた。

「それで、光山君がもし、同じような体験をしてたなら、何かアドバイスをもらえるかと思って……」

……あー、うん。思考が停止する所だった、というかちょっと停止してた。

黒が高貴ですか、そうですか。アジア人なら誰もが望む所ですね。あ、でも、たまに思うんですけど、本当に、純粹に黒目って、アリなの？ 例えば私や会長は、色素が薄い体質で髪は茶色混じりだし、目の色も焦げ茶なんだけど。人の目を間近で覗き込んだりしないからよくわかんないなあ。それとも焦げ茶は黒と言う事になってるのかなあ？

でも穂積さんの髪は間違いなく真っ黒だ。きっとその世界で大事にされるに違いない。

その夢やら白昼夢やら声やらが妄想じゃなけりゃあな！

こんな話去年のうちに聞かされてたら一秒も迷わず病院へ行けと強く勧めただろう。だが今年に入ってからの私は、悲しいかな、超

常現象に慣れきってしまった。

「うん、オレの時は、前兆があったわけじゃないんだ。最初は事故みたいなので……」

会長がナチュラルに対応した。

しかしちよつと待ちたまえ。彼女に必要なのはアドバイスよりも、それが妄想なのか現実なのかを区別する術だと思うんだ。具体的な対策はその後だ。

「今は自由に行き来できるようになったけど、最初あつちに飛ばされた時は途方にくれたよ」

「そっか、帰ってこられるとは限らないんだよね」

「言葉も、翻訳魔法をかけてもらうまでは解らなかつたくらいだしね」

「夢の中だと、言葉は解るんだけど……」

二人の情報交換はまるで世間話のように続く。帰って良いですか？

「盛沢さんは、連れてってもらった事あるの？」

「うん。私は、たまにお話を聞くだけ」

私のことは良いから二人でそのまま盛り上がってくれ。

しばらく、最初のためらいが嘘のように会話が弾んでいたが、穂積さんが突然耳を押さえてよろめいた。とつさに背中に手を回して支える。

反対側から、会長も彼女の腕を掴んだ。

これがその白昼夢の発作か、難儀な。なんて、のんきに同情していたら。

「……っ」

私達の足元に、黒い闇が、広がって、そして。

眩暈が

耳鳴りが

頭痛が

意識が

混濁する、全て、何かに飲まれて、そして、そして

.....

気が付いたら私たち3人は、石舞台のような遺跡らしきものの上に、折り重なって倒れていたのです。

8月の脇役そのよん

穂積さんが倒れそうになったのを支えた私と会長は、彼女の召喚（？）に巻き込まれて、謎の石の上に放り出されたらしい。その際、激しい眩暈、耳鳴り、頭痛に襲われた私達は軽く気を失ったようだ。大して広くも無い平べったい石の上に、私が一番下敷きになって会長が足の上に、穂積さんが胸の上に倒れていた。

あー、うん、さすが脇役。こんな絶好のチャンスでも、会長相手に「倒れたらうつかり押し倒してるみたいな状態に！ ドキドキ」フラグが立たない。別に期待してたわけではないけど。でも、こういう時に自分の身の程を思い知るなあ。

それはともかく、どうやら私が真つ先に目が覚めたらしい。重くて苦しかったから寝てる場合じゃなかったんだよね。

気を取り直した私は、二人の意識が無いのをいいことに、会長を蹴り落とした。

よし、やってやった！いつか蹴ってやりたいと思ってたんだ。穂積さんは、身体をうまく動かしてずり落とす。多分今回の主人公だからな。巫女様だし。

落とされた衝撃で二人が「うつ」とうめいて目を覚ました。

蹴落とした時にちょっと良い音がしたので、多分会長は頭を打ったのだろう。後頭部を抑えて顔をしかめている。……フ。（満足）

二人とも、取り乱す事も無く落ち着いて立ち上がった。さすが、かたや夢で予兆を感じていた本人、かたやトリップの大先輩だ。私なんかよりよほど状況を解っているのだろう。私は恐ろしくてこの石から降りたくないくらいだよ。

あ、いや、立たせようとしてくれなくていいから。このまま帰りたいから、私。抱き上げないで、やめてえ、会長。

「ここは……多分王宮内の遺跡だわ」

穂積さんがつぶやいた。

現在地が判明して大変結構。王宮内ならきつと手厚く保護してもらえそうだし、不慮の事故で巻き込まれたとはいえまずまずの着地点だ。ジャングルのなかとかじゃなくて何より。

でも、穂積さんは「呼ばれてる」って言ったのになんでお迎えが無いんだろう。なんで好青年風の王子様とか美系の魔術師とかちよつと気難しそうなカツコイイ騎士とかに囲まれてないんだろう。

(巫女召喚って言ったら逆ハーだよ、ね?)

後半は口にせず、前半の疑問を指摘すると、会長も頷いた。

「そうだね、とりあえず人を探した方が良い」

「あ、大丈夫。多分もうすぐ、夕方の礼拝に神官さんたちがここに来るはず」

夕方？

そつえば、と空を見上げた。ここは常に太陽が真上にある世界。月がその光を覆い隠す事で夜が来る。あれ、太陽ちっちゃい。そして、月がやたら大きい。

つていうか、地平線からはみ出しているあのおっきな半円がそんなんだよね？

月が日蝕を起こしている時間が夜なのだろうとは思っていたが、どうやらこの日蝕の規模は相当大きいらしい。どういう仕組みだ？太陽が常に真上にあるということはこの星には自転が無いのだから。自転がないとすると、重力はどうなってるんだ。あと、気温がこの程度で収まっているのは何故だ。太陽からかなりの距離があ

るのかな？

いや、ファンタジーでそんな天文学的疑問なんか持つちゃダメだ、多分。なんか不思議な力が働いてる、でいいじゃないか。でも一日が何時間なのかだけは本当に気になる。

帰れるかどうかという問題は気付かない振りだ。これ考えると正気を保てなくなる。

やがて月がその姿を半分ほど現して辺りがそこそこ薄暗くなった頃、紺色のずるずるとした服を着た人々が数人やってきて私達を発見し、がばつとひれ伏した。どうやら月の巫女とその従者みたいに認定されたらしい。その場で私達は手厚く保護された。

不安だった言葉の問題？ 当たり前のように私だけ言葉が解らなかつたので、会長がこっそり翻訳魔法をかけてくれました。便利ですねえ。（なんでそんなの使えるの、世界違うのに、とか絶対突っ込まないぞー！）

それが昨日のことで、とにかく今、私はなんと

「巫女様、どうぞバルコニーへ」

巫女様、をやっていた。正しくは代理、だ。影武者とも言う。もう、何がなんだか。

「盛沢さん、引きつつてるよ。笑顔笑顔」

私をエスコートするのは会長、もとい月の騎士（ぷーっくすくす）である。黒地に銀の装飾というお約束の色合いの、アオザイっぽい衣装が大変お似合いです。

一方私の衣装は、黒一色。

ベリーダンスの衣装（うちの母がジムでベリーダンスやってるのでそんなに抵抗は無い）の露出を若干控えたような服に、アクセサ

リーと一体になった薄布をびろびろとたれ下げるのがこちらの女性の正装だとかで、風の強い3階のバルコニーでは大変鬱陶しい。

髪の毛の黒さ（この程度の茶髪はやはり黒髪認定だった）を強調するために上半身がビステイプなので、常夏のこの国でもなんだか寒々しい。ちよつと可哀そうに見えるほど上半身丸出しである。

ホルターネックじゃだめなのか。

今から私は、月の巫女としてお披露目される。そして本物の月の巫女である穂積さんは、人々の興味が私に集中している間にこつそりと、世界を救うための旅に出発するのだ。

なぜこつそり出発しなくてはならないかということ……あーもー、なんて言ったらいいんだろう。

バルコニーの両扉が開け放たれ、歓声がどつと耳に飛び込んできた。

わーとかおーとかきゃーとか、意味を成さない声があまりに重なりすぎると、ただの耳鳴りのように聞こえるものなんだなあ。

とにかく、状況を整理して考える前にこのお披露目を無事に乗り切らなくてはいけない。作り笑いに集中だ。作り笑いはそこそ得意なので、気を静めればそれなりに巫女様っぽく微笑む事ができる。

「こたび我らの元へ、月の巫女様のご光臨を賜り……」

なんとたらかたらと、神官長と名乗る老人が朗々と口上を述べる。つまり「300年ぶりに来てくれた巫女様だよ、敬ってね」みたいなことを言いたいのだろうが、装飾語や古文みたいな言い回しが多すぎて長つたらしい。まあ、なるべく盛り上げて、私を本物の巫女だと信じさせようという魂胆もある、のかな？

私はひたすら微笑んで、集まった人々にそつと手を振るだけであ

る。そのように演技指導された。

良かった、ここで巫女らしいことしてみるとか人々を感動させるようなスピーチをしろとか言われなくて。

こういう雰囲気に慣れているのか、会長は平然と私にかしづく様に（なのによたら堂々として見えますね）控えている。普段から姫君たちにこうやって連れまわされているのかもしれない。いや、絶対そうだ。だってあまりに自然体すぎる。

会長も、見えないところで苦労してたのね……。

8月の脇役その1

体感では3時間ほどのお披露目のあと、やっと私達は解放された。

部屋に戻って、とりあえず過剰装飾を取っ払う。特に靴を脱げたのは嬉しい。

私はこの世界の人々に比べて身長がかなり低め（152センチ）なので身体に合う服がすぐには用意できず、かといって子供用のワンピースでは格好が付かないので、仕方なくものすごくヒールの高い靴を履いて底上げしたのだ。

もう、竹馬の上でつま先立ちする気分だった。このお陰で、私は、部屋から出てお披露目して帰ってくるまで、会長とお手々繋いで支えてもらう羽目になった。く、宿敵に頼らねば歩けないなんて、屈辱的。

黒が高貴扱いであるからして、黒に近い服ほど身分が高いことになっている。黒を着られるのは王族（と、月の巫女関係者？）だけなので、黒い服など一日で簡単に用意できるものではない。らしい。既存の型紙からとはいえ、一日で作り上げたお針子さんたちの努力を無碍にはすまいよ。

本音を言うなら、部屋では楽な服で過ごしたい。

着飾るのは大好きだけど、時々だから良いんだ。しかし私は現在の月の巫女（偽者）なので、ある程度はそれっぽく見えるように装わなくてはいけない。

だから、もっと露出の少なくして楽そうな子供服にして欲しいとか、いっそ男物が着たいなんて我侭は口が裂けても言えない。ただの脇役なのに保護してもらってる立場だから。我慢我慢。

今頃本物の方は、徒歩で世界を救う旅とやらをしているのだ。(まだ初日だけ)

徒歩で旅とか、たかが3時間(多分実際にはもうちょっと短かったんじゃないかな)立っただけで足の裏がつりそうになった私には絶対無理だなー、と、つま先を揉み解していると、ドアをノックする音がした。

「おくつろぎの所失礼致します。巫女様、騎士様がお見えです」
私のお世話係らしい女性が会長の訪問を告げる。

ほんとしつれーだな！今から身体をほぐすために柔軟体操でもしようと思ってたのに。メールの時も思ったけど、まず先触れを寄越そうよ。

その場で判断させるんじゃないやなくて、もうちょっと余裕を持たせてよ。そしたら断る理由いくらでも考えられるから。

ああ、思い出した。考えてみたらあの強引な呼び出しメールが全ての元凶だった。あれのせいで、こんな事になったのだ。うわー、ムカムカする。イライラする。

いっそのこと「カエレ！」と言って塩まいてやろうか、とさえ思ったが、そんなことできないできない。

いつも想像だけで我慢ですよ。昨日蹴り落としてやっただけでもものすごい快拳ですよ。

「……はい、お通しして下さい」

迷惑がっている様子は感じさせないような声を努めて出した。

だって私は清らかで優しくして大人しい巫女様。本物が無事に勤めを果たして帰ってくるまで、対外的には私が月の巫女。そういう約束だ。

一度引き受けた約束を破っては女が廃る。(半ば流されて約束させられただけとはいえ)

「失礼します、姫君」

しれっと挨拶して会長が部屋に入ってきた。

涼しい顔して「姫君」とかよく言えるよね。身に付いちゃってるんだね。

お茶だけ入れてもらって人払いをすると、会長は日本語で話し出した。盗聴されようが、これなら漏洩することもなさそうだ。

靴を脱いで楽にするように勧めてくれたので、ありがたくお言葉に甘える。一度脱いで開放された後にもう一度履くと、かえって辛くなるものだよね。

「盛沢さんも、大変だね」

「穂積さんほどじゃないから」

王宮で綺麗な服着せてもらって、衣食住になんの不自由も無く養われ、公務というのは日に数回のご挨拶だけ。あとはお部屋でお寛ぎください状態の私と、少数精鋭といえは聞こえが良いが本人含め4人という、世界を救うには驚きの少人数(しかも徒歩!)で出発した彼女とでは、だいぶ負担が違う。

とはいえ彼女は主人公なので、多少の苦労は物語のうちというかなんというか。

苦労する主人公たちといえは、5人戦隊はどうしているだろう。

来週には宿題見てあげる予定だったんだけど、それまでに帰れるかしら。会長も一緒なんだから、例の「トリップ中は時間が止まっている」特性が発揮されても良いと思うんだけど。

穂積さんは、「壮年期を迎え男ぶりの大層上がった」王子様と、「筋骨隆々で逞しい」次期神官長と、「無精髭がワイルドさを引き立てている」国一番の腕利きの傭兵と一緒に旅に出た。

そんな彼女に比べたら私なんてお姫様みたいな生活である。（それぞれにつく肩書きは褒め言葉です、一応）

多少、暗殺の危険があつて、半分軟禁されていようともな！

そう、暗殺。

どこにでも、宗教上の対立というものがあるわけで。月神信仰があれば、太陽神信仰も存在しないはずもなく、国同士の利権争いも絡んでなかなか大変な事になっているらしい。

大陸中央の、日差しが豊かな国々は月神を。

大陸の端に位置する、日照時間の少ない（ということはこの世界はやはり球形で、しかも直径は地球より相当小さい事になるまいか？）国々は太陽神を、それぞれ崇めている。

ちなみに、太陽神信仰の国より先は、氷と闇に覆われて人が生存できない世界になっているそうだ。

つまり、暑い所は日陰を求め、寒い所は日向を求める、という当然の図式なのだ。で、太陽神信仰の過激派が、最近テロ行為みたいなことを繰り返し始めたとかで……。

「少なくとも、解毒はできるし、回復もできるから。いざとなれば蘇生もできるし、安心して良いよ」

「あ、ありがとう……」

なんて嫌な励まし方するんだ！ こっちは小心者だぞ、もっと言い方考えろ！ せっかくプラス方向に考えて恐怖に耐えてるのに。

「怖いだろうけど、オレも騎士らしくちゃんと守るから、頑張つて」
アハハ、爽やかでムカつく。

私達が保護された時、私にだけはこちらの言葉が解らなかつた。だから、何か話しかけられるたびに会長に小声で尋ねて教えてもらったり、必要な返事を代わりにしてもらったりしていたところ、何か勘違いが生じてしまったようで「下々の者とは直接お話にならない。ということはあの方が巫女様だ!」という風に認定されていた。

加えて私の服装が黒地に白のハイビスカスのサマードレスで、会長は青いサマーセーターにジーンズ、穂積さんは白のプリントTシャツにジーンズという格好だったので、「黒に近い服ほど身分が高い」が常識の人々はアツサリと私を巫女だと信じ込んだらしい。どつりで真つ先に私にお茶が出されたわけだ。

で、偉い人たちが改めてご挨拶に来るといので、しばらく貴賓室で待たされている間に翻訳魔法をかけてもらった私は、やがてやってきた王様と神官長と数名の大臣に巫女様と呼びかけられたのにビックリして「ひ、人違いです!」と叫んでしまった。

めでたく誤解は解けたけれども、既に城中の人々が勘違いしているし、これは好都合とそのまま代役に抜擢されてしまったのです…。

8月の脇役そのらく

「この世界は、魔法が無くて不便だね」

「私にとつては、魔法がある生活のほうが想像つかないけど」

「でも、魔法みたいなものに囲まれた生活じゃないか」

行き過ぎた科学は魔法にしか見えないってやつですか。確かにね。そう、この世界には魔法は無い。ということが昨日判明した。

よく、ゲームなんかだと信仰の力を魔法に変えて色々できちゃったりするものなのに、そういうところは、この世界はシビアだった。宗教の守り手としての神官はいるけれども、あくまで彼らは信仰し、祈るだけなのだ。そして精神を鍛え、心身を鍛える。

旅に出た次期神官長が筋骨隆々なのは日々の鍛錬のお蔭なのだろう。守り手というのは言葉の通り、時には武力行使でもって守るんだそうだ。ねえ、それって……。

正直な所、世界の危機というのかなり眉唾物だと私は考える。何故なら、世界に危機が迫っているという根拠は「太陽神信仰の過激派が、月神の像を破壊してまわっているから」なのである。

神様の像を壊すと何かあるの？ 罰が当たるの？ それとも月神の像が、重力発生装置とか温度調節機（惑星規模のエアコンとかすごいな）とか、遮光シールドとかの役目を果たしているというの？ 古代の超科学の遺産とかだったりする？ すげー！

しかも、一般の人々には世界が危ない、とか、一切知らせないように情報管理しているみたいだし。

悪戯にパニックが起きるのを避けたいのは解るけど、自分達でできる危機管理をしましょうよ。例えば、神殿の周りに自警団を配置

するとかさあ。

今日バルコニーから見ただけでも、ものすごく暢気そうだったよ？ 昼日中からほぼ全員ベロベロに酔ってるとか、どんだけ緩んでるの。むしろ街の治安は大丈夫なの？

過激派とやらにも、一応通告しようよ。「その像破壊すると世界が終わるんだけど、いいの？」って。狂信的な人なら、「真の神が認められぬ世界など滅びてしまえ」とかいうかも知れないけど、中には躊躇する人だっているだろうから。

それで内部分裂して自滅してくれたら儲けものだ。さあ、れっつとらい！

旅立った穂積さんたちが何をしに行ったかというと、壊された神様の像の修復などではなくて、「最果ての地（人間が生存できる限界ラインのこと）にある隠された月の神殿に赴き、月神の怒りを解く」ため、らしい。

なにその曖昧な目的。怒りってどうやって解くの。

とにかくこれだけだと、実在しない（または人には一切関与しない）神という概念にただ怯えて、たまたま神隠しでやってきた出自不明で毛色の違う（文字通り）人間を神の使者として祀り上げてるだけ、って感じなんだよね。

唯一の救いは、穂積さんが繰り返して夢を見ていたらしい事と、誰かが「呼んだ」らしい事。これだけが、なんとなくこの世界の危機とか月の神とかに信憑性を持たせている。

これが無かったらまるで杞憂の故事そのものだ。「空が落ちる！」ってやつ。

「世界を救う旅なんてすごくファンタジーっぽいのに、魔法が無いなんて不思議な気がする。怪我したら大変そうだね」

私は、ゲームをやっている分には回復魔法より攻撃魔法派だ。回復は、上限まで買い占めた回復薬に頼る。だってMPもつたいないじゃん？

しかし現実の旅に出たとして、四次元ポケットもないこんな世界で、そんなに回復薬など持ち運べるものだろうか？ 第一、飲めばどんな怪我でも治しちゃう薬とか、ないから！

……いや、服用したら痛みも恐怖も理性も無くすような感じの薬はあるかもしれないけど。良い子は手を出したらいけません。ダメ、ゼツタイ。

とにかく、アイテムの持ち上限が99などで無い以上、回復魔法ってものすごく大事じゃなかるうか、という考察ですよ。

「この世界にはモンスター系の敵はいないみたいだし、警戒しなきゃいけないのは追剥と、あとは過激派だけらしいよ。一緒に行った3人は、この世界でも5本の指に入る強さだって言うし、きっと大丈夫だよ。お忍びだし」

え、筋肉達磨たち、(暴言)そんな強かったんだ。

赤、青、黄色、3カラーで信号みたいな髪色と、ひたすらゴツい空間に気をとられてあんまり聞いてなかった。だって別に私には関係ない人々だし。

まあ、世界を救う旅に出るくらいなんだから強いでしょう、とは思っていたのでそんなに驚かない。あの外見で滅茶苦茶弱かったらビックリしたけど。

「せめて、会長が付いて行けたら心強かったのにね」

なにせ魔法使いだ。魔法が無い世界にいる魔法使いなんて、もしかしたら最強なんじゃなかるうか？ 回復魔法とか。(しつこい)

「うん、でも盛沢さんも十分危険だから。それに、こっちにオレがいたほうが本物っぽいでしょ？」

すみませんねー、二セモノで。ええ、ええ、心強いですとも。死んでも生き返らせていただけそうですし。……事が起こる前に防げよ！

「まあ、毒を気にせずに食事ができるっていうのは、すごくありがたいかな」

暗殺といったらまず毒である。

一々食べ物をお口にすると、口に死ぬかもしれないなんて怯えるのは真つ平だ。食べる前に一通り解毒してくれるのは素晴らしい。

最近は食に全く興味の無い人もいるようだけど、私は違う。おいしいもの大好き！ だから食事は安心してとりたいたいです。

この国は常夏なので、スパイシーな料理が主体らしい。そしてもっと嬉しい事に、長粒米がある。ああ、今日はカレーみたいなものがでるといいなあ。昨日はピラフっぽい何かが出たなあ。

「ところで、思ったんだけど」

今日の夕食に思いをさせていると、会長が真剣な顔で切り出した。なんだよ。

「オレを通すように言った時の、扱いがちょっと丁寧すぎる気がして」

はい、ダメだしですか。演技指導ですか。

「オレは君の騎士なんだから、もっとそれっぽく扱ってほしいな」
それっぽくって具体的にどうしろと。

「えっと……例えば、あの、お姫様たちはどんな風に話してるの？」
参考にしてやるーじゃないか。

「そうだね……長女のレミア様は、すぐくのんびりした方なんだ。いつもワンテンポ遅れる感じかな。彼女なら、そうだな」はあい、どうぞ〜」かな
「ふむふむ。」

「次女のルビア様は気が強くて自信家だね。政治にも積極的に関わっているし、男なんかに負けてたまるかっていう気持ちは強いんだろう。彼女なら『入りなさい!』だね」
偉そうだけど、なんかいいですね、それ。

「三女のリア様は、やっぱり甘やかされているせいか、たまにビツクリするような事を平気でするんだ。多分、無言で飛び出してきてそのまま抱きつくかな」

全く参考にならないな！ちゃんと躰けとけ。

「それで……どなたを参考にしたらいいの？」

三女は却下とするが。

「今のイメージだと、レミア様がしつかりした感じかな。少しそっけなく『どうぞ』とかで良いんじゃない？」

そっけなくして良いのか。それはわりと望む所だよ？ 遠慮しないよ？

「あと、オレのことはカイトって呼び捨ててくれていいから」
全力で断りたいが、「ひめぎみときし」「ごっこなので仕方あるまい。」

いや、でも、日本語で会長って呼ぶ分には、意味も解ないだらうし構わくないですか？

「うっかり翻訳されるかもしれないし。それにほら、いつまでも会長じゃ他人行儀でしょ？そもそもオレ、もう会長じゃないからね？」

……いつかこんな日が来るかもしれないと思っていた。

もう会長じゃないのに何で会長って呼ぶのかって、いつか指摘されてしまう日が来るかもしれないと、思ってたはいた。しかし苗字呼びすら飛び越えて名前呼び（しかも呼び捨て）を要求されると思っ
てなかった。演技のためとはいえハードル高いな！

「う、うん、ごめんね？ クセになっちゃって」

「てめーとはこれ以上馴れ合う気なんかねーんだよ、ぺっ、とか言えない。」

「えっと、じゃあ、普段は光山君って呼ばせてもらうね」

「でも、統一した方がうっかり呼び間違えなくていいと思うけどな」

「……じゃあ、こっちにいる間は、名前で呼ばせてもらうね」

押し負けた自分が哀しい。

8月の脇役そのな

ふと気が付くと、お茶のポットが冷め切っていた。

ポットごと冷め切ったということはかなり時間がたっているはず、と外を見ると、月の姿が半分ほど見えた。そろそろ夕方の礼拝とやらの時間だ。私達も立ち会うことになっているので、準備せねば。

「失礼致します。お着替えのお手伝いに参加しました」
ほらきた。

ここでは何でも人にやつてもらわねばならない。本当は靴を脱ぐのさえ、手伝ってもらわなければならない。お姫様生活も楽ではない。

「では、外でお待ちしております」

会長はさつさと言葉を切り替えて、部屋を出て行った。案外ロールプレイを楽しんでいるのかなあ。開き直って私も楽しもうっと。

新しく着付けてもらった服は、私の身体に合わせて仕立ててあった。良かった、これである竹馬で曲芸みたいな気分にならずに済む。靴も、やはりちょっとヒールがあったものの、一人で歩くのに不自由しない程度の高さだ。5センチくらい？

夕方から夜にかけての衣装ということで、日中のものよりも露出が少なくて大人しい。でもやっぱり黒い。もっと華やかな服が着たいです。おねーさんが着てる青い色、綺麗ですね。

部屋を出ると、護衛の騎士たちと一緒に会長が立っていた。本職より絵になるな。

あえて声はかけずに頷いて、歩き出そうとするとさっと手を取られた。いや、あの、もう一人で歩けるんだけど……くそう。

恥ずかしがる事ないわ、これはロールプレイよ！ 私は巫女姫様
彼は私の忠実な騎士。自己暗示、自己暗示！ そもそもここは学校
じゃないんだから誰に見られてもへーきよ！ それに、こうやって
丁重に扱われれば扱われるほど、私が本物みたいに見えるから目眩
ましになるのよ！（必死の正当化）

涼しい顔はキープしていたものの、ものすごい羞恥プレイに気力
が磨り減りきって、夕方の礼拝の内容はあまり頭に入らなかった。
葛藤が……葛藤が……！

それでもとりあえず見ていた限りでは、太陽が映っている水盆の
中の酒を、日蝕が始まる瞬間を見計らって飲み干す、という儀式ら
しい。

一抱えもある水盆に並々とお酒が注がれていて、あれを飲み干す
のはなかなか至難の業ではないかと思われた。

宗教的儀式になんらかのアルコールがつきものなのは解るけど、
ちよつと控えようよ。なんだその量。急性アルコール中毒になりそ
うなんだけど。度数もかなり高そうな匂いがするし。

そうじゃなくても、持ち上げるだけで相当の重量がありそうだ。
水盆は、多分銀だと思っけどかなりしっかりした作りだし。深さも
結構あるし。

ああ、でもこの神官つてすごく鍛えてるからな……。持つ分には
大丈夫なのかな。アルコールにも強くなくてはこのお仕事は勤ま
らないだろうなあ。

夕方の礼拝の後は、王族の皆様と一緒に夕食である。流石にこれ
には緊張するが、一通りのテーブルマナーはできるし（会長は当然

完璧でしょうとも）昨夜の食事ではお箸らしきものとスプーンっぽいものがあつた。メニューもバリ島とかタイで出たお料理と似た感じだったし、多分食べ方もそんなに変わらないはず。

人の顔を伺いながら行動するのは大の得意（なんて嫌な特技）だから、観察しながらゆつくり食べよつと。

王族の皆さんに対しても、基本的に私が月の巫女ということになっていて、代理と知っているのは王様とそこご長男（多分40代後半）だけ。

今回穂積さんと旅に出たのは次男で、旅に出た理由は「俺より強い奴に会いに行く」という事になってるらしい。つまり武者修行ね。いいのか、王族がそれで。

そして穂積さんは「お使いで月神様のところへ行っている」ことになっている。うん、嘘じゃないよね。この言い方だと、まるで私のお使いに行かされたみたいに聞こえるよね。私、何様だ？ ああ、そうだ巫女様でした。

ちなみに、国の重要人物が一気に旅立ったことにすると不自然だということ、次期神官長に関しては身体を壊して病欠、ということになっている。（病欠ううう？）

どんな性質の悪い病気ならあの人倒せるんだ。

案内されて部屋に入ると、王様以外がずらりと立って出迎えてくれた。ひいひい、座つて！ 怖いから、おつきいから、圧倒されるからあ！

ヒールで5センチ底上げしている私より、更に40センチくらい背の高い皆様（女性だって20センチは高そう）が全員真っ黒な衣装を着てズラつと並んでいるのだ。どう考えたって怖い。生贄の儀式とか始まりかねない圧迫感だ。

髪の色だけカラフルなので、シユールなサーカスに迷い込んだよ
うな気にもなる。

私が軽くお辞儀をして座ると、やっと全員が着席してくれた。あ
あ怖かった。巫女つて、王様よりは身分が下で、その他の王族より
は身分が上の扱いなのかあ。……なのに本物は徒歩で、今頃野宿、
か。

とにかく圧迫感がだいぶ薄れたので、周りを見渡してみると、こ
の部屋にかなりの人数がいるらしい事がわかった。まあそりゃそう
だ、王様（70くらい？）、王様の息子たち（40代前後？）、そ
の家族、さらにその下世代（20前後？）、そしてもう一つ下世代
（幼児がいる……）って感じだろう。

人種が違つので見た目より若いのかも知れないけど。

「今宵は月の巫女様と、その騎士殿をお招きしての晚餐。皆、よく
集まってくれた。我が国のますますの繁栄を、月神様にお祈りしよ
う」

王様が合図をすると、目の前に置かれた小さな杯に液体が注がれ
た。先ほど夕方の礼拝で嫌というほど嗅いだ、あの匂いがする。っ
てことはこれ、お酒かあ……。

テーブルについた全員が杯を持ち上げた。なんとあの幼児まで両
手で持ち上げている。なにあれちよつと可愛い。じゃなくて。

倫理的には「未成年なので」と断りたい所だが、どうもこれは宗
教色の強い、儀式じみた杯だ。断りにくい。ええい、これはお神酒
と一緒に。一口分だし、いってしまえ。

想像はついていたが、杯に付けた唇から、舌、喉、胃にかけて一
気に熱を持った。

熱い熱い熱い痛熱い！　だがむせてたまるものか。プライドにかけて無表情で飲み込んだ。

薬草を漬けたような独特な味がして、不思議と酩酊感のようなものは感じなかった。アルコール度強そうなんだけどな。

にしても幼児にまで飲ませるとは、なんという英才教育か。舐める程度の量みたいだったけど、きつと年々量が増えていって、いつかあの夕方の儀式みたいな事になっちゃうんだろっな……。

は、もしかして日中集まってた人達がベロベロに酔ってたのってまさかこれと関係ある？　広場に入るのに一定量飲まなきゃだめーとか、そんな規則？

これから毎日、昼過ぎに一度バルコニーで手を振る予定なんだけど、そのたびにあんな大量の酔っ払い作るつもりじゃあるまいな？　仕事はどうする。首都機能が麻痺してしまう！

以前、かなり古い紀行か何かで、その土地の食前酒についての記述を読んだ事を思い出した。

確かそのお酒を一杯飲むと、胃の中が力つと熱くなって、お腹が空っぽになった気がするから食が進むのだそうだ。なるほど、このお酒はそういう気分させてくれる。好んで飲みたいとは思わないけれど。

何にせよ、適量以上の摂取は控えたいものだ。

8月の脇役そのな（後書き）

分かっていただけると思いますが一言。

この文章は未成年の飲酒を推奨するものではないと思います。

8月の脇役そのはち

待ちに待った（というべきか、焼けた胃が欲しているというべきか）食事が運ばれてきた。うん、大体予想通り。エスニック風の料理を、一口分ずつ給仕係りがサーブしてくれる。

ワゴンにさっと目を通した限り、「ムリムリムリムリ！」とか言いたくなる外見のものは積まれていなかった。よかった、これなら滅多な事やらかさずに済みそうだ。

なるほど、スプーンにお箸で食べ物に乗せて口に運ぶのね、ふむふむ。

何食わぬ顔して、いかにも「当然知ってました」という顔で食事を続けていると、真正面にいた幼児と目が合ってしまった。

はっきり言って子供は苦手な部類だが、この子はなんだか可愛い。ピンクがかかった真珠色の髪がくるんくるんしてて、お人形みたいだ。とりあえず笑つとけー、と思ってニコつとすると、あちらもニコつと笑った。

「みこさまは、おはだがしろくてきれーねえ」
うっわ、なんだこの可愛い生き物。

確かに、西洋人とは比べるべくもないが、私は日本人の中では結構白い方だ。色の白さは七難隠すと言うからな。難を隠すために必死でキープしていますよ。こっちにきてからも、携帯していた日焼け止めを必死で塗ったくってますよ。

努力を認めてくれてありがとう。おじょーちゃん？ おぼっちゃん？ 性別わからんな。

この国の人々は、褐色の肌をしている。まあ、気候が南国っぽい

し、日照時間も長いのでそうだったんだろう。私や会長は、そういう点でも「不思議な存在」なのだ。

「ありがとう。あなたも、綺麗な髪ね」

真珠色の髪とが見た事ないよ。きらきらしてるよ。

幼児はますますにこーっと笑って、はにかんで顔を隠した。たまにはこういうのもいいかもなあ、と油断していたら爆弾発言が飛び出した。

「みこさまは、どのおにいさまとけっこんするのー？」

……がふっ。

あ、あぶな、お米が気管に入るところだった。さっきの食前酒で必死に耐えた私に二度目の試練を与えるとは、おそろしい子！

あのね、食事の席で盛大にむせて、結果的に場の雰囲気や和ませる、とか、そういう事は主人公のお仕事なのよ？私になんてこと期待するんだ。

「これ、ファイファイ。まだ紹介もされていないのに」

……突っ込むとこチガウヨ。

「だって、ミュミュカねーさまがいったもの」

「あら、シルフェ兄様がおっしゃったのよ。私は『そうかもね』って言っただけよ」

「それは、アルジェンが侍従から言われたという話で」

「そもそもシエシエリーが立ち聞きしてきたとか」

「立ち聞きじゃないわ、通りかかったらルーディとジェファーが」
うるせえええ！ 伝言ゲームの道筋辿ってんじゃねー！

一気に騒がしくなった食堂で、私は耳を塞ぎたい気持ちに駆られた。しないけど。おっとり微笑んだ顔をキープしてるけど。

ちょっとちょっと、王様、あんまりだぜ。確かに巫女でもないどころの馬の骨が王族に嫁いできたら困ったなーって気持ちは解るけどさあ。でも、でも……。

勝手に嫁入り先決めるなんてあんまりだあ。

「えー、そうなのお」

うそだよファイヤーちゃん。

「はい。そうなんです。姫と私は、故郷に帰ったらすぐに結ばれる予定です」

ノリノリだな、会長……。

動揺したのは私だけですか。とつても悔しいです。疑う事を知らない幼子にそんな嘘ついて恥ずかしくないのかね？ 人格者じゃなかったの？ 最近化けの皮が剥がれてきてますよ。

しかし、恥らう乙女心とか罪悪感とかをおいとけば、これが円く治める一番手っ取り早い方法なのかもしれない。

うん、よく考えてみれば今はロールプレイ中なんだから、まあ。

「ひめぎみときし」「ごっこに」「ふたりはこいびと」「ごっこが加わっただけだと思えば。」

ここで派手に動揺して「なっ！ ちっ、違いますっ」とか騒いだらそれこそなんかのラブコメものになってしまう。おちつけー、落ち着くんだ私！

にしても、食事が始まった頃はみなさん押し黙ってたのであんまりわからなかったけど、お年頃の若君達が結構いたんだなあ……。

あんまりカラフルなので顔より髪にばかり眼がいつてしまっていた。髪の色さえもうちよつと落ち着いていれば、結構エキゾチックな魅力のある顔もちらほらと。う、ちょっと惜しいようなほつとしたような。

いやいやいや、ここに永住するつもりはないから。帰るから。
はいはい、みなさん「なくんだつまんねえ」って顔しないの。ま
さか暇なのか？

密度の高い二日間だったなあ……。

現在私は、お風呂でゴシゴシ磨かれて、香油でマッサージされて
いる最中です。極楽極楽。

羞恥心？ アカスリとエステのようなものじゃあないか。気にし
てはイケナイ。それに、この人達はこうするのがお仕事なんだから、
郷に入っては郷に従って、お仕事を取り上げるようなことはしちゃ
いけないよ。ふああ、きもちいい……。

あー、もう、暗殺の二文字さえ忘れていられば、南国リゾート
へバカンスに来たようなものじゃないか？ あ、あと帰還の二文字
も考えたくない。主に、その可否について。

帰還といえばさつき、会長はしれっと「故郷に帰ったら」って言
ってたっけ。もしかしてヤツは帰れる確信があるのかもしれない。

そうか、もともと別な物語の主人公が紛れ込んで来ているような
ものだからな。ここに彼が居座っては色々不都合が生じるだろうし
ね。そのうち「世界を修正する不思議な力」とかが働いて帰れると、
本能的に分かっているんだらうなあ……。私もついでに連れ帰って
もらわないと。

マッサージですっかりほぐされてクラゲのようになった私は、気
が付いたらネグリジエを着てベッドに横たわっていた。さすがプロ
だな、お世話係のみなさん。

そういえば名前も聞いてないなあ、名前といえばこの世界の名前
さえ知らないなあ。

明日になったら、お世話になってる人たちの名前くらい、なんとか覚えよう。

と、決意して、目を閉じて3秒、意識は夢に堕ちた。

8月の脇役そのきゆう

それから数日は、私のいない所で暗殺者とか暗殺者とか暗殺者とかの捕縛騒ぎがあつたようだが、概ね平和に過ごしていた。

できれば一々私に報告しないで欲しい。そうすれば心の中ももっと平和で過ごせるから。計画されていた暗殺手法とか、説明しなくていいから！ 聞きたくないから！ …… ああ、日本が恋しい。

ホームシックのせいか、5人戦隊（の一部）が夢に出てきたりしましたよ？ いや、ホームシックのせいというより、宿題を見てあげる約束を守れないかもしれないという不安から彼らの夢をみたのかなあ。ほら私、律儀だから。

あと、会長と朝から晩まで一緒なせいか、そろそろ洗脳されかけてる気がする。会長を「カイト」と呼び捨てるのにも慣れてきた。うう、学校でうっかりやらかしちゃったらどうしよう。

そんな不安は一先ず置いて、今日もまた会長にエスコートされ、廊下をとぼとぼ（気持ちはこの感じだけど実際は堂々と）歩いてバルコニーに向かう。

そういえば一番危ないんじゃないかと思われる「巫女様お披露目タイム」には何故かまだ狙われたことはない。ほんとに不思議なんだけ。

いや、実行されたら困るのでここだけの話だけど、飛び道具でぐさつとやる絶好のチャンスじゃあないか？ バルコニーで直立不動1時間（だいぶ短縮された）なんて、的にして下さいお願いしますといわんばかりなのに。

さすがに丸腰のか弱い女の子を民衆の前で狙い撃ちなんかしたらイメージ悪すぎると思って控えてるのかなあ。

なぐんて人事みたいに考えていたら「呼びました？」って感じで刺客が現れた。ふぎゃあああ！ 呼んでないよ！

「月の巫女姫の」護衛達が交戦に入る。会長も私を柱の影に押し込んで、自分は私の前に立った。

いや、ありがたいんだけどね？ 会長も大人しく守られたほうが良くない？ 多分強いんだろうけどさ？ いざとなったら魔法でやらかすつもりなんだろうけどさ？ でもあなた、ほんとに別に騎士とかじゃなくてただの日本人の高校生なんだから、そこまで勇敢じゃなくていいんだよ？ なんてなりきっちゃってんの、おちつけ！ てゆうか万が一のことがあったら責任感じちゃうからヤメテ！。

選びぬかれた護衛兵達だけあって、腕は確かなようだ。といても見えないんですけどね。会長が（すごくく）邪魔で音しか聞こえませんけどね？

でも、丁々発止と金属同士でやり合ってる音からして、多分互角に戦ってくれてるんじゃないかな？ ほんつとに音しか聞こえないけど！

なんかさあ、こういうシーンで影から覗き見さえできないとか、無いよね？

普通この展開だとモブ（失礼）の護衛は残念な事に刺客に太刀打ちできず、会長が颯爽と活躍するのをふるふるしながら見守って、やったー、全部倒したーと油断した所で、隠れていた、または傷を負ったもののまだ動ける刺客に私が後ろから襲われて「きゃー！」「あぶないっ」「どさっ……。みたいなのが王道だと思っんだ。

あ、どさっ、のところは「押し倒して庇ってもらっ」「でも「私を庇って身代わりに会長が刺されて倒れる」、でも「私が刺されて倒れる」、でもお好きにご想像下さいのことよ。

だというのに、なんだこの安心感。

背中側は大理石の壁と柱にはさまれて、それこそ壁を突き崩して来られない限り絶対安全だし、目の前には会長の背中しか見えませんよ。

そして会長はきつと反則的に強いと思われるので、あとは足元が抜けるとか天井が崩れて落ちてくるとか、そういう心配さえなければ（いや、あったとしてもきつと）世界で一番安全かもしれない…。

やがて剣戟は収まり、会長はやっと私を押し込んでいたスペースから出してくれた。

多少の傷を負った護衛の皆様と、倒れ伏している刺客らしき数名を確認。まあ、うん。王様と神殿、両方からの推薦だけあって、きつちり仕事をこなして下さいましたね、ありがとうございます。

イベント発生は別に期待してなかったもんねっ！ 皆様命があるようですねによりですとも。

ああ疲れた。

刺客の襲撃があるうと、表向き不可侵の巫女様は何事も無かったかのようにスケジュールをこなさねばならない。心労で倒れるほどのシヨックはうけなかったしね。てゆうーが見えなかったし。会長の背中しか見えなかったし！ でも気疲れした。うう早く寝たい。

そもそもこの世界に来てから、絶対睡眠覚醒リズムが狂ったと思うんだ。

だって夜以外は光の強さがほぼ一定だし、太陽の位置も変わらないし。巫女様だということ、無理やり起こされたりもしないから、昼まで二度寝三度寝し放題だし。（よく寝るのは月の加護だとか

んとか、とても都合よく解釈してもらえているらしい。ぐうたらで
ゴメンナサイ)

いやむしろ、もしかして身体が「現実なんか見ないですうっと眠
っていたい」とか言ってるんじゃないかな！

そして、大変やる気なく本日のお勤めを果たした私を部屋で待ち
受けていたのは、淡い緑色の髪的青年だった。

すごい髪色デスネ。目にしみるよ。長い髪を横に流して下のほう
を三つ編みにしているが、なんかビニール紐を裂いて束ねて作った
おもちやみたいだ。髪質は良さそうだけど。

あー、えっと、なんだっけ、多分王族だ。名前わからんけど。

「お帰りなさい、巫女姫。お疲れの所申し訳ありませんが、少々私
とお話をしませんか？」

しませんか、なんてお誘い口調だが、既に夕食のセッティングが
されているので強制だろう。

あれー、月の巫女って確か、普通の王族よりは身分が上なんじゃ
ないの？なんで有無を言わず押し通そうとしているの。

しかも用意されているのは二人分、ということは、私と二人でっ
てことか。おーい、婚約者の騎士殿はどうした。

「今宵だけは、私と二人で。どうぞ騎士殿にもご遠慮いただけると
うお口添え願います」

そう言いながら馴れ馴れしく距離を詰めてこようとしたので、さ
っと机に沿って横にずれた。色仕掛けはごめんこうむりますよ、私
はまだまだ清い身なので。

それよりも、おにーさん、何か企んでますよね？ 絶対企んでま
すよねー？ 私そういうお話だあいすきですの。聞くだけなら。

だが片棒を担げというご相談なら、残念な事にこの身はニセモノ

でございますというかなんと言っか。担ぎきれずに取り落とす事請け合いなんですよー。

まあせっかくなので聞いておこう。もしかするとこれって穂積さんのためのイベントになるかもしれないから。

一緒に異世界にやってきた親友同士（知り合い程度の仲だったじゃないかとか、会長はどうしたとかは言わない約束だよ、キミい）が、いつの間にか志の違う人々に担がれて敵同士に！ 主人公は葛藤しつつ戦って、辛くも勝利する。友人は改心して元の世界に戻る、みたいな。

あ、もしかしてこれ私の帰還フラグじゃない？

8月の脇役そのじゅう

と、いうわけで会長には「気分が優れないので夕食はお一人でどうぞ」と伝えてもらった。気分が優れないのは本当なので、またしても嘘はついていない。私、嘘つて苦手だから！（にこにこ）會長みたいなしれつと嘘つけないから。（にこつ）
……と、ヤツに言いたいなあ、いつか。

そして全然くつろげそうに無い食事が始まった。会長と一緒に大してくつろげないけどな、地を隠すのに苦労して。（なんか最近色々ばれてる気がするけど、悪あがきを止めたらそこで試合終了だ）

給仕には下がってもらい、完全に二人きりになると、悪巧みのお時間が開始した。

「単刀直入に申し上げますと、騎士殿ではなく私と結婚していただきたいのです」

……ふ、こんなことで今更私が飲み物を噴出すると思ったか！
この程度、予測済みよ！

「私の父は現王の第一子であり、正当な王位継承者なのですが……」

恨み言とか日々の愚痴とかが長いので割愛して纏めると、こうだ。穂積さんと一緒に旅立った第二王子（赤の筋肉達磨）の人望がすごすぎて、自分の父の王位継承権が脅かされている。（気がする）
そこで、月の巫女と婚姻を結ぶ事で自分の地位を確実なものにできれば第二王子を「軍部を悪戯に扇動しクーデターを企てた罪」で失脚させ、闇に葬りたい、と。

……ああ、うん、体育会系のノリってたまにすごいもんね。いかにも文科系っぽい君がドン引きして危機感覚えるのも解るよ。すごい

く。

正直な所、動機も結果もどうでもいい（だって結果は穂積さんがついた人が勝つに決まってる）私は、脇役らしく利用されるべく、領こうとした。だって断つて実力行使とかされたらやだもーん。それに、大変単刀直入に悪巧みの内容を話してくれた根性も気に入った。

もし彼が、しらじらしく「お姿を初めて見た時から私の心はあなたに捕らえられて……」とか懐柔策で来たらこつちも「私には心に決めた方が……」とか「けれども私はいずれ帰らねばならぬ身です」とかあしらおうとしたかもしれないけど。

けれども大変手っ取り早く事を進めようとするその合理性、私に通じるものがある。（4月の赤井君と青井さんの時みたいだね！）そして、王族でそれなりに美形、なのに表舞台に立てない、というところにもなんだかとても共感を覚える。

そう、私達は踏み台なのだ。仲良くしようじゃあないか。コテンパンに伸される役でもな。

確かに、私は領こうとしたのである。

「お断りします」

領こうとしたんだけど、扉の内側に、いつの間にかにつこり笑って立っている誰かさんの姿を見つけて心にも無いことを言ってしまったんですよ、この口が。

コワイヨ。いつからそこにいたんだ、どこから聞いてたんだ、とにかく怖いよ！

「姫君、ご気分が優れないとのこと、心配でたまらずお顔を見に参りました。思いのほかお元気そうで何よりです」

よく見てください、青ざめていませんか？ あなたを認識してか

ら、私の顔は青ざめて、引きつってはいませんか？元氣そうにみえますかあ？

「私という婚約者がありながら、このような時間に、いくら王族の方とはいえ異性を部屋に招きいれてしまうとは……いけない方だ」
流し目をされて一気に鳥肌がたった。ぞわあああああつ。

あなた、ほんといくらなんでも演技上手すぎるから！ なんだその色っぽい目つきとかああもうこわいよきもちわるいよ。一体どこでそんなことおぼえたの、私はそんな子に育てたおぼえはありませんよっ！（そりゃあそうだ）

ちょっと様子のおかしい会長は、そのまますたすたと長い足を動かしてこちらにやってきて、さつと私達「脇役同盟」の間に入り込んだ。

「失礼ですが、姫君は私の唯一のお方。この愛らしさに心奪われるお気持ちはわかりますが、どうぞ諦めてお引き取り下さい」

もによつとする。心臓の後ろの辺りがもによつとしてかゆい。居心地悪い。きーもーちーわーいー！

わざとらしいんだよ、どうせ密談の内容聞いてたくせに。

後ろ手で、会長がちよいちよいつと私を手招きした。それはあれか、ぴつたり自分に寄り添えつて合図か。芸が細かいですね。

だがことわる！ 演出過剰はボロをだす危険性を伴っているぞー。
と抵抗していたらいきなり勝手に身体が動いた。うええええ？まさか、かいちよおおお？

ふらつとよろめくように数歩の距離を歩かされて、会長の背にしがみつくような状態で止まる。

ちょっと、これセクハラですよ。人の身体勝手に操るとか、反則

でもやっていい事と悪いことが……ああ、いいのか反則だから。そうか。

「可哀想に、怯えて……。おそろしい悪巧みを聞かされましたね」
怯えているのは会長に対してですが。

なんだよー、悪巧みって言っても古式ゆかしい定石どおりで、笑えるほど穴だらけで、さすがだぜ脇役、という可愛いものだったじゃないさ。そんなちっさい陰謀一々潰すとか、細かいこと言ってると……って、はっ、そっぴやコイツ、よその国で宰相様やってるんだった。

そうか、陰謀叩き潰すのも仕事のうちか。こんなところでお仕事スイッチが入っていたのか。苦労性だな！

「いえ、国を憂うあまり、気持ちだけが急いでいらっしやるのでしよう。落ち着いて考えれば、そのような恐ろしい考えは早計であるとお分かりになるはずですよ」

だから見逃してやって下さい。なんか他人とは思えないんです。ほんとごめんなさい。

未だに名前も知らないけど、その薄緑の人は可哀そうな人なんです。

「……姫君がそうおっしゃるのであれば。賢い選択をなさると信じておりますよ、ユーシウス殿下」
それで、睨み合いは終了した。あーよかった「者共、であえい！斬り捨てる」な展開にならなくて。

ユーシウス（っていう名前だったらしい）殿下は、会長をものすごい目で睨み付けながらも、黙って部屋を出て行った。

あー、こりゃあ明日から、さらに暗殺の危険度が増したんじゃないな

いですかね……。

「危なかったね、盛沢さん」

一仕事終えた清々しい顔で、会長が振り返った。ちっ、余計なことを。

という態度は微塵も見せずに、そうね、と頷いた。

「二人でお話したいって、まさかあんな内容だったとはね」

「どんな話だと思ってたの？」

「うーん、世間話とか？」

くてん、と首をかしげるとぼけてやると、会長はできの悪い生徒を見る先生のような顔で笑った。

「だとしても、だめだよ、こんな時間に婚約者でもない異性と二人きりになるなんて。護衛の人があわてて知らせてくれたんだよ。『清らかな巫女様が、手の早い殿下の毒牙に掛かってしまいかもしれない』って」

ああ、なるほど。それでわざわざ様子見に来てくださったのね、ご苦労様。

「なんとなく、そういう雰囲気ではなさそうだったし、いいかなーって」

いいじゃないか、お話くらい。

それにもし万が一、許容範囲内の王子様が言い寄ってきたなら、私はそれにときめく権利がある！（と、思うんだけどだめかな、脇役はもっと控えめであるべきなのかな）

「でも、もう少し自分を大事にしないと」

私にとって私以上に大事なものなんか無いからどうぞご心配めさるな。

「はあい、わかりました。じゃあ、もう寝るね。おやすみなさい」

お説教は結構ですから早くお部屋に帰るといいですよ？

会長はまだ説教し足りないという顔であったが、大人しく「おやすみ」というと部屋を出て行ってくれた。

うんうん、普段から我侷なお姫様に振り回されている人って諦めが良くて助かるよ。

8月の脇役そのじゅういち

翌朝から、私ではなく会長に対しての（だと思っただけかどうか）刺客が増えた。

ざまあみる、脇役の意地を思い知れ、と言いたるところだが、会長と私はほぼずっと一緒にいるわけで私もとばかりを……喰わなかった。

すごいなあ、護衛の皆さん。廊下の端っこに寄ってしばらくぽけーっと立ってるだけで片付いていくよ。

脇役の意地なんてこんなもんかあ……と哀しく思っていたら、私がニセモノだと知っている数少ない大臣の一人が、焦った様子でやってきた。

「巫女様、騎士殿。王がお呼びです。すぐにとの仰せです」
……なんかとてつもなくまずい事が起きたことだけは、すぐにわかった。

案内に続いて執務室に入ると、思いのほか派手派手しい装飾が目飛び込んできた。ミントグリーンと金箔のアラベスク調か……。個人的に嫌いではないけれど、この年齢の王様の執務室にしてはいささか落ち着きが無いというか。

その部屋の真ん中で、世界が終わったような顔をした王様が天を仰ぎ見て立ち尽くしていた。ほんと、なにがあった。

王様が、油の切れたブリキの人形（見たことないけど）みたいに首を動かしてこちらを見た。ひい、こわっ。

なに、例の殿下の事と何か関係ある？ 断られた逆恨みであること無い事言ってこっちに濡れ衣着せた？

彼は、どこか焦点の合わないような目でこちらを見つめ、やっと私達を呼び出した理由を話し出した。

事の次第を聞かされて、私は思わず顔を両手で覆ってしまった。

穂積さんが、穂積さんが……！

「駆け落ち……」

しかも相手は黄色の、つまりええと、あれだ、「無精髭がワイルドさを引き立てている」国一番の腕利きの傭兵さんだ。

ええええ、よりによって、ええええ？

「現在、ミュリウスとアルーシエシアが行方を追っているが……おそらく見つかったとて、そう簡単には姫君を取り戻せまい」

その、聞いたただけだと繊細そうな名前はまさか赤と青のお名前ですかね？

ああ、確かにこれはこの世の終わりだ。あんな大人しそうな穂積さんが、ノーメイクで美女と野獣の野獣役（魔法が解けた後の王子役は別人でヨロシク）ができちゃいそうなおじさんと駆け落ちだなんて。じゃない、世界を救う旅を放り出したなんて！

どうすんだよ、誰がこの世界を救うんだよ。（未だに世界の終わりなんて真実味は無いけど）

ああ、でも、これは第二王子様、不祥事ですな。世界を救う旅に出ながら、その護衛対象をロストしたあげく奪還の見込みなしとはよかつたね、ユーシウス殿下。あなたが手を汚さなくても、彼は何らかの形で左遷されるんじゃないかな。巫女姫奪還するまで帰国は許さぬ、とかな。

で、脇役仲間のことは良いとして。どうするおつもりですか？

「こうなっては仕方が無い。そなたも、巫女姫と共にこの国に降り

立った乙女。ならば本当の巫女姫はやはりそなただったのかも知れぬ」

「すごく強引に、事件を無かった事にしようとしてる？」

「巫女姫は未だわが手の内に、とか思いたいののはわかりますが。ほんとに、私は二セモノだから。役立たずだからあ！」

「月神様の神殿に赴いてもらう。そして月神様の怒りを、その命でもってなだめて欲しい」

「はい、今まずい事聞いたと思う人、手を上げてー。(はあい)今、命って言ったよね？ 命って言ったよねー？」

「えーっと、もしかして巫女って、生贄になるものなの？ 生贄になつて神様ごめんなさい、ゆるしてえ、つてお願いするのが巫女なの？ そりゃ、事実を知つたら穂積さんも逃げるわ。」

「そつかあ、傭兵さんは穂積さんの境遇に同情して、世界が滅びるかもしれないと知りながら、連れて逃げてくれたんだね。それじゃあ穂積さんも惚れてしまうかもしれない……。」

「でも現段階の逃避行を駆け落ちと判断するのは勇み足というものだ。傭兵さんのほうも、「幸せにしてやれなかつた妹に似ている」とかで逃がしたのかもしれないし。実際のところはどうなんだろうなあ。」

「つて、暢気に二人の逃避行に思いを馳せている場合ではない。私、ぴーんち。」

「もう体裁を気にしてはおられぬ。わが国の部隊と一緒に派遣いたす。逃れられようとは思わぬことだ」

「王様が手をあげると、大臣の一人がさつと扉を開けて兵士たちを招きいれた。」

「私達を護衛してくれてた人達も混ざっている。捕獲するつもりか。」

うわあ。えー、ちよつと、私が死んでも絶対世界に影響なんてないよ？ まさかの無駄死に？

ああ、そうか、主人公の行動の陰で失われていく命、そしてそれを主人公が知って罪悪感に苛まれ、償いのために世界を変えようと立ち上がる、というアレの布石か……。

短けえ夢だったな……。と諦めのため息をついた。

そう、脇役の命なんてこんなものさ。この期に及んで未だ現実感をはつきり感じられないのは、心を守るための何かのシステムなのだろうか。

確か小動物が肉食動物に捕食される時、脳内物質の働きにより身体は弛緩し、思考は鈍ってむしろ幸福感を得られるようになっていると聞いたことが……。って私はウサギさんかっ！

「じゃあ、帰ろうか、盛沢さん」

やっぱり大人しくやられてなるものか、と闘志を燃やそうとした矢先、またまた会長の邪魔が入った。帰ろうかって、帰ろうかって……帰ろうか、って。はあ？

「生贄なんて非生産的な方法でしか救われない世界なんか、放っておけばいいよ。帰ろう」

え、えー？

「穂積さんは？」

「彼女は、盛沢さんが困った立場になるかもしれない可能性を知って逃げたんだから、いいんじゃないかな？」

ちよつといいですか。

会長、ちよつと辛辣すぎませんか？ 地が出まくってませんか？ ここ最近ちらちらと片鱗が見えてはいたけど、もしかしてものすこーくドライな性格じゃありませんか？ 普段みんなに優しいのはその方が簡単だからとかですか？

「でも、どうやって」

まあ、帰れるなら帰りたい。この世界が滅びそうだからといって命を捨てるほど思い入れは無い。衣食住の恩義はあれども、ギブアンドテイク。私は代役としての務めをきちんと果たした。

あくまで代役なので、本物のお仕事なんかできません。

「一回、フォレンディアを経由すれば簡単だよ」

……文脈から察するにそのフォレンディアとやらは会長が呼び出されるあの国だろう。ってゆーか。

「……もしかしていつでも帰れた？」

「まあね」

こっ、殺してやるっ！ いまならやれる気がする。後にも先にもこんなチャンス無いくらい、殺れそうな気がする！

しかしここで殺しては私もそのまま生贄のバッドエンドなのでぐつと我慢した。

「でも、この前お願いした事もよろしくね」

……あ。

そうして大変グダグダのまま、警戒して少し遠巻きに取り囲んでいる人々の前から、私達は何の説明も無しに、消えた。

びっくりしただろうなあ。私もびっくりしたよ……。

8月の脇役そのじゅうに

翌朝だか翌々日の朝だか。今はいつだ、ここはどこだ。いや、たぶん場所はあれだ、ふお、ふお……フォデイなんとか？

何の前触れも無く、説明も無く、会長は私を連れてこちらの世界に「跳んだ」らしい。

ちくしょー、途中退場かよ。いくら脇役だからってそりゃないよ。

まあ、最後まで見届けられたとしても生贄になるまでだから、そんなに変わらないか……いや、でも、そこに謎の美形のおにーさんが現れて私をさらって逃げてくれたかもしれないじゃないか。会長め、余計な事をつ。（何が何でも素直に感謝なんかしないんだからねっ！）

彼は本来の手順を無視して強引に「跳んだ」らしい。最初にトリップした時より頭がぐるぐるした。

お陰でひどい乗り物酔いみたいな状態になった私は、とりあえず説明はあと、ということでもたしても王宮の客室で寝かされた。そのまま泥のように眠った気がする。

喉がものすごく乾いているから、もしかすると丸一日くらい寝ていたんじゃないだろうか。ありがたいことにサイドテーブルに水差しとコップが用意してあったので遠慮なくいただいた。

水を甘く感じるなんて、脱水になりかけてたのかな？ お風呂入ってしゃきつとしたい所だけど、起きたことがバレたらまたまた面倒なことが始まるんだろうなあ。

面倒な事。

そう、例の、「頼みごと」だ。全ての元凶であるあのメールは、やはり気付かないふり、長く留守にしているふりでかわすべきものだったのだ。

先日、朝食の席でそれはもうさりげなく、なんでもないことのように告げられた頼みごととは、果たして……。 「こいびとのふり」であった。

なんとなく予想はついていたけど、お姫様たちの求婚（なんという贅沢な響き！）をかわす為に、適当に「実は好きな人がいて」とかなんとか言ってしまう、じゃあ会わせろということになった、らしい。

モテる男は辛いねー。（棒読み）でも、なんでそんなベタな言い訳しか思いつかなかつたんだ、頭いいのに。

せめて「親が決めた婚約者がいて、実際にはまだ面識は無いけれど、その相手を裏切れない」とかさあ。そしたら実物連れて来いって言われても断りようがあつただろうにさあ。

クラスメイトとか、具体的に近くにいるのに約束もない相手じゃあ姫様方が騒ぐのも無理ないですよ。「大した事ない相手じゃ納得行かない！」って思いますよ。

あー、このまま帰りたい。寝てる間に元の世界に戻してくれたらいいのに、そうしたらいつそ全てを夢落ちということまで忘れてしまえるのに、とベッドに突っ伏していたら、ノックもなしに会長が入ってきた。

紳士にはあるまじき行為じゃありませんか？ もしかしてだんだん私の扱いがぞんざいになってきてる？ （勝手に操られたこともあつたし）

いや、あのね。私、寝起きだしさ。わりと薄手のネグリジェ一枚

だしさ？ 乙女としてはまだまだ恥らう気持ちがあるわけですよ。だから氣遣えよ、こっちくん、出てけ！

「ああ、やっぱり起きてたね。気分はどう？」

色々悪いですが？ あと、なんだよ「やっぱり」って。気配でわかったの？

「えっと、私、何がなんだか……」

とくにあつちのことが大変気になります。

結局国の名前さえ聞かなかったくらいなので、世界の行く末とかへの興味はそんなに無いんだけど。穂積さんがこれから辿るルートが気になります。

太陽信仰の国と月信仰の国の仲直り取り持ちルートで逆ハーレム作るのか、建国ルートで逆ハーレム作るのか、ひたすら追っ手から逃れつつ逆ハーレム作るのか、星の謎を解き明かして古代文明の何かを発掘して逆ハーレム作るのか。（逆ハーレムにこだわりがあります。ゆめみるおんなのこだわり！）

くう、うらやましいっ！ 見たい、せめてそのハーレムの中身を見たいっ！ あぶれた美形慰めてあわよくばくっ付きたい！ 脇役でもそのくらいの贅沢は認められるはずだ。

「面倒ごとに巻き込まれそうだったから、逃げてきたんだよ。面倒なの嫌いでしょ？」

目下一番の面倒ごとの主に言われると不思議な気持ちになりますな。

まあ、それも重々承知でおっしゃってるんでしょうけど？ それともオレの持ち込む面倒はむしろ光栄に思っただけなの？ そういう上から目線ですか？

あと、面倒ごと嫌いな性格がバレてるなら、私もそろそろ取り繕う必要ないかな？ 嫌な事はどんどん断るようになっていいかな！

「それに、潮時かと思って。フオレンディアとあの国の時間の進み具合にもズレがあつてね。あつちでの1日がこちらでの1週間くらいだったんだ。あまり帰りが遅くなるのもまずいよね？」
「にやんですと。」

あ、待って、ちょっと待って、一つずつ確認させて？

「その検証は、もしかして……？」

「実は、夜中に何度か行き来してたんだ」

おい、てめえ。何故私に黙ってた。地球での生活に支障をきたさないかと心配してたの、知ってたくせに！

「……1日で1週間って事は、あつちでは2週間くらい過ごしたからええと、4ヶ月弱？」

「地球で換算すると12時間くらいになるかな」

うわー、半日で2週間分過ごしたのか。もしかしてその分年取ったのかな……。

だとしたらなんだかちょっと損した気分だなあ。それとも人生経験が増えて得したと思うべきなのか。せめて勉強道具だけでも持つてこれていたら、受験生的にはものすごく得をした気持ちになれたんだろけどなあ。

は、そういえば私の日傘とバッグは図書館に置きっぱなしだ。多分、最初に飛ばされたのは15時過ぎだったはず。じゃあ今は夜の3時くらい？ ってことは当然閉館してるから、やっぱり忘れ物扱いになってるんだろうか。

バッグごと忘れるとかどういいう状態だ。お財布も携帯も鍵も入ってるのに。

ああ、両親が旅行中で本当に良かった。危うく搜索願い出される
ところだった。会長は大丈夫なんだろうか。むしろ穂積さんはかな
りアウトじゃないかな……。最近って一晩くらいなら待つものなの
かな？

そしてサマードレスにいたってはあつちの世界に置きっぱなしだ
！ おろしたてだったのに。気に入ってたのに！

「それはともかく、早速で悪いんだけど、そろそろ姫君達が押しか
けてくると思うんだ。恋人役よろしくね」

よろしくしたくない。

お願いの内容は聞かされたけど、引き受けるなんてひつとことも
言っけませんからね！

ほんとお前、かつこよくて何でもできて家柄良いからって調子こ
いてんじゃーねーぞ。（ガラ悪い上に負け犬の遠吠え丸出し）微笑
めば女はみんな言いなりとか、思うなよ！

……あ、それはないか。姫君達が制御不能だからこんな茶番仕組
む羽目になったんだもんね。やーいヘタレ。

そうか、あつちにいたころの恋人ごっこに熱が入っていたのボ口
を出させないための予行だったんだな。すぐに連れてくるよりも、
しばらく練習してからのほうがバレにくいと思ったのか。うわあ、
策士だあ。

「会長、やつぱり私……」

無理。と断るべく口を開いた時、部屋の外が騒がしくなった。あ
あ、来ましたね。

この際なので本人たちの前でお断りして、修羅場を見学してやる
う。ククク……。私の心配を知らながら何も言わずに弄んだ報復だ、
思い知れ。

いっそのこと「そのような小細工を弄すほど、わたくし達が疎ま
しいのですか……」とか泣かれて困り果てれば良い。それで結局な

し崩し的に誰かを娶る羽目になれば良いんだ。個人的には次女一押し。凛々しそうだから。

そんな私の思惑をよそに、会長はガシッと私の両肩に手を置いた。「お願いだから。盛沢さんはやればできる子だと信じてるよ」

なんだその、どうしようもない子供を励ます最終兵器みたいなセリフは。

それにしても会長、思ってたより追い詰められてますね？よしよし、こいつぁ面白い事になりそうだぜ！

そして、扉が大きな音を立てて開け放たれた。会長がふっと笑った。（気がした）

「…………ごめんね？」

ちう。

8月の脇役そのじゅうさん

「きゃあああああああ」

悲鳴は私からではなく、扉の方から上がった。

ふ、やるじゃねえか、会長さんよ。逃げられないように、あたかも、く、唇を重ねた（若干の動揺により言い回しが古い）かのように見せかけるとは。

実際は唇の横だったが、なまじ「意中の相手が恋人を連れてきた」シヨックで混乱している姫君達に勘違いさせるには十分だった。

「……あらあら、まあまあ」

「か、カイトっ、なんて破廉恥なっ！ 身支度もしていない女性の部屋で、そ、そんなっ」

うん、聞いていた情報の通りならば、多分悲鳴あげたのは三女で、暢気な声あげたのが長女、そして最後の、常識的なんだけど落ち着いて欲しい、非常に惜しいコメントが次女ですね？

あー、もー、またしても他人が先にパニックになったせいで冷めちゃったよ。私って本当に損な性格だなあ。

まあ、唇じゃなかったし、そもそもふあーすときすとかじゃ無いし、犬に噛まれたと思っておくしかないかな……。てゆーかカウントしたくない。

ふ、私だって「ひとなつのこい」くらい経験済みよ！ ……幼稚園の頃に。

祖父母の家の近所のお寺の子だった。2歳年下だったかな？それはもう可愛い子で、「くみちゃん、けっこんしてね？」「うん、いいよ」「ちゅー」「えへへー」という、微笑ましいやり取りがあったのだ。

ああ、想い出は絶対に壊したくないので、その子とは今後一生会うつもりは無い。だってきつとがっかりするから。

とにかく、ファーストキスでもないし、そもそもこれは厳密に言えばほつぺにちゅーの一種だ。外国に行つて、そのくらい何度かされた事もあるし、べつつにい！ けつ！

だからこれ以上動揺なんてしないもんねー。まいったか！（誰を負かせたいのかわかんなくなってきたけど）

そもそもあの「ごめんね？」は、ちゅーに対するものではなくて、絶対、何が何でも協力してもらつよ」の謝罪だよな？

「ああ、ちょうど彼女が目覚めたところなんですよ」「見られちゃったー、参つたな、みたいな顔するなよ、見せたくせに。」

会長はぬけぬけと私を紹介しました。

「ご紹介します。彼女はクミ。オレの恋人です」

馴れ馴れしく名前呼ばないで欲しいなー？

「クミ、こちらはフォレンジアの姫君方。右からレミア様、ルビア様、リリア様だよ」

ところで衝撃の事実です。お姫様達、見分けがつかないほどそっくりです。私には判別つきません。どうしろと。

全員、透けるような金髪でお目はサファイアブルー。当然お人形さんのように整つたお顔で、背丈も同じくらいだし。髪型やら顔つき（これは性格によるものだろうなあ）が違つるので、慣れれば、しかも3人横に並んでれば区別はつくかもしれませんが。廊下でばったり単独で遭遇したらわからんなあ。

それぞれが髪型を固定してくれてればいいんだけど。長女がシニヨンっぽく結び上げていて、次女がストレートの腰まで、三女がく

つるんくるんの典型のお姫様結び、と、これが決まってるのなら。
しかしこの3姉妹に迫られるなんて贅沢極まりないですよ。ある意味、同じ顔で性格の選択が可能、みたいな。

「は、初めまして姫君方。こんな格好で失礼します。クミと申します。えっと、か、かいちよ……うっ」

会長、と呼ぼうとした所で肩に置いてある手に心なしか力が入った。ひいい、プレッシャー！ てゆうかいいい加減どけろっ、そこをのけっ！

「か、カイト君からお噂はかねがね……」

「わたくしたちも、あなたのお噂は聞いておりましてよ。ねえ、カイト？」

いち早く正気を取り戻した次女……えーとルビア様？ が、なんか怒ったような口調で答えてくれた。いや、気持ちはわかるけど、わかるけど、理不尽だああ。

「とにかく、そのようなりではお茶もできませんわ。誰か！ 支度を」

私の意見や都合など端から知ったこつちゃないようで、またしても寄ってたかってやってきた侍女の皆様にお支度させられました。

ああ、そんな気合入れて飾り立てなくていいんで、ほんと。

で、お茶会です。ガーデンパーティーのようなお茶会です。ああ、風が気持ち良い。あつちとは氣候が違っていて、お外で過ごすのに理想的な季節みたいですよ？ 幸せー。

……のはずなのに、お茶会というより尋問会みたいな雰囲気か漂っているのは私の気のせいでしょうか？

隣に座っている会長からは「わかってるよね？ おねがいしたよね？」という笑顔。

正面に座っているお姫様達からは「わたくしたちが見定めねば！」
みたいな視線。

なんかちよつと胃のあたりがキリつとしたような……。やめてよ
ー、空腹にそんなプレッシャーかけないでよう。あ、すみませんあ
そこのシフォンケーキ切り分けて下さい。どうもどうも。(もぐも
ぐ)

常にイニシアチブを取るのが身上なのか、ルビア様からの質問が
始まった。

「それで、あなた方はいつ頃から恋人になりましたの？」

まず根本的に間違っています。私達は秘密を(不可抗力で)共有
する仲なんです。あと、最近笑顔で無茶なお願いを強引に通そうと
される仲になりつつあります。助けて下さい。

「いえ、私達は別に……」

「あちらの時間で言うと、4ヶ月ほど前からです」
遮ったああああ！

「まあ！ たった四ヶ月で寢所に出入りする仲になるなんて！」

「違っ！ いや、確かに出入りされてたけど、そんな語弊のある言
い方やめて、ちがうのにつ！」

「あ、あの、私そんな」

「別にやましい事はありませんよ？ それに、既に婚約した仲です
し、ねえ？」

意味深に言うなっ！ あと、とにかく遮るなっ！

「婚約なんてしてませんっ」

はあ、やつと言えた。

「やだなあ、クミ。あつちで婚約したじゃないか」

「あ、あれは……」

ただのロールプレイでしょ！ と続けようとしたが、今度は暢気

そんな声に遮られた。

「まあまあ、カイトがプロポーズしたのに、クミさんはまだちゃんとお返事なさってないのねえ」

あのさ、みんな何で私にちゃんと話をさせてくれないのかな？

私に15分位お話させてくれれば、今回のこれが性質の悪い男に仕組まれた茶番だとわかりやすく説明できるんだけどなあ……。

「えー、カイトふられちゃったの？」

ぷくーっ、と頬を膨らませて三女が言った。うわあ、こんな顔しても可愛いなあ。じゃなくて。しっかりしろ、私。なんとか糸口を見つけて誤解をとくのよ！

「いえ、振ったとか振らないとかいう話ではなくて……」

「ちよつとケンカしたんですよ」

……そろそろ拳で語り合おうか。手加減しろとか女の子殴るなんて最低とか、言わないからさ。一発でも貴様を殴れるのならもうボロ負けしてもいい。

私は机の下でぐつと自分の手のひらに爪を立てた。

8月の脇役そのじゅうよん

「つまりあなたは、カイトのプロポーズが気に食わないという理由で受け入れず、あろうことかその場で口論までしたのですか？」

「うわぁお、会長鼻肩が過ぎるせいかルビア様が曲解してしまった。あんたどっちの味方だ！」

「あ、うん、わかってるけど、でもね、私本当はあなたの味方なのよ？ あなたを推したいのよ？ その辺察していただけるとやりやすいですかね？」

自分が惚れている相手のプロポーズを無碍にしたと聞かされたら（誤解だが）面白くない気持ちはわかるけど、これぞチャンスじゃないですか。亀裂の入った恋人たちの間にすると入り込もうとしてよ。

「いえ、ちょっと強引だったので、彼女はひどく照れてしまったんですよ。オレが悪かったんです」

「お前が悪いのは確かだがほんとにこう……ずっるい男だなあ。ここで私のはつきりと、てめえが悪いつて言い切ったら、また姫君達に睨まれてしまうじゃないか。」

姫君達って言うか、ルビア様に。

「あの、どちらが悪いとか、そういう話でさえなくて……」

「それにさつき、仲直りしましたから」

私はケセラン様に魂を売ってでも、この男に対抗する力を手に入れるべきなのではないだろうか。

「いいよ、紫でも緑でも銀でも黄色でも、いつそのことツートンカラーの全身スーツを身に纏ってもいいよ。ケセラン様、私に力をおおおお！」

「は、いけないわ、一生を棒に振ってしまうわ。でも、いや、でも、

うう。

もしかして会長にこそ悪い妖精さん取り付いてんじゃない？ あつちに帰ったらちよっと、女王親衛隊とキュピルに相談してみよう……。そしてできる事なら袋叩きしてもらおう。その時は私も嬉々として参加しよう。ひゃっほー！ げしっ！（想像で蹴り倒した音）

「あの、私の話を……」

「ねえ、カイトは何てプロポーズしたのお？ 強引だったって、……きゃー」

何を想像した、リリア様。

「あらあらあ、リリアったらはしたくないですわ。ルビアも、気持ちわかりますけどもう少し落ち着きなさいな」

れ、レミア様あっ！

天使！ あなた天使！ ごめんなさい、ぼんやりしててテンポ遅くて使えなさうとか思ってたごめんなさい！ あなたこそが3姉妹のブレーキ役だったんですね。

そうだよな、ブレーキって大事だよな。アクセルよりブレーキの方が人命を救うよね！

よし、私はルビア派改めレミア派になるぞー。

「わたくし、あなたにお会いできるのを楽しみにしていましたのよ？」

レミア様は流石、国王陛下の第一子なだけあって懐が深くていらっしやる。

「私も、学校で姫君方のお話を聞きたびに、きっと素敵な方たちなのだろうと想像しておりました。実際にお会いできて光栄です」

「ここは、会長が姫様達のことを「良い印象で」私に話していた事をアピールする。

嫌われているわけでは無いと確信すれば、まだまだブッシュやすかるう。

「まあ、嬉しいですわ」

思ったとおり、レミア様はぼつと頬を赤らめ微笑んだ。ルビア様も赤くなって俯いてるし、リリア様にいたっては「きゃー」と身悶えしている。よしよし、効果があったな。

「あ、あなたの事も聞いていますわ。見た目よりしっかりしていて、頭もよく回るって」

ルビア様はあれか、ツンデレキャラなのか。赤くなって俯いてそっぽ向いたまま、ぶっきらぼうにそんなこと言われると思わず微笑ましい気持ちになっちゃいますよ。

「ありがとうございます」

「でも、本当に小さいわねえ。18歳なんでしょう？わたくしより年上なのに。……まあ、身体は育ってるみたいけど」

リリア様はもうちよつと、齒に衣を着せる言い方を学んだ方がいいですよ、将来のために。

うふふ……。胸をじつと見るな！

「正確にはまだ17です。5カ月後に18になります」

まあ、だからといって私の背がこれから伸びるか、というと絶望的だろうがね。

「まあ、ではルビアと同じ年ですね」

「そうですね」

そっぴや年齢聞いてなかったな。

こっちの適齢期は知らないが、話に聞く文化レベルや色々から考えると、まあ早婚だろう。

次女が17という事は、長女はもちろんそれより上。三女も、背格好からして15は超えていそうだから、なるほど、ここの王様が焦って会長に結婚の話を持ちかけたわけだ。

三姉妹とも今が売り出し時で、特に長女にはそろそろ時間が無いという事ですな？

尚の事、レミア様推しはなくなってきた。

「地球でも、オレ達の人種は身体も小さくて、幼く見えるほうなんです。その中でも、クミは小さくて童顔ですね。可愛いでしょう？」

おおっと、会長まさかのロリコン発言か？ いやむしろ、見た目が大人っぽいお姫様達に対する牽制か！

「でもカイトは、こちらでもそんなに背が低いようには見えませんわ」

「オレは、少し外国の血も混じってるんです。それに、個人差がありますから」

初めて知りましたよ。今更驚かないけど。

そうでしたか、やはり、色素が薄いのはそういう理由ですか。180センチくらいある身長もそのお陰ですか、うらやましい。

ちなみに私はどこまで遡っても日本人のだが、何故か突然変異みたいに色素が薄かった。親戚中で不思議がられるが、顔の作りは母に、パーツは父にそっくり（そう、このぱっちり二重でまつげが長いお目はなんと父譲りなのだ）で、うっかり取り違えられたわけでもなさそうなのだ。

不思議ねえ、遺伝子って。

って、民族の特長とかどうでもいいよ。そんな話がしたいわけじゃないんだ、お互いに。

私はこの面倒な男を姫君達に進呈したい。姫君達は私からこの男

を取り戻したい。

双方の望みは、実は一致していて解決法もシンプルだ。……本人の邪魔さえ入らなければ簡単なんだよなあ。

私は思い切って、姿勢を正し、切り出した。

「あの、カイト君は、姫君方にとって、とても大切な人なんですよね？」

「よし、遮られずに言えたぞ。」

会長ラブが過ぎるこの人たちの前で「実はコイツまじでいらぬから引き取って」とか言ったら、またさっきのやり取りが再発しかねないので、今度はちよつと遠まわしに行く事にする。

名付けて「私は身を引きます」大作戦だ。

「ええ。わたくしたちにとっても、この国にとっても、カイトは大切よ」

「それなら、私の存在は、あまり面白くは無かったでしょう？」

「……そうね、初めて聞いたときには、足元が崩れ去るような気持ちになったわ」

ルビア様が、私の様子が改まったのを感じて、同じく姿勢を正した。

会長が苦笑した気配がする。ちくしょー、見てろよ。

「カイト君は、学校でもとても人気があります。何でもできるし、優しいし、かつこいいから……。私はいつも、どうしても引け目に感じてしまっんです。彼の隣に立つには、私は未熟で、つまらない人間です」

うるつと瞳を潤ませて、姫君方に縋るような視線を向けた。

「だから、彼にとってふさわしい女性が彼を愛して下さるなら、私いつでも……」

「クミ、オレには君だけだよ？」

身を引きます、までみなまで言わせず会長が遮ったが、この流れ

で続く一言が分からないほど、このお姫様達は馬鹿ではあるまい。
はーっはっはっは！

重い沈黙が流れた。ああ、この状況って、人前で別れ話をする傍
若無人なカップルみたいだ。でもこの話は、今、ここで、彼女たち
の前でしなくては意味を成さない。さあ、もってけ姫君！

俯いて何かを堪えるように（沈黙と会長のプレッシャーに堪えて
います）待っていると、レミア様が口を開いた。

8月の脇役そのじゅうじ

「カイトは……カイトは、クミさんを選んで、この国を見捨てたりはしないですわね？」

小さな声だった。けれども、静まり返ったお茶の席で、その声はよく通った。

「わたくしたち、わかっていましたの。カイトは、わたくしたちを大切に甘やかしてくれるけれど、愛してはくれないだろうって」

……えー？

え、ちよつと、え、レミア様？

「もともと、わたくしはカイトにとって妹以上にはなれなかったもの。カイトがこれからもこの国に來ると約束してくれるなら、わたくしは諦めるわ」

ひいいい、リリア様あああ？

「ちょ、頼みの綱のルビア様！ あなた何とか言っちゃって！」「堂々と愛せないのなら身を引きなさい！」って私に言っちゃってええええ！

「……こればかりは、どうしようもないですわね」

んぎゃあああああ！

な、なんで、なんでそんな物分りがいいの！

ねえ、聞いてた？ 私の話聞いてた？ こいつといるのが辛いつて言ってるでしょおお？ これ、紛れもない本心だから。

自分とどこか似てる、でも自分より出来が良い人間とか、ほんつと腹が立つだけなんだって。お願いだからボランティア精神で引き取ってよ。

会長、笑ったよね？ 今、ちゅーの時みたい「ふっ」って笑ったよね？ ちいっきしょおおおおお！

「しっかりとさい！ カイトはあなたを選んだのよ、このわたくし
たちを差し置いて。あなたはそれを誇るべきよ！」

な、なんで励ますのさああ！

「けれどもクミさん、今後もし、また弱気になるようでしたら、そ
の時こそ遠慮はしませんわよ」

そしてルビア様は、持ち前の負けん気で最後に宣戦布告をして、
立ち去っていった。レミアさまとリリア様も、それに続く。

あーあ、泣くんだろうな、こっそり。凶らずも、私が女の子を泣
かせてしまった……。

後には、目論見が外れて茫然自失となった私と、目論見通りにな
って満足げな会長が残された。

「ああ、ほんと、盛沢さんはやればできる子だった」

あんたもしかして私を憤死させたいのか。だから次から次へと私
を怒らせるようなことばかりするのか？

「罪悪感は無いんですか？」

「最初は遠まわしに、だんだんはつきりと、何度も断ってただよ
？ それでも諦めてくれなかった。だからこっぴつ方法に頼るしか
なかった。オレ、この国での仕事は続けたいんだ」

建国シミュレーションみたいで楽しい、とさらっと付け足したの
は聞かなかったことにする。そんな理由で運営される国って可哀想
だ。

ああ、でも、そんな理由でも会長のお陰で大分生活水準が向上し
ているのなら、いいのかなあ、ううん……。

「断るのに難航していたわりに、今日はぜひぶんアツサリと引いて
くれましたね」

「盛沢さんのお陰だよ、ありがとう。一番納得してくれなかったの
がルビア様だったんだけど、多分盛沢さんなら彼女のお眼鏡に適う
と思ったんだ。思った通りだったね」

きいい、この悪党っ！

ものすごい悪事の片棒を担いでしまった。あの、ユーシウス殿下の可愛いたくらみなんかよりずっと罪が重い気がする。

「……それより、もっと怒ってるかと思ったんだけどな？」

「何がですか？」

「キス」

「ああ」

私はフッと鼻で笑ってやった。

「あんなの、別に挨拶じゃないですか」

そもそもあれはキスとは認めん。ただの「ほっぺにちゅー」だ。

「じゃあ、改めてやりなおす？」

冗談めかして会長が手を伸ばしてきたので、今度こそ私は後ずさった。

「ご遠慮いたします」

「試してみたくなったら言ってね」

そしていつもの、底の知れない笑みを浮かべた会長によって、部屋に送ってもらい、この件はかたがついた。（はずだ。第二部はお断りしますよほんと、私これ以上付き合えないからね！）

それから数日、会長には溜まっていた仕事があるとかで、数日をフォレンジアで過ごした。先に帰してくれたらいいものを、私まで足止めされてしまった。

まあ、明け方の3時4時に一人で図書館に放り出されるのもちょっとアレなので、文句は言えないけどさー。

でも一回帰って私を送り届けて、改めて一人で仕事しに来たらいじゃない。（ぐるぐる）

私はする事も無く、姫君達と結託する事を警戒した会長により宰相室に缶詰状態のまま、一日中本を読んだりして過ごしていた。

つまり穂積さんのところ（もう世界の名前も何もわからないし、どうせ彼女が何かおつきなことをするんだからこう呼んでいいよね）にいた頃と一緒に。

朝起きて、一緒に朝食食べて、一緒のお部屋で過ごし、寝室まで送ってもらって、寝る、という……。息が詰まるわ！

あんまり退屈で、助手としてちょこつと手伝わせてもらったけど、まあ確かにこの仕事は楽しいかもしれない。なにせ全体的に水準が低すぎて、ちよつと手を入れてやっただけで目に見えて成果が出る。

魔法を使える人間が王都のみに集結して特権階級の世界を構築する一方、一般の人々は教育も受けられず識字率も低く、貧しさの中で悪循環に陥る傾向にあるようだ。土木技術も未熟、衛生観念も未熟。

これは、なんか手が離せないという気持ちはわかる……。

そしてやつとお仕事の終わった会長に連れられて、私は地球に帰ってきた。ばんざい！

えー、現在時刻、朝の4時少し前です。いつそのこともう少しあつちで時間を潰して、もうちょつと常識的な時間に帰って来ればいいんじゃない……とも思っただんですけどね。

あんまり長居するとお勉強の内容ほとんど忘れちゃう気がするし。会長も、私があつちに長くいるとボロが出そつで気が休まらないという事情もあるのだろう。

それに何より、私があの見張られ生活に耐えられない。監禁より性質悪くないですか？

サマードレスは泣く泣く諦めた。フォレンジィアで似たようなものを仕立て直してもらったので、まあ、いいさ。さすがオーダーメイドだけあって着心地も悪くは無い。

日傘とバッグは……ええ、なんとなく予感してた通り、会長がしつかり回収済みでした。ふ。ふふふ。ほんともう、なんですぐに帰してくれなかったんだろう。ああ、恋人役に仕立て上げるためでしたね、アハハ。

館内は真つ暗で、当然人っ子一人いない。記憶する限り、この図書館で監視カメラが設置してあるのはカウンターの中だけだ。ということはその辺を避けて外に出れば、まあ、大丈夫、かな？

「盛沢さん、こっち」

会長は手のひらにボールくらいの大きさの光の珠を乗せてすたすたと歩いていく。

その光の珠を見ているとケセラン様を思い出します。叩き落したくなります。でも正直懐かしいです。ケセラン様でさえ懐かしいのです。重症だね。

廊下の突き当たりになaturallyに貼り付けてあるダンボールをめくると、そこには忘れられたような窓があった。あ、ガラス割れてる。なるほど、ここから出て、外からダンボールを戻しておけばバレない。……なんでこんなの知ってるんですか、会長。

「子供の頃、オレの友達が割ったんだよ。それ以来ああやって誤魔化してあるけど、知ってる連中は今も利用してるんだ」

塞げよ。

まあ、男の子たちってそういう、秘密の出入り口とか好きだよね……と思いつつ、会長に続いて窓をくぐった。

そうして、体感では2週間とちよつとぶりに、足の下に土を感じたのであった。

8月の脇役そのじゅうろく

土。ああ、お久しぶり、地面さん。ここの所ずつと絨毯の上しか歩かなかつたものねえ……。しゃがみこんで再会を喜びたいところだが、服が汚れてしまう。

図書館の裏手は雑木林みたいになっていて、もちろん舗装なんてされていない。パンプスで歩くには非常に都合の悪い場所だ。ヒールをめり込ませながら会長の後をよたよた歩く。

ちよつと会長、こんな時こそ手を貸してよ、引つ張って歩いてよ、肝心な時に気の利かない男だなっ！ と背中からにらみつけてやると、まるで心の声が聞こえたかのように彼が立ち止まった。

「ああ、ごめん、ちよつと考え事してて」

そうでしょうとも。私は差し出された彼の手に遠慮なくしがみついた。羞恥心？ 二週間で克服したよ。これはほら、杖みたいなものだから。

「ところで、こんな時間に帰って家の人は大丈夫？」

「うちは二人とも旅行中ですから。か……光山君は大丈夫ですか？」

「オレは、友達の所に泊まってくるかもって言ってるから」

こいつ、元々計画的に私を連れて有無を言わずフオレンディアに行くつもりだったんだな、と確信した。

その際には私の家に対する言い訳はどうするつもりだったんだろう。

まあ、会長の用事だけだったら数時間で済んで、先に私だけ帰す事もできたのか。

「じゃあ問題は穂積さんだけか」

あー、そうだよ、お姫様達の一件ですっかり記憶の彼方になってたけど、穂積さんどうなったんだろう。

巫女姫召喚なんだからあっちではそれなりにやってるだろうけど、こっちの世界ではどうなる？ もしかしたら明日の昼くらいには「女子高生、謎の失踪事件」になってしまっじゃないか。

「彼女は、たまたま私を見つけて声をかけたって言うてました。ということは、本当に突然消えたことになります」

そして、彼女と最後に会っていたのは間違いなく私達だ。足取りを追えばきつと誰かが私達を思い出すだろう。

だって会長目立つから！ 無駄に！

「とりあえず、この時間にその格好で外にいるのはちよつとまずいよね。家まで送るよ。それで、悪いけど朝まで時間潰させてもらえるかな」

……ものすごく断りたいお願いを、よくもまあぬけぬけと。お前なんか庭で夜露にぬれて風邪引いて「夏風邪をひいたバカ」扱いられたらいい！

「流石に家の中まではご遠慮いただきたいなー、と思います」

にこっ。もう遠慮しないぞ、私は生まれ変わった。会長に対しては「ノー」と言える子になるんだ。

「でも穂積さんが戻ってこなかったら、そのうち警察が来るよ。何て答えるか話し合っておいた方がいいんじゃないかなあ？ 穂積さんが失踪する直前に会っていた二人が、明け方雑木林で話し合っているのを目撃されたらまずいよね？」

会長も負けずににこつと笑った。あなたも穂積さんの行く末についてスルーなんですな。

まあ自分でも分の悪い抵抗だったとは思っけど、結局今回も押し負けてリビングで紅茶をお出ししております。

明日があるさ。きつと、いつか、たぶん。……うん。どうかご近所の方に目撃されていませんように。変な噂が立ちませんように！

「いつそのこと、光山君が戻って彼女を連れ帰ってください。一晩くらいなら穂積さんは我が家に泊まっていた事にできますから。さあ早く！」

「うーん、まあ、それも良いけど」
けど、なんだよ。

「彼女はあちらでやるべき事があって呼ばれたんだから、事が終われば自力で帰ってくると思うんだよ。彼女がそれを選択すればね」
それは、私も全く同意見ですが。

「盛沢さんもそれが解っているから、彼女を置いて逃げるのを躊躇わなかったんだよね？」

いいえ、そんな難しい理屈考えてませんでした。

あえて言うなら旅立ちの前に、身代わりの私を心配した穂積さん（どう考えたって彼女の方が大変だろうに）を安心させようと「死ぬような目にあったら会長と逃げるから大丈夫」って言って送り出したという経緯があったから、なんです。

まさかほんとにそんな事になると思ってたし、まさか世界を飛び越えて逃げるなんて芸当ができると思ってたんだけど。せいぜい会長に守られながら逃亡するくらいだと思ってたんだけど！

「だからここは、無理やり連れ戻すよりも待つべきだと思うんだ。もしかしたら既に戻っているのかもしれないし、このまま帰ってこないかもしれない。そもそも、オレも穂積さんを連れて跳べと言われるとちよっと自信が無い」

えっ？

「オレの知っている魔法とは違うけど、彼女には何かの力が作用していた。ああいう状態の相手を連れて世界を越えるのは多分無理だと思っ」

「そうなんですか……」

流石巫女姫主人公、なんかの加護までついてるのか。お持ち帰り不可なら、じゃあ待つしかないか。

「では仕方ないですね。何て答えましょう?」

「そうだな……」

会長はこれみよがしに(嫉妬)長い足を組みなおして、膝の上で頼杖をついた。うーん、と若干気だるげに唸ると、またいつもの表情を取り戻す。

この人って、いつもこうやって何でも心の奥底に隠すんだなあ。

「たまたま会ってちょっと話をした、で基本は良いと思うんだ。何か将来について悩んでいたようだった、って言った方が自分で失踪したみたいで、ご両親は犯罪の可能性を考えるよりは安心するんじゃないかな」

「悩みの内容は?」

「進路について、で良いんじゃない?自分がやりたい事がはつきりわからなくて、とかなんとか。あとは、そんなに親しかったわけでもないから詳しくは分からない、で」

投げやりだな。でも、実際そんなに親しくも無かつたし、詳しくもおかしいか。

受験生なら誰もが突き当たりやすい悩みだな。

「せめて彼女の無事だけでも確認できたら良いんですけど」

「ああ、まあ、そのうちこっそり様子を見てくるよ」

ええ、ええお願いしますよ、私のようなしがない脇役にはできない芸当ですからね。

「ところで、本当に紅茶入れるの上手なんだね」

「あの、それ、どこからの情報なんですか？」

「瀬名さんと氷見さんと由良さん」

あの魔女っ娘どもか！

一見何の変身効果もなさそうだったが、あの姿になるとオレンジと苺と桃をそれぞれいくらでも呼び出せるという特典がついていた。(実はそれを雨あられの如く降らせて敵をやつつける目的の技らしい。スイカとかパイナップルとかドリアンとか硬くて重い果物ならともかくなあ……。オレンジはちよつと痛いかもしれぬ?)

果物を手土産にやっこられるとどうしても、家に上げないといけない気になっちゃうじゃないか。桃も苺も好きだし、オレンジは母の好物だし。ってそれはどうでもいい。

「最近仲良いみたいだね。オレに盛沢さんの事色々教えてくれるんだ。楽しい子達だね」

まーだ何か勘違いしてるんだな、連中は。それともまさか私と會長の仲を取り持とうとしてるのか。ちょー余計なお世話！ 迷惑！

「まあ、悪い人たちではないんですけど、ちよつと勘違いが過ぎてしまつところがあるようですね」

恋に恋するお年頃だしな。本当なら私もそうなんだけど。でもなんかもう今回の事でお腹一杯になった。自分の恋愛でもなかったのに、恋愛に疲れた。

しばらくいいよ。少なくとも、もつと穏やかな恋をしたい。できれば、腹黒くなくて、頭が回りすぎないで、聡くない相手とね！

8月の脇役そのじゅうなな

会長はクラスのみんなの世間話をひとしきりした後、やっと帰っていった。……なんか色々、気が付いていそうだったなあ。うちの庭のほうもじっと見ていたし。ああ怖い怖い。

現在朝の6時。一応こっそりと周囲の様子をうかがってから追いついたので、多分目撃者はなかるう。や、ほんと噂とか勘弁して欲しいから。

っていつかさ、魔法で姿消したり記憶いじったりできなかつたんだろつか、と、一息ついてから気が付いた。今更だけど。あと、朝の6時に帰ると4時に帰るのじゃ、そんなに違いますかね？

8月はまだ半ばで、夏休みはまだ続く。二週間分余計にあつたので、なんだか明日からもう新学期でいいような気さえするが。

いや、いかんいかん、その前に5人戦隊の宿題見てあげるんだっ

た。
あと、あの3人娘にもしっかり釘を刺さねばなるまい。よけーなことペラペラしゃべっていると、そのうち正体がばれるぞ！ ってね。ああそうそう、その前に会長に悪い妖精さんが憑いていないかどうか確かめてもらわねば。

週明けで、私はあの、因縁のある図書館に来ていた。うう、なんだか思い出すだけで胃がキリキリする。

結局、穂積さんはまだ帰ってこない。彼女は図書館で私達と話す前から、「光山君と盛沢さんについて」色々他のみんなに聞いて回っていたようで（まあ多分私達の様子を窺いたかつたんだろっけど、残念な事に会長に片思いしていると解釈されていたようだよ、穂積さん……）進路のお悩みと失恋による傷心で家出したのではないかと警察は結論付けたようだ。

まるで私が悪いみたいな結論だよ。しかもそれに関しては無実なのに。

ご家族も「そういえば最近思いつめたような感じで、ぼんやりしていた」と証言し、(それ、夢と現の境が曖昧になつてたせいだよ！ 眠かつたんだよ) 私達は特に疑われる事無く、打ち合わせておいた内容のお話をするだけで済んだ。

う、良心がちくちくする。ちくちくするけど、「穂積さんは図書館から巫女姫としてトリップしましたあ」とか言えない。私にできるのは、せめて彼女が無事に逆ハーレムを完成させられるよう祈る…じゃない、なんとかうまくやっているように祈るだけだ。

会長も、様子見ついでに手紙の一つも書かせて持つてきてくれればいいんだけどな。

で、まあ、あんまり縁起がいいと言えない図書館にわざわざ来たのは、もちろん5人戦隊の宿題をみるためである。そして、もうひとつ。私はケセララン様にどうしてもおうかがいしたい事があった。

「お久しぶり」

「あ、盛沢、久しぶり」

人懐っこい笑顔で駆け寄ってくる中山君に、なんだかほっとした。お馬鹿な犬みたいでなかなか可愛いじゃあないか。素直そうで。

「盛沢さん、お久しぶり。ごめんなさいね、こんな事のために」「いやいや根岸さん。宿題はこんな事じゃないよ。」

高校3年の夏って大事だよ。特に内部受験組には評価対象の一つらしいしね。あれ、ところでメガネ変えた？

「ほんと、助かるよお。私もう、数学どうしたらいいかわかんなくて」

水橋さんは何故かもう既に半泣きだ。

自分でやろうと努力はしたんだね。うん、良い子だね。

「……悪いな」

竜胆君！ 相変わらず良いお声で。

でも貴方は、見た目に反してどうせ宿題手付かずなんだよね？

水橋さん見習おうね。中山君にも言えることだけだ。

「……なんか、盛沢と光山、穂積の事でケーサツに色々聞かれたらしいね？ あれからどうなったの」

おおっと、聞かれたくないことを、福島君。

ああそうか、あなたは穂積さんと同じ美術部だもんね。連絡とか回りやすいのか。

福島君以外の4人も大変興味があるようで、私を見つめている。宿題しに来たんじゃなかったですかー？

「実の所、私にもさっぱりなの。先週この図書館の入り口で鉢合わせて、なんだか悩んでるみたいだったからちょっと話はしたんだけど、それだけ。光山君も同じようなこと言ってるみたい」

まあ、会長が考えたシナリオですからね。同じになるの当たり前なんだけどね。

穂積さん、かむばーっく。

既に超常現象に巻き込まれているこの5人に話しても、信じてはもらえるかもしれないけど（どうかな？）なし崩しの会長の秘密まで話す事になりそうだ。

私は話したくてうずうずしてるんだけど、なんか後が怖そうなんだよね。

うん、ここはやはり口を噤んでおくべきだ。本能に従おう。

「……無事に帰って来てくれると良いね」

そうだね。でも、一番無事じゃないの、君達だから。私が知る限り一番不憫なの、君達だから……！ 穂積さんにはケセララン様が憑

いていないっていうだけで、あなた達よりは幸せだから！

ああ、しかし、ケセラン様だって使いようがあるかもしれないのだ。

「うん、そうだね……。あの、と、ところで」

「けほん。咳払いを一つ。」

「ケセラン様は、お元気でいらされますか？」

「どうしたの、急に」

根岸さんが、完熟メロンのカラシ和えを食べさせられたような顔をした。そういう食べ物があればの話、だけど。よほどあの毛玉に思うところがあるんだなあ。さもありません。

「ちよつと、その……」

私は戦隊の女の子メンバーだけを招き寄せた。

「楽にダイエットできる機械とかもってないかなあ、と」

ひそひそ。

お恥ずかしながら二週間に渡る食っちゃ寝生活で、ちよつと、こ
う……。

毎日エステもかくやというくらいむにむにとマツサージされていたおかげでそこまで体型が変わったわけではないが、制服のスカートを試してみたら若干違和感がね？

「あー、それ、私も欲しいかも……。あと、頭が良くなる機械とか、記憶力が良くなる機械とか……」

水橋さんが同意してくれた。ちよつと目がうつろうけど。大丈夫かしらこのこ。

でも、そうだよな、欲しいよね。そんなものがあつたら便利だね。もしも叶えてくれるなら、私はケセラン様に魂を売り渡しても……あ、やっぱりやだ、そこまではやだ。でも跪いて感謝くらいはする。

しかし根岸さんは鼻で笑ってそんな乙女の夢をバツサリ切り捨てた。

「あの有害生物がそんな良いもの持つてるわけ無いわ」

……デスヨネー。

そうして、結局地道な努力を余儀なくされたわけです。くっそー、これも全て会長のせい！

お勉強会は5日に渡った。途中緊急呼び出しがあつて中断、そのまま解散されたり、水橋さんがそれこそ思いつめて泣き出してしまつたりと散々な経過を辿つたものの、なんとか全員分が形になつた。……私は約束を果たしたぞー！

あとは、我が家の警備と称して上がりこみ、宿題を写させてとねだる魔女っ娘達にきつちり会長のことでお説教をしたり（でもニヤニヤされるだけであんまり効果が無かつた気がする）、会長に悪い妖精さんがついていないかやむしろついているべきだという期待をキュピルに全否定されたり（あのキャベツにまで変な勘違いされていることに愕然とした。「素直になれないなら協力するきゅぴ〜」とか言われて思わず千切りにするべく包丁を取りにいくところだった）、なんだかなし崩し的に一緒にシヨッピングに行つたり、映画を見に行つたり……アレ、いつのまにか私、馴染んでる？

そういえばクラスメイト達とプライベートをこんな風に過ごすの、中学3年以来かもしれない。ああ、私、今女子高生してる！

と、案外楽しい残りの8月を送つたのであつた。果物で懐柔されたわけでは、決して、ない。

9月の脇役そのいち

新学期。これだけで憂鬱になる理由としては十分だと思う。

加えて最近の異常気象のおかげでまだまだ体感温度は夏真っ盛り。徒歩で登下校している私にとってはかなりの苦行だ。全室冷暖房完備であることを理由に選んだ学校ではあるが、中、高、大学と、そこそ広い敷地を確保するためか若干高台に建っているので行きは特に辛い。でも坂道を自転車で行き来して転んだら惨劇が起こるに決まっているので、あくまで徒歩だ。頑張れ私。

今月は文化祭がある。各クラスごとに何らかの出し物なり研究発表なりをしなくてはいけない。うちのクラスは外部受験者も少ないので多少余裕もあることだし、何か凝ったことをしよう、ということになった。(こういう時の盛り上がり具合って、クラスの気質が浮き彫りになるものだよな)私? 外部の推薦狙ってますよ。だから内申点セコセコ稼いでるんですよ。クラスの行事にもそこそこ積極的ですよ、運動系じゃなけりやあな。

で、うちのクラスはお化け屋敷をする事に決まったようだ。……お化け屋敷。お化け役としては是非とも推薦したい連中がいるんですけど。「変わった人魂」役ができそうな、光って浮く毛玉とか、飽食の時代を象徴する「食べ物のもったいないお化け」役ができそうな、浮かんでくるくる回るキャベツとかな。

ああ、でも怖さより物珍しさが勝ってしまうか。それじゃ見世物小屋だよな、うん。そもそもあの存在を公にできないもんね。残念至極。

そしてこのシーズンは、各ステージやら屋台やら後夜祭やらを管

理、主催する文化祭実行委員達が俄かに忙しくなる。裏を返せばこの時期にしか活動しないので、おいしい委員会といえるはずなのだが……。はい、ここで問題です。うちのクラスの文化祭実行委員は誰でしょう？

一人は平井君という、剣道部に所属する真面目で律儀そうな人だった。（密かにこの人と竜胆君で是非剣道関係のイベントを起こして欲しいと切に願っている）しかしもう一人は、なんと運の悪い事にスーパージョーカーのピンクちゃん、つまり水橋さんなのであった。

水橋さんは5月以降大層忙しい身なので放課後の実行委員の会議なんぞ出てもらえない。授業中でさえ腕輪に締め上げられ、ぶるぶるしながら耐え忍び、休み時間になったと勝手に飛び出してゆく日々だ。（なんか三蔵法師から頭に変な輪っかをはめられた孫悟空みたいだよ。なんだっけ、きんこじ？とかいうやつ）会議に出られなくなるたびに「妹が熱を出して」「その妹の風邪が母にうつって」「母の風邪が会社中で流行ってしまった、責任を感じた母が毎日残業で！」と無茶な言い訳を繰り返して（言い訳の監修は私と根岸さんデス）なんとか平井君に一人で出てもらっていたが、そろそろネタ切れしてきた。

そこで、とうとう本日、頼れるサポート役の私が彼女の代わりに会議に出席するハメになったのです！うにゃー、めんどくさい。まあ、代理です、と言ってあるし、水橋さんのお役目は文化祭二日目の午後のパトロールという無難なものなので、とりあえず席に座っていれば良いんだけどね。時間を拘束されるの好きじゃないんだよ。本も読めないし。下校時間遅くなるし。

文化祭が四日後に迫っているせいか、会議は予想以上に長引いた。といっても、異常なほどテンション盛り上がってしまったているごく

数人だけがああでもないこうでもないと言い合って、自分達だけで何事かに大ウケして、脱線して……という、あまり実の無い時間だったんだけど。

これ、全員集めなくても、自分達だけでファミレスでも行って話せば良くない？ 座ってるだけで6時とかどういうこと。けれども流石に皆様お腹が空いたようで、やっと解散の運びとなった。ああ良かった、さあ帰ろう、と思った私は本当に偶然、気がついた。

アレ、携帯机に入れっぱなしだ。

私は別に携帯中毒ではないし、一晩くらい手元に無くても平気な人間だ。むしろ最近、ヤツ（名前を言うとは出てくる気がする）からのメールを見るたびに無茶な事頼まれるんじゃないかとビクビクする日々なので、（まあ、穂積さんの様子とか、姫君達からの伝言とかばっかりだけど）置いて帰っても全然問題はない。

だから、これは本当に気まぐれ。水橋さんに「会議終わったよ。でも全然意味なかった」って報告しよう、と思いついただけ。私は、教室に向かった。

9月の日没は昨今の気温にそぐわず早いもので、外はもう真っ暗だ。とはいえ文化祭の準備のため最長7時まで残って良い事になっているので学校の中はまだ煌々と電気がついている。

うちのクラスは早々に、会場を教室ではなくてクラブ棟（と、呼ばれてはいるが、ミーティング用に好きに使っていいよ、という空き教室が10部屋あるだけの建物。当然冷暖房完備）の一室を押しさえてあって、作業はそちらでやっているはずだ。お化け屋敷をどうしてもやりたい！ とやたら張り切っていた篠崎さん、野島さん、村山君（は、他の二人に無理に賛同させられていたような……？）が主導で、なんか色々頑張っているらしい。

私は一応、外部受験組なので準備は免除してもらっている。当日、

お化け屋敷の受付を2時間ほどと、あとは例の資料室に積んである古本バザーの売り子を1時間ほどするだけなので大変気が楽だ。でも一度も顔を出さないのも悪いな、明日には何か差し入れもついでこう、と暢気に考えながら、他所と違って真つ暗な教室に足を踏み入れた。

窓際の一番後ろというわかりやすい席（便利だけどイベントごとも起きやすそうな席ともいう）なので、電気もつけずに。

目が暗闇に慣れて、そして私は気がついてしまった。あ、誰かいる。しかも二人。

うっわあ、やってしまったあ！ 夏休み後半、そこそこ普通の女の子してたせいか、警戒心鈍ったなあ。（あれを普通と称するあたり、もう普通じゃないよねなんて言いたくない聞きたくない認識したくない）二人はどうやらしつかりと抱き合っているようだ。うん、まあ、電気付けたくなかった気持ちは解らなくもないけど、そもそも学校でそんな、さあ……。

特に気を使わずに音を立てて扉を開けて入ってきたので、おそろく二人とも私に気付いてるんだろう。なのに何故離れんのだ！ ええいけしからん、神聖な学び舎で！ ところでアレは、誰と誰？ 男の子のほづがこちらに背を向ける形で、なんだか相手にぎゅーつとしがみついているようにも見えた。その相手は……出席番号16番、貫井 菖蒲さん？

ふ、風紀委員がなにやってんだあああああ！

いや、そりゃあ、常日頃からなんだか気だるそうな色気を振りまいていて、漫画に出てくる保健室の先生みたいな人（すごい偏見）だとは思っていたけど。男の子のシャツが若干はだけているようにも見えるんだけどほんと何してんの。

貫井さんがおもむろに顔を上げ、こちらを見据えた気配がした。目が合ったと思った途端、私の身体は硬直した。え、あれ？

彼女の目が、暗闇の中赤く光ったように見える。あれだ、赤外線
の光みたいなの、ああいう光りかた。私はただひたすら、動けない。
ああああ、携帯を取りに来たばかりにいい！ 男の子の肩越しに、
彼女は目を細めて笑ったようだった。

……うん、よくわかんないけど解った。アレは、ヒトでは、ない。

そっかあ、なんかもう、人じゃないけど人語を話す生き物がこの世にいる事は分かっていたので特にどうこう騒ぎ立てるつもりは無いんだけど、でも私、今危ないんじゃないかなあ。どう考えても「見られたからには……」直行コースだよな。指先一つ、睫毛一本動かせないからどうしようもないんだけど。あ、目が乾く。まばたきくらい許して、お願い。

まばたきのできない辛さに生理的な涙がこみ上げてきた頃、やっと彼女は男の子から身体を離れた。お陰で私の目もかなりこの暗さに慣れましたよ。もう、はっきり見える。

崩れ落ちた彼は、おやおや、出席番号28番、向原 悟君じゃないですか。珍しい。いっつもいないのに。すぐに「保健室に行ってください」と言っただけのままエスケープする人なのに、よりによってなんでまた……は！

向原君から貫井さんに意識を戻すと、彼女はにたあ、と笑った。怖っ！ 何その笑い方、こわっ！

唇の間から、鋭そうな犬歯が見えた。

9月の脇役そのいち(後書き)

緊箍児(きんこじ) 三蔵法師が呪文を唱えるところが孫悟空の頭をぐいぐい締め付けて言う事を聞かせる、という鬼畜アイテム

9月の脇役そのに

「あらあらあ、盛沢さんじゃあないの」

ぐったりした向原君を傍の机にもたれさせてから、貫井さんはわざとらしく目を瞞って驚いたような声を出した。うう、なんて悪役っぽいんだ！ ネズミをいたぶるネコのようだ。いつそのこと一思いにお願いします、痛い怖い、怖い嫌い！

二人が抱き合つてごによごによしていたわけではないのはよく分かった。えつと、多分お食事中とかだったんだよね？ 貫井さんはきつと、向原君の唇ではなくて血管に吸い付いていたんだよね？ お邪魔してごめんなさいごめんなさいごめんなさい！

「まずい所を見られちゃったかしらねえ」

はい、まずい所を見ちゃいましたごめんなさい。でもさあ、教室でそんな、見られてまずい事するほうが絶対悪いんだって。教室はみんなのものです。誰にでも忘れ物を取りに来る権利があります！ あ、逆らうつもりはないんです生意気言つてごめんなさい。

貫井さんはゆっくりこちらにやってきた。動けない私の頬を人差し指でつーつと撫でて、うふふ、と笑う。な、なんか退廃的な色っぽさがとっても怖いですよ！

「可哀想だけど、見られちゃったからには仕方ないわねえ……」

ひいひい、いやー！

「……あやめちゃん、からかいすぎだよ。盛沢さん泣いてるじゃないか」

いや、これは目が乾いたせいで……あ、でもやつぱり怖かったせいかも？

ところで今の心持ちうつとりしたような声は向原君のですか。「
具合が悪いので保健室に行ってきます」以外のセリフ初めて聞いた
よ。

普段から、見るからに「貧血です」という顔色の、線の細い可愛
い男の子で、背もそんなに高くはない。むしろ貫井さんのほうが
高いんじゃないかと思えるくらい縦にも横にも小さめな彼は、まだ
立ち上がることはできないようだ。

え、でも、からかっているだけなの？　ほんとに？

「うふふ、だって盛沢さん、泣かせてみたかったんだもの」

泣かせてみたいってなんだよ！小学生の男子か！

貫井さんがぱちん、と指を鳴らすと、やっと硬直が解けた。今度
は私がある場に崩れ落ちた。ああも、怖かった、辛かった。ぱち
ぱち、とまばたきをすると、溜まっていた涙がとうとう落ちてきた。
ちくしょー。

「でも、見られちゃったんだもの。このまま、はいさようなら、と
いうわけにはいかないわ」

そうですね、今までもそのパターンに何度も何度も苦しめられ
てきたので、分かります。

「私、誰にも言ったりしないから」

分かるけど一応、言っておかねばなるまい。

「盛沢さんは口が堅い子だっていうのは知ってるわ。でも……」

あの、ほんとさつきから顔を撫でるのやめてくれないかな。なん
だか手付きが怪しげで落ち着かないしさあ。

あと、顔近すぎ。その美しく長い御髪が鼻先くすぐって困りま
す。

「あたし、あなたの血を吸ってみたいって、ずっっと思ってたのよ」

よくしてア・ゲ・ル」

吸われたあとの向原君の様子を見ればなんとなく予想はつきますけどね！ でも、私まだそんな快感とか求めてないから。知りたくないから。向原君みたいに常習者（いけないお薬みたいなものでしょ？）になりたくないんだってば！

必死でいやだいやだと拒否しているうちに、とうとう最終下校時刻になった。貫井さんは大変残念そうだったけど、「今日のところは諦めるわ」と言っつて、力の抜けきった向原君を担いで（力持ちだなあ、さすが吸血鬼）帰っつていった。私は、なんとか自力で帰路を辿った。

結局口止めもされなかつたけど、いいのかなあ？ まあ、誰にも言わないけど。言えるわけないけど。ああ、また知らなくていい秘密を知ってしまった……。

翌日、朝っぱらから貫井さんの「おねがぁい、一口でいいから」がまた始まった。

教室の真ん中で平気でそんなこと言うものだから、勘違いした三人娘達が「なになに、何かおいしいもの作ったの？」と寄つてきたりするし、もうほんとに……。いや、作つてるんだけどね。血つて自分の身体で作るものだもんね。でも君達にとつて美味しいかどうかは保証できないというかね？

とりあえず人前で「一口」っていうのを止めてもらうべく、私は貫井さんと向原君を、放課後資料室に呼び出した。今日は会長もあつちには行つていないのを確認済みだし、内側から鍵もかけた。準備は万全だ！

本当は今日、文化祭の準備している人達に差し入れにくつもりだったんだけど、優先順位が変わつたのだ。ごめんね、みんな。

「なあに、吸わせてくれるの？」

「そうじゃなくて……。昨日は結局何も聞けなかったから」

向原君との関係とかちょー気になるよ。しかしまずは一つ目。

「そもそも何故私の血を吸いたがるの？」

そう、「バレたから口封じに吸う」というより「目を付けていた相手にバレたから開き直って吸っちゃえ」という言い方が気になって気になって、昨夜はなかなか眠れなかった。お肌が荒れてしまう。もしかして私、「ヴァンパイアに狙われやすい体質」とかだったりする？ この先一生、他の吸血鬼の皆様からよってたかって狙われたりしちゃう？ いくらなんでもそういうお話のヒロインは遠慮したいんだけどな！

「教えたら吸ってもいい？」

「ただ吸いたくないだ。」

「……ちよつとだけなら」

でも、情報料だと思えば仕方ない。献血のようなものだよね。あ、向原君がこつち睨んでる。そんな顔しても全然怖くないよ？ 可愛いよ？ チワワみたいで。

「盛沢さんって、なんだかんだ言ってるけどオトコの匂いが付いてないのよね。だから、おいしそーだなーって」

それはええと、えーっと、そういうことですか？

ていうかなんだかんだって、なんのことですか。いや、予想は付くけど。聞きたくないよ。どうせ会長とどこのころのだろう、けつ。どいつもこいつも好き勝手言いやがって。そのせいでこのまま恋人作れなかったらどうしてくれる！

「それにい、な〜んか……魔力の匂いがする」

ああ……。

それは、誰かからうつったんだろ？ 会長か、それとも魔女っ子か。はたまた穂積さんか。5人戦隊は、あれは魔法じゃないか

らな。

つまり、まとめると「穢れなき乙女で、なおかつ魔力の移り香があるからおいしそう」と、そういうことか。徳の高い聖職者が狙われやすい、みたいなものか。吸血鬼モノって、やたらシスターが狙われるもんね。納得納得。

でも、じゃあ他にも候補はいるだろうよ。それこそ魔力をお持ちのご本人の、魔女っ娘達とかさ。彼女達こそ将来が心配だ。あと、会長とかどうっすかね？　すぐく吸血鬼に好まれそうな気がするけど。あ、でもアレが吸血鬼にでもなったりしたら今度こそ手が付けられない事になる。ヤメテ！

「何より盛沢さんって、容姿がスゴク好みなの。悟の次くらいにすき」

それはアリガトウゴザイマス。

ってえことは、貫井さんの個人的な好みに合わせてしまった、というだけなんだな。ああよかった。高校卒業したら連中とも縁が切れる（予定だ）し、この先一生怯えなくても良さそうだ。助かった、今回も脇役で。

9月の脇役そのさん

将来に対する不安が一個（不安の種なんて尽きないものさ）消えたところで、次の話題。

「それで向原君は、えーっと、何なの？」

失礼な聞き方になってしまった。でも、ニュアンスは分かっていた。ただきたい。つまり彼は、人間なのか、やっぱり人外の何かなのか。本人は私の質問の仕方を全く気にしていないようで、貫井さんにべたべたとくっ付いている。ああ、なんか本当に可愛いかもしれない。貫井さんの気持ち分かる気がする。

「悟は、あたしの花嫁なの」

「うん。僕、あやめちゃんのお嫁さんになるんだ」

ちよっとまで。

「お嬢さんじゃなくて？」

「あら、だってヴァンパイアの花嫁、のほろがヴァンパイアの花婿より背徳的で、響きがいいじゃないの」

そんな理由！

「子供の頃、悟はそれはもう可愛くて可愛くて、女の子みたいだったのよ」

「その頃に約束したんだ。高校卒業したら、僕はあやめちゃんのお嫁さんになるって」

……本人達が納得しているなら何も言うまいよ。

「思い出すわ。長い間彷徨って、やっと悟を見つけたとき、この子しかいないって思ったのよ」

どうやら貫井さんは見た目より随分と長生きしているらしい。

そんなに長生きしてて幼稚園児見つけて求婚するとか、犯罪っぽいよね。人間じゃないからそのへん感覚に違いあるのかもしれな

いけど。

「それで、悟と同じ歳の姿になって、それからはずっと一緒にいるのよ」

ね、と幸せそうに二人で笑う姿に、私はもう、突っ込む言葉も持たなかった。

きっとこれもひとつの、あいのかたち。

貫井さんは私から、「ほんのちよつと」といいつつ結構な量の血を吸って、嫉妬で顔を真っ赤にさせた向原君の頭を撫でながら、資料室を出て行った。うう、うごけない……。

私は全身を襲う倦怠感に、本棚にもたれながらずると床に座り込んだ。これは確かに、何もかもどうでも良くなるだるさだ。高校卒業したら貫井さんと駆け落ちする予定の向原君の立場なら、内申点気にせずサボってしまうのも頷ける。

しかし、吸われているときは確かに恍惚感があったが、私なら常習者にはならないな、と思う。きっと向原君は、「だいすきなあやめちゃんの役に立っている」気持ち良さがプラスして、あんなにうつとりしていたんだろうな。愛の力って偉大だなあ。(ふ……)

目を開けるのも億劫で、そのままべたべたと床に座っていたら、資料室のドアが開く音がした。貫井さん達は鍵を閉めていかなかっただろうから(外から開閉するには鍵をもっていないとね)誰が入ってきてもおかしくはないけれど。でも多分、会長なんだろうなあ。くそう、弱っているところを目撃されるのは屈辱だ。

「大丈夫？」

「……ちよつとした貧血です」

やっぱり会長だった。

あのね、人の事とやかく言える立場じゃないけど、この部屋にそう勝手に出入りしちゃだめだと思うんだ。私だって、文化祭が終われば図書委員も引退で、ここの鍵も返上するしさ。あんたもいい加減、新しい会長に鍵渡してやれよ。

私の「勝手に入ってくんじゃねえよ」という視線をものともせず、彼はするりとドアの隙間から入り込んできた。

扉を閉めて、第一声。

「貫井さんには気をつけたほうがいいよ」

今更かよっ！

てゆうかなにあんた、千里眼？あーもー、突っ込むのもだるい。

「……何のことですか？」

わざとらしいと言われようと、一応浮世の義理として、ここはしばらく控えておこう。私ってなんて義理堅いのかしら！

「もう何かされた後みたいだね。盛沢さんが良いなら別に好きにすればいいけど。でも一応、ね？」

良くは無いんだけどね。今回は双方同意の上だったから仕方ない。

しかし、なんとという投げやりな警告の仕方だろう。こんなにやる気の無い警告ならしないほうがマシなくらいだ。

「……なんで貫井さんなんですか？」

「彼女、たまにもものすごく飢えたような目で盛沢さんの事見てるから」

こわっ！ 私ほんとに食糧だったんだ！

「で、今朝から『一口、一口』って騒いでたでしょ？ これは何か起こるだろうなって、楽し……心配してたんだ」

「今楽しみにしてたって言いかけたでしょう、ねえ、絶対言いかけてたでしょう！」

「やだなあ、最近盛沢さん、オレに対して厳しすぎない？」

お前が私に無礼すぎるんだっつーの！ くそー、お前なんか美青年好きのダンディなおじさま吸血鬼の餌食にでもなってしまうえ。…私ときっちり縁がきれてからな。

大体、私が、ではなくどう考えても会長が私に対して容赦なくなってきたと思うんだ。便利に利用させてもらっね、という態度をもはや隠しもしないじゃあないか。

「噂では恋人同士らしいし、もうちょっと軟化してくれていいと思うんだけどなあ」

「光山君は、噂を無責任に放置しすぎです。すごく迷惑してるんですけど！」

最近たまに殺気を帯びた視線を感じるんだよ。ビクッとして振り返ると女の子の集団がこつちを見てるんだよ。女避けに便利だからって勘違いを利用するなんて……。

しかもこの男の一番性質の悪いところは、嘘をつかないで誤魔化せるテクニクを持っているってところだ。あ、いや、私もそういう傾向はあるけど。似たもの同士とか言わないで！

とにかく、こいつは最近の「二人は付き合ってるの？」に対して肯定も否定もせず、ただ関係（ないない、無いったら無い！）を匂わすような言い方でのらりくらりとかわすのだ。朝食を一緒に食べることや、家で紅茶を出したことなんかを、まるで話の都合でぼろっともらしちゃった、みたいにな！ お年頃の皆さんが深読みするの、分かっているだろうに！

これから受験本番だっついうのに、こんな時期にイジメでも始まったらどうしてくれるんだ。

……まあ、私は大人しく「誰にも相談できない」とか悩まないタイプだけどな。やられたらその足で職員室に向かうし、親にも言う

し、本当に会長が原因だったら会長にも言いつけるけどな。だって私は非力な女の子ですもの。一人で解決なんかできません。使えるものはなんだって使うさ。

「女の子の嫉妬はとても恐ろしいんですよ？ 私、そろそろ廊下を歩くのにも不自由してるんですけど」

「男の嫉妬だって結構怖いものだよ？ お互い様だつて」

それはもしかして、私のことを多少は想ってくれている誰かさんがいるってことか？

ちよつとおおおお、それ、もつたないから！ お願い、紹介して、誰？ できれば普通の人がいいんだけど。全体的に無難な感じなら尚良いんだけど。

「じゃあ、お互い残り少ない高校生活を安全に過ごせるように、きちつと否定しましょうよ」

にこっつ。

「オレはこのままで全然構わないから、盛沢さん頑張つてね」
にこっつ。

……ああ、頑張るとも。腹を立てたら貧血も治つたしな。この怒りを糧に、明日も頑張つて生きてやるんだからっ！（ヤケ）

10月の脇役そのいち

10月。体育祭の月であるから当然憂鬱だ。しかし球技大会よりは出番があるので嬉しいといえは嬉しい。少なくとも5月よりはずつと気分がいい。

先月と違って実行委員に代理で出席する必要もなさそうだし（あ、よく見たら片方は氷見さんだ。でも魔女っ娘なら時間の融通きくよね）今月こそ心置きなく普通の生活がおくれそう。何せ来月は推薦入試本番だしな！

そして期待通り、何事も起こらず（貫井さんの「血い吸わせて」とか会長の「姫君達が会いたがつてる」とか5人戦隊の「とうとう大気圏内で戦闘が可能に」とか魔女っ娘の「新しい種類のダークフエアリーが」とか、そういうのはもう日常と思うことでスルー。テスト終わるまではスルーだ！）体育祭当日になった。ふふふ、私のこの無駄な腕力を生かす時が来た！

体育祭での私の出場競技は、基本「全員参加」のものだけで、まあ借り物競争は避けられなかったもののそれ以外の走る競技はぜんぶパス！である。あとは綱引きと、騎馬戦と、ダンス（うちの体育の授業は半分がダンス。これのお蔭で私の体育の成績がそこそこ保たれているので大変ありがたい）と、せいぜい応援合戦の時に現場にいれば良さそうだ。

中高合同の体育祭で大規模な分、第7グラウンドまで全てが会場になるので、誰がどこにしようとかめられる事は無い。というより把握のしようが無い。よしよし、日焼けしないように建物の中に避難しておこう。

同じような事を考える人間は結構いて、なんとなく部活ごとにある程度まとまってサボる傾向がある。クラブ棟のように会場からちよつと離れている場所が狙い目で、文芸部と漫研合同で（兼部している子達が結構多いからな）毎年一室をキープするのだ。

どうせ誰かが暇つぶし用品を大量に持ち込んでるだろうと、私は手ぶらでその部屋に向かった。

案の定、どうやって運んだのかと思われるほどの本が積んである。ラノベ、コミック、雑誌、同人誌。ご親切にも「ご自由にお読み下さい」V 大事に扱ってねV」と、可愛い女の子のイラストのふきだしで注意書きまでついている。見たところ漫研の子達はかたまつて「萌え談義」をしているようだし、まあ、じゃあ遠慮なく。

さて、何を読もうかな。できれば一日で読みきれぬものがないな。お勧めはなになか、と、軽い気持ちで、部屋の中で何か作業していた同じクラスの米良さんに声をかけたらものすごい大慌てで手元を隠された。というか、彼女が身体ごと机に覆いかぶさった。

えーっと、インクで何か書いてたよね？ 多分漫画を描いてたよね？ 別に私、見て笑ったりしないのに。

「もももももも、盛沢さんっ？」

「あ、ごめん、驚かせて。あの、インクが服に付いちゃうよ？」

「うきやあああああああ！」

米良さんとは、中学の頃から面識があった。

ものすごく仲がよかったというわけではないけれど、私が読んでも本に興味をもって、たまに声をかけてきたりしたからそこその交流はある。彼女の、漫画家になりたいという夢だっけ知っているし、今更そんなに動揺されるいわれは無い、はずだ。

米良さんはさつき伏せた勢いそのままに、今度はがばつと立ち上がった。

相変わらず一々仕草がダイナミックだなあ、と感心している場合ではない。立ち上がった勢いで椅子が倒れ、椅子の脚が机の脚にひっかかり、机が大きく揺れて今度はインクの瓶が机から落ち、積んであった漫画の原稿がばら撒かれた。すごい連鎖だ。ドミノ倒し見ているみたいだ。米良さんって自滅タイプだよなあ。本人が漫画みただ。

私の目の前をひらりと、一枚の紙が横切った。どうやら表紙らしく『姫事〜ひめごと〜』というタイトルに、胸の大きな可愛い女の子があられない格好で寝そべっていた、ように見えた。

……うん、まあ、見られなくなかった気持ちはわかった。

「み、見た？」

「あー、えつと、ごめん？」

不可抗力ですよ。

「ううん、あの、こっちこそごめんね、勝手にモデルにしちゃってほわっつ？」

「え、え、私？」

「あれ、わかんなかった？」

うわ〜、余計な事白状しちゃった〜、と米良さんは頭をかいた。

どうしよう、ここは肖像権の侵害とかを主張していいのだろうか。しかし、申告されるまであの可愛子ちゃん（古っ）が私だなんてわかんなかったし、まさか本名使われてはいないだろうし、法的には問題なさそうな気がしなくも……。いや、これはもう気分の問題だ！

大変美化して描いてくれているのはありがたいが、その、内容はどういったものなのか知りたいような絶対知りたくないような？

表紙とタイトルからしてかなりアレだ、不安だ。

「えっと、とりあえず拾おうか？それとも、手伝わない方がいい？」
私に見られたくないのであれば、席をはずした方がいいだろう。
どうせ既に漫研の子たちがわらわらと集まって拾い始めているし。
インク拭くのに、雑巾でも絞ってくるか。」

「ううん、むしろこうなったら、取材させて欲しいことがあるの！」
すげー嫌な予感がする。先月もこんなパターンを経験した気がする。
る。

なんでみんな「バレちゃったからには」って開き直るんだろう。

「実はこのお話は、盛沢さんと光山君が主人公なんだ！ あ、もち
ろん名前とかは違うんだけど」

ああ、お前もか……。みんな噂を信じすぎだよ、もうちょっと曇
りなき眼で見据えてよ。

どう見たって私達、よそよそしいだろうがよ！

「で、あの、光山君って、優しい？ 鬼畜？」

それは、性格の事ですよ？ そうですよ？ なんでそんなも
じもししながら聞くんだ。

くそう、こうなったらなんとしても否定してやる。

「あのね、噂がどうなってるのかは知らないんだけど、私と光山君
が付き合ってるというのはデタラメなの。ちょっと困ってるんだ、
だって私……」

ここで、ちよっと躊躇って目をそらす。少し恥ずかしそうに視線
を戻して。

「他に、好きな人、いるから」

どうだ、チクショー！ 捨て身の作戦だぞ！

広がりきつた噂は新しい噂で打ち消すしかない。多少好奇の目で見られるハメになるかと（どうせ今だってそうだもん）会長の都合に振り回されるよりはマシさ。でも相手は誰かなんて聞かないで。（架空のヒトだから）

「そうだったんだ……」

米良さんは考え込んでしまった。

周りで聞き耳立ててた人たちも相手は誰だろうって顔してる。よしよし、そうやって相手探しつつでに新しい噂を流してくれたまえ。

まあ、私と会長を題材に漫画を描いていたらしい米良さんにはちよっと悪かったかもしれないけど、勝手に人をモデルにするからだよ。そう思い通りにはいかないよ。いい経験だったね！ と前向きにとらえていたきたい。

だが、米良さんは別な方向に向かって前向きだった。

「じゃあ、やっぱり鬼畜系の略奪愛モノにするね！」

「……プライバシーの侵害とかだけは、勘弁してね」

そして心の平安のために、頼むから私には見せてくれるな、とお願いしておいた。あとは彼女の良心に任せるしかない、ね……。

気を取り直してお勧めの作品を聞いてみる。もともとこれが聞きたいだけだったのに、どうしていつも私って、知らなくていいこと知っちゃうんだらう。ケセラン様より性質の悪い何かに取り憑かれてない？

「あ、じゃあイチオシはこれ！ 『Reincarnation of the last edge』っていうの。これに出てくる『クローバー』ってキャラがちょーかっこよくて！」

あ、火がついてしまった。

それから米良さんは止まることなく、いかにその漫画が面白くてかっこよくて素晴らしいかをしゃべり続けた。結局実物を読むこともできぬまま、借り物競争の準備を促す放送が入るまで捕まっていた。

すごく、つかれた。

10月の脇役そのに

借り物競争は第4グラウンドで行われる。全ての会場のうち一番広くて、観客席もかなり本格的に作られている場所だ。

この競技は毎回かなり無茶なネタが仕込まれているので、すごく盛り上がる。そのスタートラインに、私は立っていた。

なにせネタがネタなので、この競技は足の速さよりも「家が徒歩圏内であるか」が選手の選考基準になる。要は「家から取ってこなくてはいけないもの」を平気で出題するのだ。

過去の例から言うと、「愛用の枕」「子供の頃のアルバム」「今年もらった年賀状」など。

まあ、そういう無茶な出題が売りというか、盛り上がるりの原因なので、学校側も許容しているようだが……。いいのかな。

時間が掛かるのは承知の上、の競技なので、マラソンみたいに参加者全員が一気に走り出し、無造作に机に散らばっているクジの番号を取り、アナウンス席まで走って番号に対応するお題を読み上げてもらい、そこから方々に散らばっていく。完全に運次第だから、なるほど足の速さなんて関係ないのだ。でも私、運も相当悪いよ？

うちのクラスでいうと、（同時刻に第一グラウンドで行われている1000M走の選手になった出席番号20番、平井 篤君と31番 山岸 貴史君を抜かせば）残念な事に私の家が2番目に学校から近かった。

もう一人、出席番号11番、手越 晶さんも出場している。

手越さんは中部部からの持ち上がり組で、学校から歩いて5分の距離に住んでいるらしい。中1から高3まで、毎年借り物競争に出場していたという、いわばこの道のプロである。

なんだかいつも夢見心地のような目をしていて（何を隠そう、初めて会長と資料室で遭遇した時の演技の参考にしたのは彼女である）素朴な可愛さのある子だが、恥ずかしがり屋さんのようであまり友達は多くない。

100M走出場の二人とは幼馴染で仲が良いようだ。ほんとはあつちを応援したかっただろうに。お互い家が近いばかりに、いらん苦労するよね。

スタートの合図で、みんな一斉に走り出した。早くつけば当たりクジ引けるってわけでもないのにさ。ふーんだ。

大して足が速くない、とされる集団において更にビリ争いをしながら、私は何とか机にたどり着いた。いいじゃん、残り物には福があるっていうし。

既に先頭集団はアナウンス係りにクジを渡し始めている。「バナナ一房」「テレビのリモコン」「マヨネーズのチューブ」など、発表されるたびに観衆が大喜びしている。特に、無茶そうなものの中に。このひとでなしどもめっ！

私が引いたのは78番、なんだか惜しいような気がする番号だった。開き直って歩いてアナウンス席に向かう。（どうせ列を作って待ってるんだしさ）当たりでありますように、校内で調達できるものでありますように、と願いながら自分の番を待った。

「最近噂の高等部3年生盛沢さんのお題は……キャベツ一玉だあぁ」

いらん紹介の後に発表されたのは、普通に考えればハズレのお題であった。

私は、困ったような顔をしてその場から立ち去った。

ふ、ふふふふ。しかあし！

キャベツ一玉。それが常に校内にあることを、私は知っている。急いで持ち主を探すと、氷見さんがニヤニヤして手を振っていた。そのまま校舎の方を指差すので、私もさりげなくそちらへ向かい、合流する。

「いやあ、盛沢ちゃんがアレひくとはねえ。なんか運命だよね！」
「もしかなくても、氷見さんが書いたの？ アレ」

「体育祭実行委員全員が、無茶なの1つと無難なの3つ書かなきゃいけないってねー？ どうしようかなって思ってたらキュピルが目に入って、つい」

うん、まあ、目に付いたら書いちゃうよね。おかげで私、家まで走らなくて済むんだもん。素直に感謝するよ。

さすが一の騎士、フェアリーオレンジだよ。

「くるみには言っとくから。じゃ、私が一緒だとまずいし、いくね。がんばってねー」

そして爽やかに氷見さんは去っていった。うん、あれこそ本物の爽やかさだ。どっかの会長さんとは違うよね。

教室に入ってそつとキュピルを呼ぶと、瀬名さんのバッグがもぞもぞと動いた。

巾着状になっている口を開いてやると「きゅぴー」と言いながらキャベツ頭を持ち上げて、伸びをした。アレ、今のため息みたいなもの？ そこまでこだわってんの？

「キュピル、しばらくの間、何の変哲も無いキャベツのふりをして、私と一緒に来て欲しいの」

「キャベツとは失礼きゅぴー！」

「キャベツ以外の何にも見えないって現実をそろそろ認めようよ…」

…」

色々やかましくゴネるキュピルをなだめすかして、やっと会場に戻り、なんとかゴールした。家と往復するほどの時間は掛からなかったけど、結局期待するほど早くは戻れなかったな。

まあ、キャベツ一玉を持って即座に現れたらそれこそ不自然なので、いいんだけど。ハズレお題を引いた中では早い方だったんじゃないかな？ よしよし、これでクラスへの義理は果たせたな。なにせハズレにはハンデとして1.5倍の加算点がつく。

結果にそこそこ満足した私は、キュピルを抱えて教室に向かった。ここですぐにバッグに入ればよかったものを、キュピルが「光合成したい」というので（植物だもんな！）仏心を出し、ちよつとだけなら、と出しっぱなしにしたのがまずかった。

相変わらず変な歌を歌いながらくるくる回っているキュピルをぼーっと眺めていると、突然、教室のドアが開いた。

流石のキュピルも、ぴたっと歌うのをやめて、そのまま机の上に落下。あ、ちよつと痛そう。でも珍しく空気読んだね、いいこいいこ。と、現実逃避してちゃだめだ。誤魔化さないと。

「盛沢さん？ いま、誰か歌ってなかった？」

現れたのは借り物競争仲間の手越さんだった。うわあ、どうしよう。

「え、あ、えつと、私がちよつと鼻歌うたってた、かな？」

アレを自分の歌だというのはかなり恥ずかしいが背に腹は代えられぬ。

「……そのキャベツ、浮かんでなかった？」

「ナンノヘンテツモナイキャベツダヨ」

しまった、声が裏返った。

「こほん。えつと、ちよつと放り投げてみただけなの。変なとこみ

られちゃって恥ずかしいなあ、えへへ」

「……やっぱり、そうだったのね」

手越さんの声が、一段低くなった。

あー……。もしかしなくても、何かのスイッチが入っちゃいましたかね？ 今日は何日か！

「あなたが、ハートだったのね」

「は？」

「さがしてたの、ずっと……」

「あ、えっと、私に何か用だったの？」

「ううん、いいのよ、覚えてないんでしょう？ 思い出さなくて、いいの」

ネットリと纏わりつくような、なんともいえぬ猫なで声で、手越さんが言った言葉の意味を、私はまったく理解できなかった。

何ですか、ハートって。トランプとかのアレですか？

「私は、カップ。思い出してくれなくていいの。逢えて、うれしいから」

そういうと、彼女は感極まったように泣き出してしまった。おい、どうしろってのさー？

10月の脇役そのさん

私に抱きついたらままだ泣き出してしまった手越さんをもてあましていると、また教室の扉が開いた。入ってきたのは平井君と山岸君！天の助け！あなたたちの幼馴染がよくわからんけど大変ですよー？ あ、言つときまずけど私が泣かせたんじゃないからね？ いじめたりしてないからね？

「またか、晶」

平井君が、まるでうんざりした、というような声を出した。あんたちよつと、一応（理由は分からんが）泣いてる女の子にそんな声で話しかけちゃいかんでしょう。

「ごめん、盛沢さん。あとは俺らが落ち着かせるから、気にしないでいーよ」

山岸君がべりつと、私から手越さんを引き剥がした。そして3人はどこかに去っていった。

何だったんだ、ありやあ？

「なんだったと思う、キュピル？」

「うーん、ダークフェアリーの気配は無かったきゅぴー」

お前にはそれしか判断基準がないのか。その頭をむいたらほんとにスツカスカか！

「そうじゃなくて……ああ、もういい。さ、鞆に戻って」

「使うだけ使ってポイ捨てなんてひどいきゅぴ」

大変人聞きの悪い事を言ったので、容赦なく押し込めてやった。

まあ、手越さんのことはとりあえず幼馴染達が回収してくれたので、良しとしよう。キュピルのこともうやむやになったしな。さ、戻ってさっきの漫画読もう。

クラブ棟に入ると、米良さんはいなくなっていた。ああ、よかった。これなら解説の続きを聞かずに落ち着いて読めそうだ。

えーつとなんだっけ、『Reincarnation of the hell last edge』？最後の刃の転生？なんかもう、タイトルだけで内容が分かるよね。ラストエッジさんが転生するんでしょ？ とりあえずそれは確実だね！

読み進めてみると、まあ想像を裏切らない話だった。（ごめん、米良さんの話よく聞いてなかった）

ラストエッジの二つ名で恐れられていた天才暗殺者が、現代日本に転生する。普通の高校生として生活していた彼は、ある日謎の美青年に銃を突きつけられ、死を覚悟した瞬間に前世の記憶が蘇る。そして、その美青年『クローバー』が所属する謎の組織との戦いが幕を開けた……。

とゆー、大変スタイリッシュなポーズで銃をぶっ放したり仕込み武器をふりまわしたりするアクション漫画（？）であった。登場人物が男女ともセクシーだし、魅力的だよね。微妙にBLっぽさを匂わす表現なんかもあって、うん、ほんと今風。カツコイイよ。

できる事なら米良さんが勧めてくれた通り、この話にのめり込んでしまいたかったが、5巻に入ったあたりで大変な事に気が付いてしまった。（擬音とカツコイイポーズだけでページがぐんぐん進むので、ここまであっという間だったよ）

敵の組織の幹部がそれぞれ『スペード』『クローバー』『ハート』『ダイヤ』と名乗っていて、さらにその幹部たちは実はクローンで、オリジナルの人たちは『ソード』『クラブ』『カップ』『コイン』と名乗ってる！

なんかさつき聞いたよなー、ハートとかカップとかきいたよねええええ？

え、じゃあもしかしてさつき手越さんは、自分がこの『カップ』さんで、私が彼女のクローンの『ハート』だと、そう言ってたの？
なんで？ どこが？

ハートさんって、ツインテールをくるくるんに巻いて、やたら「んふ」って笑いながら唇舐めてナイフ投げる人だよ？ すぐに意味も無く半裸にひん剥かれてるし。（攻撃を受けるたびになぜあんなふうに着が吹き飛ぶのかよく分からん）

私より、そう、むしろ貫井さんにピッタリな役だよ？ （またもや失礼）

もしかして、ハートがサイコネシスで物を浮かせることができから、キャベツ浮かせてた（あれは自力で浮いてたのに）私を当てはめちゃったのか……？ 百歩譲ってそれはわかるとして、なんで手越さんが私のオリジナルなんだ……？ 私達、これっぽっちも似てないよ？

オリジナルとクローンの関係は様々で、カップはハートを溺愛している、らしい。（よくわかんないけど）

えー、いや、クローバーさんのとこみたいに憎みあって何かと言えば殴りあう関係じゃなくて良かったけど……どうしよう。しかもこれ、現在連載中で、ここにあるだけで18巻まであるんだけど。とにかく今、読めるだけ読まないよ。

そして私は、一番貢献できると思っていた綱引きを気が付いたらエスケープしてしまっていたのでした……。うう、ごめんねみんな。（最近こればかり）

翌日。私は平井君と山岸君に呼び出された。

昨日の手越さんの奇行について説明してくれるらしい。いや、なんていうか……。説明しとかなきゃいけないくらい、アレは長引くんだろうか。一時的な錯乱とかじゃないのか。

「悪いな、盛沢」

「昨日はびっくりしただろー？」

「うん、ちよっと……」

いや、かなり。

元ネタも読んでなかったし、ほんと何がなんだか分からなかったからね。読んだら読んだでますます混乱したけどな。なんで私があんなお色気キャラなんだよ！　せめて清纯派っぽいダイヤさんでしよー？

「晶は昔から、不思議な事を言い出すヤツなんだ。大体、本やらテレビやらに影響されるみたいで」

「ガキのころは、オレたちもアニメのキャラとかになりきって一緒に遊んだんだけどさー。あいつ、まだやめられねーんだ」

あー、うん、幼稚園の頃はそれこそ5人戦隊（何故だろう、今の言葉を思うだけで涙が滲みそう）の役割分担なんかして、遊んだりもしたよ。懐かしい。

「最近もさあ。前世の記憶がどーのとか言い出してさあ」

それは、あの漫画が前世の記憶がどーの、という内容のせいじゃありませんかね？

「あれとは違うと思う。おっそろしーことに、俺と篤が実は前世で恋人同士だったとか気色悪い事ゆーの。何読んだんだろーうなあ？」

「しかも俺が女だったそうさ。最近おそろく、前世が出てくる話を気に入って読み漁っているんだな。それにしても俺が女……」

う。それはまた、きつついですなあ……。平井君が元女性ですか。

こんなガツシリした体系で、どっちかっていうと強面の平井君が。本人もかなりの違和感とショックがあったようだ。

山岸君のほうは、愛嬌のある顔で、身長もそんなに高くないんだけど。ミスキャストじゃないですか？　せめて役柄入れ替え……ても意味無いよね、うん、ごめん。

「バーカ、篤、どっちが女でもお断りだっつーの」

「まあ、そりゃそうだよな」

「なんか、大変なのはわかった」

しかし、だ。異世界の巫女様の話だつて最初聞いたときは妄想かと思える内容だったんだから、手越さんの言う事が妄想であると決め付けてしまうのも可哀想かもしれないよな。

……私もほんと、不可思議な世界に寛容になったものだよ。自分の将来が不安だよ。

10月の脇役そのよん

「で、晶が言うには、晶と盛沢はリインカーネーションオブゼラストエッジという漫画の中からこの世に転生しているそうだ」

「連載中の漫画から……」

アトランティス大陸とかムー大陸とか月の王国からじゃないんだなあ。（は、月の王国っぽいところの巫女様なら一人知ってるじゃん、私！）

「まあ、ちよい戸惑うかもしれないけど、危ない事はないからさ。あいつ、無理に記憶取り戻せとか言わねーから。それはぜってー保証する。っつーか、あれ、本気じゃねーんだよ。遊んでるつもりなんだ」

「だいたい一ヶ月くらいで言う事が変わるんだ。そのうちあの漫画に飽きれば、また別な漫画に別な相手を適当に当てはめて楽しむだろう」

困ったちゃんだな！　そして彼女を庇おうと必死だな。

B Lカップリングまで設定されてるのに、なんて健気なんだろうこの人たち。幼馴染の三角関係なのか。困ったクセのある幼馴染に振り回される二人、か。大変ですな。

「えーっと、じゃあ、私はこのまま、よくわかんない、って態度のままでもいいのかな？」

「そうそう。それでできとーにあしらっていいわ。晶は、想像だけで満足すつから」

「いつもなら俺達にしかそういう話はしないんだけどな。盛沢は優しいそうだから付き合ってくれとでも思ったんだろっ」

「あはは……」

子供のころからずーっとそんな遊びに付き合っただけのあな

た達ほどの優しさを期待されるとすごく困る。心底困る。だが武士の情けで一ヶ月くらいなら付き合ってもないよ。本当に実害が無いなら。

しかし、そうか、先月水橋さんのエスカレートしてゆく言い訳（考えたのは彼女じゃないけど）に、何一つ疑問をささまず「そうか大変だな」と一人で委員会に出ていられたその我慢強さは、幼い頃から培われていたんだな……。納得したよ平井君。そして尊敬する。

幼馴染二人のおっしやるとおり、手越さんは一人で楽しんでいるらしく、まあ、やたら甲斐甲斐しく私の世話をしたかったもの（ちよーよけーなお世話！）基本的に一人で納得しては満足しているようだ。

彼女は多分おままごととかやると、その時のキャスティングを引きずっちゃうタイプだったんだろう。お母さんとお父さんの役割を割り振られたあと、そのまま相手の男の子を好きになっちゃった子がいたな、そういえば。そんなわけでカップさんがハートさんを猫可愛がりするのと同じように構ってくる。悪いけど鬱陶しい。

「ねえ、せつかく長くてキレイなのだから、少し巻いてみましょうよ」

「え、や、私はどつちかというストレートに憧れてて……」

「まあ、好みも変わっちゃったのねえ。でも、少しだけ、いいですよっ」

「……アハハ」

昔から変わってないよ！ なんだその、「仕方ない子ねえ」って
いつ慈愛に満ちた目は。

髪くらい多少いじるのは構わんが……ってああ、ツインテールは

やめてっ。なんかいやだ、だいたいツインテールは一人いるじゃん、桂木さんがさあ！キャラがかぶるのイヤなんだよ、ただでさえ脇役体質なんだから。

しかし手塚さんはホットカラーまで持ち込んでいて（絶対にやる気だったんだな）結局私は昼休みのうちに「ツインテールのくるんくるん」、つまりあの『ハート』とおそろいにされてしまった。

首周りが寒い。あと、クラス中の視線が痛い。うん、これだと全然かぶってない。すごく个性的って言うか、目立つよね、ちよつと……そんなめでみないで。

しかしこの髪形にされて鏡を見て、わたしはなるほどと思った。うん、ちよつと似てる。私、ハートさんになんか似てる。目の形と唇がぽつちやりしてるところが。

はつきり言って米良さんのあの漫画よりハートさんに似てる。すごいな手越さん。

でも、一番の問題は手越さんがこれっぽつちもカップさんに似てない所だと思っただ。髪形やしぐさ、口調はかなり意識してるみたいだけど。ある意味役になりきっている。演劇の才能があるんじゃないか？ もしかして千の仮面とか持ってる？

平井君と山岸君が申し訳なさそうにこちらを見ている。止めるよ。あー、いや、傍目にはクラスメイト同士で髪の毛いじって遊んでるだけだから止めようがないのか。彼らはずっとこうやって、手越さんを見守ってきたんだなあ。……彼女が一線を越えないように。

は、首筋に何か視線を感じる。だれだっ、と見渡すと貫井さんだった。いやあああ、狙われてる！ きつと「吸いやすそう」とか思ってる。タスケテ！

放課後、「あなたに似合いそうなお洋服があるの。うちに来て？」という手越さんからの誘いを幼馴染組の協力を得て断り、私は髪型をそのままに帰路に着こうとした。だってこれ、スプレーでバリバリに固められてるんだもん。学校で無理にほぐすより帰ってシャワー浴びたほうが早いよ、髪が痛むし。

「盛沢、大丈夫か？」

呼びかけられて振り向くと、竜胆君が立っていた。

珍しい、そっちから声かけてくるなんて。とちよつとどきどきしつつ（だって竜胆君って理想的な夫って感じなんだもの。恋人、ではないところがポイントだ）私はコテンと首をかしげた。

ううむ、この髪型だとなんだか、意識せずに仕草が自動的にコケティッシュになってしまふな。私までなりきってどうするよ。

「えっと、なにが？」

実は竜胆君とコミュニケーションをとるのは結構大変だ。

彼はよく言えば不言実行、悪く言うと言葉が足りない。主語も述語も最低限で、修飾語は知らないのかと思うくらい足りない。ついでに前後の話題が無く唐突に本題に入る。そして唐突に動く。慣れるまではちよつとビクビクしたよ。いきなり頭撫でたりするんだもん。

で、大丈夫かって、この髪型は正気なのかとか、そういう意味かね？ だとしたらシヨック。

「平井から、聞いた」

「手越さんの事？」

竜胆君はこくりと頷いた。

「悪いクセがでたらしいな」

「竜胆君は、知ってたの？」

「いや、今日聞いた」

なんで平井君は竜胆君に話したんだろう。最近私達が仲良しさんだから？（実際はお勉強会してるだけだけどね）

「しばらくしたら飽きるみたいだし、まあ、しかたないかなーって」
竜胆君はまたいきなり私の頭をぽんぽん、と撫でると、そのままさよならも言わずに立ち去っていった。……ううん、よく分からん人だなあ。

とかいいつつも乙女心が満足したので、ちょっと足取りも軽くおうちに帰った。

11月の脇役そのいち

11月。憂鬱だとかなんだとか言っていていられない月である。いや、でもやっぱりすごく憂鬱なのは確かなんだけど。何故かって？ 推薦入試のテストがあったからだ。

流石に結果が出るまでは私もちょっとピリピリしている。放課後の学校というのは気だるい空気が漂っているので、不安がこみ上げやすいものだ。試験の結果が発表されるまでの時間というのはただでさえ心臓が落ち着かないというのに。

そもそも、内容が簡単すぎたというか……いいの？ あれでいいの？ 小論文はともかく、学科試験があまりに、こう、一般常識問題が多すぎたというか。あれなら私、多分去年の学力でも受けられたと思う。

ああも簡単だと、コネがある人間だけを入れるために表向き試験をやった事にしてるんじゃないかとさえ思えてくるよ。どうなんだろう。私が優秀だったただけだといっただけだな！

面接の時もビックリする事があったしね。集団面接の形式で「友達を作るにはどうしていますか？」という題を与えられたんだけど、同じグループの一人が「コンパについてえ、そんでえケータイきいたりイ？」とか、うん、あの、口調も内容も場所をわきまえようね、という話を始めてくれて大変困った。

あのせいでグループごと評価が下がってたらどうしよう……。なんであんなことやらかせる人まで推薦受けられたんだろう。

と、うだうだ考えながら階段をおりていたら思い切り足を踏み外した。

あっ、と思ったが、鈍い私は手すりにつかまる事さえできずに、

そのまま宙に投げ出される。うぎゃー、下に人がいるのにいいいい！ しかもスカートはいてるよ、ってことは女の子だよ、どうしよう！

「あ、あぶないいいいいいい」

せめてもの警告に、私は叫んだ。彼女が振り返る。

驚いたようなその顔は、出席番号19番、葉月 千賀子さんだった。ああ、こういう時ってほんとにスローモーションみたいに感じるんだなあ、と感心しながら、私は彼女の胸に飛び込んだ。(だって何故か受け止めようとしてくれたんだもの)

葉月さんが立っていたのは不幸中の幸い、あと一段で踊り場という位置で、私の重み加わったので心配は心配だが、どうやら頭は打たなかったようだ。代わりに背中をしこたま打ったようだけど。どうしよう、彼女ただでさえ風邪気味らしいのに。

葉月さんというのは、何を隠そう6月の一件以来私のアコガレの人である。主に体型的な意味で。

上から下までスレンダーで、しかも背がスラリと高い。顔立ちはキレイで凛々しい。なんとというか美少年顔？ で、中性的な魅力がある。いいなあ、このストイックな胸。ちょっと硬いけど。ぺったんどこころか、なんか硬いけど。

……アレ、ほんと硬いよ？こんなもんか？

「……」

首をひねって悩んでいると、葉月さんが呻く声が聞こえた。ああ、ごめんごめん、乗っちゃったままだった。

「う、ごめんね、大丈夫？」

「うー、だいじょー、ぶ」

どうみても大丈夫そうではない。上背があっても細い彼女に、申

し訳ないことをしてしまった。

「どうしよう、立てる？保健室いこう」

「や、へーき……っつ」

彼女は立ち上がるうとしたが、右足を酷くひねっているようで再びしりもちをついてしまった。

うう、ほんとにごめんよ。仕方ないのでひねったらしい方に回り込んで、肩の下に身体を入れて引っ張り上げた。あ、結構重い。いや正直に言つと大分重い。ごめんなさい。

まあ、背が高いからな。骨もしっかりしてそうだし、っていうか、腕も硬いよ？ 鍛えてるんだな。

……なんとなく頭の隅によぎったありえない想像は追い払っておこう。ないない。ないから。

異世界トリッパーや巫女様やスーパー戦隊や魔女っ娘や吸血鬼を含め、変わった人をいっぱいみつけたからって、最近私の思考は飛躍しすぎなんだ。

まさかあなた、葉月さんが女装した男の子だったり？ なんて、まさか。

アハハ、おもしろいこと考えるよね、私って。彼女の声が若干いっつもよりハスキーなのは、風邪気味だからであって……。その証拠にはほら、マスクまでしてるじゃないの。

病気なのに私を助けてくれようとした彼女を疑うなんて、私ってなんてイヤなやつなんだ。人生そんなにしょっちゅう変わった事には遭遇しないったら！

とりあえず引きずるようにしてなんとか保健室に運び込み、腫れ上がった足首に湿布を張った。さて、どうやって彼女をおうちに送り届けようか。

「お……私の弟が、近くの中学に通ってるんだ。連絡して、迎えに来てもらうから大丈夫だよ」

この近所にある中学、というと、あの男子校付属ですか。なるほど、中学生ならまだ、女子高生に化けてもそんなに違和感は……げふんげふん。

いや、何考えてるの私。これは正真正銘女の子、葉月さんだから。姉弟で入れ替わってなんかいないっいたらいいない！

「そ、そう？　じゃあ、弟さんが迎えに来るまで付いていようか？」

「あー。……うん、いや、大丈夫。暗くなる前に帰ったほうがいーよ、盛沢サン」

「そっか。ごめんね、本当に。助けてくれてありがとう」

助けてもらったんだし、何も追及する気はないさ。何で入れ替わってるの？　なんて……いやいや、だからそもそも、そんな事実はないってば。

心の内にくすぶる疑問を無理やり追い払いながら、私は家に帰った。

翌日、葉月さんの足首は完治していた。

ハハハ、すごい回復力だね。いやー、スゴイスゴイ。（棒読み）

つか、隠せよ。私に対してなにかカモフラージュしろよ。やる気あんのか！　どいつもこいつも私に口止めしないけど、買い被りすぎなんだよ。わたしがペラッペラしゃべったらどうするんだ！

……しかし抱えているネタが多すぎて正気を失ったとしか思われなそうだな。

わざとらしく「昨日はごめんね、足大丈夫だった？」と聞く事もできずに、私は悶々と一日を過ごした。人の秘密なんてもうお腹いっぱいだからな。でも、ああ、でも……！

ああもお、王様の耳はロバの耳　っ！

その放課後、校門を通り過ぎた所でいきなり腕をつかまれた。びっくりっ、っとして硬直すると、昨日聞いた声がした。

「あ、悪い」

そう、葉月さんの声を若干ハスキーにしたような声だった。

私は肩の力を抜いて、そちらを振り返った。

どうみても男装した葉月さんにしか見えない男の子が立っている。注目すべきはブレザーの制服の裾から覗く、右足首に巻かれている包帯。

あー、うん。……何しにきたの。いまさら口止めかね？　大丈夫だよ、おねーさんは誰にもいわないよ。こんな多感な年頃に女装していたことなんてバラされたらかなりのダメージを受けること必至だからな。

「おれ、あの、えーっと、なんて言ったらいいかな」

女装してた理由も、入れ替わってた理由も深く聞きたくないんだけど。だからそんな頑張つて説明してくれなくていいんだよ？

「えっと、葉月さんの弟さん？　そっくりだったからすぐ分かったよ」

だからここは大人の余裕でとぼけてあげようじゃないか。私は君たちの秘密に気が付かなかった。

「お姉さんと待ち合わせ？　教室にいたと思ったから、もうすぐ来るんじゃないかな」

「や、そうじゃなくて。あー……」

彼は何かを振り払うように頭を振った。そして、聞き間違えようも無く、はっきりと言った。

「おれと付き合ってくださいー！」

11月の脇役その二

びよ、びよ、びよ、びよ……。

校門の目の前に設置してある横断歩道の信号が青に変わり、まぬけにさえずりはじめた。

部活も委員会も無い3年生たちはちょうど今が下校時間だったので、校門周りはなかなか賑わっている。

そんな環境で、この子は。

居合わせた人々がびっくりしてこちらを振り向いた。あ、ひそひそ言ってる！「光山君の……」とか「浮気？」とか「そういえば本命が別に……」とか聞こえてくる。ごかいだあああ！あ、いや自分で撒いた噂も混じってるけど、でもそうじゃないんだ！

横断歩道の信号が変わったのに真ん中で立ち止まったままこちらを指差してコソコソ言っていた連中が、車にクラクションを鳴らされて飛び上がった。ざまあみる！

いやいやとにくだよ、なにか行動を起こさなきゃいけませんよ。しかしこれはなかなか難しいな。

だって考えてもみたまえワトソン君。あの「付き合ってください」がどんな意味を持つかを正確に読まなくてはならんのだよ。答え方を違えればこちらが無駄に恥をかいってしまうのではないか。

パターン1としては、まあこれが普通だと思っただけれど交際を申し込まれている場合。

初対面（いや、前から何度か入れ替わってたのかもしれないけど）の中学生と男女交際……。それはそれで楽しいかもしれないけど、できれば慎重にお友達からお願ひしたいところだなあ。ということ

はとりあえず「ごめんなさい」だよな。

パターン2。どこか特定の場所と一緒に行ってほしい、という意味だった場合。

場所にもよるが、まあこれは「いいよ」と答えてあげたいところだ。恩人だしな。でも、なんで私を連れて行きたいのかという疑問はあるけど。

さあ、どっち！ ええと、この場合はパターン2であったことを想定して「いいよ、どこにいくの？」と聞きたいところだが、そういうのって天然系の子にしか許されないと思うんだ。私がやるとちよつとあざといと言うか、自分でもそりゃあないぜって気がする。まあとりあえずあれだ。

「とりあえず、場所移そうか」

三十六計逃げるに如かず、だ。私達は、見物人から逃げ出した。

近場のコーヒーショップに入って、私はミルクティーを注文した。邪道なのは分かってるけど紅茶党なんだもん。葉月弟君には（名前知らん）カプチーノを買い与えてやった。年上だからね！（ふふん）

「それで、ちよつと唐突過ぎて色々よく分からないんだけど、順を追って説明してもらえるかな？」

おねーさんらしく穏やかに聞いたです。

いいなあ、この「おねーさん」という響き。癖になりそう。あれ、もしかして私年下の男の子好き？ そういえばあの子も2歳下だったなあ。

「ごめん。えーっと、おれ実はたまに姉貴と入れ替わって。昨日も気づいてたんだろ？」

やはりあれが初めてじゃないのか。葉月さんて月に1回くらい風邪引いたって言ってマスクしてたしね。もしかしなくてもあの時の彼女はこの子だったのか。

「うーん、ちよっと違和感はあるけど、でもほんとにそっくりだったから確信はなかったかな」

だからわざわざ確信させに来なくて良いと言つに。

「姉貴がさ、おれの学校の先輩と付き合ってた。うちの学校って高校から全寮制だからプライベートではなかなか会えないんだ。それで、おれのふりして会いに行くんだけど」

あー、集団生活を体験する事によって協調性をなんたらかんたらっていう学長先生の信念でそういう決まりになってると聞いたことがあるよ。偏差値は同じくらいなんだけどそれが嫌でうちの学校にした、って男の子が結構いるね。

しかし、そつかあ、葉月さんって健気だな。恋人と会うために男装して潜入とか、スリリングなことしてんなあ。

で、そこから何故さっきのような事件が起きたんだ。

「それで、（こほん）さっき言ってた事なんだけど……」

「そーそー。彼女になって！」
軽っ。

「えーとね、まず私、キミの名前も知らないんだけど」

「名前は千明。中3」

うん、まあ、最低限必要な情報は分かった。

「なんで私と付き合いたいの？」

女と言うのは理由を欲しがらる生き物なのだ。17年間彼氏いなかったくせに贅沢ですみませんねえ。いつか王子様が、とか信じて生きてたもので！　そう簡単に飛びつきませんよ。

「えー、盛沢サンっておれの好みだから？　可愛いし、昨日触った

ら胸でつかかったし」

このクソガキっ！

「そ、それだけ？」

口元がヒクヒクしそうになるのを必死で堪えつつ、笑顔をキープした。殴り倒しちゃ駄目だ、こんなんでも一応昨日は私を助けてくれたんだから。

「高3でクリスマスにフリーとか、寂しくねえ？」

ちょー余計なお世話だっ、このマセガキがっ！

……とは言えずに、「ごめんね、間に合ってるから」と答えて、相手の反応も見ずに店を出た。ちつくしょー、期待して損した。乙女のトキメキをかえせーっ！

翌日。何故か学校中に、私が『中学生に告白されていた』という噂が広まっていた。……あのさ、みんなそんなに暇なの？ チェー、ンメールとかの形式で広がったの？

ちょっと責任者！ 葉月さんはどこだっ。あ、目をそらした。昼休みになったらとっ捕まえてやる。弟さんをきつちり叱っとくように苦情を言つてやらなきゃ気が済まない。私はかなりイライラしながらその時を待った。

そして待望の昼休み。教室から逃げ出そうとする葉月さんを逃すまいと、普段の運動神経の無さが嘘であるかのように素早く教室の出入り口に回りこんだ私に悲劇が襲い掛かった。中等部の女の子が3人待ち構えていたのである。3人はさっと私を取り囲んだ。両脇の二人が私の腕をそれぞれ掴む。某国の某施設に連行される宇宙人みたいじゃん、私。

「盛沢先輩。お話があります」

ワタシニハナイヨ。

しかし、そんな言い分は通じそうもない。真ん中の女の子が目を真つ赤にして今にも泣きそうだ。なにこれ私が悪いの？え、行かなきゃだめ？だ、だれか、誰か助けて！この際だから会長でもいい。だれかあ！

しかし目が合った会長は少し考えるようなそぶりをしたあと、につこり笑って私に手を振った。ちよつとあんたひどくない？あまりの事に呆然とした私は結局彼女たちに連行されてしまい、葉月さんに抗議し損ねたのであった。

所変わって屋上。もう11月だよ、すごく寒いよ？今日は風も強いんだし頼むからお話は手短かに、そしてお手柔らかに。お話とやらが始まる前からひくひく泣いている子が気になる。なんだってのさ、まあ葉月弟君絡みなんだろうけど。私だって被害者なんだがな！

「ひっく、あの、きのう、せ、せんぱいに、ち、ちあきくんがあっ」
落ち着け。呼吸を整えてからゆっくり、主旨だけを簡潔に述べてくれ。付き添いの子達（だよな？この二人は）が「ルミい、だいいょーぶ？」とか気遣って肩をさすったりしてやっているがなかなか落ち着かない。困ったなあ、と眺めていると片方がきつと私を睨みつけた。な、なんだよつ。やるきかっ。思わず身構えた。

11月の脇役そのさん

「先輩、葉月君の事本気じゃないなら、からかうのやめてください！」
「からかってない。なんだその設定。まさか、私が手を出した事になってるの？」

「そうですね、光山先輩と付き合ってるのに、なんでそんな酷い事するんですか！ 光山先輩が可哀想です！ わたし、軽蔑しました！」

付き合っていると断定された！ そして軽蔑されたっ！

ルミちゃん（でいいんだよね？）はわっと泣き出してしまい、オトモダチの二人は私を稀代の悪女であるかのように攻め立てる。

ああ、魔女裁判ってこんな気分だったんだろうなあ。何を言っても聞いてもらえないこの空しさ。てゆーかさ、この二人はルミちゃんにかこつけて私を吊るし上げたいだけじゃないか？ お前ら本命は会長だろ。ルミちゃんの恋愛は二の次だろ。

結局予鈴を聞いて我に返った三人は「とにかく、葉月君には手を出さないで下さい」と捨て台詞を残して中等部の校舎に走って行った。あの子達、4時間目をサボって私を待ち構えていたのかなあ。

空腹を抱えて教室に戻ろうと屋上のドアノブに手をかけたら、何故か自動的に開いた。いやいや、これ自動ドアじゃないから。誰だ？ って、考えるべくもなく、会長にきまっていますよね、ですよー！。

「はい、お昼買って来たよ」

中途半端な優しさ！

「何でさつき助けてくれなかったんですか！」

「とりあえずフォレンジア行こう。オレの部屋から出なければ見づからずによく帰って来られるから」

時差を利用して昼食をとれと。いい考えだな。

空腹と、会長が買ってきてくれたランチボックス（学食にて一日10個限定販売、1セット500円。日替わりホットサンドとフライドポテト、から揚げ一個にプチトマト入）につられて、私は久々にあちらに渡った。

急いで食べても学校に戻れば数秒も変わらないのでゆっくりできるのがあるがたい。せっかくなのでついでに会長に文句を言う事にした。

「それで、なんで助けてくれなかったんですか」

ああいう子達って頭の中でシナリオができあがっちゃってて、真実を言っても理解してくれないから厄介なんですよ？

「オレ、これでも嫉妬したんだけどなあ。だからちよつとくらい、盛沢さんにも浮気の反省して欲しくてね」

「はいはい、光山君の顔に泥を塗ってすみませんねえ。だから最初から否定しとけば良かったのに」

あれだろ、彼女に浮気されたなんて不名誉な噂になっちゃったのが気に食わなかったんだろ。付き合ってもいないのに浮気とか、ほんと噂って無責任に人を傷つけるよね。

「そうじゃなくて。……キミって、わざと気が付かないふりしてるよね」

会長が大げさにため息をついてみせた。私は、てめえの本意なんぞ知るか、と最後のポテトを口に放り込んだ。ごちそうさま。

放課後。なんかざわざわしてるなあ、と思いつつ校門に向かうと

そこは修羅場だった。

「ちあきくんのことなんか、あの盛沢先輩が本気で相手にしてくれるわけないじゃんっ！　なんでそれがわかんないのっ」

「るっさいなあ。お前に関係ないだろ」

「関係あるもんっ！　わたし、わたしっ」

お、言うか？　言うのかルミちゃん。と、他人事みたいに（実際他人事なんだが）眺めていると、タイミング悪く葉月弟君が私に気が付いて手を振った。

面倒になったのはよく分かるが、空気を読め！　今私まで巻き込んだら大変なことになるだろうが。（主に私が）しかし物見高い輩に一齐に注目されてしまったので逃げる事も適わず、私は覚悟を決めて二人の元へ向かった。

「……すぐく目立ってるよ。場所を移しましょう」

今日もコーヒーショップでミルクティーと、キャラメルラテを二つ。この出費はあとで葉月さんに請求してやるんだ！

ここまで来ては今回の自分の役目が「意地っ張りの幼馴染同士の恋の鞆当」モノにでてくる当て馬役である事を認めるしかないと思う。当て馬役ってなんて損な役回りだろう。

ヒロインにしてみれば悪役と言って差し支えないポジションだし、ヒーローにとっては捨て駒と同義語である。特別手当とか支給されるべきだと思う。いや、マジで。あ、腹が立ったからドーナッツ追加してやろう。経費経費。

私はぐずぐず泣いてしゃべろうとしないルミちゃんに言ってやった。

「今は代わりに話してくれるお友達もいないんだから、しっかりしなさい」

まったくもう、私こういうキャラじゃないんですけどー？ 年上だという余裕を見せたいがために穏やかにしてるけどな、本当はお前らまとめて校門前で逆さ礫にしたいくらいには腹立ててるんだよ？ 分かってんのかね、んー？

ルミちゃんはぐずぐずすすり上げながらも、自分がいかに葉月弟君のことが好きであるかをやっと語りだした。

どうやらこの子達は小学校時代は大変べったりだったのに、ちょっとしたこと喧嘩してそのまま意地を張り続けて別々な中学に進学し、そのまま口もきかずに現在に至っただけ。……へえ。

これを聞いて、葉月弟君の態度はいきなり軟化した。「なんだよ、おれてつきり、お前にはもう嫌われてると思って……」とかなんとか。けつ。

そこで私はバカバカしくなって、席を立った。お邪魔虫は立ち去りますよー、だ。

はあ、さすがにこう、疲れたというかがっかりしたというか。なんで私ってモテないんだろう。やっぱりこの性格かなあ。一生懸命隠してるんだけど、雰囲気とかで滲み出ちゃってるのかなあ。いつか王子様がとか期待せずに、次こそ告白されたら受けたほうが良いのかなあ。次があれば、だけど。

とぼとぼとうつぶつぶ歩いて歩いていると、大きな影が目止まった。そのまま影の持ち主を辿ると、なんと竜胆君であった。

「大丈夫か？」

また唐突に。でも心配してくれてるんだね、ありがとう。

「先月も同じ事聞かれた気がする」

「……そうだな」

どうやら家まで送ってくれるつもりらしい。まあ、ちょっと暗くなってきたもんね。（そろそろ彼の無言の意思表示を理解できるよ

うになつてきたぞ)

「そついえば、最近大気圏内で戦闘できるようになったとか聞いたけど……」

「ああ」

「新しい武器の試作品支給されたんだって?」

「ああ」

もうちよつと言葉を惜しまずにかしゃべって欲しいなあ……。
なんか虚しくなってきたんだけど。

「ケセララン様元気?」

「……ああ」

あ、いまの「ああ」は忌々しそうだった!

「中間テスト、追試に引つかからなくて良かったね」

「ああ、盛沢のおかげだ」

やっと二単語しゃべった! いやいや、礼には及ばんよ。でも恩に着てね。

などと色々実験しながら(どういう話題で竜胆君がまっとうにしゃべるか、の実験)家に着いた頃には、気持ちが少し晴れていた。

翌朝。学校に行くと、何故か『葉月さんの弟に頼まれて一芝居うつて、中学生のカップルをとりもってあげた』事になっていた。えーって?」

葉月さんを見ると、ジェスチャーで「ごめんね」ってされてしまった。……うん、噂を修正してくれたんだね。しかたない、許してやるか。もともとアコガレの人だしな。

「あ、葉月さん、これ、必要経費ね!」

ただし、飲食代は徴収するからね? それに、こうしたほうが信憑性がでるでしょう? ねー? (にこっ)

「んふふー、くうちゃん」

移動教室のため支度をしていると、貫井さんがのしかかってきた。くうちゃん……。

「やーっぱり、くうちゃんはこのままでいてねえ。……じゃないと、おいしくなくなっちゃうから」

かぶうつ、と軽く耳を噛んでそう言つと貫井さんはささつと離れていった。最近の彼女の行動はかなりせくはらだと思つんだ……。

このまま一生彼女のオヤツ扱いだったらどうしよう、と少し不安になった。い、いつかおうじさまが！ 救ってくれると、いいなあ。

12月の脇役そのいち

12月。この月が憂鬱でない独り身の人間なんて、割合としては少ないのではなからうか。街はどこも電飾できらきらと飾り立てられて大変つきつきするのだが、イルミネーションを一人で見に行くにはちょっと勇気が出ないというか……。女の子どうして行ってもなんとなく居心地悪いし。

しかしまあ、良い事が一つあった。合格通知が来たのである。早々に手続きを済ませたので、あとは問題を起こさず、目立たず静かに卒業を待つだけとなった。そうすれば晴れて4月から私は都内の大学生。

だから間違ってもまた階段から転げ落ちて人様の秘密など知ってしまわぬように慎重に、慎重に歩くようにしている。常に気配を読むのを怠らず、慎重に。

……つけられている、と気付いたのは期末試験の結果が出て、5人戦隊がなんとか全員追試に引つかからずに済んで一安心した頃だった。

学校の中で視線を感じたのが最初。そのときは「また会長の噂絡みかなあ」くらいに考えて放っておいたのだが、学校だけでなく帰り道も見張られているような気配がして、さすがに気味が悪くなってきた。

最近色々あったからもしかして自意識過剰になってるのだろうかとも思ったが、それにしても気配を感じてしまうのだからこの居心地の悪さはいかんともしがたい。実際、さっと振り返ると誰かが物陰に隠れるような姿も何度か見たのだ。戻って確認はしなかったけど。(だって怖いもの)

これってもしかしてダークフェアリーの何かなのかなあ、それともストーリーカー？ ううん、どうしたもののか。とりあえず防犯ブザーは持つてるけど心許ないよなあ。

ダークフェアリーもストーリーカーも、所詮性犯罪者（という認識って間違っていないと思う）なので、その方向に強そうな魔女っ娘にでも相談してみようかなあ、と思い始めた頃、それは姿を現した。

しかも自ら。

「いい加減正体を現したらどうなのっ！」

どう考えてもこっちのセリフなのだが、そう言って電信柱の影から飛び出してきたのは、出席番号6番、篠崎 杏樹さんだった。そして、それを追うように18番、野島 翠さん、27番、村山 光君。……あの影に3人って、どうやって詰めていたんだろう。

この3人とは、中学も一緒だった。同じクラスになった事は一度もなかったけれど篠崎さんはよく知っている。なんとというかこう、エキセントリックな人柄で大変有名で。

彼女に盲目的に付き従う野島さんも同じく有名で、さらにこの二人に振り回されて尻拭いして回る召使いのような村山君も、気の毒な事に有名だった。

篠崎さんはなあ、黙って穏やかに笑っていれば深窓の令嬢風美人さんなんだよなあ。腰より長いストレートの黒髪、切れ長の目、白い肌に華奢そうな体つき。振袖着せて飾っておきたいくらいには美人さんなんだけどなあ。実際古い日本家屋に住んでるし。

野島さんはショートボブをまっすぐ切りそろえて、いかにも気が強そうな目つきをした、凜々しい人だ。背が高くてちょっと威圧感がある。弓道部所属であるためか、常に静謐な空気をたたえている

のだが……こと篠崎さんに関しては大変暴走しやすい。

村山君は、いつも寝ているイメージしかないな。でなきゃ、篠崎さんや野島さんの被害者（変な難癖つける困った習性があるらしい）にペこぺこあやまっているイメージ？気弱そうにうつむいて、おどおどと二人の後をついて回っている可哀想な男の子。

まあ実のところこの三人と同じクラスになった時点で、一回くらいは絡まれるかもなあ、と覚悟してはいたんだけど。
ところで、正体ってなんですか。

「しらばっくれないでよ！ 盛沢さん、あなた人間じゃないでしょうー！」

篠崎さんはびしいっ！と右手で私を指差した。左手は腰。仁王立ち。村山君が頭を抱えてしゃがみこんだ。野島さんは篠崎さんから一歩下がって控えつつも、私をぎろつと睨んでいる。えーっと、これ、どうしよう。

予想を遥かに上回るレベルの難癖に私が言葉を失っていると、なんとか立ち直った村山君がさっそく私に平謝りし始めた。あああ、あなた、その若さでなんて苦勞性なの。

「ごめん、こいつちよつと勘違いしてるんだよ。ほんとごめん。盛沢さんがあんまりモテるから嫉妬して……イテっ」

野島さんの突きが鳩尾に入った模様。

しばらくおまちください、の状態に入ってしまった唯一の良心をフンと鼻を鳴らして一瞥すると、篠崎さんは改めて私にびしいっ！と指を突きつけた。つまりそのポーズがお気に入りなのね。

「誤魔化しても無駄よ！ 海人様に福島君、竜胆君、貫井おねーさま、氷見さん瀬名さん由良さんだけじゃ飽き足らず葉月さんの弟ま

で！ アヤカシの力で魅了したんでしよう！」

それはええと、うちのクラスの人気ランキング（男女混合）ですか。

ほほう、確かに私と交流のある人ばかりですが……。福島君が入ってる事に驚いた。ゴメン。そして葉月弟はクラス外だったね。たまにクラスに紛れてるようだけど。

でもさ、魅了って。アヤカシって。どうしよう、言いがかりだつて説明してもきつと「誤魔化しても無駄よ！」で一蹴されてしまう。村山君、早く復活してええ！

「代々陰陽師の家系である篠崎家の名において、成敗してくれる！

えいつ

「きやつ

いきなり額にペタリと何かを貼り付けられた。いやあああ、何、

何？

「やったわ、翠！ ひるんでいるわ！」

「お見事です、杏樹お嬢様！」

いきなり顔面に何か貼り付けられたら誰だつてひるむわ！ アホかお前ら！

よく見たら人間ばい形に切り抜かれたただの紙だったので、容赦なくぺいっとはがして捨てる。ち、こんなものに驚いて損した。

「くっ、手強いわね、これならどうっ？」

今度は人型がいつぱい手をつないでいるタイプの切り絵だったので、無言でひったくって捨ててやった。そう何度も貼り付けられてたまるか。

大体本物の妖怪をこんな、誰にでも作れそうな紙細工で一体どうしようってんだ。貫井さんだったらきつと視線で燃やしちゃうぞ。

(いや、そんなことができるかどうかはわかんないけど、なんとなく)

「な、なんですって！ これも効かない？」

「杏樹お嬢様、一旦引きましょー！」

一旦とか言わずに、このまま退却しっぱなしにしてくれないかなあ。

「む、無念だわっ……。行くわよ、いつまで転がってるの、ひかるっ！」

「こ、転がしたんだろーが！ あーもー、ごめん、ほんとごめんね盛沢さんっ」

そしてとりあえずの嵐は去った。まあ、なんだ。

「受験終わってて良かった……」

どうせこの騒ぎは長引くだろうから、このくらいしか安心できる点がない。

しかし「代々続く陰陽師の家系」とか言ってたけど、本当なのかな、妄想なのかな？

本当だとしたら相当なダメ陰陽師なんだろうなあ。なんたって、「貫井おねーさま」こそが吸血鬼だぞ？ なんて彼女はスルーで私を退治しようと思ったんだよ。

そういえば、文化祭のお化け屋敷は彼女たちが主導だったよねえ。あの、ありとあらゆる種類の御札とか護符だとかがベタベタベタ貼ってある内装は、お化け屋敷というよりは御札展示会って感じの出来だった。

まあ、上を気にして歩いていると床がいきなりぶにゅっとしてたりして、それなりにお化け屋敷らしい仕掛けになってはいたけど。そもそもお手伝いしていなかった私がどうこう言う話じゃないよね、

うん。

ただ、もしかしてあの御札も、アヤカシとやらをいぶりだすための仕掛けのつもりだったのかなあ、とね。

ところで、なんだって私が人外だと思ったんだ？ ううむ、解せぬ。

12月の脇役そのに

それから、篠崎さんによる嫌がらせ（としか思えない行動）が始まった。シューズボツクス、ロツカー、机の中から出てくるありとあらゆる御札、御札、御札！ いじめ？ ねえこれ、いじめ？

無言で片付けていると村山君がどこからともなく現れて「監督不行き届きですみませんっ」と言いながらゴミ袋に回収していく。

私が彼女たちに絡まれていることを知ると、誰もが口をそろえてこう言った。「ロシアンルーレットに当たっちゃったようなものだよ」と。でも私、いつ引き金引いたんだろう……。

「なんで私なんだろう……」

考えてもサツパリわからないので、貫井さんに「献血」をする代わりに相談にのってもらうことにした。

「そおねえ。くうちゃんって、変わり者をひきつけちゃう体質なのは確かなんでしょうねえ」

貫井さんはケタケタ笑いながらアツサリ言った。あなたもその中の一人ですよ？

「魅了と言いつ切るには意思でのコントロールができてないみたいだけど。いつそのこと練習してみたら？」

「もうちよつと真面目に！」

血を提供するんだからそれなりに知恵を貸して欲しいものだ。長生きしてるみたいだしさ。

「んー、確かに『篠崎』と『野島』っていうのは、聞いたことがあるわ。篠崎は、昔はそれなりの力を持った陰陽師の家系で、野島はそこに代々護衛として仕えてきた家よ」

……ち、本人の妄想設定じゃなかったのか。

「でもねえ、そもそも篠崎家は3代くらい前に力を失って、零落したって聞いたけどー？」

「じゃあ、彼女は他家復興とか考えてるの？」

それで手当たり次第に難癖つけて退治しようとしてるのか。へボだけど。見当違いだけど。

「さあ？ たぶんそうなんじゃないかしら。でも、本人には全く力なんかないわよ。保証する。さ、篠崎さんと野島さんの情報はこれでオシマイ」

う。貫井さんの目が……。

「さあ麗しの乙女よ。甘きしずくを我に差し出せ」

芝居がかった調子で言って、彼女は私の首筋に、牙を立てた。

だるー。貧血と戦いながらなんとか家にたどり着くと、魔女っ娘どもがお出迎えしてくれたので更に脱力した。なんているの？ なんで夕食のお支度してるの？

「あ、おかえりなさい」

瀬名さんがエプロンをつけてお出迎えしてくれた。ワイ、新婚さんみたい。

じゃなくて。

「なにしてるの……？」

「いやあ、パトロールしたら、盛沢ちゃんのおかーさまに会ってね」

「コンサート行ってくるって。病気で行けなくなったお友達のかわりに。今日はお父様も学会で遅いから、盛沢さんが一人で寂しくないように、良かったらって」

由良さんがかき回しているお鍋の中身は多分クリームシチューと

思われる。牡蠣が入っているといいなあ、バターで軽く炒めたやつ。
いや、だからそうじゃなくて。

「えーと、それで母から鍵を預かって夕食作ってくれてたの、かな？」

「そーそ。いつも果物ご馳走様つて、お茶までいただいたいちゃったよー」

あははー、と、一人リビングのソファでくつろぎきつている氷見さんが能天気にかつた。キュピルは生意気にクッションを重ねた上で熟睡している。寝息さえ「きゅぴー」とは……。

軽く暖めたクロワッサンとシチュー、そしてサラダというメニューで夕食が始まった。

食事中の話題はもちろんここ最近の私のスキャンダルである。

やけになった私は、先月中学生に拉致された時会長が助けてくれなかった事をいつけてやった！ どうだ、ヤツは優しくていい人なんかじゃないんだぞ！

「でも、盛沢さんが好きなランチボックス買ってるのみたよー？」

「イチゴ牛乳も買ってたしねえ」

イチゴ牛乳が好きな事まで知られている！

あ、いや、違うんだよ。イチゴ牛乳が好きな女の子は実はイチゴ牛乳ではなくてそれを買って「可愛い」と言われる自分が好きなんだ、と陰口を叩く人もいるけど、私が好きなのはあのピンク色の安っぽい見た目とそれを裏切らない味なんだ。すごく安心する。だから決してぶりっ子してるわけじゃないんだ。分かってくれるよね？

「う、まあ、お陰でお昼は食べられたんだけど……」

「ほらあ。愛されてるねえ盛沢ちゃん。多分光山君はさあ、寂しく

てすねてたんだよ」

「ヤツがそんな可愛いタマか！　なんであんなにアイツに肩入れするのさ。」

「そもそも光山君とは付き合ってるわけでもないんだっつたら」

「えー、じゃあ本命は竜胆君なのー？」

「瀬名さんがぐつと身を乗り出してきた。……そういうわけでもないんだよなあ。」

「たまにキュンとくるのは確かなんだけど、彼と恋人になった自分が想像できない。結婚生活は想像できるのに。」

「ってそんなことは良いからもつとご近所の平和に目を向ける！」

「そ、それよりも新しいタイプのダークフェアリーが出たとか先月聞いたけど……」

「ダークフェアリーの気配きゅびい！」

「丁度いいタイミングでキュピルが飛び起きた。よしよし、たまには役に立つな。寝ぼけただけなのかもしれないけど。ほらいけ、女王親衛隊。あ、寒いからコート着ていこうね。」

「新しいタイプは人の影を盗んで実体化するらしい。お陰で真冬に全裸で踊る可哀想な人を見ないで済むようになった。それと同時に本体に危害を加えなくて済むようになったため、魔女っ娘達の過激さはますますエスカレートしていた。」

「ひっ、今、あの由良さんが、あの大人しそうな由良さんが飛び蹴りをっ？」

「フェアリーバトン！」

「瀬名さんが叫ぶと赤い光の中から、中世の騎士が振り回していたようなメイスっぽいものが現れた。バトンか。それをバトンって言うっちゃうのか。まあいいけど。」

とにかく鈍器まで参戦して大変な惨事である。良かった、敵が生身じゃなくて。ありがとう、進化してくれた悪い妖精さん！

氷見さんが『フェアリー・プリフィケーション！』と大絶叫（ご近所の人が見てませんように！）しながら喰らわせた踵落としを脳天にうけ、敵は撃沈した。もうあれだよな、なんでもフェアリーつけりゃ良いって思ってるよね。

相も変わらず、魔女っ娘ものとしてはいまいちな戦闘であった。むしろこれは格闘ものなんだろうか。ああ、私に任せてもらえたらもっと夢いっぱい改造するのにな。

まずはその、学校指定のセーラー服から改造したくてたまらない。ふりる！ ぱにえ！ 絶対領域！ みたいなの？ 一体変身の責任者は誰なんだ……。

時間も時間なので、三人にはそのままうちに寄らず帰るように勧めた。標準の武器が学校指定のバッグという人達なので忘れ物もないし、食事もほぼ終わっていたし、あんまり遅くなるとまずいだろう。女の子なんだから。

片付けを手伝わない事を謝りながら帰っていく3人を見送って、さあ帰ろうときびすを返し、二回ほど角を曲がった所で。

「みたわよお、盛沢さん！」

……まずい相手に、出くわした。

12月の脇役そのさん

「見たって、なんのこと？」

とりあえずきよとん、と目を見開いて首を傾げてみた。

そもそもこんな遠くから何を見たってのさ。篠崎さんの性格なら、あれ見たら現場に飛び出してくるでしょうが。ってことは大したものは見てないって事だ。あわてるな、落ち着け私。

「まあたしらはつくれるのねっ！」

びしいっ！ と例のポーズを決めて、篠崎さんは高笑いをする。

「うちのお風呂の窓から赤やピンクやオレンジの怪しい光が見えたのよっ！ 急いで駆けつけたらあなたに出くわした！ どう、完璧な証拠じゃないの！」

おーっほっほっほっほ、って。無理にそんな笑い方しないほうがいいよ、ああもう言わんこっちゃない。

篠崎さんはふんぞり返ったまま咳き込み始めた。悪いけどかわるー。

それでお風呂飛び出して浴衣一枚で走ってきたのか。

白い浴衣で髪を振り乱して疾走する姿はさぞやすれ違った通行人たちの度肝を抜いた事だろうよ。湯冷めしないのかね？ それともなんとかは風邪をひかないのかね？

「えーと、光が見えて、私に会ったのが、何の証拠なの？」

心底わからん。根拠が薄すぎると思わないのかな。この人の頭ってどうなってるんだらう。

「誤魔化しても無駄よっ！ どうせあの光は狐火か何かでしょう。

いい加減正体を現すのね、この狸っ！」

「たぬきっ？」

なんで狸が狐火だすんだよ、という突っ込みをする気力も沸かぬほど、シヨックを受けた。

たぬき……。狐だったらなんだか美しい妖怪ってイメージがあるけど、狸……。

「狙ったかのようなロリ巨乳に化けたりして！ あなた程度じゃ萌えないのよ！ 中途半端な化けかたして、恥を知りなさいっ！」

「あ、あのっ」

一つ一つの間違いを、泣かせるほど徹底的に否定してやりたいという気持ちよりも、何故狸呼ばわりなのかを知りたい気持ちが勝った。

「なんで狐じゃなくて狸なのっ？」

篠崎さんはまた無理な高笑いをした。

あとちよつとふんぞり返って、その壁に頭を強打してくれないかな……。そしたらもうちよつと賢くなれるんじゃないかな。

「だって狐だったら、私のような美女に化けるわ。あなたみたいなお子様顔じゃあなくてね！」

かっちーん！

自分だって狐と言うよりは蛇じゃん！ いや、蛇だってちよつとセクシーで悪くないな。狸よりは良い。

狸の実物は可愛いけど、よく見かける狸の置物って不細工なんだもん。他にないか、例えられたらイヤで彼女に似ていそうな動物。くそう、思いつかない。

じゃあなにか、私が童顔気味だから狸なのか。（ロリ巨乳って言われるようなロリ顔でもないし、巨乳ってほどでもないもの！）

「とにかく、ここで会ったが百年目よ。ちよつとお待ちなさい、翠が来たらさっそく退魔の儀式を……」

へえ。野島さんが来るまでダメなんだ？ このへボ陰陽師め。

篠崎さんは懐からチヨークを取り出すと、道路に落書きを始めた。なにしてるの？ と聞いたら儀式用の陣を書いている、と素直に答えてくれた。

「あんまり遅くなると怖いから、もう帰るね。ばいばい」

わざわざ野島さんの到着を待ってまで退治されてやる義理はないので、落書きみたいな作業に従事している篠崎さんを置いてさっさと帰った。

誰か、何とかして。

翌朝、もちろん絡まれた。廊下の真ん中で。

「私が結界を張り切らないうちに、よくも逃げたわね！」

「あー、うん。ゴメンネ」

もう、立ち止まらずにさっさと通り過ぎよう。そう思ったのだが、野島さんに回りこまれてたたらを踏んだ。

だから怖いって！ 威圧感あり過ぎだって。あれ、ちょっと、村山君はどこ？ なんでこの暴走特急放置してるの。

「呪符が効かないって事はそれなりの力があるようね。ならば、これはどうかしらっ」

「ふっ」

篠崎さんの合図で、野島さんが低く息を吐き出し何かを振りかぶった。きゃー、なになに、暴力反対！

ざーっ。

目の前を、滝のような水が流れ落ちた。水？

「せ、聖水を跳ね返したっ？」

「杏樹お嬢様、このアヤカシは危険です、引きましようー！」

二人は何が起きたのか全く理解できなかった私を置いて、脱兎の如く逃げていった。あ、篠崎さんが顔面からコケた。ざまあみる！

ところで、一体何が起こったんだろう。

「大丈夫？ 彼女たちも、ちよつと悪ふざけが過ぎるね」

「あ、光山君。おはようございます」

会長は、おはよう、と言ってハンカチを取り出した。ぴしつとアイロン掛けされているところに彼らしさを感じるよ。

「大分防いだけど、全くかぶってないと怪しいから。顔に少しかかっているよ」

前半は小声で、私にだけ聞こえるように。後半は普通の声で言って、私が受け取るうとする前に濡れた顔を拭いてくれた。あの……ありがとうございます！

一見甲斐甲斐しい彼の様子に、案の定見物人から「キヤー」と悲鳴が上がる。あのね、いや、もういい。なんかもう否定するの疲れだし好きに想像してくれていいよ。

そうか、つまり私は野島さんによって濡れ鼠（っていうか濡れ狸か、彼女らの言い分では）にされるところだったのを会長の魔法（魔法とか普通に言ってる自分に愕然とする。もう戻れないのね、あの頃には……）に救われたのか。納得した。

「ありがとうございます」

「どういたしまして。それにしても、困ったね」

ほんとにな！ とりあえずの問題はこの水浸しの廊下だよ。私が掃除するのか？

タイミングよく先生が通りかかって、水溜りの製作者は誰かと尋

ねた。

普通に考えれば真ん中に立ってる私と会長なんだろうけど、私達優等生だもんね。日ごろの行いってとても大事！

私だけならばともかく、会長にまで累が及ぶのを懸念した女の子たちがこぞって「篠崎さんがいきなり私に絡んで、野島さんがバケツの水をかけようとしたけれど失敗したらしい」と証言してくれた。こつという時、会長ってほんと役に立つよね。

おかげで私はそのまま教室に戻され、篠崎さんと野島さんは校長室でお説教の上保護者呼び出しで厳重注意となった。

どうやら聖水騒ぎも初犯じゃなかったらしいよ？

二人のご両親が常識的な方で、娘たちの行動をきちんと制御してくれるといいんだけどなあ……。

12月の脇役そのよん

「ほんとに盛沢さんってあぶなっかしいよね」

失礼な。私自身は堅実に生きてるんだぞ。悪いのは私に絡んでくる連中であつて……。

「変わった人に絡まれやすく、困ったなあ」

「自覚がお有りなら改善してください」

「……オレはともかく」

棚に上げやがった！

「まあ、さつきは本当にありがとうございました。あんな得体の知れない水を頭からかぶるなんてぞっとします」

水がはねた部分だつてなんだか気持ち悪いくらいだ。あらためて濡れタオルでぬぐつておこつ。

「うーん、余計な事だつたかもしれないけど。今回の事でますます彼女たちが疑つてくるかもしれない」

ああ、聖水跳ね返したとかなんとかね。

「大丈夫、彼女たちは確信してるんです。何を見ても結びつけるだけです。大人しく水をかぶるだけ損ですから」

「助けてあげようか？ 見返りはもらうけど」

「とんでもなく高くつきそうなので遠慮します」

一生を棒に振るほど高くつきそうだよ！

「気が変わったら、言つてね」
にこつ。

こつという笑みを浮かべた会長は危険だ、とちゃんと学習している私は、篠崎さんを見習つて脱兎の如く逃げ出したのであった。

私の受難はまだまだ続く。いや、もしかして今日が一生で一番運の悪い日なのかもしれない。

……きつといつか更新するんだろっけどな！

「盛沢、たのむ！ これ預かってて」

昼休み、中山君が私に差し出したのは、桐の箱だった。

桐の箱。嫌な予感がするよ？

「こ、これは……！」

「開けなくていい。いやむしろ今は開けないでくれるか？」

「なんで私に……ケセララン様を？」

伝承によるとケセラランパセランは桐の箱に入れて、おしろいを与えて飼うらしいよ？ そうするといつの間にか増殖して、幸せを与えてくれるんだって。

冗談で中山君に教えたんだけど、本気にしたのか。どうしたこの箱。

「俺のへその緒が入ってたやつ。おしろいはわかんなかったから姉貴の化粧品削っていれといた」

お前はそこまでしてケセララン様を増殖させたいのか！

「頼むよ、最近俺の部屋から変な声があるっておふくるがうるさくてさあ。家捜しされそうなんだよ」

「で、でも、だからってなんで私に！」

「みんな嫌がっ……ごほっ、恐れ多くてご遠慮たてまつらむと……」
日本語が大変な事になっているよ中山君。現国も古典も駄目な子だからな。

しかしよく大人しくしてるな、ケセララン様。もつときいきいわめいても不思議じゃないのに。

「いつも遅くまでゲームしてるから日中は熟睡」

……もしや授業中の緊急アラームはオートで作動していたのか？

こいつほんとに地球の平和とか実はどうでもいいんだな。駄目な公務員みたいだ。

「なー、頼むよー。今夜だけでもいいからさあ」

う、バカなわんこが耳をたらしている幻影が見える。負けちゃダメよ、だってここで負けたら私、私……！ うずうず。

だめよ、芸なんかさせちゃ。だめ、だめだったら！

「お手っ！」

「わん」

と、いつわけで箱を手に載せられてしまったのである。

くう、中山君のクセになかなかやるな！

……馬鹿な子ほど可愛いっていうよねー。あれ、もしかして私中山君が好みだったりする？ いやいや、彼はちよつと頼りなさ過ぎてなあ。こうやって頼まれごとばかりされそうだな。うん、ダメダメ。

なんてどうでもいいことを考えて心の葛藤をなんとか誤魔化しながら家に帰った。

できればケセララン様がこのままずーっと眠っていてくれますように。

今日も母は、ジムに行くといつて夕方出て行った。

「帰りにパパと合流してデートしてくるから、くみちゃんは先に寝ててねえ。うふふ」とか言いながらうきうきと。

両親の仲が良いのは喜ばしい事だし、高校生にもなって寂しいとは言わないさ。

ただ、結婚生活が幸せすぎるせいか最近私にも「恋人はいないのー？ ほら、あの生徒会長さんなんかどうなの？」とかなんとか絡んでくるのは止めていただきたい。

てゆーかいつの間にヤツの存在を……？ は、もしや魔女っ娘の
仕業か！

まあ今日に限っては両親の帰りが遅いのはありがたい。これなら
多少ケセラシ様様が起きて騒ぎ出しても大丈夫だね。でも目を離すと
怖いから、箱は肌身離さず持つておこう……。

夕食は簡単に、アンチヨビとキャベツのペペロンチーノ（具入り
は邪道と言われるかもしれないけど）でも作るのかなあと冷蔵庫を
空けてごそごそやっている、玄関のチャイムが鳴った。

こんな時間に何かな、宅配便の予定は聞いてないけど、とインタ
ーフォンの画面で確認してみたら、なんと篠崎さんと野島さんであ
った。村山君の姿はない。

そういや今日一日彼を見てないけど一体どうしたんだろう。二人
を止めようとして野島さんに何かされたのかな……。

うーん、あの二人かあ。居留守使おうかなあ。しかし待てよ、篠
崎さんが下げてる紙袋、最近流行ってるケーキ屋さんのだよねえ。

私は物欲に負けて、玄関へ出て行った。ちよっとだけ。すぐに帰
ってもらえば大丈夫だよな？

「……謝りにきたのよ。学校で聖水をかけようとしたのはやりすぎ
たわ」

篠崎さんがぶすーっとしながらも紙袋を差し出して言った。

いかにも渋々、親に怒られて来ました感丸出し。しかも「場所が
悪かった」と思っているような謝り方だよな？

どこであろうといつであろうと、人様に水を掛けようとしたこと
が問題なんだよ？ いや違うな、水だけじゃない。思い込みで人を

退治しようとする事自体が問題なんだよ。

今のうちになんとか誤解を解いておかないとエスカレートするだろうなあ。だって、見るからに反省してないもの。

でも今日は日が悪い。ケーキに浮かれてうつかり忘れかけてたけど、エプロンのポケットにまずいものが入りっぱなしなんだよ。いや、だってさ、ポケットに入れるとそのまま安心しちゃうクセがあるって。

あと、レジでお金払うと安心して商品受け取らず立ち去ろうとするクセとかな。何度「お、お客様ーっ」と呼び止められたことが。ってそれは今どうでもいい。

とにかく、いつケセラシ様が起きてしまっかと思えると背中にへんな汗かきそう。早く帰ってもらわないと。

「…………それはまたご丁寧に。今後はああいうのは控えてね？　じゃあ私、食事の支度中だから！」

早口で答えて、ドアを閉めようとしたのがどうやらまずかったらしい。

「…………様子が変です。やはり何か隠しています、杏樹お嬢様」

野島さんが余計な事を言い出した。ああ、私ってなんて迂闊だったんだろう。やっぱり居留守使うのが正解だった。

「隠すなんて。ただ、ちよっとお鍋を火にかけっぱなしで…………」
強引に誤魔化そうとベタな言い訳をした私のエプロンの中で。

「…………ん、よく寝たなう」

災厄が、目を覚ました。

12月の脇役その1

パンドラの箱というのは神話の中でも色々謎めいていて諸説云々あるようだが「開けてはいけない」事だけは共通している。開けると災いが訪れると。そして、大抵の説ではその箱を開けてしまうのは女である。

「……今の、なに？」

たつぷりの沈黙の後、篠崎さんが地の底を這うような声で言った。

「空耳じゃない？」

「誤魔化しても無駄よっ！翠！」

「はい、お嬢様！」

野島さんが私を羽交い絞めにした。いたいいたい、力入れ過ぎだつてば！

篠崎さんは私のエプロンのポケットに躊躇なく手を突っ込み、あの箱を見つけてしまった。何でそこだと分かったんだよ、変なところだけ勘が鋭いな。ああああ、開けちゃだめええええ！

「ふん、やっぱりね。油断したわね盛沢さん！ この中に手下でも飼っているんでしょう！」

手下として使えるような可愛いモンじゃないって。

「ちよつと、人のものを勝手に……」

私のじゃなくて中山君のだけどな。

「さあ、あなたの正体暴いてあげるっ」

そう言っただけで彼女は躊躇することなく、開けてしまった。あーあーあ……。

まあ、私も軽率だったけどさあ。ほんとこの子達、ダメだ。

「んー……？ オマエはだれなう？ しもべはどこなう？」

ケセラン様、戦隊の事「しもべ」って呼んでるんだ。

みんな腹が立つのも当然だよ。篠崎さんと野崎さんはケセラン様を見て硬直している。だよー、これ何？ って思うよねー。

「こ、これは……」

「これは、なんででしょう……」

なんだと思う？

篠崎さんは考えた。かなりの時間を費やして。

野島さんは期待に満ちた目で彼女を見つめている。ところでそろそろ離してもらえませんか？

「……分かったわ、ウィル・オ・ウィスプね！」

「お見事です、杏樹お嬢様！」

ちよつと待て。うっすら発光して丸いとはいえ、それは飛躍しすぎだ。

「ウィル・オ・ウィスプって、多分もうちよつと幻想的なものだと思うよ？ 湖面に浮かぶ青っぽい火みたいなの……」

「し、知っているわよ！ これでも勉強してるんだから。漫画で！漫画で！」

「え、えーつと、おうちにある古い文献とかじゃないの？ 代々陰陽師とか言ってたよね？」

「字が古すぎて読めないのよ！ 悪いっ？」

悪いとは言わないけど……けど……。それにしたって化け狸がウィル・オ・ウィスプを飼ってるとか、どういふ発想だよ。確かにケセランパセランよりはメジャーというか、ファンタジーに出てきやすいけどさあ。せめて国籍合わせようよ。

「わけがわからんなう。おい、しもべの助手！ 説明するなう」
私だつてようわからんわっ！

つてゆーか、こいつの中では私の立場つてしもべの助手なのか。
しもべそのものよりはマシと考えるべきか……？

「えーっと、ちょっと複雑な事情が絡み合つていて」

中山君のお母様が発端というべきか、夜中にゲームして騒ぐのが
悪かったのか、いやそもそも私を妖怪扱いするこの人達が悪いん
だよな！

「簡単に言つと、そちらの二人が悪いんです！」

「わかつたなう！」

ケセララン様はいきなりカメラのフラッシュのような光を二人に向
けて発射した。

ちよつとおおおお！ まさかその怪光線、物騒なものじゃないで
すよね？ 違つて言つて！

二人はバタバタと倒れた。どうやら気を失つたらしい。だよな？
呼吸してるよねえ？ してるしてる。ああよかった。

「今の光は……」

「一応現地人は庇護対象なう。傷つけると査定に響くから気絶させ
ただけなう。ちっ、残念なう」

最後に一言怖い事言つたよ、この毛玉。

査定つて、給料の？ 地球に来て可哀想な高校生捕獲してこき使
つて、自分はゲームして寝てるだけなのに給料もらつてんの？

「ついでに一時間分の記憶を消したなう。今のうちに遠くに捨てて
くるなう」

一時間分消したという事は、少なくともうちに来てからのことは

忘れたね。そいつは何より。

ケセランの様のおっしゃるとおり今のうちに遠くに捨ててきたいところだけど、さてどうしたものかね。いや、遠くっていつか学校で良いんだけど。

「一人で運べないなう？ これだから地球人はそのままでは使えないなう。役立たずなう」

ケセラン様が懐をゴソゴソする気配（手足ないけど、なんかわかるんだよ！）を察して、私は戦慄した。

まさか、まさかこんなことで私を6人目の戦士にしようなんて展開が待ってるんじゃないかな？ いやだー、絶対いやだあ！

しかしケセラン様に取り出したのは、戦隊呼び出し装置だった。

（正式名称はまた発音できないので用途を分かりやすく名付けてみた）

「しもべを呼んでやるなう。感謝するなう」

「……ありがとうございます」

ごめんみんな。こんなあほな事で呼び出して。でもお願い、たすけて！

ちょっと意外だった事に、最初に到着したのはブルーこと福島君であった。

目に優しいとは言いがたい光沢のある青の全身スーツ姿で、宙に浮かぶボードのようなものに乗ってやってきた。あれー、それ新作？

「盛沢？ なんで？」

「えーっと、中山君から預かってるんだけど」

一体どうやって説明したらいいんだろ。福島君って一番よくわかかんないんだよね。

飄々としていると言えば聞こえはいいけど、何事にも熱を持ってないタイプにも見える。こういう人って、会話も表面的に取り繕って「いーんじゃん？（どうでも）」みたいな答えしかくれないよね！（偏見）

……まあ、竜胆君に話しかけていても暖簾に腕押し的な虚しさがあるんだけどさ。タイプが違うよね。

とりあえず最低限の情報だけ伝えよう。

「ちよつとした事故で、篠崎さんと野島さんがケセララン様見ちゃったの。それで、ケセララン様が記憶を消して気絶させたんだけど……」

「あー、またか……。で、どっかに捨てるって言われたんだ？」

「そうなの。それで、ええと、ごめんなさい」

またか、という言い方が気にならないわけでもないがそこに突っ込むよりまずは謝るのが筋だ。私が頼んだわけでもないけど、ケセララン様は（こう考えると驚くべき事に）私のために呼び出してくれたのだから。

「ん。おっけー。他の奴らには来ないでいって伝えるから。ボードに乗せて、二人で運べるだろ。学校でイイ？」

「ありがとう！」

なんだ、福島君ってけっこう良いヤツじゃん！ ごめん、色眼鏡で見えました。これからは心を入れ替えます。

福島君は変身を解除して、ボードに気絶している二人を乗せた。

ボード自体に迷彩機能がついているらしく、一見しただけでは二人の姿は見えない。意識して見ればなんとなく空間がゆがんで見えるけど、この時間ならそんなに目立たないだろう。なるほど、あとはずり落ちないように両側で気をつけてやりながら運べば良いんだな。

私達は大分暗くなった道を、傍目からは二人で（実際には四人で）学校へ向かった。やれやれ、とりあえず助かった。

12月の脇役そのろく

学校に着いて、二人をなんとか保健室のベッドに運び込んだ。鍵？ ケセラん様って結構便利なんだよ。(にこっ)

「まったく、人使いが荒いなう。夕食はオムライスを所望するなう」
たかが鍵を開けさせたくらいで夕食メニューの変更を言い渡された。

ちくしょー、こいつうちにお泊りするのに結構乗り気だな。でもオムライスくらいなら可愛いものだ。良かった、最高級ヒレスターキのフォアグラソテー乗せトリュフソース添えとか言われなくて。材料調達が大変だからな。トリュフソースはさすがに作った事ないし。

さて用も済んだし帰ろうか、となった頃タイミング悪くアラームが作動した。今度はケセラん様が何かしたのではなく、自動アラームらしい。ということは悪い宇宙人が来ちゃったんだなあ。

「ごめん、家まで送れないけど。気をつけるよー」

福島君は何の躊躇もなく廊下の窓から飛び出して行った。ケセラん様もくっ付いていく。「ポタージュスープも用意しとくなうー」とか言いながら。そうか、戻ってきてしまっのか……。

ところで福島君も大分正義の味方生活に慣れたんだね。立派だよ。

こうして気がつくと、私は一人ぼつんと、真っ暗な学校に取り残されていた。

その事を意識して私は突然ぞわつとした。

だってさ、なんか怖いじゃないか。夜の学校なんてホラー映画の

舞台として最適だ。しかもこの世には吸血鬼も悪い宇宙人も悪い妖精も実在しちゃってるのだ。もっと怖い何かがないなんて、誰が保証してくれる？

うう、考えたら滅茶苦茶怖くなってきた。はやく、はやく帰らな
いと！ 私は早足で廊下を歩いた。姿の見えない得体の知れない何
かに追いかけられているような気がして。

はやく、はやく、はやく！ って、なんで私こんなに怖がってる
の？

だって、影が。足元の影が異常に長いんだもん。廊下の向こう側
までのびてるんだよ、なにこれえええええ！

私はもう半泣きになって全力で走りはじめた。まあ大した速度で
はないんだけど。ところで今気が付いたんだけど廊下がループし
てはいませんか？

参った、本当にまた非常識なことに巻き込まれてるらしいぞ。
いけないとわかっていても、怖いもの見たさで後ろを振り返りた
くなる。いやいや、だめだよ。それって一番まずいパターンだって。
こういう時は繰り返している状態を打破するのが正解だ。

私は思い切って、保健室と書かれたドアを開いた。何回この前を
走り過ぎただろう。中に倒れこむとすやすやと寝ている篠崎さんと
野島さんが見えた。ああ、一人じゃないっていいなあ。

安心したのもつかの間、何かが私の右足を掴んだ。ひい、本当に
なんなの？

おそろおそろ見ると、それは真っ黒い手だった。影のような。そ
れが何本も伸びてきて、あっという間に腰の辺りまでが飲み込まれ

た。気を失いそう。というか、失いたい。

胸にも腕にも黒い手が伸びてきて、やがて顔にまでそれが届きかけたとき、突然空気を切るような音が響いた。

同時にあの気味の悪い手がずそぞそ、と音を立てて引いてゆく。けれどももう一度あの鋭い音が響いて、それは霧散した。

「……村山君？」

黒い霧の向こうに立っていたのは、村山君だった。たぶん。

真っ白な長い髪を振り乱し、長い爪をはやし、おまけに額からは角のようなものが生えていたけれど。さっきの影を切り裂いたのももしかしなくてもその爪ですか。

「やあ。よく気絶しないで耐えたもんだねえ」

彼はククク、と嗤った。

こ、こわっ！ 多分助けしてくれたんだろっけど、でもそういう物騒な笑い方はちょっと。

「まあ吸血鬼のエサなんてやってるんだから、そのくらいの耐性はあるってことか」

エサ……。

「貫井さんの事も、知ってるんだ」

「昔からな」

昔って言うとやっぱりあれですか、村山君も実は長生きさんですか。

しかし、貫井さんめえ、なんで彼のことは教えてくれなかったんだよ！ いや、確かに篠崎さんと野島さんについてしか聞かなかったけど。でも三人セットじゃなか。教えてくれてもいいはずだ！

「いまの、なんだったの？」

「嫉妬とか、憎悪とか、そういうののカタマリ。生霊も混じってた

かな。あんた、今年になつてからかなり憑かれてたんだ」

……なんか悪いものに憑かれてるのかもしれないと思つたのは間違ひじゃなかつたのか！

「杏樹には確かに力が無いけど、俺の傍にいと見えることがあるんだよ」

村山君のいうことにや、篠崎さんには靈的な力は無いけれど感応する力があるそう。むしろ何の力もない分、力あるものに反応するとか何とか。

それで、村山君の力に引きずられて私に憑いている黒い影をたびたび見るようになってしまった、と。

「まあ、そこから何故狸という事になつたのかはわからないが」

「……変わった人だからね」

「ああ、あいつのひいばーさんもそうだった」

村山君はかつて篠崎さんの曾お祖母様の杏さんに退治されかけた鬼で、命と引き換えに篠崎家に仕えることを誓つた。

彼は次第に杏さんに惹かれていったが、彼女には既に夫がいたために実らぬ恋と諦めた。ところが亡くなる間際、杏さんは言った。

「次に生まれ変わったら、その時こそ結ばれましょう」

そして村山君は、杏さんに瓜二つな杏樹さんを生まれ変わりと信じて傍にいたのである。

はー。ロマンチストな鬼だなあ。篠崎さんちの靈的な力は、杏さんが全て持って行ってしまったかのように途絶えたらしい。

村山君は「生まれ変わるために力が必要だったんだろう」とか解釈しているが。……生まれ変わりとか、本当にあるのか？思わず10月の悪夢を思い出してしまったよ。

昼間眠いのは、かつての篠崎家への恨みで襲ってくるアヤカシたちと毎晩のように戦っているからで……なにそのバットマンみたいな設定。

とにかく、私に憑いていたものが消えたので篠崎さんの嫌疑もそのうち晴れるだろうと村山君が言うので、とりあえずはこれで一件落着、なのかなあ。

「まあ、どうせまたとり憑かれるんだろうけどな」
嫌な事いっとなっ！

後日、貫井さんに苦情を申し立ててみた。

「なんで村山君のことは教えてくれなかったの！」

「だってえ、聞かれなかつたし？ それに、お互いヒミツっていう約束もあつたしい。なにより」
ぞわっ。

「ねえ、これ以上聞きたいなら、ご褒美ちょうだい？」

私はまた、脱兎の如く逃げ出すしかなかった。退却だ、退却！

1月の脇役そのいち

1月。正月休み明け、というのは他どのの休み明けよりもダレるもので、休み明けは憂鬱なものだ。というわけで今月も例に漏れず憂鬱だ。

いい加減認めよう、私は一年中憂鬱なのだ。理由は察していただきたい。

三学期の三年生というのはちょっと特殊な扱いを受ける。内部進学組でもなく、なおかつ進路が決まってしまっている一部の人間は午後と土曜日の授業がなくなって、代わりに「奉仕活動」というものになり出されるのだ。

こうして隔離する事で浮付いた空気がクラス中に蔓延するのを防ぐというわけである。別に私浮付いてないのに。いつだって沈み気味なのに。

ところで突然だが本日化学室が爆発した。といっても、漫画みたいな「ちゅどーん」という爆発音と共に実験器具類がいくつつか割れたくらいで、校舎ごと吹っ飛んだわけではない。

音のわりに小規模な被害で、先生方も首をかしげていた。多分誰かがロケット花火でも仕掛けたんだらうということ。早々に原因追求の努力を放棄したようだ。犯人探しはするつもりらしいけど、まあ見つかるまい。

で。この化学室の片付けに指名されたのが、たまたま先生の近くにいた私と、出席番号9番、滝川 涼君と29番、米良 桃果さんの3人である。（米良さんといえば、私と会長をモデルにした漫画はどうなったんだらう。知りたくないのに気になる！）

「まったく。何が、被害はほとんど無い、だ！俺の実験が台無しじゃないか！」

滝川君は大層お怒りのご様子だ。

彼は化学部所属で、熱心な部員として有名である。小中学共、卒業文集の「将来の夢」欄に「錬金術師」と書いたという噂がまことしやかに流れている。まんざらデタラメでもなかるうな、と私は思っている。

以前、新刊のリクエストのリスト化を頼んだとき（彼も図書委員なのだ）内容が全部錬金術研究関係の本にすり替わっていて、露骨過ぎだろうと思ったことがあるからだ。

実際、飛び散っている液体は金属の欠片交じりで、もしかしてコイツ本気で金を作ろうとしているんじゃないかという疑惑さえ生じさせる代物だった。

神経質そうにメガネを何度も直しながら、彼はピンセットで丁寧に欠片を拾い集めている。私達には触ってほしくないそうだ。こっちだってお断りだ、そんな得体の知れないもの。

かといって何もしないのでは手持ち無沙汰なので私はガラス棚の清掃を、米良さんは準備室の床掃除をすることにした。

三年間お世話になった学校だしな。恩返しはしておかないと。……つくも神とか、いないとも限らんしな！もうこの世界には何がいたっておかしくないって学んだよ。

せつかくなので徹底的にやろう、と張り切って棚の扉に手をかけたところで、悲鳴が聞こえた。

「うにゃあああああああああああ！」

……悲鳴、だよな？米良さんの。

流石の滝川君も手を止めて床から顔を上げた。私達は目を合わせ、そして準備室の扉に視線をうつした。あの中で何が？

「俺が見てこよう。盛沢さんはドアの外にいてくれ。もう一度何か聞こえたら助けを呼びに行ってほしい」

「う、うん、気をつけてね？」

まあ多分、転んだとか、その拍子に何かをぶちまけたとか、そこで飛び散ったものが更に雪崩のごとき連鎖を生んだとか、そんな感じの事だとは思っけど。

でも小規模とはいえ謎の爆発事故が起きたばかりだ。もしかしたら犯人が潜んでいたのかもしれない。そんな最悪な事、考えたくはないけれど。

私はしばらく待った。かなり待った。イライラするほど待った。

なのに二人とも出てこないし、何らかの音も聞こえてこない。まさか二人とも、犯人に……？

どうしよう、職員室に駆け込むべきかな。と、弱気になった所でやっと滝川君が出てきた。ああ良かった、生きてた。

「えーっと……。その、盛沢さん、悪いんだが、あー。中等部の化学室から蒸留水を2パックほど取ってきてもらえないか？ 鍵はここにあるから」

滝川君にしては随分歯切れ悪いな。ってゆーか、私をここから何とか遠ざけようとして頑張っけて口実作ってないですか？ 中でどんなまずいもの見ちゃったのさ。

「わかった。……米良さんは、大丈夫だった？」

「あ、ああ。転んだだけだった」

それだけ聞けば十分だ。わざわざ私を巻き込まないように遠ざけようとしてくれているのだから、そのご親切をありがたく受け取るう。

いつも強引に巻き込まれるパターンが多かったから、こうして氣遣ってもらえると有り難さが身にしみるなあ。たとえ二つ向こうの建物の3階まで行って2リットルの水を抱えてここまで戻って来い、と言われてるんだとしてもな！ そのくらいお安いご用さ。

私が、なるべくゆっくりゆっくり時間を掛けて滝川君のご所望の品を運んで化学室に戻ると、既に二人の姿は無くて書置きが残されていた。

ふむふむ、蒸留水は棚の中に入れて、鍵は準備室の引き出しの二番目。先生への報告はしておいてくれるのね。よし、じゃあとつと帰ろう。金曜の放課後に少し早く帰れるのってお得な気分だよ。

土日はどうやって過ごそうかなあ、なんて浮かれながら歩いていると、前方に三人の人影を発見した。

んんー？ あれ、あれえ？ 私もしかして早かった？あんなにゆっくりしてきたのに、あれは滝川君と米良さんに見えるよ？そして二人が引きずるようにして支えてる人は、えーっと。なんだあの白いスーツ。ホストか？

「うっ」

真ん中の人が突然呻いて足をもつれさせた。米良さんが支えきれずにバランスを崩して、踏みとどまろうと頑張った滝川君を巻き込み、三人ともが地面に転がった。

米良さんはなんとというか、ドミノ倒しみたいなものを生じさせる才能があると思うんだ。

白いスーツの人は汚れが目立ちそうだ。そうじゃなくてもどこどころコゲたり破れたり、血がついたりしてるのに。……うん、ホストじゃなさそうだね。アレが今回の厄介ことだね？

「い、いったたた。大丈夫、クローバーさ、あ、も、盛沢さんっ？」

……今何か聞こえた？ ううん、何も。（私Aと私Bの会話）

とりあえず見つかったので（というのは双方の認識だろう）無視して立ち去るわけにもいかず、私は心配そうな顔をして駆け寄った。

「大丈夫？ 滝川君、米良さん、と、えーと」

「あ、えええええええ、ええと、このひとはあの、違うの！ 本物のクローバーさんが漫画から飛ばされてきたとかじゃなくって！」

「コスプレのひとだね！ うわあそっくりい」
米良さんが墓穴を掘りすぎないうちに声をかぶせた。

わざとらしくはなかっただろうか。声は震えなかっただろうか。
一気に10月のアレコレが頭の中にフラッシュバックした。

あの忌まわしい『Reincarnation of the last edge』が。

やっと手越さんの熱が冷めてきた気がするのに再燃するような事件はやめてええ！ まさかの逆トリップなんてヤメテー。

しかし私の心遣いを台無しにするように、彼は言った。

「よう。ハートじゃねーか。今回はまた随分可愛いカッコしてんな」

1月の脇役そのに

問題。初対面の人間からさも顔見知りであるかのように声をかけられた場合、どう返すのが一番良いか。ただし、特殊な条件がいくつか付加されているものとする。

条件1、相手は気が短く、少しでも気に食わないことがあれば銃をぶっぱなす。

条件2、相手は自分の置かれた立場をまだ理解しきっていない。

条件3、間違われている対象は、変装して色々な所に潜入するのが趣味の人物である。

条件4、自分は運が悪い。

答えは？

うん、いい方法思いつかなかった。誰か代わりに問題解いてください。

「初めまして。米良さんのお知り合いの方ですか？」

とりあえず少し意味有り気に笑って見せてから、少しの間を置いて答えた。

こういう答え方すれば、もしこのクローバーさんが本物だった場合「ハートが潜入のために初対面のフリしたがってるんだな」とか誤解してくれるかもしれないじゃん？ 殺し屋の幹部なんかしてるんだからそのくらいは察してよ。（ただのコスプレイヤーの勘違いだったらなおよろしいのだが）

たのむ、とりあえずここはスルーしてくれ。落ち着いてから改めて彼女たちの説明を聞けば誤解も解けるさ。

私の願いが通じたのか、彼は少し考えるようなそぶりをしたあと、

そうか、と頷いた。

「ああ、わりイ。知り合いに似てたモンで」

「それは奇遇ですね。ええと、お怪我してるようですけど……」

「この人は俺の従兄弟だ。今からうちにつれて帰るところなんだ。盛沢さんは気にしなくて良い」

滝川君がささつと間に入り、私から彼の姿を隠した。よしよし、あくまで私は部外者でいて良いんだな。もちろん怪我の事聞いたのは社交辞令だから。そんな警戒すんなって。

ならば気にせず退散させてもらうさ。滝川君ちに帰るならスクールバスでしょう、とか、この先は米良さんちに続く道だよねとか突っ込んだりもしないさ。

しかし逆トリップモノの主人公って色々大変だろうなあ。家族と一緒に暮らしている女子高生がなるものじゃないよね。衣食住全部世話しなきゃいけないだもん。

かといって警察に届け出るというのもなんだか薄情な気がしちゃうし。でもなあ、どうやってご両親誤魔化すつもりなんだろう。もしくは説得？ 米良さんちのご両親がおおらかな方だといいな。まあ私が心配しても仕方ないか……。

とりあえずおうちに帰ってゆつくりと彼に言い聞かせると良いと思うよ。私がハートさんなんかじゃないってな！

週明けの教室で、私は信じられないものを見てしまった。教室の中に普通に紛れているクローバー（仮）さんである。

シャツにジーンズという服装だけどすごく堂々としているから違和感無いよ。へえ、スーツ脱ぐと若く見えるねえ。そっぴや設定年齢19だっけか。マンガのキャラの年齢って色々無茶だと思うんだ。

そんなことよりも、米良さん？ どういう設定にしたの。
見た目はどう見てもアジア系、流暢に崩れた日本語を操る彼をな
んと言って紹介するつもりなの。

ホームルームで、先生から正式に彼の紹介があった。

彼は米良さんのおうちにステイしているアメリカ育ちの日系人、
らしい。名前は梨院 黒刃くん。

りいん、くろは……。うん、ひねりも何もない偽名だよね。これ
であの漫画のファンということにすれば、好き過ぎて口調も真似し
てるのかな？くらいで誤魔化せるといふ算段だろうか。

外国のオタクの人って、たまに漫画で日本語覚えてとんでもなく
無礼な口利いたりするもんね。以前チャットで「キサマは〜」だろ
うが」とか言われてすごくびっくりしたことがあるよ。

ところで細かい事なんだけど、金曜には滝川君の従兄弟って紹介
された人が、今日は米良さんの家にホームステイしてることになっ
てる矛盾については、彼らが何か言い出すまでは気が付かないふり
で良いよね？

それとも彼らはうまい言い訳を考えてくれたのだろうか。（それ
以前に米良さんちでどういう紹介がなされたのかも気になる所だ）

私なら自分の嘘にそんな矛盾を内包していたら整合させるまで落
ち着かない気がするけど、二人は大丈夫なのかな。いや、気になら
ないならいいんだけど。

……そういえば私にはもう一つ気をつけなければいけないことが
あるんだった。手越さんだ。

まったく、彼を教室に連れてくるなんて何考えてるんだよ！ ま
あ目を離すのも怖いという気持ちはわからなくてもないが。彼女がク

ローバーさんに絡んだらまたややこしいことに……ああっ、見てる！手越さんがクローバーさんを見てるう！ひいいい。

休み時間になると、手越さんはさっそく私のもとへやってきた。

いや、あの、うん。いきなりクローバーさんに絡むよりは賢い選択だとは思つよ。(命の危険性があるかどうか、という点で)

「あの子もここに来ていたのねえ」

「……えーっど？」

「ああ、そうね、貴女は覚えていないのよね。でも大丈夫よ」

なにがどう大丈夫なのか分からないのだけど、彼女はしょっちゅう私に「大丈夫よ」と言う。

はつきり言つて根拠どころか理由さえもなく「大丈夫よ」なんて繰り返されたらその方が不安になるんですけど。何を心配するべきなのかさえわからん！

次の休み時間、手越さんは私に微笑んで頷くと、クローバーさんのところへまっすぐ歩いていった。あああ、やめとけつて、つつくなつて！見ていられなくて私は教室から逃げ出した。

だってだって、せっかく滝川君と米良さんが逃がしてくれたのにわざわざまた巻き込まれるなんて悪いじゃないか！私は彼らの厚意を無駄にしたくないのだ。

さて4時間目の授業が終わり、本日は奉仕活動やら特別講義(申し込み制の時間つぶしカリキュラムとも言つ。私は水曜と木曜に、英語の本を和訳するグループに参加している)もないのでとつと帰ろう、と玄関に向かうと何故かクローバーさんが一人で私を待っていた。(のだと思う。わざわざ行く手を遮られたから)

「話がある」

そう言って彼は歩き出した。振り返りもせずに。

ここで無視して逃げたらやはり撃たれるのだろうか。

私が躊躇する気配を察したのか、彼はやっと立ち止まってこちらを振り向いた。

「なにしてんだ、早く来い」

その声音に、なんだか継るような音を感じたので、私は仕方なく彼に続いた。

連れて行かれたのは化学室だった。うーん、経緯からして多分彼はあの爆発に関係してここにやってきて、準備室で米良さんに発見されたんだろうね。先生方に見つからなくて良かったよね。

「さつきあのオンナに聞いた……。オマエ、ハートなんだろう？ 覚えてないって本当か？」

「いやいやいやいや！」

「いや、あの、そもそもね、私……」

「なあ、とぼけんなよ！ 思い出せよ！ こんな世界に来て平和ボケしちゃったのか？」

彼は目にも留まらぬ速さでどこから銃を取り出した。きゃー！

ほらあ、だから言ったのに！（誰も何も言っていない）

現代の日本で、こめかみに銃を押し付けられてゴリゴリされる女子高生なんてそうはいないだろうな。アハハ……。

私は反射的にホールドアップしながら、飛びそうになる意識を必死でつなぎとめていた。

1月の脇役そのさん

「……ここは、俺達の居場所じゃねえ」

うん。まあ、思春期になると誰でも持ちそうな悩みだけど、あなたのは切実だよ。お察しします。

でも私はここで18年生きてますから！

「モモカから聞いた。俺は、マンガのキャラクターだってな」

本人にそこまで告げたの？ そりゃあちと酷じゃないかね米良さんや！ だからこの人混乱して暴走しちゃったんだよ、責任取れ！
「だがオレはここにいる。それならオマエがハートでも、おかしくはねえ」

無茶苦茶言った！

……ああ、そうか。彼は不安なのだ。だから仲間が欲しいんだね。知ってる人と一緒にここに来たって思いたいんだね。だから、目と唇の形が似ているだけの私を、ハートさんだと思いたいよね。

だが断る！

ハートさんの役なんか冗談じゃないよ、付き合ってられないよ！
最近じゃあしよつちゆう、敵対する組織に潜り込んでバテて（だって行動が派手すぎるんだよ）ぴんちに陥ってひん剥かれてるじゃないか。（繰り返すが、何で攻撃を受けると服がはじけ跳ぶのだろう。風圧？）それで何故か、やっぱり敵のはずの主人公に助けられてお礼に情報流してるんだよね。

無理だ、私にはできない。私は清纯派だからあんなお色気担当で
きない！

先月の一件で、どうやら輪廻転生がもしかするとあるのかもしれないことは、まあ分かった。長生きしてる鬼がそう言うのだから、きつとそんなこともあるのだから。

しかし「あなたは連載中の漫画から転生したのだ」と言われてもどうしてもピンと来ないんだよ。ってゆーか絶対勘違いだと思うんだ。ハートさんだけは、ない。

問題は、どうやってこういう厄介な相手に説明するかでしてね？あ、やめてください、ごりごりしないで、髪が絡んじゃうから！人が大人しくしてるからっていいかげんにしろよ！

「手越さんの言っている通り、もし本当に私がハートさんなら、手越さんはカップさんってことになるんですけど」

「ああ？ あのオンナは似ても似つかねーよ。オマエバカか？」
あんたに言われたくないですよ、脊髓反射みたいに銃をぶっぱなすおバカさんのくせにっ！（言えないけど。言ったら最後だけど！）

「でも彼女は自分がカップさんだって断言しています。そちらは否定して、私がハートさんだという部分だけを信じるんですか？」
すぐく分かりやすく整然と指摘してみたつもりなんだけど、どうだろう。この人のおつむでちゃんと理解できるだろうか。

しばらく眉をしかめて頭を右にひねったり左にひねったりしたあと、クローバーさんはうなだれて銃をおろした。どうやら脳まで私の言葉が届いたらしい。ああ、良かった。

ってゆーかね、そういう弱音（弱音っていうほどしおらしくはなかったけど）吐きパートは私じゃなくて米良さん相手にするべきじゃないかな！

ちょうどそこへ息を切らせた滝川君と米良さんが飛び込んできた。遅いよ。こっちは自力で危機を脱出しちゃったよ。君達、もう少し主人公としての自覚を持って行動してよ。

「……はあ、も、もり、盛沢さん、クロー、クロハくんに、な、なにか」

まずは落ち着いて水でもお飲みなさい、と言ってやりたいほど二人は息も絶え絶えだ。お互いインドア派だもんな。

一通りぜいぜいと呼吸を整えた二人は、クローバーさんの手の中にある銃に気が付いて目を剥いた。まあ、そうだよな、どうやって誤魔化そうとか思うよね。

「モデルガン見せてもらったの。この前のコスプレといい、本格的だよな」

必殺、平和な勘違いしてるフリ！

説明しよう。これは、三人の女の子が一つの鞆に頭を突っ込むようにして語りかけているのを目撃してしまった時などに「なあに、三人で内緒話？ うふふ」とか言いつつ炸裂させていた技である。

この技で私は、キュピルの登場を7月まで押さえ込んだのだ。……いや、まあ今思えばあれは5月中にとっとと解決させて妖精界に突っ返すべき事件だったんだけどさ。

「どうしてわざわざこんな所まで来たんだ？」

「手越さんから、私が『リインカーネーション オブ ザ ラスト エッジ』の大ファンだって聞いたみたい。それで色々見せてくれようとしたんです、よね？ 空いてる教室探したらこんな所まで来ちゃったの」

お願いだから私を日常にかえして。クローバーさんを叱るのも、励ますのも、慰めるのも私の仕事ではない。主人公たちのすべき事

なのだから。

「でも梨院君、本当にクローバーさん好きなんです。名前も似てるし顔立ちも似てるからすごく真に迫ってました。ドキドキしちゃった」

いつぶつ放されるかな。

「さてと、いいもの見せてもらいました。じゃ、私そろそろ帰らなきゃ。ばいばい」

無駄に説明しようと言をばくばくさせる米良さんと、彼女を黙らせようと押さえつける滝川君を華麗にスルーして、私は今度こそ玄関に向かった。

米良さんは絶対墓穴掘るもんね。そのまましっかりコントロールして、私の耳には何も入れないでくれたまえ滝川君。

家に帰って部屋着に着替えた私は、ベッドに仰向けに倒れこんだ。あー怖かった。先月変な黒い手に取り込まれそうになった時ほどじやなかつたけど。

だって銃なんて現実味がなさ過ぎる。ほんとにモデルガン突きつけられたくらいの恐怖しかなかったな。モデルガンも最近は危ないって聞くけどさ。

それよりも、銃をおろしたときのクローバーさんの顔が頭から離れない。なんでだろう。恋？（いやいや）

……あー、なんか可哀想だったなあ。彼だってまだ19歳だもんね。

私がもし来年、いきなり別な世界に飛ばされて、なおかつ「ああ、あんたのこと小説で読んでたよ」とか言われたらきつと立ち直れな

いと思う。ってゆーかプライバシーの侵害だよな。訴えたいよね。

そんな所で知り合いに似ている誰かを見つけたら、たとえケセラ
ン様っぽいものだったとしても泣きながら抱きつくかもしれない。
(何故ケセラン様を例に出したのかといえは、頼りたくないイキモ
ノ第一位だからだ。二位はキュピル。三位以下はどれも横並びと言
おうか順不同と言おうか……)

あれ、そういえば漫画のほうのクローバーさんって、今どうなっ
てんの？

手越さん対策の一環として、先月までは本誌を立ち読みして(ご
めんなさい、買ってませんでした。だって週刊誌ってかさばるんだ
もの)チエックしてただけど、今月に入ってからはまだ見ていな
い。確か先月の最後はどこかの工場で主人公と小競り合いしてた気
がするんだけど。

よし、ちょっと読みに行こう！ 着替えるの面倒だし、このまま
コート着ちゃえばわかんないよね？ 外も大分暗くなってきたし。

私はいそいそと家を出て、駅前のコンビニにむかった。

別に、最近店頭で扱われ始めたゴディバのアイスが食べたくなっ
たせいではないよ？

1月の脇役そのよん

結論から言うと、本誌のクローバーさんは行方不明になっていた。

化学工場での戦いのさなかに、最近台頭してきた新しい敵勢力の妨害を受けて戦線離脱したあと、そのまま見つからないらしい。ハートさんが（またもや）半裸でそのように説明していた。

ハートさんは最近準ヒロイン的な位置にいるよね。敵対してるくせに妙に主人公に好意的だ。

うーむ、化学工場で行方不明か。それで满身創痕でうちの学校の化学室にとんできちゃったのか？ じゃあこのまま彼がこっちにいたら、漫画のほうのクローバーさんはずっと出てこなくなるのかな？

だめだろ、それは。だって彼は人気投票で常に上位の人だよ？ 主人公を喰うくらいの人気を誇る人だよ。連載が危うくなってしまっじゃないか。

もし彼がこっちにトリップしたせいで連載打ち切りとかになったらどうなっちゃうんだろ。なんだかすごくパラドックス的なことが起こりそうだ。うう、頭が痛くなってきた。

漫画の雑誌を見つめながらうんうん唸っている私の後ろに、影が差した。

おっと、すみません、邪魔でしたね。急いでそこからどうと顔を上げると、立っていたのは光山君だった。（いい加減呼び方統一することにした）

「盛沢さんって、この漫画読むときはいつも難しい顔してるよね」
彼はすっと私の手から雑誌を取り上げ、ぺらぺらとめくった。

み、見られてたのか……。よりよって一番あられもないかつこ
うしたハートさんが大寫しになっているページを開きつ放しだつた
んですけど。だってだって、そのページでクローバーさんのこと説
明してたんだもん。しかし言い訳するのも不自然だし、ああ、恥ず
かしい！ 赤面ものだ。

「手越さんが、盛沢さんに似てるって言ってるの、この子？」

流石にそつのない彼は、ハートさんの顔のアップだけが映ってい
るページを指して私と見比べた。それはそれで恥ずかしいです、や
めてください……。

「えーっと、そのようです」

「ふうん。盛沢さんのほうが可愛いのにね」

ひっ！

「何を企んでるんですか！」

そんなストレートに褒めるタイプじゃないだろ、あんた。しかも
そんな見え透いたお世辞なんか言って、なにが望みだ！

「……ほんと、オレに対しては遠慮がないなあ」

威嚇する小犬みたいだよ、と言いながら彼は苦笑した。

こ、小犬だとう！ 失礼な！（9月に向原君をチワワ呼ばわり
した事については、まあ、あれだ。過ぎた事だ）

「光山君こそ、私に対して本性を包み隠さないじゃないですか。お
互い様です」

「そういう相手って希少だと思うんだけど？」
まあそうだけどさ。

こつしてなし崩し的に私はこの人に慣れていくのかと思うと、複
雑な気分になるんだ。だって、昔はあんなに敵視していたのに。

「それに婚約した仲じゃないか」

「しつこいですよ！」

「ここはコンビニ！ 学校の最寄り駅の目の前にあるコンビニだからね？ 誰が聞いてるかわかんないんだからね？」

あ、ちよつと、レジのバイトの子が目を真ん丸くしてこつち見てるよ。違つつてそうじゃないんだ、いや、ある意味嘘ではないけれど説明し難いなあ、もう！

とりあえず彼女がうちの学生じゃなくて良かった。

「まあ冗談はともかく、オレも少し心を入れ替える事にしたんだ」

「……へえ」

「あれ、感動薄いね。先月、盛沢さんに改善しろって言われたからなのに」

ほお、そうですね。

「じゃあ、期待してますよ。……そろそろ帰りますね」

これ以上誤解を生んでまた変な憑き物に襲われたらたまらないので、私はまた彼から逃げ出した。

逃げることはかりだなあ、私の人生つて。でも逃がしてもらえらうちは逃げていいよね。いつかは対峙しなくちゃいけないんだろうけど。

家まで送るといふ申し出を断つて、最初の目的通りゴディバのアイスを買って（目的の順位が入れ替わってるね！）家に帰った。お風呂上りに食べるアイスっておいしいんだよねえ。

お釣りもらつときちよつと引つかかれたような気がしなくも無いけど気のせいだ。

……村山君に何か有効な憑き物対策でも教えてもらったほうが良いかもれないな。あ、また雑誌買ってないや。

それから私は、部外者ながらもはらはらしながら逆トリップ組を観察し続けた。

幸い手越さんは「記憶の無い」私よりも「記憶のある」クローバーさんに構うのが楽しいらしい。

毎回「うつせーな！ てめーにや関係ねえだろうが！」と邪険にされるけど、もともと原作でも彼はカップさん含めオリジナル組にいい感情を持っていないのであんな態度なのだ。

というわけで手越さんは大喜び。平井君と山岸君は、ただでさえ微妙な三角関係なのに彼女が他の男に構いっぱなしなので気が気ではない模様。

なんて罪な女だろう。いいなあ、もてて。羨ましい！

三角関係といえは、米良さんと滝川君とクローバーさんもなんとなくそれっぽいかもしれない。

滝川君が米良さんのフォローしているうちに絆されたんだな、あれは。でも米良さんはクローバーさんに夢中で、クローバーさんも米良さんにはちょっと態度が柔らかい。

まあ刷り込みの一種なのかもしれないけどね。今の彼は彼女の家
の居候だし。

金曜日、待ちに待った例の雑誌の発売日。

どうなってるのか気になっていた私は、かなり早起きしてコンビニに寄り道した。さて目的の漫画は、と探してみると、作者急病につき休載とのお知らせが！

……これは偶然なのか、それとも恐れていた事態の始まりなのか。私は暗澹たる気分です学校に向かった。（あ、また雑誌買ってないや。ごめんなさい）

教室のドアを開けようと手を掛けると、嫌な予感がした。なんか、今開けちゃ駄目な気がする。こんな早い時間なのに、中から人の気配がするということは……。

「だから俺は、彼を戻すべきだと言っている！ このままだと彼の世界とこの世界が混じりかねないんだ。何故分らない！」

「だってそんなのクローバーさんが悪いわけじゃないじゃん！ 彼はこっちで幸せになるために来たんだよ。それだけだよ。あっちに戻ったらまた怪我したり、辛い思いするだけだもん。なんでこのままじゃいけないの！」

あー、うん。滝川君も今日のアレみて私と同じ事考えたんだね。

いつの間にかあの漫画の存在が薄れて、こちらに具現化してしまうのではないかと。あんな物騒な設定がこちらに融合したら大変だ。私、生きていられないよ。

しかもクローバーさんが間違う程度にハートさんに似てるなんて不都合なフラグが乱立しそうじゃないか。

だからできれば彼を戻した方がいいとは思っただけど、具体的にどうしようってんだ？

とにかく私はギリギリまで部外者であり続けるために、そーっと教室から離れた。ホームルームまで図書室にでもいるさ。

週明けで、またもや化学室であの「ちゅどーん」が鳴り響いた。

今度こそ犯人を捕まえようと、先生方は奉仕活動中の私たちまでかりだして校内を搜索したけれど、結局犯人は見つからないまま解散となった。

そして次の日、梨院君は急用でアメリカに帰ったらしいと噂が流れた。あの独特な雰囲気の彼がいなくなっただけか、教室はいつもより精彩を欠いている気がする。

米良さんはかなり落ち込んでいたけれど、滝川君が朝も帰りも一緒にいるのでそのうち元気になるんじゃないかなあ、と思う。……
失恋の痛みってどのくらいで癒えるものなんだろう？

その週の金曜日の例の雑誌は『Reincarnation of the last edge』が表紙で、主人公の右上にいるクローバーさんがかっこつけてニヤリと笑っていた。
私は今度こそ、その雑誌を買って帰った。

あ、……アイス買うの忘れた。

2月の脇役そのいち

2月。チョコレート会社の売り上げのほとんどはこの月に掛かっている。と聞くが、社交上その陰謀に加担せねばならないと思うと憂鬱になる。

クラスの9割と何らかの形で関わってしまったので、面倒だが何か用意するしかないだろう。これはあれだ、お中元とかお歳暮の代わりだからな。

外国では男性から女性に花を贈ったりする日はずなのに、日本だけ不公平だよね。まあ最近はお友チョコだの逆チョコだのまで流行らせて更にチョコレートの売り上げを伸ばそうとしているらしいが。

お手軽にクッキーを大量に焼いて、チョコレートフォンデュの要領でちよつとずつコーティングすればいいや。一見手が込んで見えるしな。

ところで2月になるとやたらそわそわして女子に親切になる男子ってたまにいるよね？ まあそういうのって、大抵中学生くらいまでだと思うけど。今時チョコレートがそんなに価値のあるものとは思えないけど、面子の問題なのだろうか。

しかしうちのクラスでは一番そういうことに興味の薄そうだった3人組が、ここ最近怪しい動きをしているのが妙に気になるんだ。

出席番号4番、菊池 輝君、12番、中川 真人君、25番、松澤 賢治君の3人。

彼らはいつもゲーム機を持ち歩いていて、その「中の女の子」に夢中だったし、てっきり二次元には興味がないのだとばかり思っ

いたものだから。(だって教室の中で堂々と「三次元なんて大惨事じゃないか!」とか叫んだ事あるんだもん)

真正面に立つても視線は常に右45度逸らして話すし、前髪も伸ばしっぱなし。理由は「現実なんて見たくないから」だそう。不潔にしているとかではないんだけど、感じ悪いんだよね。

だから女の子たちにはあまり好かれていない。全員不健康そうな顔色でほっそりしていて、おそろいの髪型で、似たようなシルバーフレームのメガネを掛けているので、背の高い順に松澤君、菊池君、中川君、と区別している。

そんな彼ら、というか菊池君と松澤君がある日突然女の子たちに親切になったのだ。おかしくない? いや、人としては正しい姿なんだけど。

重いもの持ってあげたり、当番を代わってあげたり、体調悪そうな子にさっと気付いて保健室に送ったり……。

それだけでも驚きだったのに、ちょっと前髪切っただけの子を見つけてそれを褒めたのにはほんとにビックリした。ごめん、私は気が付かなかつたよ、水橋さんが前髪を3ミリ切ったことなんて。

とにかく、誰がなんと言おうと彼らは様子がおかしいのだ。何かある。絶対裏に何かあるぞ! 絶対に近付いてはいけないと私の本能が囁いている。

更におかしいのは、そんな彼らの変化を女の子たちが誰一人おかしいと感じていないらしいところだ。男子は「あいつらそんなにチヨコ欲しいのかよ」という生暖かい目で見ているんだけど。

あー、もしかして私、考え方が男性的なのだろうか。乙女として

はもつと素直に「最近優しいね。嬉しいなあ」って受け入れるべきなのか？

大体、人を疑いすぎるのが私の不幸のもとなのだと思う。何事もすんなり受け入れてスルーしていればもうすぐこの学校ともお別れなのだから、自分から首を突っ込む事はないよな。きっと彼らは少し現実と折り合いをつけようと思ったんだよ。大人になったんだよ。そう自分を納得させて、私は見て見ぬふりを続ける事にした。

ある昼休み、つまり私にとっては下校時間に、先生から教材の運搬を頼まれた。

地球儀と世界地図なんて滅多に使わんものを用途は知らないが中等部の社会科資料室から高等部まで運んできてくれということだったので、よせばいいのに私はその両方を一気に運ぼうとしていた。

だって今日は駅前のケーキ屋さんが2時から限定スイーツ販売する予定だったんだもん。早く帰りたかったんだよ。

地図は私の背と同じくらいの長さの巻物で、地球儀は一抱えほどの大きさ。面倒がらずに分けて運べばよかったんだろうけど、そもそもこんな女の子一人に運ばせるのもどうかと思うよ。

私は根性で高等部まで戻ってきた。さあ、これから階段だ。下りは何とかなっただけど上りはきついなあ。

いつそ一階に片方だけ置いて、戻ってきたほうがいいかなあ。でも目を放した隙に誰かがいたずらでもしたら私の責任になるよなあ。それはやだなあ。

少し考えて、ここまで頑張ったのだから、と両方持ったまま上がる事にした。3段上がった後は休憩、みたいなペースで。一人でウサギと亀みたいなことやってるね、私。バカみたい。

こんな時に誰かがさっそうと現れて「持ってあげるよ」とか言ってくれたら……。

「持つよ。社会室？」

そうそう、こんな風に地図だけでも……って、アレ？

菊池君と松澤君だ！ 二人はそれぞれ、地図と地球儀を私からとりあげた。うわー、うわあ、今ちよつとキユンときたような気がする！ なるほど、この効果が女の子たちに広がりつつあるんだな、と感心していたら、いきなり変な音が鳴った。

ぶつきゆるう〜！

……何だ今の？ 菊池君、松澤君のそれぞれの胸元から聞こえてきたような。

二人はすぐに胸元からゲーム機を取り出した。え、なにになに。

「あ、これ攻略対象外だ」

「おれも。なあんだ」

二人は謎の言葉を残し、無言で地図と地球儀をそこに置くと、立ち去っていった。

………何だ、今の？

「でもおかしくない？おれもケンジも対象外って。エラーかな？」

「マサトに聞いてみよう。直ってから試した方が良い」

しつこいがもう一度言おう。何だ？ 今の！

階段の上から聞こえてくるあまりといえはあまりな会話に、私はしばらく動きを止めていた。んーと、つまり見捨てられたんだよね？ 何かの「攻略対象外」だったから。

………攻略対象外ってなんだよ！

ちょっと、対象外ってつまり私はお話になりませんか？
仕組みはわからんがお前らが何をしているのかは分かったぞ！ リ
アルギヤルゲーだな！ そのゲーム機になにか秘密があるんだな？
攻略対象はうちのクラスの女子か。
それであんたたちは最近みんなに親切だったのか。

……だめだ、対象外とか言われて心底へこんだ。気持ちが浮上し
ない。

しかしどつちにとっても対象外、というのはどういうことだ？
二人は同じゲームをしているんじゃないのか？

ううん。何かの基準で攻略対象を分けているのかな。それで、私
はその両方の条件に合わなかったということなのかなあ。（そうよ、
私自身がダメなんじゃないわ、きっとゲームの仕様がだめなのよ！）

荷物運びも忘れて一人自分を慰めていると、竜胆君が上から降り
てきた。

傍から見れば不審者（地図と地球儀足元において、壁に手をつい
て俯いていた）な状態の私を見て彼は少し考えるようなそぶりを見
せてから、またいつものように無言でぼんぼん、と頭を撫でると地
図を抱えあげた。

視線でなんとなく、目的地を聞かれたような気がしたので、とり
あえず答えてみた。

「社会科資料室なの」

こくり、と頷いて彼が地球儀にも手を伸ばしたから、私はあわて
て拾い上げた。

「大丈夫、こっちは持てるから。ありがとう」

「ああ」

ゲーム感覚で親切にされるのとはやっぱり違うよね。

こうして、私は教材運びの使命をなんとか果たしたのである。ケ
ーキ？ 流石に行く気失せたよ……。

2月の脇役そのに

見て見ぬふりをしよう、と決心したはずなのに、私は翌日から彼らの行動をじっくり観察し始めた。

攻略対象とそうでない相手の違いとやらをなんとしても見つけてやりたくて。これは女の意地だ、戦いだ。なんで私はダメなんだよ！

二日ほど見ていて分かってきたことがある。基本的に、彼らが接触する女の子はダブっていない。(例外もいるのだが)

しかし、そんなことよりも大事なことがあるんだ。……私、みんなのパラメーターらしきものが見えてるんですけど。

例えば私の前の席の瀬名さんの頭上(空中部分)には、ピンク色の文字でこう書いてある。

瀬名 くるみ(せな くるみ)

6月30日(蟹座) O型

A 攻略中

「好感度」35 「親密度」20

食べ物：マドレーヌ

場所：雑貨屋

プレゼント：？

そうかと思えば右隣の貫井さんの頭上にはブルーの文字が躍っている。

貫井 菖蒲(ぬくい あやめ)

12月1日(射手座) ?型

K 攻略中

「向原」200

「好感度」0 「親密度」1

食べ物：？

場所：？

プレゼント：薔薇

基本的に彼氏持ちはブルーで、フリーの子はピンク。おそらくこれでお対象を分けているのだな。彼氏持ちまで対象とは、なんて情け容赦のないゲームだろう。

ブルーを攻略中なのは松澤君のほうらしい。好感度と親密度つてのはたぶんプレイヤーに対する数値だよな。200が満タンの状態みたいだから、貫井さんは向原君に首ったけなんですね。松澤君の入る余地なしだね。ザマミロ。

そして、二人ともが接触している子はパープルである。パープル組は3人いて、篠崎さん、野島さん、手越さんがこれに属する。この子達がどういう分類なのかが謎だ。

うーん、篠崎さんと野島さんには村山君がいて、手越さんには平井君と山岸君がいるけど、はっきりした関係ではない、ということかあ？

最初は中川君の攻略対象なのかとも思ったんだけど、彼だけは今までとほとんど変わらないんだよね。なんか、パソコン持ち込んでパチパチ打ち込んでる姿は見るけど。

……これ作ったの、中川君っぽいなあ。一体どんな超能力もってんだよ中川君。でも、モンスターを狩って野生生活を楽しむゲームを選ばなかったのは賢明だよ。

とにかくパラメーターがちらちら見えるせいで色々まずいこと知

っちゃったんです。どうしよう。

具体的にいうと1年のときのあの恋愛カップルの内情である。いけないいけないと思いつつも、見えちゃうんだよ、仕方ないじゃん。

出席番号10番、巽 文香さん。こちらは23番、北条 昭洋君とお付き合いが続いているはずなのだが……。パラメーターが大変な事になっている。

「北条」80 「鈴木」80

「好感度」40 「親密度」25

松澤君の好感度が意外と高まっているのも問題なんだけど。その上の文字の方が大変だ。

……す、鈴木君が巻き返している！ 鈴木君というのは出席番号7番、鈴木 久君の事で、1年のときに巽さんに横恋慕していたけど。今では北条君の幼馴染である14番、夏目 静さんとくっついているはずなんだけどな！

そして夏目さんのパラメーターもすごい。

「鈴木」20 「北条」180

未だにほぼ北条君しか目に入っていないってことですよ？

おいおい、これはひょっとしてひょっとするんじゃないかね。4月の私の懸念どおりこじれそうな気配が濃厚じゃあないか？ このリアルギャルゲーのせいで、入れ替えが起こってしまうんじゃないかなあ……。ああいやだ、そんなドロドロした第二部は知りたくない。

こんなパラメーターが奴らにも見えているのなら、私、攻略対象外で全然構わないような気がしてきた。人様の恋心なんざ視覚化するものじゃないよ。そつとしいておやりよ、無粋な連中だな！

しかし、なぜ私にこんなものが見えるようになってしまったんだろう。は、まさか私もプレイヤーになってたりする？

奴らの魔の手から救う為に、先に女の子たちを口説けてか？
ええー、めんどくさあい。(ごろごろ)

冗談はさておき、階段で接触した時に聞こえたあのエラー音(だよなあ、あのマヌケな音は)を聞いて以来、こうなっただよね。クラス外の女の子見てもパラメーターは出てこないの、実は気付いたの翌朝なんだけど。

ということは、今、彼らのゲームはバグってるということではないかね？

バグって、ゲームとかの製作者にとっては消去対象ですよ、ね？

……よし、やはり見て見ぬふりに戻ろう。間違っても私にパラメーターが見えていると気付かれちゃいけないね。階段でも「これ」呼ばわりされたくらいだし、すぐくアツサリと消去されちゃいそう
だ。

数日間は平和に過ごせた、気がする。どうしても見えてしまうパラメーターの数値変動や、聞こえてきてしまう好感度アップダウンの音さえ意識しなければ、全くと言っていいほど平和な日常だった。

しゃららららら〜ん。

ぶっきゅる〜う。

しゃららららら〜ん。ちやらららら。
ぶっきゅる〜う。

……耳栓して過ごせればなあ。

てゆーか流石リアルギヤルゲー。そう簡単には好感度も親密度も上がらないのだな。

彼ら自身も悪いんだよね。たまに余計な一言つけちゃうんだもん。お前らの失言のたびに間抜けな音聞かされるこっちの身にもなってくれ。一日中聞いていたせいか耳に残って、なんだか幻聴まで聞こえてきた。頭痛もする。あ、ほんとに痛い、すごく痛い、いたたた。

私はたまらず、頭痛薬をもらいに保健室へと向かった。

2月の脇役そのさん

この学校の保健室は、いわゆるミステリーゾーンである。七不思議があるとか、そういう理由ではなくて、養護の先生の存在がミステリーなのだ。誰もその姿を見たことがない。

保健室はいつ訪れても鍵があいていて、カーテンの向こうに白衣を着た人影は見えるのだがそれだけだ。訪問者が「怪我をした」「薬が欲しい」「寝かせて欲しい」と要望を言つと、その人影は立ち上がりもせず、一言も発せずカーテン越しにすうっと指をさす。自分で勝手にやれ、というわけだ。

救急箱、薬箱はとても分かりやすく整頓されているし、今のところ大怪我をした生徒は出ていないのでそんなに問題になった事はないが、ただひたすらミステリーなのだ。

なんとかその正体を暴こうと果敢にもカーテンを払いのけてみた生徒も何人かいたらしいが、何故か皆、転んだり頭を打つたりしてそちらに気をとられた隙に先生はいなくなっていた、というエピソードばかりが増える。

……怪しいから、特に今年は近寄らないようにしてたんだけどねえ。しかも12月にはここで一回怖い目にあってるしさ。早く薬だけもらって退散しよーっと。

「失礼します。頭痛薬が欲しいんです」

学年、組、名前など言わなくても、いつの間にか名簿に書かれているので目的のみで良いらしい。人嫌いのわりにすごい記憶力ですね、先生。

「彼女はまだ特定の相手はいないはずなんです。でも親しい相手は何人かいる。だから分類は紫に設定したつもりです。なのにエラーが出るんです。もちろん他の設定も試しました」

中川君が先生に訴えるのを聞いて、やっと自分の分類が分かった。そっか、私ピンク組じゃないのか。よりによつて篠崎さん、野島さん、手越さんと同じグループか……。いや、うん、いいんだけど。一番クセのある人達グループだよね？ あー、頭痛がまた酷くなつた。

「パラメーターも見えないし。俺も輝も、彼女に接触してからゲームの調子がおかしいんです。やたらと好感度ダウンするようになって」

「それはたぶん、二人が余計な一言付け足すせいだとおもつよ……？」

例えば「さんって可愛いね」に「ネズミに似てる」とか「あれ痩せた？」（これ自体もちょっと地雷含んでるけど）に「足首ができてるよ」とかな。前半でしゃららららくん、となって後半でぶつきゆる〜う、と鳴るのだ。いい加減に口を閉じろっつーの。

「いいや、バグのせいだ！」

しかし菊池君は頑として自分のミスを認めない模様。出入り口は3人に塞がれているし目の前には謎の先生。ぴんちだよー、絶体絶命だよー。

先生はふむふむと頷きながら私をじろじろと上から下まで観察した。いやらしい視線は感じなかったけど、正直気持ち悪い。

「なるほど、こんな低レベルの星でも次元を超える術が発見されていたとはね」

んん〜？

「君は別な次元に恋人がいるのだね？ なるほど、そのようなパタ

「ーンは考えていなかったよ」

「んんんんん？」

低レベルな星とか別次元とかもなかなかアレなんだけど、恋人つてのはなんでしょね。

「別な次元？」

あ、中川君が食いついた。

「それはつまり……」

身を乗り出して詳しく聞きだそうとした中川君が、いきなりひっくり返った。続いて、菊池君、松澤君もころりと転がった。え、なになに？

あんまり一瞬の事で気が付かなかったけど、保健室のドアが開いていた。そして、そこには珍しく笑っていない光山君。

あれえ、今もしかしてその長い足で3人を蹴っ飛ばさなかった？ 残像っぽいものが見えたような気がしたんですけどね。

「彼らの様子がおかしいからつけてきたんだけど。本当に、君は……」

真面目な顔でため息をつかれた。いちいち困った子扱いしないで欲しいな！ でもここは助けてもらわねばなるまい。

打ち所が悪かったのか転がったままの3人を迂回して光山君の背中にささつと回りこむ。頭痛を悪化させてはいけないのであくまでもそつとね。

このままドアから出ちゃだめですかねえ？ しかし光山君が私の腕をぎゅゅとつかんでしまったので逃げるに逃げられない。一緒に逃げようってばあ。こんなおっさん相手にするのろくな事ないよ。

「光山 海人か。君も次元を超えているんだね。ああ、なるほど。」

君が彼女の恋人なのか」

「婚約者です」

まだそのネタ引つ張るのか。そんな口からでまかせの設定を……いや、あれ？ その設定がきっちり有効だから私がバグったのか？

「君たちのようなイレギュラーが混じっていると、私の計画に支障をきたす。消えてもらおうか」

……この一年何だかんだと逃れ続けた「消えてもらおうか」をととう聞いてしまったよ。しかし、ゲームを使った計画って一体なんだよ。聞きたくないけど。でもべらぺらしゃべるんだらうなあ、こういうタイプって。

「改造したゲーム機をばら撒いて手駒を増やし、更に人類を恋愛ゲームにとりこんで、

地球人をメロメロにして平和に支配しようという私の計画に、君たちは邪魔なのだよ！」

「めろめろ……」

めろめろという単語が古すぎて新しく感じるとか、そういうことは置いといて、そんな計画立てたにしては手駒がちよつと力不足だよな。こちらにいらっしやる光山君でも抜擢すれば良かったのに。そうすれば、わざわざ恋愛ゲーム使わなくても計画が成功したかもしれないのに。

しかし、道理で女の子たちが彼らの不自然な変化を受け入れたわけだ。ゲームにとりこまれていたせいなんだなあ。ここにきてやっと、彼らの激変を女子がすんなり受け入れた理由がうっすらとわかったよ。

兎にも角にも、自分の思考回路が女性らしくないのだからかという悩みから解放されて、私は心底ほっとしたのであった。

2月の脇役そのよん

ところで、これってもしかしくなくても5人戦隊の管轄なんじゃないかな。宇宙人アラムはどうした？ 悪い宇宙人が入ってきたら鳴るはずじゃないのか？ 電池切れとか故障とか言ったら今度こそケセララン様をノートではさんで潰してやる！

「ふふふ、仲良くあの世に送ってやろう。食らえっ」

完全に悪役っぽく悦んでいる先生が、とうとう口から変な光線を発射した。同時にみしみしと音を立てて身体が變形していく。

きゃーお約束、お約束！ 光山君に抱きかかえられて辛くも直撃を避けた立場だというのに、私は先生の姿に目が釘付けであった。

「……コンセプトは信楽焼きの狸、ですか？」

「やかましい！ あちらが我らをモチーフに作られたのだ！」

信楽焼きの狸というと、どうしても12月の苦い思い出が蘇るわけですが。

人に化ける狸の妖怪って、もしかしてこの連中のことなんじゃないかろうか。 ってことは篠崎さんは、私をこの類だと思ったって事で……きい、改めて腹が立つ！

「我ら一族がこの星に降り立って幾星霜、今まで地道に地球人を研究し続けてきたのだ。この野望の実現を邪魔するものは許さん！」

そんな長期間考えた末、思いついた手段がギャルゲーってちょっとどうかと思うけど、なんだか社会現象みたいになってるタイトルもいくつかあるもんね。オタク文化から攻めるっていうのは決して間違いではない、のかなあ？

暢気に侵略作戦の有用性について考えていると、ちょっとまずいかな、という光山君のつぶやきが聞こえた。え、この人そんなに強そう？

「ふははは、私の天才的な頭脳に掛かれば、君が使う子供だましの事象歪曲術を無効にすることなど造作もないのだよ！」

……えーと、詳しい事は分からないけど、この狸が彼の魔法を打ち消す術を持っているらしいことだけは理解した。

それって、もしかしてかなりまずい状態ってことじゃありませんか？

「ごめん、空間を閉じられたみたいなんだ」

「光山君らしくない不手際ですね」

なんで考えなしに入ってきたちゃったんだよ。あなたって普段はもっと用意周到でしょうに。

「君のことが心配で、いても立つてもいられなくてね？」

……いつもみたいにここにこ胡散臭く笑っていてくれれば流せるんだけど。

最近ほんとにこの人心を入れ替えたんだろうか。うっかり絆されそうなんですけど。まあそんな場合じゃないんだけどね！ でもちよっとときめいちゃうじゃないか。

今までの苦勞を思い出して頭に血が上ったのか、それとも発射回数に制限でもあるのか、狸は光線を放つのをやめ直接襲い掛かってきた。光山君が私の手を引いて廊下に飛び出し、そのまま走り出す。

空間が閉じられている効果なのか、誰とも会わない。まるで無人の学校みたいで気味が悪い。

幸いな事に狸は足が大変遅いらしくて、私でさえやや余裕がある

のだけれど、頭痛が。頭痛がするんだってば！

走りながら、光山君が口を開いた。

「盛沢さん、ああいう相手に対抗する手段に心当たりあるんじゃないの？」

ぎくつ。

いや、あるけど。でも、光山君と会わせるのは避けたいんだよね。
(なんでばれてるの、とかそういうのはもうわざとらしいと思う。
何でもご存知なのでしょうよ)

「光山君の魔法は全く通じないんですか？」

「……そういうわけでもないけど」

あ、いまムツとした？ 手の力が若干強まりましたよ。跡がついちやうからもう少し丁寧に扱ってくれんかね。ごめん、ごめんってば、男の子のプライド傷つけるような言い方して悪かった。

「彼に対して直接、というのは無理だけど、まあ学校自体を物理ト
ラップにすれば簡単に倒せる。でも、被害が大きくなるからね」

つまり倒すために学校を武器にするってことか。過激だな。

「ここって、異空間じゃないんですか？」

「オレ達の空間軸がちょっとずれてるだけだよ。建物は一緒」

ふあ、ふあんたじーというかSFというか怪奇というか。一体ど
うしろと言っの。

ちょっと途方に暮れかけた私の目が、そのとき何かを捕らえた。

何かというか、一番恐れていたものを。それは、光る毛玉……！

「ケセラン様……」

毛玉は一直線にこちらに飛んできて、更に私たちを通過し、怒れる狸の前に静止した。

「見つけたなう！ 第一級指名手配一族# \$* @& +* の生き残り！ オマエを捕まえてポーナス3年分げつとなう！」

ポーナス3年分！ そんなにやばい相手だったのか。光山君と会わせたくないから呼びたくない、なんて暢気な事考えてごめんなさい！

ケセラん様はしつかり5人戦隊（変身済み）を引き連れてきていた。

私はともかく光山君の姿を認めた彼らから、かなり動揺している気配を感じる。でも、ああ助かった。これってケセラん様の物欲センサーのお陰？ だとしたらちよつと複雑だけどなあ。

「ブラック、お手柄なう！ キミには特別に新しい武器を支給するなう」

……違ったらしい。竜胆君が気付いてくれたのね。流石、影の実力者タイプのブラックだね！

でもケセラん様のご褒美って、相変わらず本人の懐が痛まないものばかりだ。

「くつ、こんな边境の星まで宇宙警察の手が伸びていたとは！」

「政府が変わったから方針も変わったなう！ ばら撒き政策の一環なう！」

そんな内情ばらしてどうする。

「見つかってしまったのなら仕方ない、計画変更だつ。この星の外周に設置してある強制トキメキメモリ植え付け装置を稼働させる！」

略称がやばそうな装置！

できればさつきみたいに仕組みを説明して欲しかったのだが、狸

は窓を叩き割り、そこから飛び出して行ってしまった。あーあ、戦鬪は今日もお空かあ。

「追いかけるなう！」

ケセララン様も相当張り切って飛び出していった。一方5人は私たちをこの空間において行くのを躊躇っているようで、誰も出て行くとしめない。光山君がいるからなんとかかなりそうな気もするんだけどね。（根拠もなく大丈夫だろうと思われてしまうのが彼の可哀想なところだ）

君たち、早く行かないとケセララン様に怒られちゃうよ？

「……彼女を頼む」

光山君は頷いた。声で正体ばれちゃうよ、しゃべらなくて良いよ竜胆君。

「大丈夫、彼女はオレが連れて帰るから。……気を付けて」
そして5人は、きちんと窓を開けて、そこから飛び立っていった。

強制トキメキ装置（無難に略してみた）が発動したらどうなるのかとても気になるけれど、きつとその野望は潰えるのだろうなあ。若干残念に思いながら、狸の妨害から自由になった光山君に連れられ、私は元の空間に戻った。

ちょうど「いきなりガラスが割れた」後に、「誰もいないのに隣の窓が自動で開いた」という超常現象で大騒ぎの最中だったので、うまく人ごみに紛れ込めたと思う。……なるほど、光山君の最終手段を発動したら大変な事になるところだったんだね。

後日、私は果敢にもケセララン様に抗議した。何故あの狸型宇宙生物にアラームが作動しなかったのかと。

ケセララン様は涼しい顔（判別つかないが）をしてさらっと答えた。

「ワタシが来る前から潜伏していた連中には反応しないなう。設定が違うから仕方ないなう」

開き直ったよ……。

この分だとまだまだ潜伏中の宇宙人は多そうだなあ。いいのかな、ケセララン様に地球を任せておいて。完全にお役所仕事（しかも古いタイプ）の、やる気のない公務員じゃあないか。誰かやる気のある若者が赴任してこないかな。辺境惑星だからだめか。

あの3人組はどうなったかという罰としてケセララン様のしもべになるには、運動能力が基準値に達していなかったらしくて、結局例の記憶消去光線でゲームのことだけ消されてしまった。

こうして一件落着かと思いきや、彼らの行動で動いた好感度などは継続されているらしく、巽さんと北条君のカップルは崩壊した。そこにすかさず夏目さんがアタックした結果、結局北条君と夏目さん、鈴木君と巽さん、という意外性のないカップルが誕生したのである。

……この人達、一生こうして入れ替わり続けると困るから、結婚したらお互いに疎遠になるべきだろうな、と心底思った。

3月の脇役そのいち

うちの学校の高等部の卒業式は、3月3日である。

学長先生の強いこだわりで日付が固定されており、曜日に関係なくかならず3月3日にするべし、という決まりになっている。

2月下旬からはもう授業はないので、私にとって3月は春休みと同義だ。というわけで、卒業式を明日に控えているにも関わらず、私は昼間っからお雛様の前で甘酒を飲みつつぼーっとしていた。

我が家のお雛様達は皆、かなりの美人さんだ。毎年この季節に飾るのが嬉しくて仕方ない。飾ったら飾ったで、暇さえあればこうして眺めている。別にお嫁に行き遅れてもいいから、一年中飾っていたいなあ。と、若干危ない思考に浸っていたら珍しい事に光山君からメールではなくて電話がきた。

「盛沢さん、ごめん。助けて欲しいんだ」

向こう側から聞こえてくる声は本当に余裕を失っているようだった。どうしちゃったんだろう。

先月危ない所を助けてもらった恩もあるし、ここは清算しておくべきだよな。うん、今のうちにきっちりしておくべきだ。4月からは関係なくなる予定だしな。たぶん。

「リリア姫がこっちについて来ちゃってね。今、オレの部屋にいらんだけど……」

おやおや、そいつぁ大変だ。

「……とりあえず、彼女が着られそうな服、持ってきてくれないかな」

「……がんばって探してみます」
と、いうわけで、電車で4駅先の光山宅を初訪問する事になったのである。

光山宅は、意外にも日本家屋である。おそらく古くからこの地に根を下ろし、代々土地を守ってきたのであろう。ちよつと周りの景色にそぐわないほど古風な塀に囲まれていた。

駅を少し過ぎたあたりからずーっとこの塀が続いてるんですけどね？ 入り口どこ。もしかして反対周りが正解だったんじゃないかしら、と心配になってきた頃、やっと、これまた立派な門を見つけた。

うん、表札もあるし、ここだ。

電話で指示されたとおり、出入り用の木戸からこっそり入る。(こっそり入れとは言われてないけどさ)

そのまま母屋には立ち寄らずに右奥の離れに来てほしい、との事だったので、手入れの行き届いた庭園を横目にそちらへ向かった。しかしまあ、広くて立派なおうちですな。

離れの玄関には既に光山君が待ち構えていて、すぐに部屋に入れてもらえた。

なるほど、この離れが丸々彼のお部屋というわけか。秘密の二重生活をするにはもってこいの環境だよな。

突然やってきた異世界のお姫様が居候するのにも向いている環境ともいえる。道徳的な問題に目を向けなければ。(けれどもこれもまた良くあるパターンだよな)

部屋に入るとすぐに、ものめずらしそうにテレビのリモコンをいじりまくっているリリア様が目に入った。おお、思いっきりドレ

スだよ。

「いつぞやこちらの服が着たいというので何着か持っていたことがあるんだから、せめてそれを身につけていてくださればねえ。」

「部屋の中は外見に反して洋室風に改装されているので、そこまで違和感があるわけでも……いや、やっぱり違和感あるわ。」

「クミさん、お久しぶり！ 全然顔を見せに来てくださらないから、お姉様方が寂しがってるわ」

「ご無沙汰しております。……まずは御召し替えをしましょうか。お手伝いします」

髪型もなんとか直さねば。

「典型的なお姫様巻きでは、ゴスロリ風の服でも着せないと合いません。そして私は、ゴスロリ風の服など持っていない。子供の頃は、随分持ってたんだけどね。」

「わたくし、どうしてもお二人の晴れの舞台が見たくて。明日はソツギヨウシキ、とかいう催しがあるのでしょうか？」

「それで思わず、後先考えずに飛びついてしまった、と。」

私は、ちょっと道具を借りてくる、とリリア様に言い含めて、廊下で何か考えごとをしつつ支度が終わるのを待っている光山君のもとに行き、小声で話しかけた。

「このままフォレンジィアに帰っていただくわけにはいかないんですか？」

「もちろんそれも考えたけど、彼女はもうこの座標を覚えてしまったし、次は自力でこちらに来れると思うんだ。今、無理に帰したら最後、レミア様とルビア様まで連れて戻ってくる可能性が高い。彼女、魔法に関しては天才なんだよ」

なんてこと！

「卒業式さえ見せれば多分満足して大人しく帰ってくれると思う。だから、悪いけど……」

「いやなよかん！」

「耳塞いでいいですか」

彼はふつと笑って私の両肩を壁に押し付けた。ひい！ この体制はちょっと困る！

「一晩、盛沢さんの家で預かってほしいんだ」

ほらあああ、聞いちやダメって言ったのに！（私の本能が）

「友達とか後輩ってことにして、一晩だけ頼むよ。ね？」

至近距離で囁く事じゃないよね。こうやって私を困らせて、頷かせようという魂胆だよ。ね。

くそう、最近、やっぱり案外いい人かも、とか思ってたのに。

何でこの人は、自分から評価を持ち上げては落とすような事するんだろう。（最初の好青年風よりはこっちの方が話しやすいんだけどさ）

「明日には絶対帰ってもらうから。だから。ね？」

すみませんクラクラします。色香に酔ったのでしょうか、先ほどの甘酒が少し回ったのでしょうか。

私は、気が付くとなんだかよく分からないうちに頷いていた。

信号機にはしゃぎ（なるほど、譲り合いの精神なのね）電車にはしゃぎ（すごいわ、馬車より早くてこんなに揺れないなんて）電柱に感心し（ではこれで全ての家庭に魔力が行き渡っているのね）とにかくある意味お約束どおりの反応を一通り見せてくれるリア様をなんとか家まで連れて帰った。

私の見立てどおり、ホワイトベージュのレギンスを履き、サーモンピンクのチュニツクの上に黒いふわふわのケープを羽織ったりリア様は、ものすごく可愛らしかった。持ち主の私より似合ってる。ちよっと悔しい。

母は、留学生の後輩が泊まりに来た、という言い訳をアッサリ受け入れた。なぜかというとは実は、もともと魔女っ娘達が泊まりに来る予定だったからである。今更一人増えようが、そう変わらないと思っただらう。

リリア様がきれいな日本語で挨拶したのと、容姿がとっても可愛らしいのも受け入れやすかった一因だともう。でも、彼女が着てる服に見覚えはない？ あれ、気が付かない？ 娘の普段の服装とか、実はどうでもいいと思ってる？

……まあ、いいや。ところでどうして日本語で話せるようになったのだらう。電車ではあちらの言葉だったのに。

「せっかくこちらに来たんですもの。お話できないとつまらないでしょう？」

リリア様は、光山君から習っていた知識と先ほど電車で聞こえた日本語をもとに、いつの間にか対日本語の翻訳魔法を組み立てていたらしい。

性格に反して（すごく失礼）頭が良い、というのは本当だったんだなあ。

3月の脇役そのに

夕方になって、予定通り魔女っ娘達がお泊りにやってきた。

彼女たちには流石に後輩だと誤魔化す事ができないので、(だつてこんなに目立つ子がいたらみんな知ってるよ)仕方なく「光山君に所縁のある子で、ご両親に内緒でコッソリ遊びにきちゃったのを預かった」と紹介した。……嘘はついてないよね？

相変わらず私の恋愛事情(本人だけがおいてけぼりにされて、噂と憶測だけで構成されてるんだけど)に興味深々の3人は、光山君のところへ押しつけてきた謎の美少女という存在に食いついた。

確か君たち、うちのお雛様見ながら一日早いひな祭りパーティーがしたい、とか言つて本日のお泊りを企画してたよねえ？ うちのお雛様よりリリア様に注目するなんて、お人形に失礼じゃないかな！

リリア様も彼女たちに大層興味をお持ちになったようで、既に打ち解けつつある。さっきまでのお澄ましさんの仮面が剥がれてきている。

すごく不安だ。頼むから、頼むからフォーローできないような爆弾発言は……。

「この人たちはカイトとクミさんの学友なの？」

「学友？」

だからっ、そういう一般人にそぐわない単語を出すなと！

「ええと、クラスメイト、って言いたかったの。リリアさ……ん、は日本語お勉強中だから」

危ない、リリア様と呼びそうになった。魔女っ娘達が来る前に、

「さん」付けでお呼びする許可をいただいたのに自分がウツカリしたらダメだよな。

……魔法も使わないでほしいと言い含めてあるんだけど、大丈夫かなあ。この方、呼吸するみたいに魔法使っちゃうタイプでしょう？（天才って、きつとそういうことだよな）

リリア様をちらりと見ると、別に今のやり取りでご機嫌を損ねてはいないようだった。むしろお雛様を見て目をキラキラさせている。まあ、おおらかというか物事に頓着しない性格みたいだし、そもそもご本人がいまいちお姫様としてはお転婆すぎる方だからな。

「あの人形はなに？」

特に一番上の一对に目が釘付けだ。まあ、8段も上にあるとお顔がよく見えないよね。取って差し上げようと、脚立を目で探していた隙に、さっそくりリア様はやらかした。

男雛と女雛がふわっと浮いたかと思うと、次の瞬間は彼女の手元へ。キャアアアア。

魔女っ娘たちは目を点にして、ぴたりと動きを止めた。

うあー、もうだめだー。せめて手前の従者のおじさん達なら、「あれーおかしいなあ、落ちちゃったのかな」ってとぼけられたかも知れないのに。

そして更に事態を悪化させるできごとが。

「強い魔法の気配きゅぴー！」

キャベツが飛んできた。……そういえばこんなのいたよね。肌身離さず連れ歩いてるんだからお泊り会にも当然持参するよね。

一体どう收拾つけたらいいのか、頭が真っ白になってしまった。せめて母だけでも夕食の買い物に出ていてくれてよかった。

しかしリリア様は飛んできたキュピルを見て目を丸くしたものの、あれえ珍しい、と首をかしげるにとどまった。

「妖精がいるなんて。なにかあったの？」

「きゅぴー？ フォレンディアの王族が、なんでここにいるきゅぴー？」

誰か、説明を求む。

魔女っ娘たちも私と同じような状態だったので、とりあえず母が戻る前に、と全員で私の部屋に移動した。

あ、リリア様、とりあえずお人形戻して下さい。……だめです、あげません。いいえ、カイト君には似てません！ それより右大臣様がちよつと竜胆君に似てるような……げふげふ。

「つまり、光山君はその世界とこっちを行き来してるんだ？」

「すごおい、宰相様だって」

「彼も魔法が使えるなんて、ビックリしたわ」

「フォレンディアではこのキャベツが妖精として認定されてるんですか」

リリア様とキュピルによる、説明というよりはただの世間話から、私達はそれぞれ自分なりに必要な情報を読み取るしかなかった。

みんな興味を持つポイントが違うんだね。

そこから更に、キュピルによるお涙頂戴の苦労話とか（ごめん、泣けなかった。欠伸が出た）リリア様によるカイトちょーすてきカツコイイ話とか（美化されきってて微妙に引きつった笑顔になりました）を聞かされていたら、いつの間にか夕食の時間になっていた。今日は母が全部作ってくれる予定だったので思わず甘えてしまっただが、片付けは引き受けよう。

チラシ寿司と蛤のお吸い物、春巻き風のサラダに、鯛の酒蒸しというメニューはこれまたリリア様に大うけで、母もまんざらではなかったようだ。

それにしてもナイフとフォークであのメニューを綺麗に食べられるリリア様の技術は見ものであった。

翌朝。グツタリとうなだれた私の横を、生き生きとはしゃぐリリア様、そして少し前をやっぱりはしゃいで歩く魔女っ娘たち、という構図で登校した。

何故私がこんなにグツタリしているかというと、それは昨夜繰り広げられた所謂恋バナ疲れだ。

せつかくだからみんなで一緒に寝たいと魔女っ娘達がいうので、私もリリア様も客間で寝る事にしたのだ。

ところが氷見さんが「盛沢さんはモテるんだよ」なんて言い出すから、リリア様が私にお説教し始めちゃってさあ大変。「カイトと婚約しているんだから、他の男なんか近づけちゃダメ！」と怒り出してしまった。

そこで瀬名さんが「ええー、婚約してたのー？」とテンションを上げて、由良さんが「詳しく聞きたいです」と援護射撃をしてくれたのだ。後はもう、とても私の手に負える状態では……。

光山君、元はといえば全部あなたのせいなんだからね！

昨夜のうちに、光山君には一言だけメールを送っておいた。「ごめんなさい、ばれました」とだけ。誰に何がばれたのかは一切書いていない。一晩ヤキモキすればいいと思って。

というわけで予想はついていたのだが、彼は校門のところ私たちを待っていた。そんな光山君に、さっそくりリア様が食って掛か

る。

「カイト！ あなたがすっかりしないと、クミさんをリンドウとかいう男に取られてしまうわよ！」

校門ですから。登校時間ですから。と、止める暇もなかった。

彼女の美しく良く通る声があたりに響き渡り、皆がぎよつとしてこちらに注目した。卒業式までこんな目にあうとは、私ってなんて不幸なんだろう。外部受験しといて本当に、本当によかった！

そして、卒業式が平日だから保護者の皆様の参列が少なくて本当によかった！

うちの母？ 遅れてくるんじゃないかな。じっと座って退屈な話聞いているのに耐えられない人だから。

「オレも頑張つて捕まえておこうとしてるんですけど。彼女は照れ屋だから」

「そんな余裕を見せてちゃダメよ！ もう、お姉様たちに言いつけちゃうからね！」

ああ……。このまま地面に穴を掘って埋まってしまうたい。

幸い、このやり取りはここで中断された。卒業生向けのアナウンスが流れたためである。

とりあえずリリア様を父兄席にご案内して、「お願いですから、式の最中はあまりしゃべったりせぜずに静かに座っていて下さいね」と念を押し（そういうのは得意だと言われた。考えてみればお姫様の主な仕事とかぶってるよね）私達は一度教室へ向かった。

式の間中、リリア様はほぼ大人しくしていらしたのだが、卒業生代表で光山君が壇に上がった時はちょっとヤバかった。

彼が答辞を読み終えた途端一人立ち上がり、スタンディングオベーションを始めてしまったのだ。

やがて在校生の中から、おそらく光山君のファンと思われる女の子たちがちらほらと立ち上がり彼女に続き、結局気が付いたら全員が立ち上がったの大喝采になっていた。

流石に光山君も恥ずかしかったようで苦笑いして降りてきた。

……やっぱり彼に勝てるのは姫君達しかないと思うんだ。

3月の脇役そのさん

卒業生代表の答辞に大喝采しつつ女の子たちが興奮のあまり号泣すること30分、という前代未聞の珍事件を除けば、卒業式自体はつつがなく終了したと言つてもいいだろう。まあ、この事件は伝説として語り継がれることだろうけど。

このあとは、教室でクラスごとのお別れ会である。生徒だけのイベントなので、多少メンバーに入れ替えが生じるのも毎年の恒例らしい。

というわけで、何故かリリア様が参加している。

さらに、野次馬が紛れ込んでいる。

なのに光山君がいない。確か第一体育館の裏（告白用の名所。なぜか桜、桃、梅が揃って植えてある）のほうに行列ができてたね。いつそ整理券とか配ったらいいのに。

今朝の噂がまた広まっているようで、ちくちくと視線を感じる。

ああ、帰りたい。本当は自由に抜けていいのだけれど、リリア様を放り出しては帰れないんだよ。なんでここにいるの。連れてきたのは……魔女っ娘どもか！

学校及び保護者の皆様が手配して下さったケータリングのお料理と、それぞれ持ち寄ったお菓子などを囲んで、立食パーティー形式のお別れ会が始まった。会、というほどのものでもなく、それぞれ親しい人同士で集まっておしゃべりするのだ。

クラスの半分は内部進学組だから、そんなに別れムードは漂っていない。ごくごくいつものどおりの雰囲気である。

……誰か私とお別れを悲しんで？

桂木さんと新渡戸君が教室の真ん中で早速恒例のあれを始めた。
ああ、鬱陶しかったけれど、すごく腹の立つ事もあったけれど、もうあのやり取りを聞くことができないのかと思うとなんだか寂しいなあ。

なぐんて感傷に浸れたのは最初の5分だけだった。

まずは手越さんがやってきて、涙ながらに卒業と別れを悲しんでくれた。

いや、うん、ありがとう。メアド交換はいいけど、あの、私、筆不精だからお返事毎回送るとは限らないけどゴメンね？

彼女の中では、私が外部の大学へ行くのは潜入任務のため、という事になってるらしい。

なんとしてもあの漫画の設定のまま貫く気なんだな。なぜそんなにこだわるんだ。そもそも幼馴染たちの話では、数ヶ月もすれば飽きて別な作品に目移りするはずじゃなかったのか？

やっぱりクローバーさんがこっちにきちゃったせいで延長されたのかなあ。

そこへ米良さんまで加わった。ひとしきりクローバーさんの思い出話などをしつつも、(傍から聞いていると微妙にかみ合っていない。手越さんは漫画の中の彼を、米良さんはこちらにいたときの彼を語っているからだと思われる)彼女の興味はリア様に移行した。漫画に出すライバルキャラに理想的、らしい。

ああ、まだあの漫画描いてるんだ？ えーと、書きあがったら送ってくれるの？ いや、送料掛かっちゃうし、かえって悪いから！

いいから！ (必死)

……ともあれ失恋からは立ち直ったみたいで良かった。滝川君のおかげだね。

そこへなんと菊池君と松澤君もやってきて、許可もなくリリア様の写真を取り出した。

もちろん姫君のお目付け役（不本意）として、問いただしましたよ。全く、マナーのなってない連中だよな！

どうやら中川君が作っているギャルゲーのキャラの参考にしたいらしい。……懲りないなあ。（記憶がないから仕方ないんだけど）ところで何故本人が来ないの？ ああ、リアルの子はキライだったね。

青井さんと赤井君は、お付き合いを始めて一年も経つのにまだ初々しい二人の世界（同じタイミングで同じお菓子に手を伸ばした、というだけで見詰め合って赤くなってる）を展開中で、そうかと思えば先月の破局再生カップル二組は、ちょっと学校では遠慮してほしいほどのいちやつきっぷりを見せ付けてくれる。

お前ら全員とつと帰れ。二人つきりでラブラブしてればいいじゃない！ 私に対する挑戦ですか？

魔女っ娘達とうち解けきってはしゃいでいるリリア様には悪いけれど、もう連れて帰ろう。（置いて帰ったりしませんよ、色々怖いから）

そう決心したのも束の間、がしっと根岸さんに腕を掴まれ、そのまま空き教室に引っ張っていかれた。

「盛沢さん、みんなには急用で帰ったって言つといて。あと、教室の荷物お願い」

あー、緊急呼び出しきちゃいましたか。こんな晴れの日なんて難儀な。でも私、ちょうど帰りたいと思ってたところなんですけど。

……ごめんなさいなんでもないです。

「早く帰って来てね？」

いまだかつてないほど心をこめて5人を見上げると、私の真剣さに押されてか竜胆君がちょっと後ずさった。

いや、別に遅くなったからってどうするわけでもないけどさ。帰りたんだよ。

左手で右腕を押さえてぶるぶるしているけど、そんなに痛いのか？
ごめん、そんな目に遭ってまで地球を守ってる人達に勝手な理由で早く終わらせるとか言ってる。

「……盛沢は、罪作りだと思ってる」

何故か福島君がぼそつと暴言はいた！　なんだよ、いきなり失礼だな！

「うん。わざとかって思えてきた」

何がですか、中山君。あなた、私のお陰で内部進学認められたんだからね？　もうちょっと感謝して、できれば庇ってよ。……国語が壊滅的なあなたには難しいですかね。

「流石にちよつと、鈍いような気がするの」

「無意識に、ラインを引いてるんじゃない？」

水橋さんと根岸さんにまで攻められて、私は立つ瀬がない。何故今、そんなことを言われなくてはいかんのだ。

それよりさあ、みんな腕は大丈夫なの？　竜胆君がぶるぶるするくらい痛いんでしょう？　話は後で聞くから早く行ってらっしゃい、というとうつつむいていた竜胆君がため息をついて、言った。

「……いや、俺が悪い」

何が悪いんだろう、言葉が少ない彼については、わからないことが多い気がする。

視線から読み取れないものかと目を合わせると、彼はもう一度ゆっくり息を吐き出して、いつものように私に手をのばしてきた。

大きな骨ばった手がぼふっ、と、躊躇うように頭の上に乗る。最初はビツクリしたもののけど、慣れてくると心地良い。それから2、3回ぼんぼん、とされて、その後何故か、手をとられた。

そつと手の甲を指でなぞられる。アレ、え？

「後で、伝えたい事がある」
え……。

私は目をパチパチさせた。最初の頃光山君にやってた演技的なものではなく、ごく自然に。

え、なになに、今の。少女漫画のような少年漫画のような、このよく分からない一連の行動は何！ しかもみんなの前で。竜胆君、どうしちゃったのさ？

……は、そもそも今のセリフってかなりアレだ、「おれ、この戦いが終わったら結婚するんだ」みたいな匂いがした。

やばいって、変なフラグ立っちゃうって！

私が不吉な事を考えておろおろしている間に、5人は変身して窓から飛び立っていった。

もう全身スーツに対する抵抗がうすれてしまったんだなあ。まあ、彼らはスタイルが悪くないからな。某遊園地で僕と握手できるくらいには見られるんだけど。

……彼らがケセラ様から解放される日は、果たして来るのであるだろうか？ でも可哀想だけど、ごめん、ケセラ様よりはあなた達に未来を託したいので、これからも当分頑張っと思ひます。

3月の脇役そのよん

教室に戻ると、光山君が戻ってきていた。学ランを着ていないのはきつと、ボタンというボタンを筆記取られて原型を留めていないからだろう。うわ、寒そう。

こうなる事は予想できてたんだからセーターの一枚くらい用意しとけばいいのに。(それはそれで自意識過剰過ぎてイヤだな)

「ジャージでも着てたらどうですか？ 見てるほうが寒いです」

「それはちよつと……」

まあ、卒業のお別れ会にジャージはちよつとやだよ。うん。意地悪言ってみた。

「彼らも大変だね」

彼ら、が誰を指しているのかは聞かなくても分かる。そうですね、とだけこたえて、窓から空を見上げた。

竜胆君あんなフラグ立てちゃったけど、無事に帰ってきてくれるといいなあ。

「浮気はだめよ！」

いきなりリア様に怒られた。え、なんで浮気。外も見るなど？ わき目も振らずに光山君見つめてると？ (言いかねないな)

「今、任務に向かった騎士を見送る侍女達と良く似た目をしてたわ！」

「ええー！」

「わ、私、恋でもしてるんでしょうか？」

「あなたカイトの婚約者でしょう？ カイトが好きなんじゃないの？」

ひい、教室でそんなこと言うなって口止めするの忘れてた！

この人の中ではその設定は事実のままなんだよね。私のせいで光山君への恋心を諦めたのに、他の人間に気があるようなそぶりみせたら怒るのは当たり前だ。でも、そんな大声で怒らないでえ！

だってドキドキするのは仕方ないじゃないか、あんなこと言われたらいくら私だって分かる。竜胆君が、ええと、その、つまり、もしかしたら私に気があるんじゃないかって。そしたら意識しちゃうのは仕方ないじゃないかあ！

みんなリリア様の発言を聞き逃さなかったようで、一斉に教室どころか廊下まで歓声というか悲鳴というか怨念のこもった泣き声とどうか、そんなもので騒がしくなってしまうた。

ちょっと、このままだと暴動がおきるってば！ 流石に怖くなって光山君に助けを求める視線を送ると、彼はなんだか寂しげな目でこちらを一瞥して、言った。

「……そうだったらいいのにね、ってこと。オレが一方的に、彼女のことを好きなんだよ」

かあああああああつ。

未だかつてこんなに顔が赤くなった事があつただろうか？ 別に人前だったから恥ずかしいわけでもない。ギャラリー付きの告白劇なんて既に経験したからな。（そっぴや葉月さんどこだ？）

リリア様はよく意味が分からないようで不満げに眉をひそめている。説明しなさいと光山君に訴えていたが、あとでね、と宥められ渋々頷いた。

— なんだか血がのぼりすぎて、目の前の会話を遠くに感じるよ。一枚布を隔てた向こう側のやりとり、みたいに。

まあ、最近「アレ、もしかして」と思うことは何度かあったけど、気のせいってことにして直視しないでやり過ごしてきた現実にとっとう直面したというかなんというか。いずれは白黒つけなきゃなあ、と思っただけというか？

でもそれが今じゃなくてもいいじゃないか！ 突然すぎるよ、もっと時間をくれ。10年くらい。

「あう、あ、う」

「うん。わかってるよ」

私が、心の中に反して言葉を紡げずにいると、光山君はまた、できの悪い生徒を見る先生みたいな顔で頷いた。きい、ム力つく！

「盛沢さんにはまだ早いんだろうね。だから、ゆっくり考えてくれていいよ」

まだ早いってどういう意味だコラあ！ と言いたるところだが、じゃあ即決しろと返されると大変なのでぐっところえて頷いた。

結局、お別れ会終了時間のお知らせの放送が入るまでこの騒ぎは続いた。（いや、私はもう、うつむいてぼーっと突っ立ってただけなんだけど）

光山君がいつもの笑顔で、詳しく聞きたがる野次馬たちを追い払い続けていたような気がする。なんだこのいたたまれなさ。

誰かが、どこか別なお店で二次会やろう、と叫んで、ほとんどの人はそちらについていった。魔女っ娘たちも参加するようだ。私は「約束があるから」と断った。

光山君も、リアア様をあちらに送り返すついでに上着を取ってくるといって教室から出て行った。多分気を利かせてくれたのだろう。

一時間ほど待っただろうか。やっと帰ってきたら5人戦隊はみな無

事だった。いやいや、良かったよ。かなり心配してたからね、特にフラグっぽいもの立てた竜胆君を。

でも、このあとのお話とやら、聞きたいような聞きたくないような。だって私にはまだ早いな。よう。

竜胆君とのお話を終えて、私は魂が抜けたようにフラフラと玄関までたどり着いた。

疲れた、疲れたよお！ほんと、もういい。しばらくいい。私、お見合いするまで恋愛しない。

こうしてみると、くっ付いたり別れたりを簡単に繰り返す人達のパワフルさがよく分かるよね。うん、すごいすごい。半ばやけっぱちな気持ちで世の中の恋愛モノ主人公たちに賛辞を送りながらシューズボックスを開けると、靴の上には一通の便箋が置かれていた。

あら恋文かしら、古風な。まったく、二人ともまずはこの辺から始めてくれないと困るよね！いきなり、あんな、あんな…。（ああ、早く帰ってベッドの上で思う存分ゴロゴロ悶えたい！）

また思い出して、あまりのむず痒さにしゃがみこみそうになる足を叱咤しつつ開封してみると、それは葉月さんの弟君からであった。……脱力した。

目がすべるような内容（卒業のお祝いの言葉は最初の一行で、自分がいかにルミちゃんと幸せにやっているか、あなたも早く彼氏作れよ、的内容）で、今日みたいな日に読まされると、なんだか怒りがわくような手紙だ。

普段なら人様から届いた手紙にこんなことをしようとは考えないんだけど、今の私はなんだかテンションがおかしくなっている。

そうだ、捨てて帰ろう、と思いついた。一番近いダストボックス

手の中の手紙がグシャリ、と音を立てた。

3月の脇役その1

「え、え、ほ、穂積さんって、あの穂積さん、ですか？」

「ええ、穂積 万理よ」

マジで！

「えっと、だいぶ変わりましたね？」

変わりすぎだよ。

まあ、あの日図書館で彼女こそが光山君の相手じゃないかと思っ
たとき、きつと眼鏡とって髪ほどいてちよつと綺麗な服着せたら大
変身するんだろつなとは予想したけどさ。

見た目も綺麗になっただけで、何より雰囲気ガラリと変わっ
ている。オドオドしたところが無くなつて、カリスマ的なオーラま
で感じる。

そういえば光山君の話では、彼女はあれから国を作っていたはず
だ。ってことは女王様か。なんで今更ここにいるんだ？

あれ、しかも良く見たら旦那様（ですよね、隣の人）は、金髪に
目も金色で彫りの深い顔立ちの美丈夫さんではないですか。

うわあい、やったね巫女様！ お子さんは旦那様に似て将来の楽
しみな美少年ですなあ。（わくわく）

「だって、私にとっては16年経つのよ。……盛沢さんは変わらな
いわね」

「光山君から少し聞いてます。国を作ったんですって？色々あつた
んでしょうね」

国よりハーレムを作ったかどうかの方が気になってるんだけど旦那
様とお子様の前では聞けない。残念だ。

「そうね、色々あったわ。あの時は盛沢さんにも迷惑掛けたわね。お別れも言えなかったから気になってたの」

「私達は大丈夫でした。すぐに光山君が連れて逃げてくれたし。お互い……」

「お待ちなさい、その狸っ！」
なんかでできた。

ちよつとちよつと、感動の再会劇をぶち壊すようなこと言うのは誰ですか？ わかつてるけどね？ 私を狸なんて呼ぶのは一人しかないからね？

「篠崎さんと、お付きの二人……」
今日も今日とてご苦労な事だ。

村山君は篠崎さんと野島さんの荷物まで持たされている。彼女のお気に入りあのポーズを決めるには、手ぶらじゃないとキツイもんね。

野島さんも、なんか大きな箱を持たされている。篠崎さんったら、いらぬオカルトグッズ最後まで持ち帰らなかつたんだね。

しかし村山君、あなたの正体は鬼でしょう？ なんで女子高生の荷物持ちに甘んじてるの。一回こっ、ガツンと言ってやれ！ あんまり舐めた事言ってるど頭からバリバリ喰っちまうぞって言ってやれ！

「ふん、クラスのみんなは騙しとおせても、私はそうはいかないわよ！ さっきの光山君はその狐が化けたニセモノだったのね！ 誤魔化しても無駄よっ」

篠崎さんは例のポーズでびしい！ っと穂積さんを指した。
ちよつとちよつと女王様になんて失礼な事を！ あ、ほら、隣の

旦那様がムつとしてるよ？

しかし、私が狸なのに穂積さんは狐か。いいなあ。狸って、狸の妖怪って……。アレと一緒にされ続けるのはやだよ。 (そう言えば新しく赴任なさった養護の先生は美人なお姉さんだったなあ。一度もお世話にならなかつたけど)

「狐と狸にまんまと騙される所だったわ。今度こそ成敗してやるんだから！ 翠！」

「はい、杏樹お嬢様！」

野島さんが箱を掲げて篠崎さんの横に跪いた。え、まさかあの中身使うの？

「ふふふ、曾おばあさまの遺品の中から出てきたお札よ。くらえっ」

「な、あれを見つけていたのか、杏樹っ」

村山君がぎょつとして、演技も忘れて叫んだが残念ながら間に合わなかつた。

そおれっ、とばかりに、高笑いをしながら篠崎さんがお札を撒き散らす。村山君が焦るお札って何！

危機感を感じて思わずしゃがみこんで目をとじたが (篠崎さん達が「やったわ！ 怯んでいるわ、翠！」「お見事です、杏樹お嬢様！」とはしゃいでいるけど気にしない) 不思議な事にあれだけ盛大にばら撒かれた紙が一枚も降ってこない。あれえ、と薄目を開けると、穂積さんの旦那様が手を翳し、何かしていた。

「あの娘は何を言っておるのだ？ 先ほどからそなたに無礼極まりない態度ではないか」

おお、期待通りの重低音。あと口調が偉そう。(そして地球の言

葉じゃないよね。こっちの翻訳もまだ有効なんだなあ)

ところである国には魔法なんか無かったはずだけど？

……まあ、巫女様にも加護が付いてたし、巫女様の旦那様も唯人じゃないんだろうね。息子さんの将来がますます楽しみですだ。

私と穂積さん一家を取り囲むように、半円状の何かが光っているわーい、バリアーだ生バリアーだあ。しかし、篠崎さん達は別な所に注目していた。

「ひ、光……？あなた、その姿……」

「お嬢様、危険です！ 離れて下さい！」

そう、なんとお札をかぶってしまったらしい村山君が、本性を現してのたうち回っていたのだ。

なんだかすごく苦しそう。同じくかぶったはずの陰陽師主従には影響が無いみたいだから、こりゃあ本当に妖怪に効き目のあるお札だったんだねえ。って、村山君退治しちゃだめじゃん！ 彼がいなくなったら誰がこの暴走娘どもの面倒見るの？

「なんだ、あの男は異形の者であったか」

「ええ、でも、普段は全く無害なんです。むしろ人を守ってるほうでして」

今にも「ならば退治してくれよう」とか言い出しそうな穂積さんの旦那様に、慌てて説明した。なんで全く関係ない(一回助けてもらったけど)私がこんなことしてるんだ。

「……盛沢さんも、色々あったようね」

ええ、不本意ながら色々な目に遭ったんですよ。異世界トリップに関わってただけじゃないんです、忙しくしてたんです。

「村山君、なんとかなりませんか？」

障壁の向こう側では篠崎さんが珍しいほど必死に村山君を呼んでいる。それを野島さんが必死に押さえつけている。なんだか映画みたいだなあ。

「では、元クラスメイトのよしみで何とかしましょう」

穂積さんがにこっと笑って旦那様に頷くと彼は翳していた手を下げた。おお、光が消えた。

「なにをするの、やめて！ 光を連れて行かないで！」

どこにだ。妖怪の世界とか？

「大丈夫、どこにも連れて行ったりしないわ」

巫女様らしい微笑で穂積さんが穏やかにいうと、あの篠崎さんが（あの篠崎さんが！ 篠崎さんが、ですよ？）ぴたっと黙って頷いた。本物の巫女様はしゅげー！ 弟子入りしたい。

彼女がそつと手を翳すと、村山君は徐々に落ち着きを取り戻していった。何をしたのか聞いてみると、「体内の気の循環を整えたの」とか何とか。気功みたいな力なのだろうか。

やがて、落ち着いて人間の姿に戻った（あれ、鬼の姿の方が本体か）村山君が、大きなため息をついて、それからぐしゃりと頭をかきむしった。

隠していたかったんだよね、彼女達には。傍にいたために。

「ああ、ちくしょう。杏樹、俺は……」

「ひかるう！」

感極まった声を出して、篠崎さんが村山君に抱きついた。

そのまま子供みたいにわんわん泣きじゃくりながら「戻って良かった」とか「どこにもいかないで」とか。拳句に泣き疲れて眠って

しまった。

すごいな、流石は歩く傍若無人。どうでもいいからそういう「世界は二人のためにあるの」的感動シーンはおうちでやって！

結局、そんな篠崎さんを村山君が背負って帰ることになった。彼女のただっこモードのせいでも、なんかグダグダになったけど、正体がばれたからお別れということにはならないように良かったね。野島さんの警戒対象も私から村山君に移行したようになり。

もう、陰陽師ごっこは3人でやってね。頼むから。後生だから。言っとくけど、他人巻き込むから今回みたいなことになったんだからね！ 反省しなさい！

3月の脇役そのろく

それから、私はやっとおちついて穂積さんとお話をした。

傭兵さんと逃げた先で、国どころか帝国まで作っちゃった事とか、実は穂積さんより前に召喚されて「太陽王」と呼ばれていた旦那様との出会いと一目惚れの話とか、色々。

こちらには、卒業式に出席する気分を味わいたくてコツソリ戻ってきたらしい。ご家族に会うつもりはないそうだ。確かに、大人になっちゃったもんねえ。ビックリされるし、信じてもらえなかったら悲しいよね。

というわけで、手紙を預かってしまった。シューズボックスに入っていたことにしておいてと頼まれたので、その通りにしようと思う。素敵な旦那様と可愛くて利発そうなお子様がいて幸せにやっているのだなあ。安心したよ。……あの子、半年後には21歳か。

葉月弟君の手紙は、やはり捨てずに持って帰ることにした。これのお蔭で穂積さんと会えたわけだしね。まあ、内容はともかく！

家に帰りついた頃には結構なお時間で、穂積さんの16年にわたる壮大な冒険のお話の余韻に浸る間もなく、着替えて、夕食をとって、お風呂に入って、気が付いたらベッドの上でグッタリしていた。

あーあ、卒業したんだなあ。もうあの制服を着ることもないし、あの教室で授業を受けることも無いんだなあ、とぼんやり考えながら、卒業記念にと両親からプレゼントされたブレスレットを眺める。華奢な作りのプラチナのチェーン。一点ものだ。私の好みのデザインで嬉しい。

試しに左手にはめてみようとして、あの時の事を思い出した。

そういえば竜胆君がやたら大事そうに撫でたよなあ。

思い出して一気に顔が赤くなった。ひいいい、こそばゆい、ほろあまい！

思わず枕に顔を押し付けてバタバタしてしまった。

そういえば私、今日は人生始まって以来のモチ日だったよ。ほんとうしちゃったの。とうとう脇役卒業して恋愛モノ主人公にでもなっちゃったの？ まさかの三角関係？ ……んきゃー！（ごろごろごろ）

いやいやしかし。なんとというか、ちょっと苦いものもよぎるとい
うか？ だってだって！（ごろごろごろごろ）

5人戦隊が無事に帰ってきたあと、私は竜胆君と二人、空き教室に残された。

もちろん全員に見守られながらというのも気恥ずかしいが、「わかってるから」みたいな優しい目でこつち見たあと出て行かれるのも同じくらい恥ずかしいよ！ そもそも、何故突然こんなことになっただろう。

そりゃあ竜胆君に限って、罰ゲームとかドツキリとかの悪質なオチは用意されていないだろうけど。ううむ、わからん。

まあ、告白されると100%決まっている訳ではないのだから、心を落ち着けるんだ。深呼吸して〜、すって〜、はいて〜。（どきどき）

落ち着いているようでいっぱいっぱいの私の耳に、小さな呟きが聞こえた。え、なになに、聞こえなかった。ごめん、もう一度。すきだ？ つきあってください？ 勝負だ？

「幸せに、するから」

竜胆君の口からポツリと出た言葉に、私は目が点になった。え、なにそのプロポーズみたいな言葉。まだお付き合いもしてないのに。

しかし彼は、私の動揺を全く無視したまま、今までの無口さが嘘だったかのように、立て板に水の如くまくし立てた。

「絶対に幸せにする。苦労は……させるかもしれないが、できる限りさせない。お前は何もなくて良い。炊事も洗濯も掃除も買い物も全部俺がやる。盛沢が嫌がるような事はなにもしない。ただ嫁に来てくれるだけでいい！ お前はただ、傍にいてくれるだけで良いんだ！」

……何だそれ？

「確かに道場の経営は順調とはいえないし、親父の本屋も道楽みたいなものだ。今まで通りの暮らしはさせてやれないと思う。それでも、俺が精一杯働くから。もちろん、盛沢に働けなんて言わないし、誰にも言わせない。だから、だから……！」

り、竜胆君ー！

どうしちゃったの、一体何があなたをそんなに追い詰めたの。なんで段階すつ飛ばして結婚なの。

もしかして道場を継ぐ者は高校卒業までに結婚しなくてはいけないという決まりでもあるの？ そうなの？ あと、私にどんな夢見てるの？ 風に当てたら倒れるとか思ってる？

「家にはテーブルや椅子を好きに置いていい。畳の生活は慣れないと辛いと聞くから……。すまない、早速苦労を掛けて」

ちょ、ちょっと、おち、おちつけ！ なんで既にオーケーしたよ

うな話になつてるんだ！

「あ、あの、竜胆君！」

なんで彼がこんな状態になってしまったのかはわからない。いや、多分何かに追い詰められたせいだとは思うんだけど。なんとかしな
いと！ ちよつと怖いよ。

私は竜胆君を落ち着かせるべく、彼の両手をとり握り締めた。は
つ、と息を呑む音が聞こえた。

よし、とりあえずおかしなこと言ってるって気が付いてくれたね
？ そしていつものようにじつと目を合わせて、言った。

「私、（まだ）竜胆君と結婚なんてできない」

そうだよ、まだ高校卒業したてだよ？ これからお互い大学に行
くんだし、結婚なんて気が早すぎるよ。大学でもっといい子が見つ
かるかもしれないだしさ。

「だから、あの、ごめんね？」

その時の竜胆君の顔。

まるで2軒先のアンドレ（シベリアンハスキー、3歳）が、
大好きなボールを取り上げられた時とそっくりだった。……ああ、
罪悪感。

彼は「そうか……そうだな。いや、忘れてくれ」などと言いつつ
フラフラと教室から出て行った。なんか、ごめん。そんなに結婚し
たかったとは。でも私、いきなりそこまでは踏み切れないんだ……。

と、いうやり取りがあつたわけですよ。まあ、私もあの時緊張と
驚きでパニックに陥っていたので、多少返事の仕方がまずかつたと
は思う。彼はたぶん、「今すぐ結婚するのを断られた」のではなく
て「振られた」、と思つたのだろう。

違つんだよ、まあ、すぐにお付き合いとかは考えられないけどもうちよつと保留にさせてほしかったんだよ。でも、今更こつちから電話なりメールなりで言う事じゃないしなあ……。

ああ、なんだか悪い事をしたような、でも期待させて保留にした拳句にやっぱりゴメン、よりは良いような？ うう〜。

とにかくほろ甘いような苦いような心持ちでベッドの上に突っ伏している、いきなり背中の中のしつと重みを感じた。そのまま耳にふうつと息を吹き込まれて思わず悲鳴が上がりそうになった。あぶなっ！

「何てことするの、貫井さん！」

こんな事するのは彼女だけなので、振り向きもせず名指して抗議だ！

「んっふっふ〜。くうちゃん、卒業記念に一口ちよーだい？」

ほら、貫井さんだった。不法侵入だ！ いくら吸血鬼でもやって良い事と悪い事が……ないのかな？ あれ、そういえば吸血鬼って夜な夜な部屋に忍び込んで血を吸う魔物だ。良いんだ？

「私も卒業したんだから、記念品はもらうほうの立場じゃない？」

「ああ、そんなこと言っつていいの？」

貫井さんはさすが魔物らしく、ニタリと嗤う。

「今朝の騒動で、だいぶ憑かれたみたいよう？ ……一緒に、吸い取ってア・ゲ・ル」

そう脅された私は、素直に彼女に首を差し出すしかなかったのである。

確か彼女、このあと向原君とカケオチするんだよなあ。向原君、手紙くらいはご両親に残してくれるといいんだけど。

わりとたつぷり血を吸って満足したらしい貫井さんは、しばらく私の部屋に居座っていた。せっかくだからちよつと相談に乗ってもらおうと、人名は伏せて今日の事を話した。（貫井さんと向原君、あと葉月さんは、お別れ会にいなかったからな）

「それって、光山君と竜胆君でしょー？ あゝあ、残念。そんな楽しいことがあったなら出席すればよかつたあ」
即バレた。

もしかして私ったら、気が付かないのは本人だけ、のラブコメものの王道をかましてきたのだろうか。

いや、だつてさ、まさかわが身にそんなことが降りかかるとは思つてなくてね。そんな贅沢な話がまさか、まさか……！（くそう、惜しい事をした！）

「いいこと教えてあげる。くうちゃん」

気だるく天井を見上げて寝そべってる私の上に、貫井さんが覆いかぶさってきた。女の子同士でもこういう体勢はちよつと心臓に悪いのでやめてください。

「王子様なんて、いないの。だからみんな、少しずつ妥協して恋人をつくるのよ。でも……」

おおう、未だかつて無いほど真面目な顔で乙女の夢を叩き潰したよ、この人。

「それが最高の喜びだなんて誰が決めたの？ 一人でだって、幸せになれるわ」

自分は向原君みつけたくせにい！ となじると、貫井さんはまたニタリとわらった。

「あたしは、ながーい間一人だったの。その末に本物を見つけたの。人間みたいに、瞬きのような短い時間で嫌いになったり、しないの

よ。ああ、そうだ」

彼女は、すごくいいこと思いついた、という顔をした。あ、嫌な予感がする。た、たすけてえ。(じたばた)

「くうちゃんも、ヴァンパイアにしてあげよっか？ そしたらいつか、真実の愛がみつかるかもよ？」

どんだけ気長に探せつてのさ。いつか王子様が、と夢見て何が悪いのさあ！ かっこよくて、優しくて、強くて、賢くて、経済力があって、性格が良くて、私だけに一途な人を求めて何が悪い！

……いや、さすがにそれが想像上の生き物というか、ユニコーンとかペガサス並みにレアそうなのはわかるけど。でも吸血鬼も妖怪も宇宙人も妖精も漫画の中の人もいたんだから、いつかは会えるかもしれないよね？ ……長生きすれば。吸血鬼並みに。

「んふふ、その気になったらいつでも呼んでねえ」

じゃあ、サトルが待ってるからと、メアドを残して彼女は消えた。霧のように。私はその霧に向かって、「考えとく」と呟いた。

霧が、唾つように歪んで、とけた。

そういえば穂積さんのご両親に手紙を届けなくてはいけない。きつと驚いて、私に色々聞こうとするだろうなあ。うっかり余計な事言わないように気をつけなきゃなあ。

気だるさに身を任せたまま、私は、目を閉じた。明日からも、がんばらないと……。

ともあれ、一年間お疲れ様、私。おやすみ、なさ、い……。ぐう。

all...?

And that's

3月の脇役そのらく（後書き）

これにて高校3年生編終了です。

あとがきらしきもの、及び続編については活動報告にて。

* 完結したものの続編があるので、連載中そのままにしておきます。

高校編 エンドロール(前書き)

* 高校編のネタバレどころか、盛沢さんさえ知らない設定で盛りです。

* 長いです。

高校編 エンドロール

1番 青井 恵子（あおい けいこ） 4月

じれつたいキラキラ少女漫画主人公。ちよつとトロい。二言目には自分に自信がないようなことを言う。でも案外図太い。全体的にいろんな意味でタンポポっばい。自分ではヒマワリっばいと思っている。好きな色は当然黄色。

盛沢さんに強引に煽られて（？）勢いで赤井君にアタックしてしまった。おかげで今ではラブラブ。でも赤井君ってデートのときも手を繋いでくれないし、行き先も全部私に任せきりだよねえ、と悩んでいる。そのへんが不満。かなり不満。

将来の夢は可愛いお嫁さん。一軒家でガーデニングしてフリフリのエプロンで旦那様を迎えたい。（でも旦那様は赤井君とは限らないかもなあ、とちらっと思ったりもする）

2番 赤井 圭介（あかい けいすけ） 4月

自分ではとづくに付き合っているつもりだった青井さんから突然告白されて「アレ？」とビックリした。そういえばはつきり好きだとも付き合おうとも言ってなかったなあ、などと暢気な事考えながらも、未だに自分からは言い出した事がない。

青井さんは何でもリードしてくれるし、しっかりしてて良い子だよなー、と感心している。彼女に大満足。結婚したい。

将来はサッカー選手になりたいと本気で思っているが、そのわりにどこかの有名なクラブなんかには所属しようとはしない。いつか突然有名チームの監督から「キミはスターになれる！」とスカウトされるといいなあ、と夢見ている。

3番 桂木 蓉子（かつらぎ ようこ） 6月

凸凹ツンデレカップルのラブコメヒロイン。元気なお子様。見た

目も中身も小学生。(低学年)ツインテールが標準装備。実は合気道なんかをやっていて、何度もロリコンの変質者を病院送りしている。

無邪気で、言動に悪気は一切ない。でも無神経。ただひたすら目の前しか見えないイノシタイプ。反省する事もあるけど一回寝ると忘れる。新渡戸君と別れることは、多分ない。もしかすると大学生のうちに結婚するかもしれない最有力候補。

お料理をすると何故か食材が謎の物体Xに変質する。確かに食べられる食材を集めて作っているはずなのに、おかしいなあ。と悩んでいる。

4番 菊池 輝(きくち あきら) 2月

中川君が作ったリアルギャルゲーのプレイヤー。彼氏のいない子担当。(純愛モード)

中学時代は結構外見を気にしていてそれなりに爽やか少年だったのだが、好きだったアイドルが声をあてたギャルゲーに手を出したのが運のつき。最初の目的だったアイドルよりもそのキャラクター(美月ちゃん)が本命になってしまった。今でも美月ちゃんが本命。

実はたまに、そろそろ現実の女の子とも遊びたいんだけどなあ、と思ったりもするが、中川君が怖くてそんなこと言えない言えない。大学デビューを狙っていたのだが、うっかり外部受験するのを忘れていたために、結局このままで通すハメになるかもしれない。

密かな悩みは中学校のころの友達とすれ違っても誰も気が付いてくれないこと。

5番 光山 海人(こうやま かいと) 4月

ハーレクインロマンス要員のはずだったが、ちよつとした事故のようなもので悪い魔法使い(違)に。盛沢さんを昔飼っていた小生意気な犬に重ねて愛でているつもりなのだが、構い方がどこか間違っている。そういえばあの犬にもよく噛まれたり引つかかれたりし

たなあ、と、むしろ微笑ましく思っている。マゾというわけではない。どちらかというところサディストの傾向がある。(自覚アリ)

だんだん、嫌われるかもしれないギリギリのラインで彼女をいじる事に喜びを覚えはじめている、これではいけないと反省したりもする。(でもやめられない)

盛沢さんを本当に困らせていいのは自分だけ、なんて考えていたりして。

6番 篠崎 杏樹(しのざき あんじゅ) 12月

周りの迷惑を顧みない自信過剰不思議系少女。黙っていれば日本人形みたいな美人さん。

曾お祖母さんがすごい陰陽師だった、という話を祖父から聞かされて以来オカルト熱に火がついてしまった。力を与えてくれるアイテムの類を探して家の蔵やらいわくありげな神社やらを徘徊する日々。漫画みたいに「それ」を手にした途端ものすごい光があたりを包み込み、自分の運命が回り始めるのだと信じている。

考えが浅くて否定される事を我慢できない。でもほんとはすごく繊細で傷つきやすい。(扱いづらい)とにかく自分は特別だと思っている。祖父と父は普通の会社員。

好きな人物は自分に従う人。嫌いな人物は自分より目立つ同性。

7番 鈴木 久(すずき ひさし) 2月

くっ付いたり別れたりまたくっ付いたり、という、現代風の刹那的恋愛をこれから一生繰り返す人、そのいち。

1年生の時に振られた同士で夏目さんとくっ付いたが、実はお互い協力して本命同士を別れさせようという協定のもとにできた偽カップルだった。北条君と巽さんが破局した途端別れて、3日で巽さんをゲットした。かといって彼がそのまま巽さんをキープし続けるのが難しい事は重々承知なので、なんとか北条君と引き離そうと画策中。

表向き北条君とは親友同士だが、せこせこ嫌がらせを続けている。でも鈍い北条君には気付いてもらえない。悔しい。

8番 瀬名 くるみ(せな くるみ) 7月

魔女っ娘。妖精の女王親衛隊2の騎士、フェアリーストロベリー。テーマカラーは赤。最近の愛用の武器はロッド。(という名のメイス)

慌て者で、すぐに早とちりをする。彼女に話をするときはよくよく気をつけて先に結論を伝えておかないと、前半だけ聞いて暴走してしまうことがある。伝言ゲームが苦手。

ドジっ子っぽいところも可愛いと男子から人気があるのだが、まだまだ女の子同士でつるんでる方が楽しいと思っている。他人の恋愛の話聞くのは好き。

とりあえずその日一日を楽しく過ごせれば良いや、という思考の持ち主なので問題を先送りにしがち。夏休みの宿題は最後の一日に半べそかきながらやる。

9番 滝川 涼(たきがわ りょう) 1月

一攫千金を目指して茨の道を選んだ人。最近マスコミが、ネットなどを駆使して成功した人達を「現代の錬金術師」とか持て囃しているのを聞くたびに激昂している。アイザック・ニュートンよりカリオストロ伯爵が好き。つまり、より胡散臭い方が好き。

理屈っぽくて神経質。気に触る事、理屈に合わない、「彼が」感じることもあると、なんとかそれを軌道修正すべく何時間でもじっくり説得しようとするので皆から遠巻きにされている。空気? 読めないがそれが何か? そもそも空気というのは空中に漂っているものであって目に見えるものではないだろう。それなのに何故「読む」という言葉を……。 (えとせとらえとせとら)

感情論が低俗だと思っている。けれども感情だけで動く米良さんに弱い。

10番 巽 文香(たつみ ふみか) 2月

くっ付いたり別れたりまたくっ付いたり、という、現代風の刹那的恋愛をこれから一生繰り返す人、そのに。

根っからの恋愛体質。というより恋愛依存症気味。日常生活に支障をきたすレベル。

1年生の時にクラス中を巻き込むほどの恋愛劇を繰り返してやっ
と落ちていたくせに、2年に上がってクラスが別れたとたんに他の
男の子に心がぐらついたりした。常に構われていないと寂しくて不
安定になる。正直、構ってくれるなら恋人は誰でも良い。むしろ予
備がほしい。というわけで、鈴木君と北条君、両方ともキープして
いたい。

女友達は少ない。自分以外の女の子なんていなくなっちゃえばい
いのに、と思っている。

11番 手越 晶(てごし あきら) 10月

世界に自分を合わせるのではなく、世界を自分に合わせようとす
る迷惑な人。思い込みが激しいのではなく、そうやって他人を振り
回すのが楽しい。性質が悪い。

実は想像で日記を書いており、その中身は波乱万丈。日記の中の
彼女は転生した女神で、なんでもできて、人々にかしずかれている。
日記帳に鍵はかけていない。閲覧自由。

今のところお気に入りの漫画は『Reincarnation
of the last edge』で、中でもカップというキャ
ラが好き。これと決めた作品、キャラには身も心も入り込むクセが
ある。それがどんなに無理のある設定でも頑張ってしまう。周囲の
評価など全く気にしない。

日常的な不満は、幼馴染二人がイマイチ漫画にキャスティングし
にくい人物であること。

12番 中川 真人（なかがわ まさと） 2月

リアルギャルゲーの製作者。かなり悪意のこもったプログラムを組んであった。

とんでもなく横暴な姉と反抗期の妹に囲まれていて、女性恐怖症を通り越して完全な女嫌い。仮想空間の女の子だけが彼の天使。リアルの子を褒める言葉などを聞くと鬼神が光臨したかのように荒ぶって否定する。ただし、アイドルをキャラクターに置き換えたようなゲームには肯定的。何故ならそれはリアルではなくて虚構だから。

千夜一夜物語にでてる、女性不信になった王様にいたく同情的。彼がシエヘラザードによって言いくるめられてしまった事が悔しくてならない。（彼女も虚構なのに）

リアルを女性の目の前にと身体が硬直するので、多分犯罪には走れない、はず。

13番 中山 飛翔（なかがやま ひしょう） 5月

正義のスーパー戦隊所属。レッド。ケセラン様のせいで一度死んで蘇った。レッドといえばリーダーだが、蓋を開ければケセラン様のお世話係やら雑用係になっている。でも基本的人にお人よしなので特に不満はない。

両親は喫茶店を営んでいる。コーヒーが美味しい店。たまに店番を任されながら「あ、この仕事って秘密のヒーローに向いてるか」とか考えたりもする。一生こき使われ続けることを半ば覚悟してしまっただけ。

敬語と丁寧語の区別がつかない。国語と英語の成績は常に壊滅的。意外と暗記力に優れているので、盛沢さんによって教科書を丸々詰め込まれた。でも来年にはきつと忘れてる。

14番 夏目 静（なつめ しずか） 2月

くっ付いたり別れたりまたくっ付いたり、という、現代風の刹那

的恋愛をこれから一生繰り返す人、そのさん。

美少女ストーリーカー。北条君とは生まれた時から赤い糸で繋がっているのだと頑なに思い込んでいる。彼が巽さんとかくつ付いてしまったのは若気の至りで、そのうち真実の愛に気が付いて自分のもとへ戻ってくると信じていた。北条君と同じ空間で呼吸する女の子たちを抹殺したいくらいに彼が好き。

当然、巽さんが嫌い。嫌いで嫌いで、丑の刻参りが欠かせない。たまに暗がりでこけるので生傷が耐えない。ますます巽さんが憎くなる悪循環。

15番 新渡戸 哲夫（にとべ てつお） 6月

凸凹ツンデレカップルのラブコメヒーロー。見た目は大人、中身は子供。常に眉間に皺が寄っているが、悩んでいるわけでも怒っているわけでもない。コンタクトレンズを入れると涙がとまらない、けれども眼鏡をかけると父親（52歳）と瓜二つになってしまうので断固として裸眼で頑張るド近眼。

見た目に反して身体が弱く、ありとあらゆるアレルギーを持っている。子供の頃は喘息もひどく、病院から学校に通うほどだった。胃腸も弱い。

なのに桂木さんの作った料理は食べられる。彼のこの体質は愛の力というものをもう一度信じさせてくれる奇跡だと噂されている。

16番 貫井 菖蒲（ぬくい あやめ） 9月

吸血鬼。自分が何年生きているのかはもう分からない。実は男にも女にもなれるが、向原君を見つけてからはずっと女性の身体。盛沢さんにちよっかい出す時もこっちの身体の方が警戒されにくくて便利だし、と思っっている。

基本的に向原君のこと以外はものすごくどうでもいい。盛沢さんはお気に入りだけど、困っている顔の方が好きなのでわざわざ助けてあげることはいらない。ただし、美味しいおやつとして「乙女」で

あり続けるための手助けは惜しまないつもり。

幼稚園児に目をつけたのは別にシヨタコン的嗜好からではなく、他の人間に汚されないうちにいい物件を見つけておこうという、所謂青田買い思考。

17番 根岸 きらら（ねぎし きらら） 5月

正義のスーパー戦隊所属。ホワイト。ケセラン様のせいで一度死んで蘇った。5人のブレイン的存在のはずだが、よくよく考えるとこの戦隊は別に頭脳戦などしていないわね、と悩んでいる。支給される圧倒的な火力を誇る武器でひたすら敵を倒し続ける日々嫌気が差している。将来は警視庁に入りたかった（ドラマの影響）が、残念な事にこのままでは夢がつかないえそうな気配濃厚。なんとかしてケセラン様を亡き者に、とは思うものの、殺生に抵抗があるらしい。とりあえずアイツが左遷されたら良いのに、と願っている。

小学生の頃、林間学校の飯盒炊爨で作ったカレーを鍋ごと落とした事がある。以来、カレーがトラウマになった。

18番 野島 翠（のじま みどり） 12月

幼稚園児の頃は人見知りで苛められっ子だった。ある日、神社に閉じ込められ泣いていたところを篠崎さんに救われ（彼女はただ日課の、怪しい場所めぐりをしていただけ）それ以来、盲目的に篠崎さんに従っている。野島家の人々にとっては、かつて篠崎の家に住んでいた事は黒歴史みたいな認識で、この状態に良い顔をしてくれない。

彼女自身には少し霊的な力があり、うっすらとだが「見える」。でも篠崎さんが黒といえば白も黒。というわけで、盛沢さんに対する理不尽な疑惑を諫める気はこれっぽっちもない。篠崎さんの気に触る存在だから悪い、みたいな。とにかく篠崎さんラブ。一にも二にも篠崎さん。同じく彼女に纏わり付いている村山君が目障りで仕方ない。

19番 葉月 千賀子（はづき ちかこ） 11月

恋人を追いかけて、弟のふりをして男子校に入り込むというスリリングな事をする人。本当はずっと入れ替わっていたのだが、弟が嫌がるので月に一回しか会いにいけない。

弟と入れ替わると何故かモテモテになる。学校中の生徒どころか教師達からも熱い視線を送られてしまうので、うちの弟は普段どんな生活しているのかな、と心配している。けれどもその現象は、彼女が入れ替わっている時にだけ生じるという事実は知らない。

女の子である事がバレそうになったドキドキ事件、弟の親友と体育館倉庫に閉じ込められる事件、恋人といちゃついている所を目撃されて疑われる事件などたくさんネタを持っている。（でも何一つ活かされない）

弟の恋人になつたルミちゃんが苦手。既に「将来のお姉ちゃん」扱いされて無駄に懐かれ困っている。この二人がこのまま結婚したら私は実家から離れた所に住もう、と思いつめるほど苦手。

20番 平井 篤（ひらい あつし） 10月

困ったクセをもつ幼馴染の女の子に振り回される可哀想な男の子そのいち。何とか手越さんの趣味をもつと差し支えなさそうなものに変えようと悪あがき真つ最中。望み薄な事には気が付いている。でもがんばりたい。平和だったあの頃の3人に戻りたい。

親友の山岸君とは手越さんを挟んでの三角関係で、律儀な性格ゆえ抜け駆けもできないし、かといって気持ちは簡単に変えられない。すごく面倒な状態で膠着している。

剣道部所属で、竜胆君と仲が良い。盛沢さんへの好意に一番初めに気付いた人。俺のことは構うな、お前だけは幸せになつてくれ、という気持ちで後押ししようとするのだが、所詮本人の恋愛も御せない人なので戦力になりきれない。

21番 氷見 良子（ひみ りょうこ） 7月

魔女っ娘。妖精の女王親衛隊1の騎士、フェアリーオレンジ。テーマカラーはオレンジ。

必殺技は『フェアリー・プリフィケーション』という名の踵落とし。背が高くて脚が長いのでキレイに決まる。

小学生の頃は無愛想であり友達ができなかったので、中学校入学以降努めてお調子者を演じている。……はずなのだが、だんだんどっちが本当の自分だか分からなくなってきた。少なくとも今のほうが楽しいなあ、と思っている。

天敵はお向かいの家の大型犬。子供の頃、脱走した彼にのしかかられて顔中涎だらけにされて以来、背中を見せられない。家の数メートル手前から力二歩きで警戒するのが日課。

22番 福島 樹（ふくしま いつき） 5月

正義のスーパー戦隊所属。ブルー。ケセララン様のせいで一度死んで蘇った。常にダルそうな現代っ子。何をやるにも二言目には「だりー」と言ってしまうが、別に本気でだるいと思っっているわけではない。あくまでそれは口癖。

しゃきつとして普通の格好をすると割と地味な子。そんな自分をなんとか魅力的にみせようと頑張った結果、みんなから「ホストっぽい」と言われる今の状態に落ち着いた。まあ若いうちは遊んでるっぽく見えてもいいか、とその評価に甘んじている。

子供の頃の夢は「ふっりのサラリーマン」だった。今は、もはや働かせてもらえるのならどんな仕事でも良い、と思い始めている。実は一番地に足のついたことを考えている人。

23番 北条 昭洋（ほつじょう あきひろ） 2月

くっ付いたり別れたりまたくっ付いたり、という、現代風の刹那的恋愛をこれから一生繰り返す人、そのよん。

無責任な口約束を悪気なくばら撒くタイプ。天然のお調子者。簡

単に「絶対」とか「一生」とか口にする。その時は本気で言っているつもりなのだが、後から考えてやっぱり無理かも、と思うと平気で反故にする。実は夏目さんのことを未だに思い出せない。自分に悪意がないので、他人からの悪意にも鈍感。何でも笑って許せてしまっ。

巽さんのことは確かに好きだったけれど、彼女の異常なほどの構ってオーラに辟易していたので、別れ話が持ち上がったとき正直ほっとしていた。

24番 穂積 万理（ほづみ まり） 8月

とある世界の「月の巫女」様。こちらにいた頃は地味で、自己評価も大変低い子だったが、世界を渡ってからどんどんアグレッシヴに成長した。もともと資質があっただと思われる。大変できのい姉と弟に囲まれて、常に居心地の悪い思いをして暮らしていたために、コンプレックスから開放されてはっちゃけたともいえる。

生贄にされそうだったところを助けられて逃走したあと各地を転々としてつつ人心を掌握し、国を作った。そのまま無駄にいがみ合う国々を破竹の勢いで制圧し、とうとう帝国を築き上げた。

やがて「太陽王」と呼ばれる金髪金目の男性（この人は穂積さんより前にどこから召喚されていて、太陽信仰派の旗印になっていた）と出会い、電撃結婚。現在5歳になる息子がいる。

結局誰に呼ばれて世界を渡ったのかは分からない。旦那と二人で「きつとここでこうして出会うために、魂がお互いを呼んだに違いない」「ええ、そうね。きつと……」ということに納得している。

25番 松澤 賢治（まつざわ けんじ） 2月

中川君が作ったリアルギャンルゲーのプレイヤー。彼氏もち担当。

（略奪モード）

実は眼鏡を取って髪型を整えるとあら不思議、超美形。中学時代にモテすぎて遊びすぎて、刃傷沙汰に巻き込まれて以来、あえて女

性には興味がないキャラを演じている。

とは言いつつも、ギャルゲーは大好き。8股かけても刺されないし、揉めないから。でもちよっと物足りないんだよなあ、さわれないから。

中川君の女嫌いつぷりに心の中で大爆笑している。菊池君の、興味があるのに言い出せない初心さ加減も微笑ましくて思わず指差して笑いたくなる。そろそろこの演技も飽きたし、大学に行ったらスツパリ縁を切って元に戻ろう、と思っっているが、果たして……。

26番 水橋 奈々枝（みずはし ななえ） 5月

正義のスーパー戦隊所属。ピンク。ケセラ様のせいで一度死んで蘇った。テニス部のマスコットの存在。元気で可愛い。性格も可愛い。下の学年の子からも、影でコッソリ「ななちゃん」呼ばわりされている。本人は気にしていない。あまり上下関係にうるさいと雰囲気悪くなるからねえ、と笑って許している。

容姿に反して悪趣味。ぶさかわいいキャラクターグッズを集めている、と本人は言うが、友人からは不気味キャラクターグッズのマニアと思われている。

スーパー戦隊ものは見ないで育ったので、イマイチ設定が理解できない。「何で赤が男の子なのー?」「くらいの知識のなさで、ピンクのポジションも分かっていない。

27番 村山 光（むらやま ひかる） 12月

普段は冴えなくて気の弱い男子。しかしてその正体は、実力派の鬼。かつて篠崎さんの曾お祖母様の杏さんに捕らえられ、退治される代わりに仕えることになったのだが、いつのまにか憎い敵であるはずの彼女に本気でほれ込んでしまった。結局彼女と結ばれる事は叶わなかったが、生まれ変わってまた逢いましょうという約束を真に受けて、篠崎家をずーっと守り続けていた。ある意味、それは世代を超えたストーリーカー行為の域。

篠崎さんが杏さんに生き写しなので、彼女こそが生まれ変わりだ
と思っっているのだが、色々違うところがありすぎて「ただ似てるだ
けの別人か？」と考え込む事も多々ある。けれども馬鹿な子ほど可
愛いというか結局絆されてしまった。惚れっぽいだけかもしれない。

28番 向原 悟(むこうはら さとる) 9月

吸血鬼の花嫁。(ここがポイント)

幼稚園児の頃に貫井さんに目をつけられ、もともとぼーっとした
少年であったためにうまい具合に言いくるめられ、彼女に永遠の愛
を誓ってしまった。後悔はしていない。

高校を卒業したら貫井さんに眷属として迎えられて、そのまま駆
け落ちする予定。ゆえに内申点も成績も、人間関係も何もかもどう
でもいい。そもそも貫井さんと出会って以来慢性的に「原因不明の」
貧血なので、あまりうるさく言われなかったのも彼が無気力に育っ
てしまった一因である。

最近の悩みは、貫井さんが盛沢さんと浮気(言いがかり)するこ
と。でも耐える妻。

29番 米良 桃果(めら ももか) 1月

いわゆる腐り気味の女子。ノーマルから同性もの、ほのぼのから
鬼畜系、少女漫画からロボットアニメまでなんでもいける。ちょっ
と面白いところがあればなんにでも飛びつくので、漫研仲間からは
無節操と思われる。

漫画やアニメから聞きかじった知識でうんちくを語ることもある
が、それはその作品独自の解釈である、とされていることも一般常
識だと思っっている。あるゲームの影響で神様の名前をたくさん知っ
ている事が密かな自慢だが、ギリシャ神話も北欧神話もキリスト教
の天使の名前も全部ごたませ。でもゲーム上でのステータスは事細
かく頭に入っっている。両親からは脳みその無駄遣いと怒られるが、
不思議と勉強は頭に入らないので仕方ない。

30番 盛沢 久実（もりさわ くみ）

とにかく脇役。惜しい所まで行くけどチャンスを見逃しやすくってやっぱり脇役。彼女は皆様の心の中にいます……。

31番 山岸 貴史（やまぎし たかふみ） 10月

困ったクセをもつ幼馴染の女の子に振り回される可哀想な男の子
そのに。手越さんの趣味には、もう一生付き合い続ける覚悟ができた。親友の平井君の努力を生ぬるい視線で眺めつつ、彼女の気に入りの漫画を徹底的に研究する日々。でも残念ながら、彼女の好む漫画の男性キャラはいけ好かないかっこつけヤロウばかりで、自分になりきれそうなキャラがないなあ、とガツカリしている。一縷の望みを託して格闘漫画とかスポ根漫画なんかを彼女の部屋にそっと置いてくるのだが、全部資源ゴミに出されて悲しい。

最近手越さんがやたらと盛沢さんの話題ばかりするので、とうとう百合モノの漫画に手を出されたらどうしようかと戦々恐々している。

32番 由良 明子（ゆら あきこ） 7月

魔女っ娘。妖精の女王親衛隊3の騎士、フェアリーピーチ。テーマカラーはピンク。家庭的で優しい性格の子、のはずだが敵をやっつける時には情け容赦が無い。蹴り技がどんどん上手になってきている。最初は戦う事に抵抗があったはずなのだが、流行の格闘系エクスサイズだと自己暗示を掛けている模様。おかげで楽しくなってきた。

趣味は料理及びその道具を集めること。良く砥がれた包丁をみるとうっとりする。彼女の家のキッチンがプロ仕様。最近は何に食に対するこだわりが募ってきて、麺類も粉から作る。いずれは粉を挽くところから作りたいなあ、とか本気で考えている。（特にお蕎麦）
そんなに料理が好きなのに、なりたいものはツアーガイド。趣味と仕事は分けるタイプ。

33番 竜胆 宗太(りんどう そうた) 5月

正義のスーパー戦隊所属。ブラック。ケセララン様のせいで一度死んで蘇った。古くから続く剣道道場の跡取り息子。幼い頃から祖父に剣道と、武道とはなんぞやという精神論を叩き込まれて育った。父親は剣道よりも本が好きで、道場に古書店を併設して商い始めた。あまり軌道に乗っているとはいいがたい。祖父の教育の賜物か、全体的に古風な子。恋愛観も古風。お年頃の男の子らしい欲求もあるのだが、盛沢さんを神聖視しすぎていて、そういう考えを抱く事自体に罪悪感を覚える。

盛沢さんが光山君と良い雰囲気(誤解)になっているのを見て、自分の出る幕じゃないなと思いつながらちもやっぱり気になって仕方が無い。

キュピル(きゅぴる) ?

春の妖精。多分、齧ると甘い。

女王の側近候補のトップ。想像しがたいほど暢気な妖精の国の中では気が利くほうで、かなり優秀。しかしせっかちな現代日本人と比較するとお話にならない。

その時の気分を何でもかんでも適当な歌にしてしまう。いつか自作のアルバムを作るのが夢。

クローバーさん(くろーばーさん)

『Nobody』という組織の幹部。気まぐれで短気。すぐに銃をぶっぱなす。

遺伝子をいじって超能力をもったクローンを作り上げる、というプロジェクトにおける失敗作。身体能力の向上はあったものの、他の幹部達のような異能は持たない。故に、常にアイデンティティークライシスと戦っている。

ケセララン様（けせらんさま）？

どこかの星からやってきた宇宙警察。本人は絶対認めないが、所謂左遷扱いで辺境の星を次々と渡り歩き、とうとうこれ以上ないというほど飛ばされた結果が地球担当。

実はよく見ると申し訳程度に手足がある。けれども彼をよく見る人などいないので、手足の存在に気付いてもらえない。

葉月 千晶（はづき ちあき）

葉月 千賀子さんの弟。中学生。並べて同じ服を着ると両親でさえ間違えるほどそっくりで、姉のわがままに付き合ってたまに入れ替わっている。

お蔭で姉の恋人との仲を噂され、疑いを晴らすために彼女を作ろうと焦って適度に好みだった盛沢さんに告白してみたものの、幼馴染のルミちゃんと心が通じ合ったのですぐにどうでもよくなった。恋人ができたとたんに調子に乗るタイプ。うざい。

ファイフィーちゃん（ふいふいーちゃん）

穂積さんが召喚された遺跡を所有する国の王族。正しくはファイフィーナ。真珠色でくるくるの巻き毛をした愛くるしい幼児。天使そのものだった。王様の末娘（！）にあたる。

ユーシウス殿下が起こしたクーデターにより軟禁されるものの、穂積さんの働きで解放され、以降彼女に仕えることになる。初恋の人は「月の騎士様」。憧れの人は「もう一人の月の巫女姫」。

保健室の先生（ほけんしつのせんせい）

宇宙征服を企んだかどで犯罪者として追われる身となり、一族ごと地球に逃げてきた宇宙人の子孫。とりあえず何かを征服してみたい、ただその一心で計画を立てたものの、そのあとどうやって運営するのか全く考えていない。お勉強はできるが頭は悪い典型例。

信楽焼きの狸によく似ている。

穂積さんとこの王様（ほづみさんとこのおうさま）

穂積さんが召喚された遺跡を所有する国の王様。悲観主義で、物事は必ず最悪の状態で終結すると信じていたため、穂積さんの脱走はある意味想定内の範囲であった。しかしスペアの盛沢さんにまで逃げられたのは想定外で、シヨックで倒れてしまう。

その隙に孫のユーシウスにクーデターを起こされ、離宮に愛妾達と共に軟禁されるが、おかげでストレスから解放され元気になった。結果、世界の長寿記録を塗り替え、大往生。

穂積さんの旦那様（ほづみさんのだんなさま）

どこか遠くの世界から召喚され、「太陽王」とまつりあげられた人。もともとの世界でも王族で、ちょうど後継者争いの戦争真っ最中であつたのだが、帰れないのでは仕方ないと早々に割り切つて新しい世界に順応した。

そこで覇王道を突つ走るつもりだったのに、穂積さんと出会つてふおーりんらぶ。彼女を女王に据え、自分はその補佐役におさまつた。ほぼ恋の奴隷状態。

リリア姫（りりあひめ）

フォレンジアの姫君。三女。天真爛漫で細かい事を気にしない。人の言う事はあまり聞いていない。大抵が生返事。「だめ」といわれた事も平気でやってしまい、あとから「あれ、いけなかったの？」と言つタイプ。

生まれつき魔法の才がとびぬけており、無意識に力を使つてしまふ。一番の悩み事は、寝相が悪く寝ている間に宙に浮いている事。

ルミちゃん（るみちゃん）

葉月（弟）の幼馴染。気が弱く（自称）いつも言いたい事の1/3も伝えられない。代わりに口達者で気の強い親友二人が勝手に話

を進めてくれるので、不自由した事はない。

葉月（弟）とくっ付いたが、実は彼氏がいた。その彼氏に別れ話をしたのも親友二人で、本人はずっとうつむいてぐずぐず泣いていただけ。基本的にズルイ。

ルビア姫（るびあひめ）

フォレンディアの姫君。次女。自分に厳しく他人に厳しい、キリつとした人。完ぺき主義者で、若干ヒステリック。「女の身で……」と陰口を叩かれるたびに男に生まれていればと悔しがっていたが、光山君に恋をしてからは考え方が変わった。

結局失恋してしまっただが、恋敵の盛沢さんに対しては憎しみなどなく、「なるほど、あのように一見頼りなさそうなのに気が強い、というのが有利なのね」と感心している。

レミア姫（れみあひめ）

フォレンディアの姫君。長女。次期女王様。おっとりしているが、行動力はある。

実は幼い頃から隣国の王家の次男と婚約しており、「宰相様の「婚約」を機に結婚式の準備が着々と進行中。恋愛感情はないけれど、これも運命かと受け入れている。

妹たちがどうも「一般的な姫君」から外れている事が悩みの種。ルビア姫が狩猟会に参加したり、リリア姫が窓から外へ飛んで行ったりするたびに眩暈がする。

ユーシウス殿下（ゆうしゅうすでんか）

穂積さんが召喚された遺跡を所有する国の王族。王様の長男の第一子。自分のことを野心と才気に溢れていると勘違いしている。

側近たちに唆されてクーデターを起こしたのは良いものの、親族に手を掛けるほどの非情さはなく、全員軟禁に留めた。やがて穂積さんの軍隊に制圧、追放され、あてどなく彷徨ううちに小さな村の

宿屋の娘と恋に落ち、結婚。宿の仕事にも慣れ、気性も穏やかに
なった。現在8歳になる双子の女の子の父親。名前はそれぞれマリ、
クミ、という。

再び春休みの脇役

3月、私は忙しかった。とつてもとつても忙しかった。

大学生になる準備と引越しの準備、ここまではまあ、多少差はあれど誰にでも共通する忙しさだと思う。家具を揃え、家電を揃え、電話にネット、水道電気の契約。(オール電化なのでガスは省略ね)

けれども、異世界の宰相様の婚約者(偽、ですよ！ 仮、ですらないからね！)とか、地球を守るヒーローたちの助手(彼らを学力低下から守る大事なお仕事)とか、妖精界の女王様を巡る小競り合いの見学(戦い、なんていう崇高なものじゃないと思うんだよね)とか、吸血鬼のオヤツ(小腹が空くとやってくる)なんてものを兼任している人間は、そうは居まいよ。あと、容疑は晴れたけど妖怪(しかもためき)として退治されかけたりな！

忘れてはいけないのが、異世界に巫女姫として召喚されたまま行方不明になった穂積さんのお手紙だ。いやあ、大変だった。

穂積さんに頼まれたとおり「シューズボックスに入ってたんです」と言つてご家族に届けたんだけど、「元気でしたか?」「いまだここにいるんですか?」と質問攻めにされて……。知らんっちゃゆるの。あ、いや、知ってるんだけど言えないというか、言ったら正気を疑われるに違いなくてね。

異世界で帝国をつくって女王様してます。やたらと尊大で美形な旦那様と、将来が楽しみで仕方のないお子さんに囲まれて生き生きしてます、なんてさあ。

ああ、ざっと思い返しただけでも眩暈がする。おかしいなあ、一昨年までは、確かに色々あったけど、どれも「誰にでも起こりうる

トラブル」の範囲内だったのになあ。

なんでいきなりファンタジーに巻き込まれちゃったんだろう。

忙しかったのはファンタジー関連だけではない。

こっちはちよつと自業自得というか、うん。エイプリアルフルに気合入れて嘘ついたら大変な目にありました。てへ。みたいな？

でもそのゴタゴタのお蔭で卒業式に大変な誤解をさせて傷つけてしまった竜胆君との関係も修復することができたので、結果オーライ……ではないね。大変だったもん。うっかり実家にいるときにやらかしちゃったものだから、面倒な連中が押しかけてきたりしてね……。八八八。

篠崎さんから「永遠のライバル（好敵手と書くらしい）」宣言されたたり、手越さんから「潜入捜査の一環で偽装結婚をする際の心得」なんかを説かれてみたり。ほんと、面倒な連中と関わってしまったばかりにいらん気苦労が増えたよね。

正直、こっ、竜胆君に対する後ろめたさよりも、あとに起こった騒ぎの収集に費やされたエネルギーのほうが大きかった。光山君もなんだかんだ言ってるけど根に持つてらばいしさあ。ち、面倒な男だ。別に恋人でもないのに。あんな可愛くて無邪気な嘘くらい笑って流そうよ。

光山君といえば、大方の予想通り最高学府の医学部に合格したらしい。意外性は全く無かったんだけど、発表当日にチェーンメール状態で情報が回ってくるとか、どういうこと？ 注目されすぎるのも大変だなあ、って思わず同情しちゃったよ。他人事じゃないのに。

5人戦隊は付属の大学に進学したし、魔女っ娘たちはやつぱり付属の短大に進んだ。よしよし、ここまでは予定通り。（別な大学に

行つてそのままフェードアウトするぞ計画)

貫井さんは……あのひと、神出鬼没だから、気が付くと人のベッドの上でくつろいでるだけだね。そして一通り向原君とのノロケを聞かされて血まで吸われるという。

あれ、このままだともしかして彼女からは一生逃げられない？ え、どうしよう。彼女、本に書いてあるような吸血鬼の弱点なんかも全く関係ないみたいなんですけど。

まあ、なんにせよ学校が離れたくらいで縁が切れるなんて樂觀できないのは薄々分かつてるんだけどね？ だって、光山君は当然都内だし、付属の大学も短大も、キャンパスの一部はやっぱり都内にある。加えて、どうせ魔法とか宇宙の超技術なんてものを使う連中なので、地図上の距離なんてきつと関係ないと思うんだ。

大事なのは心の距離。(私としてはこれも遠いつもりなんだけどなあ……)

私の引越し先は、実家から電車で1時間弱。都内のターミナル駅から徒歩10分の距離にある。ここから大学までは、徒歩の時間も含めて片道40分になる。

せつかく引つ越すんだから大学の最寄り駅にしとけばいいのに、と魔女っ娘たちから突っ込まれたけど、まあ、落ち着きたまえ。これには訳があるのですよ。

実はこのマンション、我が家の持ち物なんだ。しかも新築。

私は大学生の傍ら、マンションの管理人という肩書きを背負う事になったのですよ。

マンションは打ちっぱなしコンクリートの3階建てで、コの字型をしている。エントランスはエキスパンドメタルの門になっていて、

オートロック式のガラス戸がついている。

3階部分がオーナールーム兼管理室。1、2階にメゾネット6部屋と、1Kを2部屋用意してある。いわゆるデザイナーズマンションなのでちよつと家賃が割高なものと、完成したのが今年の2月だったので、まだ住人さんは二人しかいない。

これが建ちあがるまでにも、ちよつと信じられないような事件（？）がいくつか起こったわけで……。まあ、それでもなんとか完成までこぎつけたのだから今は良い思い出だ。何か起こるたびに「私の体質のせい？」とドキドキしていたのも、良い思い出。（自己暗示自己暗示）

私の管理人としての初のお仕事は仲介業者さんが連れてくるお客様のご案内だった。

サービス精神旺盛（若干不本意ながら）の私にこの仕事は合っているらしくて、一週間もすればすっかり慣れて、近くのコンビニ、駅までの抜け道などの案内やらもちゃんとできるようになった。さすが私、やればできる子！（ふふん！）

その甲斐あつて決まった最初の住人さんは103号室、浅見 幸恵さんである。私と同学年で、4月から大学生になる女の子だ。学校は違うみたいだけど。

なんとというか、ちよつとドジっこ属性なのかもしれない。とにかく挙動不審で、壁のあちこちにガンガンぶつかっては「ごめんなさい、ごめんなさい！」と繰り返していた。そんなに狭い造りじゃないんだけどなあ……。一緒にいらしたご両親は慣れたもので、「あらあらこの子ったら」「ははは、もつとしっかりしなきゃダメだぞお」なんて暢気に笑っていたけれど、そういうレベルじゃないと思う。

だって、ぶつかりまくったあげくに断熱用のボードが張ってある

部分に穴を開けてしまったくらいだから。結局その弁償も含め、入居が決まったのだが……。若干不安だ。

そんな経緯で、彼女は1Kタイプのお部屋に入ったのであった。

二人目の住人さんも、多分大学生だろうと思うのだが実はよくわからない。

お部屋を案内している間中お母様の言葉に控えめに微笑んで頷くだけ。借主はお母様だし、なんとなく「息子さんは何をなさってるんですか？」とか聞きにくい親子というか。独特な空気が漂っていて、入り込みにくかったというか。

えーっと、もしかしてマザコンさんですかね……？

彼は、ちょっと変形しているけれど一番広いメゾネットのお部屋、101号室の住人になった。名前を神宮司 拓馬さんという。ああ、惜しいなあ、見た目も結構良いのにマザコンはなあ……。って、別に関係ないんだけどね。他の住人さんやご近所の皆様とトラブルを起こさず、お家賃をきちんと入れてくだされば構わないんだけどね？

とにかく、こんな感じで私の貴重な春休みは消費されてゆき、とうとう明日は入学式である。春休みから早速いろいろあったおかげで既に疲れ気味なんですけど。

もはや「何にも巻き込まれず平穩無事に過ごしたい」なんて高望みはいたしません。どうか、どうか、「常識の範囲内のトラブル」が起こりますように！

無駄な足掻きとはいえ（既に諦め気味）願わずには居られない、4月某日の夜のこと。

四月の脇役 その一

顔を洗ったら化粧水を念入りに染み込ませて、ほっぺの手触りがぶにぶにっとしてきたら日焼け止め入りの乳液を塗る。そして、ベビーパウダーでかるーく整える。ここまでは高校生の頃と同じ。

大学生になって付け加えたのはビューラーでまつげを持ち上げる。そして、リップの代わりに薄いグロスを塗ること。

大学生になったのだからとはりきって目力メイクなんぞした日には、あわれ目玉のお化けのようになってしまつので（だって元々目はつきりしてるんだもん）、私はあえて薄化粧で勝負だ。何と戦うのかと聞かれると答えに窮するけど。

えーと、まあ、あれだ。『男子家を出ずれば七人の敵あり』という諺があるけれど、女の子も外に出ると色々大変なのだ。世間の目とか。化粧は女の戦闘準備だと言うからね！ いつでも臨戦態勢、これが大事。

お次は性格を反映したかのように毛先だけあちこちはねている髪を、ヘアアイロンで頑張つて伸ばす。（最後はいつもあきらめるんだけど）

あとは、ワンピースにカーディガンという簡単コーディネートで「盛沢 久実、大学生バージョン」ができあがった。

よしよし、派手すぎず地味すぎず、悪目立ちしない程度になつたな、とエレベーターの鏡で最終チェックして、お気に入りのバレエのストラップをとめて、今日ばかりは最初から付き合ってくれるという母と一緒に玄関を出た。

……卒業式と入学式の違いつてなんなんですか、お母様。卒業式は気が進まなくて入学式は張り切ってるのはどうしてなんですか、

お母様！

学校にたどり着き、早速校門と桜をバックに記念撮影。基本だし、このくらいは撮っておかないと。基本的に写真は苦手だけどね！

誰かと約束があるという母を校門に残し、私はさっさと一人で受付を済ませ会場に入った。母もこの卒業生だから、もしかするとお友達の子供も入学したのかもしれない。

親同士が友達だとなし崩し的に子供同士も友人になることを期待されるものだから、なるべく顔を合わせないようにしては。 (だってその子と私の相性がいいとは限らないじゃないか)

入学式はとても退屈に進んだ。学長先生の挨拶は流石に背筋を正して拝聴したけれど、あとはもうダルダルだ。

次々にマイクの前に立っては似たようなスピーチをするなんとか議員のなんとかせんせいの話なんて、関係者以外一体誰が真剣に聞いているっていうの？ 楽しい？

ところが、いい感じに半分うとうとしかけた私の耳に、とんでもないアナウンスが飛び込んできた。

「入学生、代表。経済学部、光山 海人君」

「はい」

やけに通る、甘い声が、会場に響いた。

そして、同姓同名の似たような声をした別人かもしれない、なんて希望的観測で現実逃避する間もなく「ヤツ」が壇上に現れると、会場全体に漂っていた眠気が吹き飛んだ。こう、色めき立ったというか？ 主に女の子たちの目つきが変わったというか。

……え。アレ？ なにがおこってる、の？

それから式が終わるまでの記憶がほとんどない。寝てたんじゃなくて気絶してたんだと思う。

式が終わり、ふわふわした足取りで（浮かれて、じゃないよ？）母を探して校門までたどりつくと、なんだか見たことのあるようなないような女性と楽しそうにおしゃべりをしているのを発見した。背がすらっと高くて色素が薄くて、目鼻立ちがパツチリしてて……。誰かに似ている。誰かっていうか、ええと。

声をかけるのがなんだか怖いような気がして（だって、だって！）そっと近づくと、その女性が私に気付いてにこりと微笑んだ。

「まあ、クミさんね？　すぐにわかったわ。初めまして。息子がお世話になっております」

「あら、久実ちゃんったら。声かけてくれたらいいのに」

「……ごめんなさい、お話の邪魔しちゃ悪いと思って」
「なんだか盛り上がっていたような気がするしね。ああ、恐れていた事態が着々と進行していく気がする。母親同士が仲良くなって、盛り上がって、のパターン。ひいひい、どうしよう！」

けれど心とは裏腹に、私みにこりと笑顔を作り、お辞儀をした。

（お愛想は反射だよ）

「初めまして。ええと、光山君のお母様、ですか？」

いや、聞くまでもなく絶対そうだと思う。だって似てるもの。お綺麗な顔立ちだけじゃなくて、雰囲気からして似てるもの！　ノーブルそうな、柔らかい笑顔といい。（でも息子さんと違って裏がなさそう）

そういえばうちの母とジムでお友達になったと聞いていたけど……まさか子供の入学式に待ち合わせするような仲になってたなんて。

「ええ、海人の母です。本当に、可愛らしいお嬢さんねえ」

「い、いえ、そんな」

どうしよう、ものすごく好意的な視線だ。確かに私って大人受けが良いほうだし、これはとっても役に立つ特性ではあるけれどこれはいかん。いかんよ。

いつか見た悪夢（流されるまま光山君と結婚して、劣等感に苛まれる夢）を思い出し、私は一步後ずさった。と、背中に何かが当た

る。

「おっと」

「うひっ」

真後ろから聞こえたのはあの甘い声。振り向かなくてもすぐにわかった。

「こ、光山君」

「おまたせ。さ、行こうか」

行こうかって、どこに。駅だよね？ 駅までだよねえ？

校門の周りは、サークル勧誘のビラ配りで大変な賑わいだった。

光山君は大層目立つので早速綺麗なおねーさん達が群がって来て、彼の手にビラを押し込んでいる。隣にいる私にも、ついでに……なんだこの「恋愛クラブ」って。

こんな混沌を極めたような人ごみの中を四人で移動なんて、絶対はぐれると思うんだけどな？（むしろはぐりたい。私が）

けれども彼はナチュラルに私の手を取って、先導して歩き始めた。ああ、デジャビュ。あまりに自然すぎて思わず素直に手を預けちゃったよ。そっだよ。こうやって歩くの、初めてじゃないよね、私たち。

「だけど……、だけど、お互いの母親の前でこうやって歩くのはどうかと思うんだ！」

あ、ほら、後ろからすごく生暖かい視線でついてくるよ？ なにこれ、お見合い？ いつ「あとはお若い人たちで……」なんて言い

出されるか、っていう雰囲気なんだけど。

「あの、確か理？に受かったって聞いたんですけど……」

こそつと小さな声で問いかけると、彼はシレッと答えた。

「うん。でもオレ、父の会社を継ぐからね。医学部に行くより、こつちのほうが良いんだ」

「じゃあなんで受けたんですか！」

「先生に、受けるだけでもって勧められてね？」

あー、うん。つまりあれね。「年度、大学、学部、合格者名」のアレのためですか。そりゃあ、大人の都合だなあ。でも、本気で入学したくて受験した人たちに一言謝つとけよ。カチンと来るよ？

「なんで教えてくれなかつたんですか？」

私はさつき、あんまり驚いたせいで文字通り魂が消えかけたんだからね！

「ビックリするかと思って」

彼はにこつと、悪意のかけらもなさそうに微笑んだ。まあ、悪意じゃないんだらうけど。ただ単に、私をからかっているつもりなんだらうけど。

「あなたって人は……」

これからの大学生活も、こつやっついていじられ続けるのかなあ。これじゃあ恋人なんてできそうにないなあ。（いらないけど。心穏やかに暮らせればそれでいいんだけど）

四月の脇役 その二

入学式での予想を違えることは無く、私の大学生活は微妙な騒がしさを伴って始まった。

オリエンテーションの会場では早くも「ほらあの子。入学式の後……」なんて指差されたりしちゃって、もう！（地団駄）

校門前でのサークル勧誘も光山君狙いらしいお姉さん達（この人たちは近隣の女子大からわざわざ勧誘に来ているらしいと聞いてビツクリした。すごいなあ）から「彼氏も連れてきてよ」なんて言われたりしちゃって！

いや、彼氏じゃないけど、もし仮に連れてつたら最後私を押しつけて群がる気満々でしょ？ ……まあ、それはそれでアリかもなあ。

新学期が始まった今もかけられる言葉は常に「入学式の日に光山君と手を繋いでた子だよな？」から始まるものだから、私は早速腹を立てている。ちくしょー、どいつもこいつも私をおまけみたいに扱うなんてしつれーな！

その次に続く言葉は「どういう関係？」だし！ 腐れ縁だよ、ペっ！ とか言いたい、叫びたい。（でもできない）

今のところ「高校のクラスメイトだったの」「私が転びそうだったから心配して支えてくれてただけ」とニッコリ笑って答えることでかわしている。

このとき一瞬たりとも表情を崩してはならないし、ムキになってはいけない。ひたすらオツトリ（みえるように）微笑んで、「なんでそんな事聞かれるのか、本気でわかんない」という態度を貫くのがポイントだ。

がんばれ、頑張れ私。人の噂も75日だ、がんばれ！。

「盛沢さん、お昼どこで食べる？」

ギリギリと奥歯をかみ締めていると、隣から声が掛かった。新しい環境に馴染むまでにできるいわゆる「暫定オトモダチ」で、名前を面白 優奈さんという。

出席番号が前後しているという理由でお話するようになったんだけど、名前の通り優しい雰囲気の子で、このままちゃんとお友達になりたいなあと思っている。

「あ、うん。学食、行ってみたいなあって」

入学してからこちら、私はまだ学食に入った事がない。学校の周りにカフェやらファストフード店やらがたくさんあるものだから、なんとなくそっちに足を運んじやあって。外からのぞいた限り、明るくて広くて、結構良さそうだったから気になってたんだ。

「うん、いいよ。そういうえいだったことなかったよね」

たどり着いた食堂は混雑のピークだった。うわあ、なんだかすごいなあ。どうみてもパジャマ兼部屋着にしか見えない服装で座っている人もいるし。食事の時間だけ学校に来る人がいるらしいって噂、あれ、本当なのかもしれない。

「ごめんね……。まさかこんなに混んでるなんて思わなくて」

やっとこさ食券を買い、なんとか席を確保して（食べ終わっているのになかなか立ち去らない人たちの後ろをうろろしてプレッシャーを与えてみた）、私達はため息をついた。

いやあ、高校の学食とはだいぶ違うね。なんといっても食券の販売機の長蛇の列が。高校ではお弁当か、そうでなければパンを買う人がほとんどで、ランチセット頼むのは結構楽だったのになあ。

うどんと迷ったけどご飯物にしてよかった。こんなに待たされた

ら麺がのびてしまう。

「ううん、私も一回来てみたかったから。次の講義までまだ時間あるし」

そう言いながらチラッと腕時計を見た目白さんに、私はなんだか違和感を覚えた。んー？

「さ、食べちゃお？ まだ待つてる人もいるんだし」

あ。

「そういえば、目白さんって効き手に時計してるのね」

彼女が割り箸を取り上げたところで気が付いた。

そうだ、彼女は右効きで、右手に時計をしているんだ。私は右利きで左手に時計をつける。そのほうがつけやすいから、なんだけど。

もちろん時計をどちらにつけるかなんて人それぞれだし、5人戦隊の腕輪だつて右手についているんだから「おかしい」とかケチをつけるわけではない。ただ、アレ？ と思ったただけだ。

しかし彼女ははっとしたような顔でその時計を押さえ、小さな声で「うん……」と頷いた。

あー、もしかして私、地雷踏んだ？ うわあ、やつちまった？

そのまま会話もなく、ちょっと気まずい食事が終わった。うう、ごめんよう、悪気なんてなかったんだ。ただ、その、こだわりとかのお話に繋がったら仲良くなれるかなって思ってた。うう。

「あ、あの、ほんとかさねがさねごめんね。私、無神経だったみたい……」

おずおずと謝ってみる。お願い、許して。なんだか分からないけどほんとごめんなさい。詮索する気なんて毛頭ないので、どうか、どうか水に流してください。という気持ちで。

すると目白さんは、ううん、と首を振った。

「大した事じゃないの。ただ、ちょっと……」

そうしておもむろに時計を外した。ひい、そこまで立ち入った事情知りたいわけじゃなかったのに。

「私ね、生まれつき、ここに痣があるの……。そんなに大きいものじゃないし、気にするほどじゃないとは思っただけど」

そう言っただけでくれたのは、彼女の右手首。

なるほど、ちょうど文字盤で隠せる程度の大きさの赤い痣がある。そんなに濃いものではなかったけれど、お年頃の女の子には複雑かもしれない。

なんて言ったらいいだろう。きっと目白さんは繊細な子だ。ああ、私をもっと豪快に「気にする事ないってえ」とか笑いながら背中をぺしぺし叩けるような性格だったら良いのに！

「お姉ちゃんかね、優奈が赤ちゃんの頃、天使がやってきてキスした痕なのよ」って言ってくれたの。それからはあんまり悩まなくなっただけど……」

彼女はそつと痣を撫でた。むしろ愛しそうに。なるほど、彼女自身は「身体の一部」として受け入れたんだな。色々葛藤もあったみたいだけど。お姉さん、ナイスフォロー！ おとめちっく！

「そついえば、天使の羽根みたいな形だね」

そうだ、それは天使に祝福された証だ。そう思えば思うほどなんかそんな感じに見えてくるじゃあないか。

「うん、私もそう思うの」

そこで私達は顔を見合わせてにこつと笑った。これで、ほんわか友情が芽生え……

「そ、その痣はっ！」

……る、はずだったんだけどなあ。

がっしゃーん、と音を立て、机の上の食器をなぎ払い、私達の斜め向かい側の席でカレーを食べていた人がスライディングしてやってこなければ。

「きみっ！ き、君っ！ その痣はっ！」

自身が食べていたカレーは言うまでもなく、間で食事を取っていた人々のお味噌汁、うどん、ごはん。そんなものにまみれながら、彼は目白さんに手を伸ばした。

眼鏡越しに見開かれた目は爛々と光り、尋常ではない迫力をかもし出している。うわー、関わっちゃいけない人だー、早速来たー！

ああ……ちよつと油断したとたんこれだよ。そもそも学食でカミングアウトするべきではなかったかもね、目白さん。

いや、きっかけ作っちゃったのは私だけど。ええと、まあ、うん、ごめん。（言葉が見つからないんだ）

とりあえず、ほんとーにうどんじゃなくてよかつたなあ、なんてしみじみ思いながら（だつてうどんだったら今頃頭からかぶる羽目になってる）目白さんの後ろにこっそり引っ込んだ。

決して薄情だからじゃないよ？ 主人公を立てようと思って。（ぶるぶる）

四月の脇役 その三

「ちょ、ちょっととき、きたまえっ！」

その危ない人は、目白さんの右手を掴みぐいぐい引っ張った。だ、だれかあ！ 誰かきてー、たすけてー！

周りにはたくさん人がいるのに誰も動こうとしない。

なんてことだ、か弱い女の子が変な人に絡まれてるっていうのに！（まあ、机の上を食べ物にまみれながらスライディングする生き物に積極的に関わりたくない、というのは等しく人間の本能と言えなくもない）

うう、私が助けなきゃダメえ？ もうちょっと待ったら目白さんのヒーローが颯爽と現れたり、しない？

はたして、目白さんのために私がしゃばるべきか引っ込んでるべきか。てゆうか引っ込んでいたい、に一票なだけど。（身体の位置的には既に引っ込んでるんだけど）

でもなあ、一応形だけでも止めるべきだよな。お友達（候補）として。

「あ、あの、何ですか？ 離してあげてください……」

「聖女の証だ！ 君には天から課せられた使命があるんだ！ いや、宿命だ！ 我々の『秘蹟革命サークル』に来たまえ！」

聖女の証とか宿命とか秘蹟とか革命とか！ 通常会話ではあまり使用しない単語がいくつも入ってどこに突っ込んだらいいのか分からないだけど。

いやむしろ、「ひせき」と聞いて「秘蹟」とすぐに理解しちゃった自分がすごいとか思ったり思わなかったり？ これも昨年度の度重なるファンタジー事件の賜物か。

「同志よ我々は君を歓迎するなに君はまだ本当の力に目覚めていないだけだ我々の元で修行をすればすぐに使命を理解できるはずだ今はまだ草の根的な活動に甘んじているがやがては日本中からそして世界中から覚醒せし民を集めてユートピアをおおおうおお！」

食べ物まみれの怪しい人は、目白さんの細いお手々を両手でがちり掴み（あ、うどんの汁が垂れてる）息継ぎもせずにくましく立た。うわあ、話を通じそうに無い相手だ。

思わず周囲を見回すと、目が合った数人が残念そうな顔で首を横に振り、うつむいた。え、ちょっと、これどうしたらいいの？ 本当に誰も助ける気無いの？

ところが目白さんは何故かこのいかにも怪しい話題に食いついてしまった。

「せいじよ？ 宿命？」

「我々は聖痕を持つ同志を集めている。君のその痣は紛れも無く聖痕だ！ 共に世界のために働こう！」

目白さんが興味を示したことで少し落ち着いたらしい彼は、安原信一郎と名乗り、いきなりシャツをめくりお腹を出した。（ここ食堂！ あと、これってセクハラに抵触しませんかね？）そしておへその横にあるほくろを指差し、「これが私の聖痕だ！ 北極星に選ばれた印だ！」とのたまった。

……まあ、戦おう、ではなく働こう、であるあたりまだ穏便そうだよな。いやあ革命なんて言うからってつきり戦でもおこすつもりかと。

でもやめといたほうがいって。その人には関わらないほうがいって！

しかし私の心の中の忠告はあつさり無視して（まだ以心伝心するほどの仲じゃないもんなあ）、目白さんは頷いてしまった。

天使がキスをした痕だって、本当に信じていたのだろうか。確かにそれが本当だったら聖痕なのかもしれないけれど。お姉さんの乙女チックな思いやりの言葉が、彼女をこんな怪しい団体に所属させるきっかけになってしまったなんて、なんだかやりきれないなあ……。

ああ、でもなあ、もう「あり得ない」とは言い切れないしなあ。

だが、一つだけ言わせてもらおう。目白さんはともかく、安原先輩（だよな、たぶん）のはただのほくらだと思う！

「ところで、君もどうだ？ 君には不思議な力はないのか？」
ひいひい、まさかのとぼつちり！

「いえ、あの、残念ですが全く心当たりが……」
いや、まてよ？ ある意味、有るっちゃあ有るよね。トラブルに巻き込まれる特殊能力が。入学早々こんな目に遭ってるんだから間違いない。

ああ、それから認めたくないけれど、たまによく分からない生霊とか怨念にとり憑かれたりもしてるみたいだし……。うん。でもね？
「ありません！」
きつぱりと。「嘘をつかずに煙に巻いてごまかす」というモットーを捻じ曲げて、否定しておいた。

目白さんはそんな私にはお構いなしで、活動内容のパンフレットを渡すからと誘われて、安原先輩について行ってしまった。

「遅れたら代返お願い」と私に言い残す理性はあつたようだから、きつと大丈夫じゃないかなとは思っただけど。なんだか、目的を見つけたような目をしていたからなあ……。

「君、新人生？」

二人が出て行くとまるで何事も無かったかのように食堂の雰囲気
が元に戻り、隣の席の人が話しかけてきた。ごはんとお漬物ひつ
くり返されたことはスルーなんだ、そうなんだ？

もしかしてあれって珍しくない光景だったりするんですか？

「彼、有名なんだよ。ちょっと使命感に燃えすぎてて……。あのサ
ークル、名前はちょっとアレだけどやっていることは普通のポランテ
ィアだから。心配しなくて大丈夫だよ、多分」

「あ、そ、そうなんですか。ありがとうございます」
多分て何だ。てゆうか、助けるよ。とは言えなかった。

午後の講義をさっそくサボった目白さん（代返は私がするとバレ
てしまいかねなかったので、前の席に座っていた子にお願いした。
彼女への借りは本人が返せばいいと思う）の行く末もかなり気にな
るところではあるが、私にはこのあと用事があるのでとっとと帰ら
ねばならない。

平日の、しかも夕方からというイレギュラーな時間にも関わらず
新たな入居者さんがやってくるのだ。鍵はもう渡してあるし、特に
手続きが必要というわけでもないんだけど、先方が忙しい方で、で
きれば本日中にご挨拶をとのご希望だったので。

どうやら今度の人はずうちに住むわけではないらしい。あくまでも
「仮眠室および趣味室」と考えているようだ。ぜーたくな。

……そういや、光山君が今住んでるのもお父様の仮眠室なんだっ
け。駅から直通のご立派なマンションの一室を仮眠室と称するあた
り、世界が違う。

借主さんは、樋口 美緒さんという。彼女のお気に召したのは107号室、中くらいのサイズのメゾネットのお部屋だ。確か職業は飲食店オーナーで、ご案内の時に見た限りではなんだか大人の色気漂う美人さんだった。まだ若そうなのに複数のお店を経営しているやり手のおねーさんだ。

いいなあ、実業家かあ。憧れる。

少なくとも、私は聖女より実業家に向いていると思う。機会さえあれば、一度ゆっくりお仕事のお話を聞いてみたいものだ。（まあ、無いだらうけど）

最寄駅から徒歩10分の距離は、余裕がある時には丁度良いけれど予定が詰まっている時にはもどかしく感じる。

わざわざお仕事を抜けてご挨拶にいらっしやるお客様に対し、玄関先で軽くご挨拶で済ませるべきか、それともリビングにお通ししてお茶を出すべきなのか。お茶をお出するなら、紅茶の蒸らし時間その他を考えるとせめて15分の猶予が欲しいところだ。

ああ、そういえばお茶菓子になりそうなものがない！ 仕方ない、コンビニに寄ろう。

お店に入ってお菓子の棚を探していると、目の前にペットボトルが落ちてきた。と、同時に悲鳴。更なる雪崩。

がったーん「きゃーすみませんすみませ」ぼとぼとぼとぼとっ！
どうやら、裏からペットボトルの補給をしようとしてドジっらしい。もう一步踏み出していたら危なかった。当たったら結構痛そうだ。せーふ。ところで、今の声、なんだか聞き覚えがある気がするんだけど。

棚越しに店員さんの姿を覗き見ると、それは先月入居した浅見さんだった。パニックに陥っている彼女はまだこちらに気付いていな

いようだ。私はそつと目を逸らし、クツキーを購入して外に出た。

しばらくこのコンビニには近寄らないほうがよさそう。（今度こそ巻き込まれるかもしれないし、それ以前になんだか気まずいじゃないか）

四月の脇役 その四

色々考えて準備を整えていたのに（紅茶の蒸らし時間だってほぼ完璧だったのに！）、引越しのご挨拶は玄関先で終わってしまった。……まあ、そういうもんだよね、ふっ！。

真つ赤なスーツを着てオシャレなピンヒールでカツカツと歩く樋口さんの姿はかっこよかった。残念だけど私はあんなふうにはなれないな。路線が違う。あーあ。

でもいいんだ、コンビニで買ったものよりずーっとおいしいクッキーもらっちゃったから。えへへ、私、このお店のクッキー大好きなんだよねえ。今日は夕食代わりにこれでいいや。

頬を緩ませて階段で（ホームエレベーターは、荷物がある時と二人以上の時にしか使わないように心がけようと思う）3階まで駆け上がる。スライド式の一枚ガラスの扉を開けてすぐにリビング、というつくりなので、緩みきった顔のまま部屋に入るとそこには……。「お、お邪魔してます……」

ものすごく申し訳なさそうな顔をした5人戦隊の面々と、宙に浮く毛玉がいた。

一瞬幻覚かと思った。水橋さんが消え入りそうな声で挨拶しなければ、扉を閉めるところだった。

アレえ、招待した覚えはないんだけどな？（3階のこの部屋にどうやって侵入したか、という疑問はもはや湧かない）

「え、えーつと」

「喜ぶなう、しもべの助手。今日からここを秘密基地と定めるなう！」

「ハア？」

おつといけない、思わずドスのきいた声で返答してしまった。や、でも、しょうがなくなる？ 嬉しくないどころか心底遠慮したい事態を「喜ぶなう」とか言われたらこんな声でるよね？

「私は、反対したのよ。したんだけど……」

根岸さんが眼鏡のフレームを落ち着きなくいじりながら、小さな声で言った。そりゃあ、そうだろう。まさかこの5人の提案であるはずがない。毛玉の思い付きだ。

どうせ中山君に借りてこさせた特撮モノのDVDでも見て、秘密基地なんてものを思いついちゃったんだ。絶対そうだ。ああ、困った。

五人（と一匹）が帰った後には、空になったクッキーの箱。あうう、結局ひとかけらも食べられなかった。夕食、どうしよう。

翌日、一限目。

私の隣には目白さんが座っている。

……えーっと、この人は確か昨日、私にはちよつと足を踏み入れにくい世界に旅立ったはずでしたよね？ 何故、当たり前のように近くにいますか？

いや、違うんだよ、私も少し距離を置いて見守ろうとは思ってたんだよ？ でもね、しょうがないじゃない！ 私、一回仲良くなった人をそんな簡単に切り捨てたりできない性格だったんだもの！

彼女はもう時計で痣を隠す気はなくなったらしく（それはけつして悪い変化ではないのだが）むしろうつとりとした表情で手首をなぞり、たまにため息までついている。心なしか頬を染めたりなんかしちゃって。

なにがあっただらう。絶対例のサークル絡みなんだろうなあ。

まあ、あれだ。お友達が聖なる使命に目覚めて修行を始めるなんて、よくあることだ。うん、よくあるよくある。……稀に。（ただし、自分でも何言ってるのかわからなくなった）

「……はあ」

あ、ため息がこれ見よがしになってきた。やばい、聞いてほしいことがあるっばい。負けないぞ、スルーしてみせるぞ！

しかし、私の気持ちを酌んでくれない目白さんは、授業が終わったとたん、一方的に説明を始めた。あああ、もう、どうあっても関われと言うのか！

なんだか夢見心地で散文的に語るものだからどうにも要領を得なかったのだが、彼女が言いたいのは多分こんな感じの事だ。

昨日「秘蹟革命サークル」とやらに連れて行かれた彼女は、例の安原先輩に一人の男性（当然、サークルのメンバー）を紹介されたらしい。彼は涼やかな目をした好青年風（ここがかなりのポイントみたい。熱心に教えてくれた）で、その左手にはなんと彼女の「聖痕」と対になるような印があった。

彼女は確信した。「天使が二人を巡りあわせたのだ」と。

そして決心した。天使の御心に従い、世界をより良くするために努力しよう、と。

「私ね、今まで男の人って、怖いなって思ってたの。でも彼は……あ！」

崇高な使命よりも運命の相手にご執心、というのが丸わりの説明の途中で、彼女は唐突に声をあげた。そして、さらに頬を染めて教室の入り口の方へ手を振る。

ああなるほど、そのパートナーさんが通りかかったのだな、と理解した私の頭に、突如何かが当たった。

「いたっ」

ペけん、と音をたてて何かがおちてきたのである。それは、私の頭の上でぽんとはねた後、机に落下した。

え、なになに、なに？ 誰かが何か投げた？

ビックリして周りを見回したが、みなそれぞれのおしゃべりに興じていて犯人らしき人物は見当たらない。なんだよー、感じ悪いなあ。

消しゴムか何かかしら、と思つて机をみると、そこには水色の包み紙に包まれたキャンディー。どこから投げられたものなのかわからなかったたので、もったいないけどあとで捨てよう、とバッグに放り込んだ。

それに気を取られたおかげで、目白さんのパートナーさんとやらを見てやろうと廊下に目をやった時にはもう誰もいなかった。ち、見逃したか、涼やかな目元で鼻筋が通つていて笑顔が可愛くて優しい好青年とやらを。

以来。

目白さんが私の隣で頬を染めてパートナーさんに手を振るたびに、頭の上に衝撃を感じるようになった。ペけん、ペけん、と、それは軽妙な音を立てて落ちてくる。

被害者は私だけではないみたいで、どうやら目白さんが嬉しそうな顔をして手を振るたびに、その一番近くにいる人の頭にキャンディーが降ってくる仕組みらしかった。

遠目に観察したところ、本当に唐突に宙にキャンディーが現れて、落下するようだ。そしてみんな、「誰かが投げたのかなあ？」と首

をひねって、バッグにしまいこむ。

なんとなく捨てがたいものだから、水色、ぴんく、黄緑、クリーム色、レモン色、オレンジ……。私のバッグには正体不明のパステルカラーのキャンディーが増えていった。

あれ、これってもしかして捨てられない呪いでもかかっている？
突然空中に現れて落ちてくるキャンディーなんて、絶対まっとうな食べ物じゃないとわかっていながらなぜ捨てられないんだろう、困ったな。目白さんに自覚はないみたいだから「これ、食べても平気？」なんて聞けないしなあ。

悩んだ私は、人体実験を試みることにした。対象は、私の知る限り一番丈夫そうな連中である。すなわち、5人戦隊だ。

ケセララン様に無理やり秘密基地にされてしまったあの日から、最初の頃の申し訳なさそうな表情はどこへ行ってしまったのか、今では三日とあけずにやってくる。(もうちょっと遠慮しろ！)
そんな彼らには正体不明の天使印(包み紙に天使の羽みたいなのがプリントしてあるんだもの)キャンディーの試食要員がぴったりにじゃないか？

私はにこつと笑って、ガラスのお皿に飾り付けたキャンディーをお茶請けに出した。

「なにこれ？」

早速中山君が興味を示す。ふふふ、彼は甘党だから喰い付くと思っただ。かかったな！

「貰い物なの。良かったらどうぞ」

誰から貰ったかと聞かれると困るけど、貰い物なのは間違いなからう。

「可愛い色ね」

キモ怖いグッズ集めに精を出しているとはいえ、ちゃんと可愛いものにも興味を示す水橋さんがそれに続く。

あ、ええと、まずは中山君が食べて、30分くらいしてからが良
いと思うよ、水橋さん。(って言えないけど)

二人はそれぞれ、水色、ピンク色のキャンディーを摘み上げ、同
時に口に放り込んだ。(ときどき)

一呼吸おいて、二人は叫んだ。

「な、なにこれっ！ スツゴクおいしい！」

「ほんと、すげーうまい！ なんだこれ！」

おいしいおいしいと、なんだかすごいテンションで盛り上がって
いる。いや、あの、自分で出しておいて今更だけど、大丈夫、なの？

結局、甘いものが苦手(なんてもったいない)な竜胆君以外、全
員が(ケセララン様さえも!)キャンディーを口にして帰って行った。
……まあいいや。喜んでたし。

後日、被験者達はめいめいが、帰った後になにがあつたかを語っ
てくれた。

いわく、「懸賞があつた」「犬を飼うことになつた」「無くし
たはずのピアスが見つかった」「絶版になつた本を古書店で安く手
に入れた」「昇給のお達しが来た」などなど。

あのキャンディーには、ちょっとだけ人を幸せにする効果がある
のかもしれない。

相変わらず私の頭の上にはパステルカラーの飴が降る。

私は決心した。今度は、何色を誰が食べて、なにが起きるのかを
きちんと記録しよう、と。

データを半年くらいとつたら、もしかしたら口にする気になるか
もしれないなあ、と思いつつ、今日もせつせと回収に励む私なので
あった。

五月の脇役 その一

五月。五月といえばGWだ。といっても、今年のGWは正確には繋がっておらず、少なくとも私にとっては「小さな連休が連続して来た」という認識だった。

一人暮らしを始めてまだ一ヶ月弱。この時期にわざわざ里帰りする学生は珍しく、サークル主催の親睦会やら小旅行やらを行う絶好の機会である。と、いうわけで、前半の連休はアーチェリー部の先輩に連れられ、ラフティングに行つて、見事川に流された。

……順を追つて話そうか。

大学に入って早々雲行きが怪しい事に気付いた私は、万が一ではあるが、今後また異世界にでも飛ばされたりなんかしちゃつて、更に万が一ではあるが、戦に巻き込まれたりする最悪の事態を想定して、最低限の戦闘能力を身につけておこうと思ひ立った。

かといって私は絶対に接近戦向きではない。遠隔攻撃だ、それしかない。

そこで、それっぽいことを習えそうな団体をピックアップしてみた。「弓道部」「アーチェリーサークル」「ライフル射撃部」「サバイバル同好会」などなど。

うち、「部」と名の付くところは練習が厳しそうなので候補から外す。

サバイバル同好会は、なんだか生き抜けそうにないので（毎回最初からのためにされて終わるだろうことが十分予測できる）却下。

で、「走るトレーニングはしないし、室内で活動するよー」とい

う甘い言葉に釣られて、アーチエリーサークルに入ってみたのだ。大会などには参加しないということで、それもすごく魅力的だ。気楽に楽しめそうぞ。

アーチエリーサークルには毎年恒例の行事がいくつかがあって、今回のラフティングもその一つだった。

ラフティングは楽しかった。大きな岩の上から川へ飛び込んだり、小さな滝をボートごと跳び越したり。ガイドのおにーさんの巧みな話術にも、随分笑わせてもらった。

しかし、昼食会場へ移動する際、悲劇は起こった。

前々日の雨の影響で、会場までの徒歩ルートの水深が私の身長より深くなっていたのである。

おかげで私は何度も流され、そのたびに先行していた誰かに回収される、ということを繰り返し、あげく「もうそのまま浮いてて。引っ張ってくから」と言われ、ライフジャケット任せに仰向けに浮いたまま、首根っこを先輩に掴まれて運ばれるハメになったのだ。

あれはもう、屈辱だった。ウエットスーツにライフジャケットを羽織り、疲れ果てて死んだ魚みたいにお腹を見せてぷかーっと浮かんだ私を、先輩が黙々と引っ張っていく光景はさぞや滑稽だったことだろうよ。

誰かがボソツと「ラッコみたい」と言っただけで、犯人を捜す気力さえ沸かなかった。

ああ、もう！

本当だったら、後半の休みはそんな心の傷と疲れきった（筋肉痛がヒドイ）身体を癒す事に費やしたかったのだけれど、そうもいかない。

魔女っ娘達による女王収穫祭（って言うとキュピルは怒るんだけど、他になんて言ったらいいのかわかんないんだもん）のために、実家に帰らなくては。

我が家の牡丹はGWが盛りなので、このチャンス逃したらまた来年まで女王様に間借りされるハメになってしまうのだ。絶対、絶対に今年中におひきとり願いたい。我が家とご近所の平和のために。

さて、気が進まないけど帰るかあ、とマンションの中庭に出るとエントランスの内側に大きなトランクケースがぐんと置かれていた。

どなたのかしら、ここに置かれるとちょっと出入りに迷惑だ。

困ったなあ、としばらく眺めていると、小学生くらいの男の子を連れた神宮司さんが入って来て、すみません、と謝った。

「こんにちは」

「こんにちは。すみません、人を見送っていたもので」

そういえばさつき車の音がした。きつとお母様だ。大方GWを利用して遊びに来た弟さんを送っていらしたんだろう。……それにしちゃ、トランクが大きいけど。人が一人ぐらい入れそうな大きさだけだ。

男の子はすたすたとこちらへやってきて、そのまま私の周りを一周して、言った。

「誰？」

「こちらのマンションのオーナーの、お嬢さんですよ」

なぐんか生意気そうだなあ。でも、お客様の身内の方だし、とりあえず愛想を振りまいておこう。

「はじめまして。弟さんですか？ おいくつ？」

えーつと確か、子供相手には少しかがんで、視線を合わせてにこつと笑ってあげるといいんだっけ？ 少なくともファイファイちゃんはそのうすると喜んでたはずだ。

しかし、男の子はバカにしたように「ふんっ」と鼻で笑い、言った。

「子ども扱いしないでほしいな。ボクより背が少し高いからといって偉いわげじゃないんだから」

……ハア？

「ま、凡人というのは目に映るものだけが全てだからね。そうやって無意識に自分の優位を主張する様は、いつそアワレだよ。ぬいぐるみのほうがずっと利口だよ。だって、余計な事を口に出したりしないからね」

おちびさんは一方的にまくし立てると、満足げに頷いてさっさと一号室に入ってしまった。

か、かんじわるう！ そりゃ、幼児に対するのと同じように対応したのは悪かったかもしれないけど、あんなに怒らなくなっただけいいの。男の子ってほんつとに扱い辛いな！

「すみません、照れてしまったようです」

「あ、あはは……」

照れ？ 照れてあの反応だとしたら、ものすごいツンキャラってことですかね？

子供好きだったら「かわいい」と思えるかもしれないけど、私はそんなに人間できてないんだよ！ 大人気ないと言われるかもしれないけど、ああいうちびっこは一回逆さにして振るといいとおもっ

た。頬がびくびく痙攣しているのを十分自覚しつつ、私は駅に向かった。

翌日。私は何故か、ご近所のダークフェアリー退治「めぐり」(重要)をする魔女っ娘達に同行していた。

何故かと言うか、そもそもこういうことになったのは私が「儀式とやらの前にできるだけ危険な芽を摘んでおくべきだと思う!」と主張したためで、そんな主張をしたのはキュピルが「女王様の目覚めの儀式中には結界を解く必要があるきゅぴー」。きつとダークフェアリーがいつぱい襲ってくるきゅぴー」と言い出したせいで、キュピルがそんなこと言い出したのは、アレだ。多分、「そういうものだからだ。」

つまり、一件落着の前に一波乱おこして主人公の見せ場を作っておけ、という不文律が、この世にはあるのだ、きつと。

大体、なんで妖精界をあげて「女王様ご帰還祭」なんてものを企画してしまうのだろう。パンフレットに儀式の日付まで載せちゃうなんて、妨害してくれといわんばかりに。

は、もしかや妖精界の上層部にも裏切り者がいて、わざとダークフェアリーに情報を流したとか? ……一気に「よーせーさん」のイメージがどす黒くなるね、考えるのやめとこ。

「ダークフェアリーの気配きゅぴー! 変身きゅぴー!」

「くくスクランブル! フルーツバスケット!」「くく」

ああ、このやり取り、今日だけでももう8回目だよ。飽きてきたよ。もう変身しっぱなしでよくない?

変身する三人の声や動きは、今やぴったり揃っている。いつの間にか決めポーズが、より「らしく」なっていて、なかなか堂に入った魔女っ娘っぷりだ。

でも相変わらずセーラー服(色違い)なんだよね。だから卒業式

前に「ちゃんと話し合おう」「って言ったのに。氷見さんたら樂觀的に「でもさあ、どうせ五月までだから」と笑って取り合ってくれなかったんだよね。いいの？ 本当に後悔してないの？（あんまりしてなさそう）」

もぐら叩きのようにひよこひよこ飛び出してくる「影」やら、変質者やら（まだ旧型のとり憑かれかたしてる人もいたんだなあ）を、氷見さんが踵落しで、由良さんがとび蹴りで、瀬名さんがメイスで殴って倒す、倒す、倒す。

相変わらず眩暈がするほど物理攻撃の力押しだ。ああ、手馴れている、暴力に手馴れている。かわいそう！ 加害者も被害者もかわいそう！（どっちが加害者でどっちが被害者なのは、私はあえて口を閉ざそうと思う）

「フェアリー・プリフィケーション！」

氷見さんのお得意の技が最後の被害者（あ、言っちゃった）の頭に炸裂した。

ああ、夕日が眩しい。

一年間お疲れ様でした。あとは女王様収穫して、任務終了だね。

さあさあ、善は急げ、それ急げ、と三人と一玉を追い立てるように帰路につこうとしたのだが……。

「随分好き勝手にやってくれたものだな、ライトフェアリーの騎士達よ！」

私達の行く手を、長い影が遮った。

五月の脇役 その二

「ながっ！」

思わず声に出してしまった私の、……ええと、驚きと言おうか、それともやっぱり突っ込みと言おうか……とにかく、私のセリフに、影の持ち主は満足げに「フフン」と笑いを漏らした。

いや、だって、長いよ。長い……ゴボウ？　ゴボウが、宙に浮いて、しゃべっている。

宙に浮く野菜って言ったら、アレですよ？　よーせーさん（棒読み）ですよ、ね？　登場時のセリフから言って、ダークフェアリーさんだったりしますね？

後ろに引き連れている男性三人は、まさか親衛隊のダークフェアリー版？

「久々だな、ライトフェアリーの騎士と合間見えるのは……」

ゴボウは私のシヨックなど気にもせず、「女王親衛隊」に向かって笑った。ゴボウなのに笑った！　ゴボウなのになんかニヒルだしゅげえ！

面識あるの？　と魔女っ娘達にアイコンタクトで聞いてみると、三人ともふるふる、と横に首を振った。そうか、初対面か。

そんな中、キュピルだけは目を大きく見開いて、震えながら叫んだ。

「ま、まさか……バードック將軍きゅぴ！　生きていたきゅぴ？」
「ふはははは！　この『ヴァー』ドック、貴様らライトフェアリーどもに復讐するため、地獄から舞い戻って来たのだ！」

バードック將軍（なんとなく呼び捨てしにくい威厳を感じる。ゴボウなのに）は、お名前の発音にこだわりがあるらしい。若干巻き舌気味で強調した。

でも、ゴボウなんだから「バードック」で合ってるよね？ もしかして名前がそのまんま過ぎて、コンプレックスだったりする？

「35年前、あの子につくきアルルンの騎士に破れた恨み、晴らさせてもらっぞー！」

35年で、だいぶ前だよ。私達生まれてないよ。ってことは、その「アルルン」さんとやらが選んだ別の魔女っ娘に対する恨みをキユピル達にぶつけようとしているわけか。

なるほど、江戸の敵を長崎で討つってヤツですね、わかります。

「フッフ、紹介しよう。我が部下、新しきダークナイト達を！」
いや、いいから。いらんから。さっきから私も魔女っ娘達も、ついていけないから。

將軍がさつと手（よく見たら枝分かれしてた）を上げると、ダークナイト達（色々な感情を通り越して微笑）がササッと気障ったらしいポーズをとった。

う、うわぁ、私あんなポーズ、誰にも見られてなくても無理。恥ずかしい。恥ずか死しそう。

あんな決めポーズを初回からすんなりとれるだけでも、ダークナイト達の恐ろしさがわかるうってものだ。だめだ、魔女っ娘達に勝ち目はなさそうだ。そもそもコスチュームですでに負けるもの。彼らの衣装は、どっかの国の近衛兵みたいなんだもん。肩章付いてるし。

うわぁ、総付きのエポーレットだ、カッコイイ！

「杏の騎士、エシャロット」

「武の騎士、ラディッシュ」

「参の騎士、ターメリック」

それぞれ白、赤紫、黄色の衣装で……よく見たらベースの形は学ランだ。

いや、でも、肩章が付いてるだけでなんだかカッコイイ。そっかあ、学ランってもともと軍服っぽいもんなあ。

エシャロット卿（っていう呼び方、ちょっとかつこよくない？

騎士っぽくて）は一番背が高くて、気だるげな色気を漂わせる美形だ。

色気のある美形って言ったら光山君や福島君もそうなんだけど、この人にはもつと不道德なものを感じる。過去に数回くらい刺されていそうな？ 女性関係で修羅場を経験した事がありそうな。

なんていうか、有閑マダムに受けそう。そして各家庭を崩壊に導きそう……。

ラディッシュ卿は、ええと、良くも悪くもフツッな感じ？ あくまでもふつー。

なのに、人に「ねえねえ、オレって何系？」とか聞いちゃって、「……………うーん、かわいい系？」と相手が答えるまでの30秒くらいの葛藤には気付かず、じゃあおれ可愛いんだ、とか勘違いを募らせていそう。

でも、エシャロット卿とセットで見ると、あの不健康な色気を洗い流してくれるような、一種の浄化装置みたいな役割を果たしている。

そしてターメリック卿。

ウコンという、ある意味一番健康的な名前を戴きながら、彼の顔色は青白く、不健康だ。

神経質そうな手つきで左側に掛けたモノクルを落ち着きなくいじっている。おそらく彫りの浅い日本人ゆえにうまく嵌らないのである。無理しなきゃいいのに。ふつーに眼鏡かければいいのに。だいたい、目が悪いなら前髪はもうちょっと短くして視界をクリアにすべきじゃないか？

……アレ？

「行け！ ライトフェアリーに与する愚かな娘たちに、引導を渡してやれ！」

將軍の手が、まっすぐ私を指差した。って、ええええええ、私まで？

「言われるまでもないですよ、將軍」

ターメリック卿は何故かものすごく怒りに満ちた表情で、魔女っ娘達を、そして私を睨みつけた。ワタシ、アナタニニモシテナイヨ？

「三次元女子の分際で魔女っ娘なんて、俺は認めない！」

……んんん？

「やれやれ、仕方ない。マサトの病気は根深いよな」

「ケンジい、やっぱやめねえ？ おれ、このカツコウ恥ずい……」
んんんんん？

なんだろう、なんとなく私、わかつちやったような気がする。この人達。

つまり、この三人は……。

「くらえっ！ ダークストーツムッ！」

ターメリック卿、もとい中川君（推定）が叫んだ。

その途端、空気が引っ張られるような感覚がし、次の瞬間渦巻く

勢いで風がふいた。

「くっ、あ、キュピルうっ！」

風圧に耐え切れず吹き飛ばされたキュピルを助けようと、瀬名さんが手を伸ばした、が、間に合わない。

キュピルはいつかのように、私の鳩尾にめり込んだ。

「……っごほっ」

今回はギャラリーに男の子も混じっているので、私は必死で声を殺して呻いた。

く、くそう、なんで私ばかりこんなメに！

キュピルの激突でバランスを崩した私は、すってーんと無様に転がって、後ろの壁に叩きつけられる。あいたたた。頭打った。あと、たぶんぱんつ見えた。(でもきつとフレーム外)

うわああん、ほんと、なんで私ばかりこんなメにい！

「じゃあ、俺も。ダークアロー」

エシャロット卿、たぶん松澤君(自信ないけど。かつこよすぎて自信ないけど、声は彼だ)が面白がって不穏な呪文を発して掌を魔女娘達に向けると、そこから黒い矢のようなものが飛び出した。

「きゃあっ」

「あぶないっ、あつきー！」

避け損ねた由良さんを氷見さんが突き飛ばし、事なきを得た。しかし、その矢はそのまま一直線に飛んで……。

どすっ！

私が寄りかかっている壁、耳のすぐ横に刺さった。

ひいい、危ないってば！ いちいち「ダーク」ってつけりゃいいと思ってるんだらう、なんて突っ込んだりしないから、お願い、巻

き込まないでえ！

なんで、なんでわたしばかり（以下略）！

「んーと、ダークウィップ？」

將軍に頭を小突かれて、ラディッシュ卿、残るは菊池君（あまりに没个性的で、消去法でしか特定できない）が自信なさげに呟くと、どこかから黒い鞭（っていうか、蔓じゃない？）のようなものが現れて、魔女っ娘達と私に巻きついた。ぐええ、くるちい。

魔女っ娘達は、手足を縛られ吊るされて（正義のヒロインのサーブスシーンっぽい格好）いるのに、私だけ糞虫巻きで地面に転がされた。しかもお腹のあたりから白目を剥いたキュピルが顔を出すと、いうおまけつき。私は有袋類か！

なにこれ、なんてイジメ？

「くっくっくっく……くあーっはっはっは！ 他愛ないものだな、

ライトフェアリーの騎士達よ！ まったく、この程度とはな」

うちの魔女っ娘達はなあ、肉弾戦派なんだよ！ くうう、殴り合
いならきつと負けないのにい！

もー、なんであの人達はああなんだろう。「わるいうちうじん」
の次は「わるいよーせーさん」の手下になるなんて。余程心に闇を
抱えていると思えない。カウンセリングへ行け！

五月の脇役 その三

文字通り手も足も出せない魔女っ娘達。キュピルは問題外。さあ、どうする？

とりあえず「み〜の〜む〜し〜ご〜ろ〜ろっ」とか歌いながら転がって逃げようか、どうしようか。あ、でもお腹のキュピルが邪魔できっとスピードが出ないまま捕まっちゃうね、アハハ。

……足手纏いどころじゃないな、このキャベツ。(ちっ)

毎度の事だけど、だれかたすけてー！

確か、前回あの眼鏡3人組(今は掛けてないけど)に絡まれた時は、光山君がいかにもヒーローっぽいタイミングで助けに来てくれたんだよねえ。でもなあ、さすがに今回はだめだろうなあ。

ってゆーか、来たら来たでコメントに困る。連休中の私のスケジュールも把握してるんですか、なんて怖い事聞いてしまいそうになる。

そもそもコレって、正確には私のぴんちではないんだよね。魔女っ娘のぴんちに巻き込まれてるだけで……ってことは、もうそろそろ魔女っ娘用のヒーローでも現れるんじゃない？ お腹にキュピルがくくり付けられている限り、ついでに私も助けてもらえるに違いないよね？

ダークナイト達はなぜか攻撃の手を止めてニヤニヤ笑いながら魔女っ娘達を眺めている。

いやいやいや。ちよっと、早く助けてあげようよ、なんかすごく彼女達が不憫だよ。

なんでもいいからはやくきてー、はやくう、と一心不乱に祈っていると、やがて期待通りにその辺の空間（多分魔女っ娘の頭上なんだろうけど地面に転がっているという不本意な体勢なので遠近感が……）がぴかーっと光った。

やったー、救援だあ。だって將軍がひるんでいるもの。

……光の色が緑であることから察するに、多分アレはお野菜だ。まあ、いいけど。別にミステリアスな謎の青年とかを期待してたわけじゃないから。

光はある程度の大きさで一旦収束すると、突如縦に伸びた。ほんとーに、転がっているせいで正しくはわからないけれど、多分電柱ほどに伸び、やがて形をとった。

そして現れたのは巨大なアスパラガス。アスパラ……。緑の電柱みたいなアスパラ。ここまで伸びるとおいしいのかどうか不明だなあ。いや、はつきり言うともまずそう。

「キサマはっ！ 我が宿敵アルルンかつ！」

「久々あるん、バードック……」

「き、キサマっ、いつのまにそんなに伸びたのだ！」

35年ぶりに再会した宿敵への最初の質問がそれか。さては長さで張り合ってたな、あんたら。將軍も長いと思っただけど、残念、アルルンの圧勝だ。

將軍は悔しさのあまり（？）「うぐぐぐぐ」なんて呻いている。

「おのれ、おのれえっ！ 35年前のあの日、キサマの騎士に折られてさえないければ……！」

折ったんか！ 先代、思い切ったことしたなあ。

アルルンはそんな將軍にはお構いなしに、キヨロキヨロとあたりを見回した。

「キュピル？ キュピルはどこあるん？」

お宅の役立たずは私の腹に張り付いて絶賛気絶中です、という私の心の声が聞こえたのか、アルルンはこちらにぐいっと身体を傾けた。ひいい、倒れてこないでっ、潰されるう。

どうでもいいけど、語尾にフルネームくつつけるのは自己主張激しすぎるとおもうんだ！

「キュピル、しっかりするあるるん」

アルルンが呼びかけると、その頭の前からぼわわっと光るものが出てキュピルにふりそそいだ。よーせーさんの粉的なものだろうか。

「きゅ、ぴい……」

キュピルがうつすらと意識をとりもどす。

「キュピル、こんなところで倒れてはダメあるるん。女王様のためにがんばるあるるん」

「きゅぴい……じよ、おう、さま……」

女王様、という存在が相当大きいのだろう、反応がしっかりしてきた。

……ところであの、ちょっといいですか？ このキャベツを復活させるより、あなたがその立派なお身体でダークナイトを一気になぎ払ったほうが解決早いと思うんですけどね？

それともあれか、お助けキャラにありがちの「本人はすっごく強いけど、後輩の成長を期待して、あえて手は出さない」タイプですか？

そんな悠長な事ばかり言ってるから、あとから更なるトラブルが発生するんですけど、その辺しっかり考えた事ありますか？

「じよ、おうさまの、ために、キュピルは、キュピル、は……」
「そうあるん。今こそ本当の力を目覚めさせるあるん！」

私のお腹と半ばから曲がった電柱（緑色）の感動的なシーンはまだまだ続く。

魔女っ娘は相変わらず吊るし上げられたまま。ダークナイト達は「アングルが……」とか「やはり三次元はこのくらいが限界……」とか「腹減ってきた」とか、暢気におしゃべりしている。

ああ、懐かしいなあ。そうだよ、この人達ってこうだったよね。いつも三人で集まって、周囲の状況には目もくれずゲーム機つきあわせて自分達の世界を作り上げてたよね。

「これを受け取るあるん！」

アルルンが、箱を掲げた。なるほど、あの節のところにある葉っぱみたいなもの（ハカマとか言うんだっけ？）が手なんだなあ……。二枚だけやけに長いと思ったら。

「そ、それは、まさかつ」

キュピルより先に將軍が目を見開き、叫んだ。

「何をしているっ！ 我が騎士達よ、あの箱を奪い取るのだ！ アレには、先代のライトフェアリーの騎士の魔力がっ」

折られた事が余程トラウマなのか、先代の騎士の力の詰まった箱とやらの動揺した將軍が、サボっているダークナイト達をけしかけた。

將軍の慌てた声に、いち早く反応したターメリック卿（あえて、騎士としての名前で呼びたい）が、さっきの「ダークストーム」を繰り出す。大木のようなアルルンには堪えない。

エシャロット卿、ラディッシュ卿の攻撃にもびくともしない。ほんと、アルルンが自力で戦ってくれたらすぐなんだけどなあ。

「ダークナイト達がちくちくと攻撃を仕掛けているのを無視して、一玉と一本は見詰め合い、「先代の……」「そうあるるん。先代の親衛隊が残した力……」なんて話を進めている。

双方の会話から察するに、先代の魔女っ娘はどうかやら魔力重視タイプだったようだ。なんで今回は物理攻撃重視なんだろう？ 本人達の適正ゆえ？

「きゅ、きゅぴiiiiiiiiiii！」

アルルンに激励され、キュピルが叫んだ。

「おー、本当の力とやらを目覚めさせるのか？ 覚醒しちゃうのか？ バージョンアップして、こんどこそ理想の妖精さんスタイル（本体はかわいい女の子で、ドレス部分がキャベツ）に進化するのか？」

「ぴっ！」

ふんっ、と息を吐き出すようにして、キュピルは「剥けた」。ベリっ。そして、私のお腹から脱出した。

……脱皮？ え、まさかそれだけ？

「オレンジ！ ストロベリー！ ピーチ！ 今助けるきゅぴー！」
若干ピカピカのつやつやになったキュピルが、アルルンから受け取った箱を魔女っ娘達に向けて開け放つ。

「し、しまった！」

バードック將軍は大慌てで「汚いぞ、ライトフェアリーどもめっ」なんて叫びつつ飛び回る。

「んー、まあ、ここぞというタイミングで大逆転アイテムが出てくるっていうのは、主人公特典とはいえずらいよね。私だって敵側だったら反則だって声高に主張するよ。（でも今は主人公側の脇役だから見て見ぬフリ）」

さて、何がでるかなーとわくわくする事30秒。「じぼっ」という音とともに大量の泡があふれ出してきた。そしてみるみる膨れ上がる。

泡、泡、泡。

虹色の泡があふれ出て、魔女っ娘達を縛っていた鞭(ってゆーか、蔓)を溶かし、さらにはダークナイト達と將軍に襲い掛かった。

「おかしいあるん……。シャボン玉だったはずあるん……」

「古くなつてたきゅぴ〜?」

い、いま、なんか怖い事聞いた! 古くなつてた魔法の泡って、なんか怖い! 助けてほしいけど触りたくない!

束縛を解かれた魔女っ娘達は、泡に溺れて魔法を使いあぐねているダークナイト達を蹴る、殴る、引っかく。う、うわあ、やっぱり肉弾戦だと強いなあ。猫の喧嘩みたいだけど……。

「くっ、今日のところはこのくらいにしておいてやるっ!」

魔法を封じられたダークナイト達の劣勢っぷりに、將軍は今時信じられないほどお約束のセリフをはいて撤退していった。「おぼえてるっ」とか、完全に負け犬フラグだから。

今後、出るたびにそう言うはめになるフラグだから!

新たな強敵(?)を撃退して喜ぶ魔女っ娘達とキュピル、そしてアルルン。を、地面に転がったまま見上げる私。

あの謎の泡に触れないですんでよかったと思うべきか、最後まで転がされてた事を悲しむべきか。

「あ、あのう……」

私は、彼女達の興奮が一段落つくまで待ち、声をかけた。

「たすけてください」

とりあえず一件落着いてなにより。でも、なみだがでちゃう。だ
っっておんなのですもの。(しくしく)

五月の脇役 その四

やっとこさ鞭から開放された私は、道の真ん中でお行儀悪く伸びをした。あー、身体中が痛い。

地面にこすれて傷になった腕をさすっていると、魔女っ娘達がちやほやと世話を焼いてくれた。たぶん、すっかり忘れてた罪悪感で。

「あー、あははー。ご、ごーめんごめん、盛沢ちゃん」

「怪我してない？」

「髪に砂がついちちゃってる。取ってあげるからまってて」

「う、うん、だいじょーぶ……」

まあ、彼女達だつて身動き取れなかつたんだし、解放されてからは怒り心頭に発していたんだろつから、仕方ないよね、うん。キュピルとアルルンにはもともとから期待さえしてなかつたし。

前から思ってたんだけど、この自称妖精達つて薄情だよな。第一目的以外、基本どーでもいー、みたいな。キュピルとのファーストコンタクトでも、咳き込む私そつちのけで女王様がどつのと騒いでたし。

それはともかく、こんな巨大なアスパラが出現したというのになんで騒ぎが起きないんだろつ。野次馬が集まってしかるべきじゃない？ 目立つのに。ものすごく目立つのに。……魔女っ娘モノ補正で一般人は気が付かないとか？

いや、でも、万が一ってこともあるじゃないか。篠崎さんの例もあるし。

「さあ、女王様をお迎えに行くあるるん」

「女王様はこちらきゅびー」

「すつぷ！」

12月の悪夢を思い出した私は、キュピルが能天気アルルンを我が家に案内すべく飛び立とうとしたのを、すんでのところできっと捕まえた。

あ、あぶなあ。「何するきゅぴー」なんてもがいてるけど、絶対放さないぞ！

「もうちょっと、こっ、目立たないように、控えめに行かないと。えーと、ほら、ダークフェアリーが後をつけてきたりしたら大変じゃない？」

アルルンを何とかしろ、というのを精一杯オブラートに包んで表現してみたんだけど、わかってもらえるだろうか。ってゆーかわかってくれ、ここは察してくれ！

私の誠心誠意をこめた説得（キュピルの頭を、若干瑞々しい音にするほど握り締めつつ頑張った）に、しぶしぶながら精一杯小さくなったアルルンは、それでも氷見さんよりちょっと背が高いくらい。「これ以上は無理あるん」と主張してたけど、多分それは「これ以上は（バードック將軍より短くなるから）無理」の意味だと思っ。奥の深い葛藤があるんだろうなあ、お野菜には。

まあこのくらいの長さなら、通行人とすれ違った場合は「ちょっと変わった棒です。用途は秘密」みたいな感じで誤魔化せなくはない。物干し竿とか、カーテンレールとか、そんなものに見えてくれますように。

我が家へ向かう道すがら、アルルンは先代の戦いについて（聞いてもないのに）色々教えてくれた。

もともと妖精の国は唯一の女王（何年かに一回種の状態で休眠し、

生まれ変わるらしい)の下、ライトフェアリーもダークフェアリーも仲よく暮らしていたのだが、35年前、ダークフェアリーが離反し、自分達の「女王」を立てて戦いを挑んできた。

その舞台として、何故か日本が選ばれてしまったらしく、お互いに現地で「騎士」を選び、戦っていたらしい。(つまり代理戦争やらせたってこと?)

先代は魔法の力がとっても強くて、ある意味私が理想とする「魔女っ娘」らしい戦いを繰り広げたようだ。次々に現れるダークナイトを打ち倒し、しまいにはバードック將軍を真つ二つに叩き折って見事勝利した。(い、痛そう)

ダークフェアリーは敗北を認め、両者は和解したはずだった。

しかし、一部のダークフェアリー達は仮初の女王「メイ」を擁したまま、未だに草の根的な抵抗運動を続けているという……。

ってゆーか。

「ダークフェアリーの女王様って、ジャガイモ?」

「なんでわかったあるん?」

「や、だって……」

名前を聞いたらメイクイーンが浮かぶじゃないか。

「先代は戦いが終わった後、最後のダークナイトと恋におちて、引退したあるん」

「敵方の騎士と恋に……」

ある意味禁断の関係っぽくて萌えるシチュエーションではある。

あ、やばい、ちょっとうらやましい。きゅんきゅんする。どうしよう!

「いいなあ、敵同士なのに惹かれあう恋かあ」

よかった、あの泡に巻きこまれなくて！

そんなこんなで（もう色々どうでもいい）やっとこさ女王様の収穫までこぎつけた。

魔女っ娘達がアルルの指導のもと、なけなしの魔力を振り絞ったり、キュピルのあの変な歌が、実は女王を目覚めさせる効果のある大事な歌だったことが発覚したりはしたものの、引っぱ張った割には、こつ、地味っていうか期待はずれっていうか。

だって女王様、赤ちゃんなんだもの。しかも握りこぶしサイズ。ちっちゃ！

私としてはやっぱり、「よくぞいままでわたくしを守ってくれましたね」なんて微笑みながら、威厳と愛らしさを共存させた女王様が、魔女っ娘達にお礼をおっしゃるシーンなんてものを見たかったわけですよ。

でも赤ちゃんなので「ふぎゃー」と泣いているばかり。頭の一部が牡丹の花で、葉っぱでできたベビー服を着ている。うん、まあ、ギリギリ許容範囲。かわいいっちゃかわいい。頭と身体のバランス悪いけど。

なんだかなあ。女王様誕生で一件落着だと信じていたのに、新たな敵も出てきたし、このまま第二シーズンが始まっちゃうんだろなあ。だから言ったのに！ コスチューム変えとけて。

ああ、でもダークナイトも学ランだったし、基本的にそういうものなのだろうか。

魔女っ娘達は、「魔法の特訓きゅぴー」とやけに張り切るキュピルに乗せられて、妖精界へと旅立っていった。……フォレンディア

と交流があるらしいし、だいじょぶだよね、帰って来る頃には10
0年近くの歳月が経っていました、なんてことにはならないよねえ？

ついでに私にも「一緒に来るあるん？」とお声がかかったが、
「このあと大事な用があるから」と丁重におことわりした。や、嘘
じゃないんだ。明日、明後日と、連続してお引越があるから、管
理人としては、ねえ？

どうせ両親は旅行中だし、一人で家にいてもすることないし。と
いうわけで、私は疲れた身体を叱咤して、マンションへ帰ることに
した。

五月の脇役 その五

つかれたあ……。そして身体中が痛い。

女王収穫祭のえとせとらですっかり忘れてたけど、そういえば私、擦り傷だらけなんだった。どつりで電車でじろじろ見られたわけだ。なにあのこかわいそう、みたいな視線を感じてやっと思い出した。傷というのは認識すると痛くなるものだよね。ああ、ズキズキする。

今日はお料理する気力もないし、絆創膏とお弁当買って帰ろーっと。

浅見さんがバイトしているらしいお店をあえて通り過ぎ、1ブロック遠回りして反対方向のコンビニに向かう。駅とは逆方向だけど、実はこっちのほうが我が家に近いので、普段はこちらを愛用している。

絆創膏とく、ドリアとく、そしてデザート。今日の気分は杏仁豆腐だ。ふわっとした味に癒されたい。

そうだ、ついでに野菜スティックも買ってポリポリ齧ってやろう。(腹いせ)

開いているレジは一つで、ちょうど顔見知りの人がお金を支払っているところだった。お向かいのアパートのおねーさんだ。こちらに引っ越してすぐの頃、彼女には大変お世話になった。

一見無愛想なんだけどお話してみるととっても親切で、駅までの抜け道とかおいしいお弁当屋さんとか品揃えのいい図書館とか、(これが一番大事なことだけど、と前置きしてから)口うるさ

いご近所のおばさま方のかわし方なんかを教えてくれた。

……すつごく、淡々とした口調で。最初は怒られてるのかと思っ
たよ。

「こちらにふつと視線を寄越し、目礼だけして彼女はすたすたとコ
ンビニから出て行った。

ううん、いつみてもクールっぽいなあ。隣にいるブレザー姿の男
の子は弟さんだろうか？ 似てないけど。

男の子のほづがなにやら話しかけてはそっけなくあしらわれて、
というかほぼ無視されている。ちよつと可哀想。

お会計が終わって、彼女達の後を追うようにお店を出た。お向か
いゆえに帰り道も一緒なんだから、わざとじゃないんだ。決して下
世話な詮索がしたくてあとをつけてるわけではない。

でも、何とはなしに目で追ってしまう。関係を詮索したいとかそ
ういうんじゃないんだけど、なぜだか引っ掛かるんだよねえ。そし
てこの引っ掛かりはきつと、あまりよくないことが起こる予兆だ。
目白さんの時計の時みたいな。

気付いてはいけない、なのに気になるう。ううむ。いやいや、や
めよう、自ら首を突っ込むような真似はしないほうがいい。

と、やつと気持ちに整理をつけた瞬間、私は見てしまった。

むこうからやってきた人が、あの男の子と正面衝突したにもかか
わらずまったく気付く様子もなくすり抜けて、それでいて「うおっ
？」なんて悲鳴をあげた瞬間を。

……あつれえ？

えーっと、そういえば男の子が、全く足を動かしていないような

気がするんですけど。それどころか、宙に5センチくらい浮いてるような気がするんですけど。浮かぶ野菜ばかり見続けた副作用かな？ 引っ掛かってた違和感はアレかあ。

やや歩調を緩めて距離をとる。絶対関わっちゃダメよ、アレに気が付いたって悟られちゃダメよ！ ってゆーか、アレはただの幻覚よ、と自分に言い聞かせながら。疲れてるから幻覚を見たのよ、幽霊じゃなくて！

ああああ、もう。やっぱりあつちで一泊して早朝に戻るべきだったあ！

翌朝。私は半分上の空で104号室の住人さんをお出迎えした。昨日目撃してしまったあの幽霊（不本意ながら認めよう）さん、最後にこつちを向いてニヤって笑ったんだよねえ……。そしておねーさんに耳打ちして、彼女はちょっと驚いた顔をしてこつちを振り返ったから、あちらにも気付かれた事はほぼ確定だ。

あーもー、どうしよう。オカルト系トラブルとは相性悪いのに。あ、いや、オカルトに限らずトラブルとは相性悪いけどね？ 悪いよね？ うん、悪いはず。中でもオカルト系は特に困るんだって。

お向かいのことで頭がいっぱいだった私は、新しい住人である九頭竜 貴彦さんのお話を一部聞き逃していた。せつかくお仕事の内容を説明してくれたのに。

この九頭竜さんは御歳34歳にして、独立行政法人の「地球平和機構」とかいう、すごく漠然とした名前の組織の所長さんなのだそつだ。

独立行政法人って、名前から業務が想像しにくいところが多いよねえ。政府から委託を受けて、「絶対やらなきゃいけない事業」を運営する機関なんだっけ？

九頭竜さんのお話からは、なんかの研究機関らしい事だけはわかったけど……。

ああいう機関って、どっかのお役所からむにやむにやしてきたおじさん達が退職金を稼ぐところなんだと思ってただけけど、これってただの偏見？ 34歳で、さすがにそれはないよねえ？

「お若いのに所長さんだなんて、すごいですね」

「はっはっは。ボクはこう見えて、10代の頃にアメリカで学位を三つ取ったんですよ。そのあとは色々な研究所に引つ張りだこでねむしろ遅いくらいですよ」

……実力に基づいているようだけど、えっらい自信家だなあ。笑
い方がアメコミっぽい。「ニカツ！」って効果音が聞こえてきそう
だ。(うっとうしい)

歯がやけに白いのはホワイトニングしてるからだろうか。そして
身体も気を遣って鍛えているな！

あちらでは見た目に気を遣うのもビジネスの一環っていう考え方が
浸透しているようだし、研究室に籠りきりのもやしっ子じゃダメ
なのかもなあ。

「でも、所長さんがこういうマンションで、いいんですか？」

そんな天才ならなおさら、もっとこう、セキュリティがこれでも
かっつてくらいすごくて、コンシェルジュと警備員が常駐している
超高級高層マンションの最上階とかのほうがいいんじゃないか？

研究成果目的で誘拐されたりしないの？ うちはそこまで責任と

れんよ？

という意味で聞いたのだが、彼は別な意味でとつてくれた。

「いいんですよ。あんまり高級なマンションに住むと、最近世間の目もつるさいですし、このくらいのレベルの部屋で」

わーるかつたなあ、「このくらいのレベル」の建物で！ こつちはこれで気に入ってるんだつちゅーの！ って言えない、お客様だから。

むー、ナチュラルに無礼な人だな。

104号室は101に次いで広いお部屋で、南と東に窓があつて、しかも南側は空き地、という好条件のお部屋だ。使い勝手は101よりむしろよさそうだし、私は気に入ってるのになあ。妥協しました、みたいな言い方されるとちよつとへこむ。

私が苦笑いしたのに気が付いたのか、九頭竜さんは慌てて微妙なフオーローをした。

「なにより、仕事場のすぐ近くなんですよ、ここ！」

……うん、まあ、悪い人じゃないんだ。ちよつと人付き合いについて学び損ねた人なんだ、きつと。ということにしておこう。

ゴミ出しのルールと宅配ボックスについての説明をして、私は彼に鍵を渡し、部屋に引つ込んだ。

大丈夫かなあ、ちゃんと生活できるのかなあ、と不安に思いながら。

五月の脇役 その六

更に翌日。昼。

今度は106号室のお引越しだ。

やっぱり34歳の男性で、名前を旭 直さんという。すなお、という名前の響きに反して、やけに皮肉っぽい印象を受ける人だなあ。世の中を斜めに見ているような、なんだかそっけない、冷たい人？人間嫌い？

よく見れば女性的な、美しいとさえ言える顔なので、余計に冷たい印象を与える。損だよ、絶対。日本において愛想笑いは万能なんだから。ほら、笑って笑って！

お仕事はNPO法人役員だそう。うわあ、なんだか九頭竜さんと色々対照的というか。

「NPO法人って、私は不勉強なのでよくわからないんですけど、どんなお仕事をなさってるんですか？」

なんとか会話をしよう、同じ建物で暮らすんだから、顔合わせたらご挨拶し合うくらいの関係構築こう、と適当に話題を挙げると、彼は名刺を取り出した。

うん、あの、ごめんなさい。そこに書いてあることは入居申込書にも契約書にも載ってました。ただ、それじゃわかんなかったんです。「NPO法人 MINT」ってナニ？

「み、ミントって、かわいいお名前ですよね」

なんでもいい、反応を返しとけー、なんでもいいから褒めとけー、と思って口にした言葉に、旭さんはなぜかむすっとした顔をした。ありゃ、男の人にかわいいって、禁句だったりするんだろーか。

「mission industrial nature
rust」

「へ？」

唐突に出てきた英語に、一瞬混乱した。み、みつしょん、いんだすとりあす……にやんだつて？ 勤勉な計画？

「略してMINTです。……まあ、要するに自然環境保護を目的としています」

「はあ。立派なお志ですね」

NPO法人つてのは確か、世のため人のためになるような業務をしつつ、利益をあげて給料をとっていい団体、なんだっけ。ただし、必要以上の利益は配分してはならない、とかなんとか。

自然環境保護で利益をあげるつて、きつと大変なんだろうなあ。

ミントと名乗るからには、ハーブの育成、販売でもしてるのだろうか。それとも別な事で賄っているんだろうか。

106号室は中くらいのサイズのお部屋で、お家賃もそこそこなんだけど。なんかこう、NPOというと半分ボランティアでお給料そっちのけ、みたいなイメージがあつて、余計なお世話だけど心配してしまう。

「既存の環境保護団体よりも、より積極的且つ勤勉に行動する事で

……」

あ、やべ。火いつけちゃった。

いつぞやの米良さんのマシンガントークを思い出しつつ、私は適当に相槌を打ち続けた。管理人業はサービス業なんだから、がんばってね、という母の言葉をかみしめながら。

こうして私の大学生活最初のGWは消費されていった。はつきり言って通常授業がある日のほうが楽だった。主に精神面が。

学校は学校で、今日も頭の上に飴が降ってくるし……。そういや目白さんの運命のお相手って、未だに姿が見えないな。不思議だ。

「どう？ 管理人業は。順調？」

「……たぶん」

不思議といえば、気が付けば光山君と一緒に過ごしているこの状況も不思議だ。なんだこれ。なし崩しに「二人は恋人」認定が浸透しつつあるし。

おかげで実は興味深々だったコンパとやらにも一度も誘われないんだけど。いや、うん、もともと私なんかお呼びじゃないのかもしれないませんがね？

でもちよつとお年頃の女の子としては寂しいじゃないか。誰か声かけてよ。

「あ、そうそう。そういえば……」

「クミちゃああああああん！」

光山くんがニヤつと意地の悪い笑みを浮かべて何かを言い出そうとした時、それを吹き飛ばすような声が聞こえた。

なんだろうと思って声のほうに目をやると、カフェの方から知らない男の子がぶんぶんと手を振りながら走ってくるのが見えた。……ダレ？

私を「クミちゃん」なんて馴れ馴れしく呼ぶ男の子は従兄弟達しかいなかったと思うんだけど。あ、や、嘘。今の嘘。もう一人いた。祖父の家の近所のお寺の子が私をそう呼んでいた。

でも違うよなあ。だってあの子、今じゃすっかり嫌なやつに成長したって聞いたし。

「クミちゃん、久しぶり！ うわあ、ほんとにクミちゃんだあ」
優しげなかわいい顔立ちで、声も高め。うーん、失礼だけど大学生に見えない。中学生でも通りそう。髪はちよつと染めてるのかな？
程よく茶色い。

こういうタイプが好きな女の子にモテるだろうなあ、この子。

光山君が視線で「ダレ？」とたずねる。私は首をかしげた。はて？

「えーっと……」

言え。「どちらさまでしたっけ？」と言え、言っただ！ 隣から
「じゃあさつさと追い払えば？」という圧力が掛かっているぞ。

ああ、でも、でも。

「ひ、久しぶり……？」

言えなかった。笑顔が引きつった。う、光山君がちよつと不機嫌
になったような気がする。

やめてえ、私が悪いんじゃないの！ この優柔不断なお口が悪い
のっ！ だって、こんな人懐っこく、心底嬉しそうに再会を喜ぶ人
相手にそんな残酷な事できないって。

「ほんと、久しぶりだよねえ。12年ぶり。全然変わらないねえ」

じゅーにねんぶり。ってことは……幼稚園か。

アレ、じゃあ今もしかして、幼稚園の頃から全く進化してないね
ってバカにされた？

そういえばあの幼稚園、名札はひらがなで名前表記だったっけ。

「ぺんぎんぐみ くみちゃん」って感じで。そっか、ってことは従
兄弟達以外にも、私を「クミちゃん」と呼んでた男の子は結構いた
のかも知れない。意識してなかっただけで。

「盛沢さんの友達？」

光山君がさりげなく一步前に出て、ついでに私を後ろに押しやっ
た。

別にユーシウス殿下の時とは違うし、とって喰おうってんじゃないんだからそんな警戒せんでも。

「あー、キミ知ってる！ 光山 海人君だよ。ボクは小笠原 礼央っていうんだ。よろしくね」

しかし、彼の無駄な警戒行動のお蔭でとりあえず名前が判明した。レオ君。はてさて、全く覚えのない名前だ。

だいたいさあ、幼稚園の頃の記憶って、曖昧になってもしょうがなくはない？ よっぼど印象的なできごとでなければ。

お遊戯会とか運動会とかお泊り会とか、そういうイベントの写真と一緒に写ってる子のことはそれなりに覚えてるんだけど……。

「ボクはねえ、クミちゃんの王子様なんだよ」

「は？」

あ、光山君と初めて心が一つになった気がする。

「おうじ、さま？」

あ、光山君が珍しく声に感情をにじませてる。

よっぼど驚いたんだなあ。いろんな意味で。ちなみに私、驚きのあまり口が利けません。「は？」と声を上げたまま固まっています。

「うん。クミちゃんを助けてあげたから、ボクが王子様」

いやいや、「ねー？」なんてニッコリ笑って同意求められても困るっちゅーか。

助けてもらったって、いつだ？ お泊り保育で川遊びの際にサンダル流されてコケた時？ 運動会の玉転がしで玉に潰されかけた時？ お遊戯会の舞台の上で問題児にスカートめくられた時？

正直、あの頃から無駄にトラブル続きだったから心当たり多すぎるんだよね。

ああ、問題児といえば、あいつのせいで死に掛けた事があったっけ。諸事情により、あの時の恩人のことだけ記憶から抜けてるんだけど。もしか、それが彼だったんだらうか？

私はじくつと彼の顔を見つめた。小笠原君とやらは自分のセリフになんの疑問も羞恥もないようで、暴力的なほど無邪気になっこ笑っている。

だめだ、わからん。

「えーっと、王子様って？」

「えー、ほら、あのときクミちゃん言ってたじゃん、『たすけてくれてありがとう、わたしのおうじさま』って。忘れちゃった？」

……記憶にございません。

えー、言った？ そんな夢見がちな事言っただけ？ この私が？

「まあ、しょうがないよね。あの時クミちゃん、すっごくショックを受けてたみたいだし」

「あ、あはは……？」

いいや、今は曖昧に笑っつけ。お茶を濁そう。確信が沸くまではお礼は保留で！（だって、すっごく小さな恩だったりするかもしれないじゃん？）

「クミちゃん、昔『おうじさまとけっこんするの』って言ってたから、王子様って言われてうれしかったのになあ」

「あはは、あはははは」

く、くるしい！ この人の真意が見えなくて苦しい！

「ふーん、王子様と結婚ねえ」

引きつったまま不自然に笑い続ける私をさすがに哀れに思ったのか、光山君が間に入ってきた。

「かわいい事考えてたんだね。子供の頃は」
若干棘を感じないでもないけど、乗った。その助け舟、乗った！

「ほ、ほんと、子供って何にも考えずにすごい事言っちゃうものね」
「でもこの歳になると、さすがにそんなに無邪気でもいられないよね」

「そ、そうですね」
助け舟が泥で作られているような気がしてきた。でも後には引けない。

「えー」
小笠原君は、ぷーっと頬を膨らませた。ほんとにこの人同い年なんだろーか。
「うーん、まあ、いいや。あ。ボクそろそろ行かなきゃ。またお茶しながら色々お話ししよーね。そしたらきつと思ひ出すよ」
「ばいばあい、と、彼は来た時と同じようにぶんぶんと手を振り、去っていった。

そして、あとにはなんだかとっても不機嫌な光山君と私を取り残された。

「とりあえず、『色々』聞かせてほしいな。『お茶しながら』」
「理不尽な怒りだと思っただけど、なんだか逆らいにくいなあ。ち、しかたない。

私はしぶしぶ、彼に連れられカフェに向かった。

……はやくおうちにかえりたい。

六月の脇役 その一

えーっと。

現在私は、「王宮」にいます。そして机をはさんで反対側のソファに座っている竜胆君にぺこぺこ謝っています。どうしてこうなった。

「あの、ええと、ごめんなさい」

一概に私だけが悪いとは思えないんだけど、竜胆君が無言、無表情のまま、もう10分も動かないものでプレッシャーに負けました。完敗だよ。怖いよ。ただでさえ彼は威圧感があるのに。

事の起こりは（体感では）数時間前。現場は我が家のリビング。ケセララン様によって勝手に秘密基地にされてしまったお蔭で、ほんっとーに用もないのに戦隊が我が物顔で出入りするようになってしまった、「我が家のリビング」である。

だから、彼が巻き込まれたのは我が家にあがりこんでたせいなのだ。私が招待したんじゃないから、やっぱり私のせいじゃないよね？

「いや……。盛沢が悪いわけじゃない」

うん、そうなんだけど。あなたが黙りこくってるからこっちは気を遣ってですねえ！ なんだよ、無駄に謝っちゃったじゃないか！

「それでここは……どこなんだ？」

「えーっと、国の名前は知らないんだけど……」

かつての名前も、今の名前も知らないんだけど。

「穂積さんの、国」

本日、108号室に住人さんが入った。倉石 雛さんという女性だ。

この方は、このマンションを建築中、デザイナーさんが言った言葉を思わず反芻してしまうような人だった。

「デザイナーズマンションというのは、個性的な方の需要が大きいです。特にメゾネット、変形部屋となると、正直使用面積はかなり損なんです。それでもそういう部屋を選ぶ、という方はかなりのこだわり派でしょう」

……ほんとだなあ。

今までの住人さん達は、お話してみると若干変わっていると感じたものの、見た目は普通だった。スーツだったり、ラフな格好だったりだけど、街を歩いても特に注目は集めなそうな服装だった、というか。

しかしこの倉石さんはやたらと目立つ。

ジーンズにタートルネックのノースリーブ、その上に黒い布をぐるっと巻いている。多分、原型はサリーなんだと思う。あれだ、インドの方の民族衣装。

詳しくないのでよくわからないが、布地にはおそらく手書きで、金色の魔方陣らしきものが所狭しと書き込まれている。う、ううん。今にも何かが発動しちやいそうだなあ……。

まあ、ご職業を考えればそのスタイルもアリかな、とは思っ。

彼女はなんと、売れっ子の占い師さんなのだそうだ。いろんな雑誌に関わっているとか。確かに、雑誌に載っている占い師さんは、こんな恰好してる人が多いような気がする。普段着だったのか。

占いというと、私は携帯に毎日配信される星座占いをチラッと見て、「そうか、今日は悪い事が起こったとしたら星の巡りのせいに

できるなあ」という使い方をしている程度だけど、全く興味がないわけではない。だって夢見がちな女の子だもん。

でも、いきなり「あなた、素質があるわ。弟子にならない？」なんて勧誘されたら引くのはしょーがないよね。

一体何の素質があるってんだ。霊感的なものか？ 昨年あたりから生霊に追っかけられたりして、とうとう芽生えちゃったのか、私！ 困るよ！

「今は学業と、この建物の管理で手一杯なので」とお断りして、とつとと部屋に引き返した。

ああ、貫井さんに会いたいような気がしてきた。こんな事相談できるのは彼女しかいない。向原君が吸血鬼の生活になじむまで当面付きっ切りになるみたいだな事言っただけど、一度連絡してみようかしら……。

なーんて考えながら（そんなことしたら足元見られて干からびるまで血を吸われてしまうから、考えるだけにしておく）階段を上がり、リビングのガラス扉を開けると、私が部屋を出るまではいなかった人達がいた。

水橋さんと、竜胆君。ここまでは不本意ながら理解できたんだけど（どうせこれから会議という名のお茶会だと呼び出されたのだから）、もう一人、いますよね？ 見知らぬ子が。

金髪の、いかにも日本人じゃないんだぜ的な整った顔立ちの男の子が。不機嫌そうな表情で、竜胆君を睨んでますよね？ なにごと？

竜胆君が睨み返したりせずに、むしろ困惑の表情を浮かべているだけマシな状況だけど。（あー、でも慣れないうちは、竜胆君って目つきが厳しいから、睨まれてるように感じるかもなあ）

「えーっと、こ、こんにちは？ その子は……？」

「あ、お邪魔してます。わかんないの、盛沢さんのお部屋からでてきたから、てつきり知り合いの子かと……。言葉も通じないし」

私の部屋から出てきたなんて聞き捨てならない事聞いちゃったよ？ どゆこと？

こんな若いのに空き巣？ いや、倉石さんをお迎えするまで私は家から一歩も出ていないし、お迎え中だって中庭でお話してたんだからこの子が忍び込めるはずなんてなかったはず。

となると可能性は二つ。

- 1、私が中庭に出る前から既に家の中に潜伏していた。
- 2、外壁からよじ登ってきた。

あるいは……。いやいやいや、考えたくない、想定外だと言いたい。

でもなあ。彼のちょっと変わった服装、なんだか見覚えがあるんだよなあ。そして彼が抱きしめている本は、穂積さんのところから光山君がお土産に持ってきてくれた絵本じゃあない？

「巫女姫！」

彼は本を取り落とし、私に駆け寄ってきた。あ、その本、綺麗だから結構大事にしてるのに！（コレクシヨンの意味で）

私を巫女姫と呼ぶってことは、やっぱりあの世界から来たんだなあ。きつと、あの本が目印になったんだろう。あの世界では黒髪と同じくありえない（とされている）金髪。そしてこの子の目の色は、よく見れば黒じゃないか。ということとは。

「穂積さん……。マリさんの、息子さん？」

「そうだ。もう一人の巫女姫。あなたを、迎えに来た」

そう言って微笑んで私の手を握る彼の、まあかわいいこと。神宮

司さんとこのクソガキと、なんとゆー差だろう。(言葉遣いは尊大
だけど、お父上がアレだから仕方ない)

かわいいんだけど、困った。保護者！回収してー！

「盛沢さん、さつきから何語でしゃべってるの？」

おっといけない、水橋さんと竜胆君がいるんだった。ここはなん
とか舌先三寸で丸め込んで、この二人に帰ってもらわねば。会議な
んて中山君のおうちでやればいいんだ。

その後、この子を送り返す算段をつけよう。手っ取り早いのは
光山君にお願いする事かな。

「え、えーと、えーっと、ほ、ホヅミノクニ語というか、そんな感
じの……」

とつさの事とはいえ、そのまんまの命名だった！いや、私さあ、
ネーミングセンス0なんだよ……。よかった、この場に根岸さんや
福島君がいなくて。あの二人がいたらぜったい突っ込まれたよ。フ
ウ、あぶない。

水橋さんは素直に「へえー、初めて聞いた。盛沢さん、すごい」
なんて感心している。ああ、水橋さんって(疑う事を知らなくて)
ほんといいこだなあ。だいすき。

竜胆君は、と見ると、彼はなにやら思索していた。うわ、めっず
らしい。(失礼)でも、眉間にシワ寄せすぎないほうがいいよ、た
だでさえ厳しい顔つきしてるんだから。新渡戸君みたいになっ
ちやうよ？

「おい！先ほどから何を企んでいる！」

そんな竜胆君の姿が、この子には「企んでいる」ように見えたら
しい。いろんな意味で一番企みに向いてなさそうな人捕まえて、な

んちゅーことを。

彼は私の手をぎゅーっと握ったまま、竜胆君の前にずかずかと進み出た。いたいいたい、多分剣で鍛えてるキミの力はちよつと強すぎるってば！

「丁度よい。そなたも共に来るがいい。民の前で、どちらが巫女姫に相応しいか正々堂々勝負しようではないか！」

あ、あー、そのセリフ！ 去年まで私が竜胆君を遠くから眺めながら妄想してたセリフだ。（前半はだいたい違うけど。道場をめぐるライバルと勝負してほしかったんだけど）

と、まあ、それは今どうでもいいよね、ごめん。

竜胆君は、なにを言われているのかはわからなかったものの、どうやら雰囲気で「敵視されている」と感じたらしい。「何を言っているんだ？」という視線をこちらに向けてきた。

いや、私が聞きたいよ。一体なんで竜胆君に敵対しようというのか。なんで勝負せねばならんのか。

「姫、安心なさい。あなたを月の騎士から解放するために、私は来たのだ」

ほわっと？

「さあ、行こう。こうしている間にも、現世うつしよの時は流れている」

いやいや、私にとっての現世はここですよ？ と拒否する間もなく、彼は、自身と私と竜胆君の足元に、何かを発動させた。ひー、家の中でのファンタジー禁止！

ああれえ、ごむたいなー、なんて冗談を言っている場合ではない。み、水橋さん！

「こつやまくんに……！」

水橋さんが驚きのあまり口をあんどぐりとあけている姿が、ゆがんで、そして……………。

気が付くと、またいつぞやのように、例の遺跡の上に三人折り重なって倒れていたのだった。

六月の脇役 その一（後書き）

* 絵本の詳しい内容について知りたい方は、「脇役の分際 ぷらす」の「ある日のアフタヌーンティー」をどうぞ

六月の脇役 その二

あー……。うん、重い。今回はうつぶせですか、おなかがゴリゴリします。そしてクロスするように竜胆君がのっかっています。プロレスの技かなんかか！ 内臓が出る！

おまけに「ご子息様」が私の腕を潰している。前回の巻き込まれ召喚のときも大概だと思っただけど、今回のほうがヒドイよ。前は光山君を蹴り落として、穂積さんもずり落とすという方法が使えたのに、これはキツイ。

しかし、アーチエリーで鍛えた（たかが2ヶ月弱だけど）私の腕は思いのほか力がついていたようで、上に乗っていた男の子をなんとか転がす事に成功した。よっしゃ！

ごろ、ごちつ、と音がしたけど、どんまい。

続いて腕をついて上体を起こし、身体をひねって竜胆君を落つことす。こっちも結構いい音がしたけど、きつと大丈夫。気にしない。そもそもレディーを潰して気絶しているほうが悪い。

二人が意識を取り戻す前に、私はささつと身繕いをした。そして何食わぬ顔で石の上に座りなおした。降りなかったのは前回みたいに怖かったからではなくて、靴を履いてなかったからだ。スリッパは脱げてどこかにいっちゃったみたいだ。気に入ってたのになあ。

二人とも石頭なのか、あんないい音をさせておいてまだ目覚めない。さて、どうしよう。

月の騎士から解放云々、というのは、あの絵本の物語の事だよなあ。

月神様が地上の争いを憂いて地上に遣わした二人の巫女姫。その片方が、地上の人間を見限った月の騎士に攫われて、遠くの世界に連れて行かれた、というエピソード。

攫われた巫女姫は私（ああ恥ずかしい！）で、騎士は光山君の事だったんだけど……。もしかしてあの子ったら、竜胆君を騎士だと思いついてしまったのだろうか。

まいったなあ。何もかも、最初から最後まで勘違いしているってことだ。だって、あの童話自体が捏造だもの。穂積さんパートなんて、昔話のミックスみたいだったし……。

ああ、跳ぶ寸前に叫んだ言葉は、水橋さんに届いただろうか。「光山君に連絡して、迎えに来てって伝えて」と言いたかったんだけど、「こうやまくんに」までしか間に合わなかったし。そもそも彼女、光山君の連絡先知ってたっけ？

もう、ため息しか出ない、ほんとどーしよー、と途方に暮れていると、突然ガラスが割れるような音が響き渡った。そして、悲鳴。

「だれか、だれか！ 殿下が！ 殿下が！」

そして……。人を呼び寄せる、甲高い声。周りが騒がしくなったお蔭で、やっと二人が意識を取り戻したけれどもう遅い。

「殿下が二の巫女姫を連れて戻られましたあ！ 宴の用意を！」

と、そんなこんながありました、今の状況に陥ってるわけです。

……。やっぱり、私は悪くないよね。

穂積さんの息子さんはほぼ一日行方不明になっていたらしくて、城中大騒ぎだったそう。あっちにいたのはせいぜい一時間くらいなのになあ。相変わらずとんでもないズレだ。

そんな殿下は現在教育係からお説教の真っ最中。私と竜胆君は誤解を解く間も与えられず、貴賓室に押し込まれてお茶を飲んでいるというわけだ。

しかし出されたお茶にはバニラのような香りがついていて、私は好きだけど竜胆君は一口飲んでぴくりと眉を寄せ、以来口をつけていない。彼は甘いものが苦手なのでお茶菓子にも手を出さない。

結果として断続的に、私がカップを持ち上げたり下ろしたりする音だけが部屋に響く。

このなんとも気まずく説明しがたい状況を、誰かなんとかして。

「去年の8月、穂積さんが行方不明になったでしょう？」

「ああ。……ここにいるのか？」

「詳しいことはよくわからないんだけど、彼女はこの世界の、えーと、神様の御遣いみたいな役目があったらしくて、それで私と光山君も巻き込まれて……」

どう説明しろっちゅーんじゃ！ 「巫女姫」なんてちやほやされて、光山君とお手々つないで恋人ごっこして、暗殺者に狙われたりしたあのわけのわからん日々を！

「この国の人達は私を『巫女姫』、光山君を『月の騎士』って呼んだの。それで、多分今回は、竜胆君が『月の騎士』って事になると思うんだけど……」

彼の表情は相変わらず読めない。どうしよう、内心「こいつどうとう狂ったのか？」なんて思われてたりしないよね？ 竜胆君はそんな人じゃないよね？

「現在、『月の騎士』は、私を攫って逃げてしまった悪い人扱い、されてるみたい、です、ごめんなさいっ！」

竜胆君の眉が再びぴくつとしたので、私はまた謝った。私が悪いんじゃないのにい！

「それで、さっきの子供は？」

「穂積さんの息子さんみたい。えーっとね、この世界と地球ではかなり時間の流れに差があるの。大体、こっちの一日が地球では一時間弱、なのかな……」

少なくともこの国に2週間いたとき、地球では半日くらいしか経っていなかったのだからそんなものだろう。井勘定だけど。

「光山君が言うには、『身体は所属している世界に準じて歳をとる』らしくて、穂積さんはこの世界を選んだから、こちらの時間で成長してるの。でも私達は、万が一ここに長くいることになっても地球時間に換算した分しか成長しないんですって」

「穂積の……」

そうか、元気なんだな、と竜胆君は呟いた。

そうだよ、行方不明になったクラスメイトの行く末はやっぱり心に引っ掛かってたよね。ごめんね、今まで本当のこと隠してても言えなかった私の事情も理解してくれるよね？

「失礼いたします。陛下より、お手紙でございます」

この世界について、できる限りのアドバイス（食事のマナーだとか、やたらキツイ食前酒だとか、うっかり長期滞在になったときに必要な日常用の知識の説明）を竜胆君にしていると、ノックの音がした。

「はい、どうぞ」

私は思わず去年の「偽の巫女姫」モードの演技に切り替え、少々抑えた声で応える。あ、竜胆君ビックリしてる。こっちも説明しと

けばよかったか。

「陛下は先程、ご公務で城を発たれました。お帰りは十日後になります。それまでどうぞごゆるりとお過ごしてください、とのことですよ。そんなとんでもない言葉と、差し出された便箋。

引きつりそうになる（十日って！）顔をなんとか落ち着かせながら、中身を読んだ。そこには一行、走り書きでサラリと。

「お久しぶりです。時間がなくてまだ会えません。息子をよろしくね。『二の姫』へ」

わざわざ日本語で書いてあるのに、二の姫へ、ということとは、アしですね。「よけいな事言っせつかく捏造した物語をぶちこわすようなマネしないでね」という脅しが入ってますね？

あくまで私に「二の姫」としてふるまえと。そういう事ですね？

忙しいのはわかるけどさあ、ちょっとだけ顔出してくれたらなあ。竜胆君の事、どう扱うべきなのか相談したかったのに。穂積さんも、まさか自分の息子が光山君と竜胆君を取り違えて連れて来たとは思ってもいまい。くあー、私がなんとかしなければっ！

「ありがとうございます。一の姫に会えるのを楽しみにしています」

とりあえず絵本では、二人の姫君は親しげだったので、あまりへりくだった口調ではおかしいよね？ それとも帝国の女帝陛下に対して不遜だろうか？ ああもおめんどくしゃー！

幸いな事にお手紙を持ってきてくれた人は特に不快を顔に表すでもなく、「何かご入用なものがありませんらなんなりとお申し付けください」と言って出て行った。

まあ、お城勤めの人がポーカークフェイスくらいできないと、それ

はそれで問題だからなあ。うーむ。

「穂積さんとしては、やっぱり私を『巫女姫』ということにしておきたいみたい。竜胆君も、『月の騎士』として通す事になると思うの。言葉も通じなくて不便だろうけど、私が通訳するから……」
「いや。さつき解析が終わった」

解析？ なんのこと、と首を傾げた私に、彼は右腕を差し出した。
あー。あー、ああ。アレか。うちの超技術か！ それ、そんな便利機能ついてたのか。……なのになぜ戦隊の英語の成績はあまりふるわなかったのだろう、と思わなくもないが、きつとフェアに勝負したんだね。テストは実力で受けてこそだもんね。

「会話のパターンを学習するらしい」
もしかしてリビングで小難しい顔してたのは、その機能の調整のためだったんだろーか。

「便利なのね」
「……ああ」
相変わらず、ケセラシ様がらみで褒めると複雑そつな顔をするなあ。おもしろい。

「それで」
もうちよつとからかってみようかな、なんて意地悪な事を考えている私に、彼はとても真剣な顔で、言った。

「俺は、おまえを守ればいいんだな？」

六月の脇役 その三

竜胆君の言葉に、私は「目をぱちくり」というのを素でやらかした。

オレハ、オマエヲマモレバイインダナ？

数秒反芻してその言葉の意味をやつと頭が理解する。と同時に、体温が急上昇した。

ひいいい、なんとゆー殺し文句を！ やばい、今ので私の乙女心メーターの針は振り切れた！ いやあああ、久々にベッドでゴロゴロのたうちたい！ 思う存分枕をぺしぺししたい！

いやいや、しかしだね、落ち着きたまえ。今の会話からどうして「俺がお前を守る」云々になったの？ むしろ色々気をつけなきゃいけないのは悪者の月の騎士認定されてる竜胆君本人なのに。

まさか「騎士 守る！」的に直結したんじゃないやあるまいね？ （だつて竜胆君つてたまに極端なんだもん）

「ま、まもる、つて？」

「あの光山が、盛沢を連れて逃げるような事情があつたんだろう？」
竜胆君からも「あの」呼ばわりされてるんだ、光山君……、というのは置いといて、なるほど、そういう思考過程がちゃんとあつたのね。（ほっ）

あながち間違つちやいないんだけど、あの時逃げ出したのは、潮時だったから、というのが真相だと私は思うんだ。

今は宗教の対立はなくなつたはずだからそういう危険性はないはずだ。（表向きは）

でも、未だに裏では対立が続いているかもしれないし、そうでなくとも「現在のバランスを崩しかねないので、月の巫女は二人いてはいけない」なんて考える輩も出てくるかもしれないからなあ。うわー、そう考えると私も危ないような気がしてきた！

「そうね、前回ほど危険じゃないとは思っけど、一応用心したほうがいいかも」

……ああ、穂積さん、ほんとにちょっとでいいから直接話し合いたかったですよ！

竜胆君の言葉に赤くなったり青くなったりしてしていると、またもお世話係の皆様がやってきて、私は久々にこちらの服に着替えさせられた。

わあい、サイズがピッタリ！ まさか私用の型紙が残っていたりする？

まあ、あれだ。少なくとも今飲んでいた紅茶には何も混ぜていなかったし、そこまで悲観することはないよね。うん、ないない。だいじょーぶ、今夜の宴でいきなり毒殺なんて、きつとない。

怖くない、怖くない、と自己暗示をかけながら部屋から出ると、さっそくつけられた護衛のみなさんに混じって立っていた竜胆君が、私の姿を見て顔を赤らめた。

あー、私にしてはそうとう露出高い服ですからね。純情さんめっ。涼しい顔で「似合ってるね」なんて言った光山君とはどこまでも反応が違うから、なんだか新鮮だなあ。

……だめだ、からかいたい。さつきから、隙あらば竜胆君をからかいたい欲求がわいてくる。恋？ いいえ、これは竜胆君の反応がかわいいのが悪い！ 私の心のイケナイ部分を呼び覚ましてしまっ

たのが悪い！

私は巫女姫モードの笑顔を浮かべて、竜胆君に右手を差し出した。「エスコートしてくださる？ 私の騎士様」

本来の私にはできない。でも、去年の二週間で私は女優になったのだ。巫女姫になりきってしまえばこんなものよーよ！

竜胆君はうろたえ、更に顔を赤らめて私を凝視していたが（まあ、これはさっきのお返しのようなものだから許してね）とうとう覚悟を決め、手を取った。

あ、握るんじゃないなくて、私の手をあなたの掌の上へのせる感じで引いていてください。

ぎくしゃく動く竜胆君（関節に油を差してあげたくなった）のエスコートでやっとこさ到着した宴の間には、相も変わらずとんでもなくカラフルな髪色のみなさんが勢ぞろいしていた。

……女帝陛下はご不在で、きつと旦那様も一緒に留守にしているはずだよ。この人達ってどういう基準で集められたんだろう？

「巫女姫」

殿下が立ち上がって隣の椅子をひいてくれたので、私達は内心の動揺はともかく、迷わずに自分の席までたどり着いた。昨年同様、私が座るまで全員立ちっぱなしなのは大変なプレッシャーなんですけど。怖いんですけど。そんなにみつめないで。

私が着席し、竜胆君が殿下の反対側の私の隣に移動すると、みなさんも腰を下ろした。これでやっと分析ができるってものだ。

ざっと見渡したところ、みなさん若い。20歳まで行ってないよな見た目だ。殿下のご学友とか、そんな感じ？ 男女取り混ぜて座っていて、まるで合コンのようだ。行った事ないけど！

うにやうにやと考えている私の目の前に杯が置かれた。そして、懐かしい香り。あの食前酒だ。

初めはクセが強くて、むせずに飲み込むのが精一杯だったけど、慣れるとこれはこれで……。 (もごもご)

殿下が杯を持ち上げ(まだちびっこくせになあ)乾杯の音頭を取り、皆が一斉に飲み干すとお食事が運ばれてきた。そういや竜胆君は大丈夫だったのかな、とちらりと見てみると、彼はいつもどおりの無表情。わ、わからん……。

同席しているのが同年代のおかげか、それぞれが好きに会話をしている。これならあまり緊張せずに食べられるな。まあ、きつとみなさまご身分が高くてお育ちもいいんでしょうけど。

「巫女姫……、いや、クミ姫。先程は失礼した」

食事が進み、空気がだいぶ砕けてきたなあ、そろそろデザートのために調整に入ろうかなあ、という頃になって、殿下が私に言った。

途端に、ぴたりと周りの会話がやむ。いやー、注目しないで！ほつといて！

「しかし、この期を逃せば次はまたいつ常世とこよに渡れるかわからなかったのだ。許してくれ」

常世。なるほど、時間の流れが違いすぎて、こっちの人にとっては地球って時が止まってるように感じられるのかもなあ。

でも私、不老不死じゃないんで。かなりか弱いので間違っても危ない事に巻き込まないでね？

「そういえばまだ名乗ってもしなかった。私の名は……」

殿下はそこで、一度口を閉じた。まるで名を口にするのを憚るように。もしかして尊い御名なのでやっぱり教えられないとか？

私が「ん？」と首を傾けると、テーブルの、遠くの方の席から、なぜかくすくすと笑う声が聞こえた。なんだあれ、感じるわ。っ。

「私の名は、モモタロー、だ」

ももたろうとなつ？ 桃太郎。そっぴや絵本の穂積さんパートは、かなり桃太郎だった。犬、猿、雉が赤、青、黄色の筋肉達磨に置き換えられてただけで。……好きなのかな？

「それはまた、随分男らしいお名前ですね」

男らしいってどうか、漢らしい。潔い。縁起もいい。ちよつと古風ではあるけれど。金髪美少年にはちよつと違和感があるのは否めないけれど。

「本当かつ？」

殿下改めモモタロー君は、俯き気味だった顔をぱつと上げた。

「本当に、男らしい名だと思つか？」

「私の国では、おそらくもつとも有名な英雄のお名前ですよ」

民俗学専攻じゃないからわからんけど、日本昔話の中で言ったら三本の指に入るくらいメジャーだと思うんだ。

「そうか、母上のおっしゃる通りなのだ……」

モモタロー君は（どんだん省略しちゃうぞー！）うれしそうに笑った。「皆、私の名を女のようにだと言っただが……、それを聞いて安心した。礼を言う、クミ姫」

桃太郎が女性の名前って、どういう感覚？ と突っ込みそうになったが、思い出した。この世界って、女性名は同じ音を二回つなげる風習があるんだった。モ・モ、という部分が女性名っぽいってとか。

「この上なく男らしい名前だと思います」

タロちゃん（これでいこう！）があんまり嬉しそうに笑うので、私は念をおすように繰り返した。あの端っこで笑った意地悪な子に言い聞かせるように。

しかし、穂積さんよう、あんまりだぜ。そりゃ、故郷を思い出せる名前をつけていう気持ちはわかるけど、少しは現在地の風習とか考えてあげようよ。

可哀想に、絶対陰口たたかれて傷ついてるよ、息子さん。

帰ってきたら一言文句言ってやろう、と思う。（でも旦那さんが隣にいたら怖くて言えないなあ）

翌日。名前の件ですっかり私に懐いたらしいタロちゃんが、朝っぱらからやってきた。

「クミ姫、でかけよう！」

お子様は元気ですなあ……。

早起きな竜胆君（剣道の早朝稽古してりゃ、そうなるよね）に合わせて予定外の時間に起こされた私は、ぼーっとした頭でパン（というかナンに似てる食べ物）を齧りつつ、頷いた。

六月の脇役 その三（後書き）

*この小説は、未成年の飲酒を推奨するものではありません。

六月の脇役 その四

この世界の基準は全て20。これは二十日に一回だけ「二の月」が昇ることに由来している。

二十日に一回って、地球の月に比べたらなんちゅーぐうたらな衛星か。ちよっと私みたいじゃないか。（あ、今、私本当に二の月の巫女姫なのかもしれないなあ、と頭によぎった。いや、ないない。無いから！）

というわけで一日は二十の時間に分かれているし、一月は二十日。一年は二十ヶ月。つまり一年は400日。わかりやすい。

最初は地球時間に換算してたから「タロちゃん、13歳にしちゃ幼いなあ」と思っていたけれど、実際はまだ10歳なんですって。なるほど、やっぱり口調はともかくお子様なのだね。ちびたんなのだから、少々わがままで強引なのは仕方ないさ……。

朝食の席に飛び込んできて、偉そうにふんぞり返って私をデートに誘ったのも、ちびっこ故の傍若無人さによるものだから仕方ない。許してやろう。

連れて行かれたのは博物館のような施設だった。国宝を始め、貴重なものを広く民に解放する事で情操面の発育をなんとらんたら、というタテマエで、入館料を稼いでいるらしい。

なんでまたこんなところに連れて来ようなんて思いついたんだ、タロちゃん。

まあ、こういうところ好きだけど。宝石とか展示されてるのかなあ？ いわくありげな宝石とか、ぜひともあってほしい！ 修学旅

行のルートを決めるときにも、ホープ・ダイヤ見たさにスミソニアンの自然史博物館をゴリ押ししたくらいには、好きだ。

竜胆君は……ダメだ、興味なさそうだ。博物館と図書館にはあまり縁のない感じの人だしなあ。なのに付き合ってくれてありがとう。

タロちゃんは私の手を引いて、順路などお構いなしにどこかへ誘導しようとしたが、私は遠慮なく興味を引いたものの前でいちいち立ち止まってやった。（朝から急げ急げとせきたてられて連れ出された腹いせ）

持った者が次々と暴君と化す「呪われた女王錫」。

永遠にお茶の時間が続く「呪われた時計」。

うっかり齧ると背が伸びたり縮んだりする「呪われたキノコ」。

ここは不思議の国かつ！ というツツコミを一通り（心の中で）堪能した後、ようやくたどり着いたタロちゃんの目的地で、私は固まった。

「どうだ。絶対驚くと思ったのだ！」

驚いた、というか、うん。

その部屋は特別嚴重に警備されていた。入るには更に「特別展示室入場料」が必要となるそうだ。（商売上手だなあ）

入って真正面に、私はとても懐かしいものを見つけた。

黒地に白のハイビスカス。試着を除けば一回しか袖を通さなかった、私のサマードレス。それを着たマネキンが、浮いている。いや、よく見れば糸で天井から吊られているんだけど。

入場した人たちを抱きしめようとするように両手を広げ、左足は

つま先までまっすぐに伸ばし、そつと地に着く寸前といった感じだ。右足は少し折り曲げている。(あ、サンダルまで履いてる！)

プレートには「二の月の巫女姫、御光臨の様子」と書いてある。なるほど、マネキンの背中から上に向かって伸びている銀色の糸は、翼と光を兼ねているのか……。

私の記憶が確かならば、去年「御光臨」しちゃったときは、石の上で穂積さんと光山君の下敷きになってたんですがね？ なにこの捏造。なにこの宗教画みたいなポーズ。

マネキンにははつきりとした顔はない。鼻と、うつすら微笑んだような口があつて、髪は黒い糸で作られている。ほんとなにこれ。ぜんっぜん私に似てないんですけど。

「普段はこの周りも警備の者が取り巻いている。残念ながら聖遺物を盗もうとする輩が絶えないのだ」

聖遺物ですとおおお！

「こ、これは、私が着ていた服、ですよね？」

たかが私のサマードレスが聖遺物とか、肩身が狭すぎる。思わず声が震えちゃったよ。

「残念ながら、その、姫のし、下着は、戦後の混乱に乗じて盗まれてしまい……、噂によると南の方の小国の神殿が保管しているそう。申し訳ない」

ひぎゃああああ！ セクハラだ、断固返還を要求する！ 穂積さんもそこはなんとしても取り戻そうよ。でも取り戻したら焼き捨ててほしい。頼むから保管したり展示したりしないで。

だいたい、入って真正面に私のマネキンとかおかしいでしょ。むしろここにあるべきは穂積さんの服でしょ？ いや、そもそも何故

こんなものが残ってるんだろう。ここって月の神殿の保守派が最後まで抵抗を続けたせいで激戦区になってたって、光山君が言ってた気がするんだけど。

誰かがわざわざ持ち出したのかしら。

「ファイフィーナが大切に持っていたそうだ。母上に付いて新しい製紙工場とやらの視察旅行に行ってしまったが、会いたがっていたぞ。ふい、ふいふいーちゃあああああん？」

「ファイフィーちゃんが？ あの子、マリさんに保護されたんですね」
「ファイフィーナはクミ姫より年上……、ああそうか、姫は子供の頃のファイフィーナしか知らんのだな」

タロちゃんは、ふむ、と頷いた。

やめなよ、まだ子供なんだからもうちょっと子供らしく振舞おうよ。まんまお父上のコピーになってどうするの。

「ファイフィーナはよくクミ姫のことを話してくれた。母上とは違いたおやかで儂げで、鈴振るような声で話すかわいらしい人だったと。なんだかよくわかんないけどごめんなさいっ！ 期待させてごめんなさいっ！」

「私は、二の姫の話聞きながら眠るのが好きだった」

……期待が重いよ。潰されそう。

「騎士殿についても、話してくれた」

タロちゃんは、今までどう見ても無視していた竜胆君に視線をやり、きつとにらみつけた。

「いやいや、それほんとは月の騎士じゃないから。大人の事情を汲んでそういうことになってるけど、それ別人だから。」

「騎士殿は、姫君を心から愛していた、と」

や、それも誤解。ファイイーちゃんはその頃とつてもちっちゃかったから記憶が曖昧になってるんだよきっと。光山君の好意は、なんとというか……そんな一途なものではなくて、もうちょっと歪んでる気がする。

あああ、もう、この心の声を全てぶちまけてやりたい！

「……けれども姫は、ときどき騎士殿を恐れているようにも見えた、とも言っていた。もしかしたら騎士殿は、姫の心変わりを恐れて攫ったのではないか？」

「どの魔王様だ！ 確かに、たまに「こわっ」と思ったりはしたけど。だって怖い夢みちゃったんだもん。」

でも、さすがにそこまで悪役にしなくても。ファイイーちゃん、けっこう光山君の事気に入ってみたいだったのに。

……あー、でもそのシチュエーションもおいしいっちゃおいしいかもしれないなあ。なにせこの場合、魔王は美形。フィクションでは結構人気のあるパターンだね。

「姫……。本当は、騎士殿に囚われていたのではないか？」

タロちゃんの手にぎゅっと力が入った。若干震えているのは気のせいではないと思う。そんなに怖いなら真正面からケンカ売らんでも。

光山君ならむしろノリノリで「だとしたら、どうします？」なんて受けて立ちそうなシーンだが、竜胆君はただひたすらタロちゃんを無表情に見下ろしている。だめだー、私がなんとかしないと！

「彼女はとても小さかったので、きつと少し勘違いをしているのでしょう。彼は私を守るために、界を超えたのです。あの時は、他に手がなくて……」

もちろん、あの時光山君が本当に手詰まりだったかどうかは私の知るところではない。(どうせ本人に聞いたとしても、ニッコリ笑って沈黙で答えてくれるに決まってるもの！)

「戻って来なかったのは、もうマリさん……一の姫の手に委ねるべきだと判断したからで」

「いや」

なんとか丸め込んで、月の騎士の疑惑をグレーのままお茶を濁そうと必死な私を遮って、黙りこくっていた竜胆君が首をふった。

「盛さ……ひ、姫を、この世界に奪われなくなかったから、だ」

そしてタロちゃんの神経を逆なでするような事言った！ ちよつとちよつと、今はあなたお得意のだんまりをぜひとも貫いててほしかったんだけどなー？ 空気読め！

あと、せつかくなので嘸まずに言っただけだった、です。

「奪われるだと？ 無礼な、そなたこそ……！」

「だから、必ず連れて帰る」

ちよつとー！

このままだと昨日の「どちらが巫女姫に相応しいか勝負だ」が実現しちゃうんですけど！ 控えて。お願いだから控えて！ このお年頃のお子様は、一回ムキになっちゃうと頑固で大変なんだからお取り扱いには慎重に頼むよ。

ますます面倒にこじれてゆく関係を何とかしなきゃ、とため息をついた私の耳に、次の瞬間女の子の声が飛び込んできた。

六月の脇役 その五

「通して！ 巫女姫様にお会いしたいの！」

「なりません。どうかお戻りください」

まだ幼さの残る声だ。多分タロちゃんと同じくらいの年の子供だろう。多分だけど。

……声だけじゃ年齢って判断しにくいよね。かくいう私の声も、セールの人から掛かってくる電話の撃退には大活躍している。

半分くらいはあちらが私を小さい子供だと勝手に判断して、「お母さんいる？」と優しく問いかけてくれるので、なるべく舌つたらずに聞こえるように意識して「いません」と答えるだけでいい。これはこれで屈辱だったりもするんだけどね！

まあ、そんなことは置いといて。

「通してっ！ 通しなさい！ 私を誰だと思っているのっ？」

「いかん、お止めしろっ！」

なんだか穏やかじゃないことになってきたなあ。

タロちゃんと竜胆君も、さすがに不毛ならみ合い（というか、竜胆君は見つめてるだけのつもりなんだろうけど、いかんせん視線が強いんだよね）をやめて入り口の方をうかがっている。

「……ティティ？」

タロちゃんには心当たりのある声らしい。

ティティちゃんとやらは警備の人達をかなり困らせている。（「イテッ」とか「あっ！」とか聞こえてくるといふことは、きつと抑える人を引つかいたり叩いたりしてるんだらうなあ）

「止めなくて良いのですか？」

そわそわと、私と声のほうに視線を行ったり来たりさせる夕口ちやんに、私は助け舟を出してあげた。自分からは言いにくかるう。

「すまない。……っおい、ティティ！」

途端に、ぱつと表情が明るくなった。今までの、年にそぐわぬ落ち着いた態度をかなぐり捨てて走ってゆく。

ああ、無理してたんだなあ。ぎゃあぎゃあと、なにやら元気に騒ぐあの姿こそが彼の本性か。安心した。

さて、今のうちに竜胆君に釘を刺しておこうか。（日本語で）

「ごめんね、思っていた以上に月の騎士は悪者扱いされてみたい。あまり正面から受け止めずに、流しちゃってくれる？」

相手は10歳の子供なんだから。さっきみたいに勝負を受けて立つみたいなセリフは控えてね。（って、遠まわしに言っただけなんだけど、通じたかしら……）

元々無口で、視線と首の動き、そして時々「ああ」だけで意思表示するようなあなたが、なんだって頑張ろうとしちゃったのさ。

「……盛沢」

てつきり今回も「ああ」と言って頷くだろうと思っていたのに、竜胆君は珍しく首を振った。え、ちよつと、ほんとなんでそんなキヤラ変わってんの。トリップの副作用？

「あいつは、真剣なんだ。理由はよくわからないが、真剣に、俺と戦いたがっている。だから」

入り口の方の騒ぎが収まり、しんとした展示室の中に彼の声だけがやけに響いた。

「だから俺も、きちんと向き合おうと思う」

覚悟を決めた武士のような目でそんなことを言って、私に一体どう反応を返せと？

とりあえず正直に言っていい？
……扱いきらい。

ティティなんかちゃんは、オレンジの女の子だった。オレンジの髪、オレンジの目、そしてオレンジのワンピース。（ということ、成人していない年齢だ）

つんと澄まして、挑発的な目で私を見つめている。うふふ、そんな生意気な子にはニンジン娘とあだ名つけちゃうぞ？

そついや二つの宗教が（名目上）和解して融合した現在、服の色の決まりってどうなっているんだろ？ 私と竜胆君、そしてタロちゃんは黒を着ているし、私の世話係さんや護衛の皆さんは青系統だからすっかり頭から抜け落ちてた。（多分コレは、月の巫女姫に対する配慮ってやつだ）

太陽神信仰の貴色が何色だったのかわからないけど、そつちも当然取り入れてるよねえ？ 彼女のオレンジは、もしかするとそうなのかもしれない。侵入を止める警備のみなさんの反応からして身分は高そうだし。

「ティティ。クミ姫に何か話したいんだろ？」

「はい。巫女姫様とお話がしたいのです」

「姫と二人だけで話したい、ということか？」

「殿下、それは……」

護衛のリーダーっぽい人が、言いにくそうに口を挟む。そうだよねえ、何かあってからじゃ遅いもの。子供にも警戒してこそプロだよね。だいぶ元気なお子様のようにだし。

「ティティは大丈夫だ。クミ姫、聞いてやってくれるか？」

でもタロちゃんはプロではないので、アッサリ私に判断を委ねた。

なんて答えにくい二択なんだ。イエスなら危機感が足りない、ノーなら心が狭いと思われそうじゃないか！

「あら、巫女様が、こんな小さな子供と二人きりになるのが恐ろしいとおっしゃるなら、騎士様も一緒にかまいませんわ。誓って巫女様に危害を加えたりはいたしません」

どっちがマシなイメージだろうか、と我ながらせこい計算をしていると、本人から譲歩案が出た。

小馬鹿にしたような態度は鼻につくが、きっと生まれた時からわがままに育てられたお嬢様なんだから仕方ない。(自己暗示)

それよりも、ボディーガードにわざわざ竜胆君を指定してきたというのはつまり、どうしても話をしたいけれど、タロちゃんやこの世界の人達には聞かれたくない、ということか。

どんな話なのか興味が沸いた。ようし、聞いてやるんじゃないか。「いえ、二人でお話しましょう」

咎めるような竜胆君の視線を無視して、私はあえて彼女と二人きりになることを選んだ。挑発に乗ったわけじゃないよ？

城に戻って席を用意する時間がもつたいたい、とティティちゃんが言うので、ここの応接室を借りることになった。

館長さん自らお茶を持ってきて注いでくれたけど、手が震えるあまりお茶は半分以上がカップの外に注がれていく。おちついて！ テーブルクロスはお茶を欲しがってないですよ！

「み、み、みこ、巫女様におかれましては、ごき、ごきっ」
多分「ご機嫌麗しゅう」とかなんとか言いたいのだろうけれど、震えが激しすぎて噛みまくっている。

まあ、着ていたサマードレスどころか下着まで聖遺物扱いされる

レベルのありがたがられっぷりだしなあ。きっとこの人は信心深いんだ。宗教と無縁に生きてきた私にはわからない緊張だ。

幸いな事に館長さんはほぼ意識が飛んでいて、机にお茶を注いだ事や、噛みすぎて挨拶を言い切れなかった事にさえ気が付かず、力クカクとお辞儀してさっさと出て行ってくれた。うんうん、これでまた失礼をお詫びする口上やらなにやらが始まったらいつまでたっても肝心のお話が聞けないから助かったよ。

「では、あなたのお話を聞かせて」

本当はここで一口お茶を飲みたかったんだけど、カップを持った手が濡れてしまいそうなので我慢。お茶菓子もなかったから（まだ早い時間だったし、急だったから仕方ないけどさー）ナプキンもないし。

ティティちゃんは、改めて「ルクティティと申します」と気取った挨拶をしてみせると、きっぱりと言った。

「早く元の世界に帰って、二度と戻ってこないでください」

この世界は現在、「一の月の巫女姫」である穂積さんを女帝に戴き、「太陽の神子様」が王配殿下兼摂政として政治を執り行っている。

建国以前から二人に付き従っていた人々が帝国貴族となり、早期に降伏した国々は属国として残された。滅ぼされた国々の王族の生き残りは、一部は帝国貴族に列せられたが、多くは抵抗勢力として野に下った。（帝国貴族と属国の王族は、身分としては同等、という事になっているが、実際は側近として重用されやすい帝国貴族のほうが格上のようだ）

ティティちゃんは、元太陽信仰派の帝国貴族の娘なのだそうな。

そして、なんとタロちゃんの許婚候補とゆー。

護衛の皆さんが危険視する理由がよおくわかった。いつ私を暗殺しようとしても不思議じゃない立場の子だった。ってゆーか、若干殺気を感じる。

「はつきり申し上げて、今度の巫女姫様のご光臨には、皆困惑しておりますの。せっかく太陽と月、バランスよくつりあっていましたのに、今更月の巫女姫がもう一人いらっしやるなんて。このままではまた無益な争いが始まりかねない、と父も心配していました」

タロちゃんに無理やり連れてこられた、という事実は無視ですか？ それとも本当に知らんのか。そして月の騎士については問題視していないのか？

私を非難するティティちゃんに容赦は無い。

「この上殿下まで黒い目の魔法にかけられてしまったら、とっても困った事になるって、父が！」

うんうん、ぱぱがね。黒い目の魔法云々ってのはよく意味がわからないけど、ぱぱが言ったのね。

「殿下は、おばかさんなんです。いつまでたっても、あの忌々しいファイアーナの夢物語に夢中で！」

いまいまして言った！ あ、いや、でも、ファイイちゃんの美化されたお話には私も引いたよ。なんだあの「たおやかで儂げで鈴振るような声で話すかわいらしい人」って。そんな生き物、今時いるの？ 絶滅危惧種？

その点については大いに語り合えそうだなあ、と頷く私に気付かず、ティティちゃんは、とうとう勢い良く立ち上がった。

「この世界を見捨てて逃げた巫女姫に、片思いするなんてっ」

そして興奮のあまり、彼女はテーブルにドンっ、と両手を叩きつけた。

がっしゃーん。

ティーセットが跳ね、ついでに中身も跳ね上がる。護衛の皆さんと竜胆君が、すわ一大事と部屋に雪崩れ込んでくる中で、彼女は拳を握り締め、叫んだ。

「わたくしが、私がいるのにつ！」

……………。なんだ、また久々に、恋の鞘当にまきこまれただけか。

「とりあえず、タオルとお茶をください」

私は、もはや手や服に滴が垂れようと気にせず、冷めたお茶を飲み込んで入り口の皆様に微笑んだ。

六月の脇役 その六

ちよつとお茶が掛かったくらいでやれ医師を呼べ、風呂の支度をしろ、お着替えを早く、と大騒ぎになつて、私は話の途中でテイテイちゃんと引き離されてしまった。もしかするとあれは前フリで、本筋はこれからだったのかもしれないのになあ。すつきりしない。あの続きが、実は国家を転覆させるような陰謀についてなんかじやないことを切に祈るよ。郷に従つて月神様と太陽神様に。

とりあえず「私が手を滑らせてカップを取り落とした」と言つておいたので（どう見たつて犯人はテイテイちゃんだけど、こういうのは形式だからね！）、こんなつまらんことで関係者に処分が下ることは多分ないだろう。ないよね？

まあそんなわけで、お医者さんに診てもらつて、お風呂で磨きなおされて、お着替えをして、今度は竜胆君と2人で読書をしている。

読書してるつて言うか、うん。竜胆君の腕輪にはさすがに文字を読む機能まではついてないそうなので、私がしばらく音読して聞かせてただけど、本人が「俺のことは気にしなくていい」というので（飽きたんだ。絶対そうだ）お言葉に甘えてます。

どっぶり自分の世界に没りきつて読んでます。（そついや竜胆君なにしてるんだろ？ 室内なのでちょーちよや白兔を追っかけてるというわけにもいかんし、座禅でも組んでるのだらうか）

だつて他にやることないんだもの。テイテイちゃんはたぶんおうちに帰されてお説教されてるだろうし（まさか怒られないつて事はないだらうさ）、タロちゃんは勉強の時間だし。

竜胆君を外に立たせとくわけにもいかないし、かといつて二人で

お散歩というのもどうかと思うし。

護衛の皆さんだって、護衛対象がお部屋の中でじっとしてるほうがやりやすいだろうし！（護衛のしやすさ、という点を常に考えってしまうあたり、私はやっぱり小市民だと思うの）

何を読んでいるのかといえば、それはもちろん「二の月の巫女姫と月の騎士」に関する諸々の物語。

「私達が常世にいる間に、こちらで起こったことを詳しく知りたいのです」とお願いしたら、ものすごい数の本を運び込まれてしまった。

これ、全部読めってか？ 代表的なもの数冊でよかったのに。いくら読むのが早い私でも、一週間はかかりそうだ。

というわけで、そんな一大プロジェクトはさくつと諦めて、興味のあるところだけ流し読みすることにした。

物語の大筋はどれもいつしよで、大まかに言うと三つに分かれている。「一の月の巫女姫パート」は、月神様から地上の平定を頼まれた穂積さんが、道中出くわした赤、青、黄色の従者を連れて国を統一するべく各地の戦場を行脚するお話。（……ってことは、傭兵さんだけじゃなくて第二王子と次期神官長さんも、結局合流したんだなあ。もしかすると側近としてまだ生きてるんじゃないか？ あの人達）

そして「太陽の神子パート」では、太陽神に遣わされた旦那さんが、ものすごいカリスマ性と知略を駆使して太陽信仰の国々を纏め上げ、その時点で穂積さんと出くわしてふぉーりんらぶした事になっている。

この出会いはもともと太陽神と月神の意図する所であった、とも

されているが、これはうそっぱちだ。

だって私知ってるもん。本人から聞いたもん。二人が出会ったのはむしる戦場で、刃を交し合ううちに恋が芽生えたって。(あ、旦那の方は一目ぼれしたんだっけ?)

そのほうがよりドラマティックな気がするんだけど、あまりに血なまぐさいのと、宗教をより統一しやすくするために操作したんだな、きつと。

で、私が本当に興味があるのはもちろん「二の月の巫女姫パート」なんだけど、これがまたなんとモ……。本によって解釈が違うというのが大変興味深い。

多分、本人が不在だった上に、滞在していた国は滅び、真実を知っている人々は口を閉ざしてしまったからなんだろうけど。

神学会では(そんな部門があるんだなあ)今一番ホットな話題、らしい。穂積さん達もわざと目くらましように放っておいてるんだな。くそう、ダシに使われてくやちい。

ある本では「二の姫と騎士は心の底から愛し合っていて(この部分は音読を自主規制させてもらったよ)、騎士は姫の危機にやむを得ず攫って逃げた」ことになっているし、またある本では「二の姫に邪な想いを抱いた騎士が(ここも自主規制。ってゆーか、個人的に検閲削除したい)無理に攫っていった」ことになっているし、「二人はこの世界を見捨てて駆け落ちした(むしるこのほうがスッキリしてわかりやすい)」なんてのもある。

更には、「実は月の騎士という人物は実在しなかった」説や、「二の姫は既に死亡している」説や(縁起でもない!)、「姫はどこかの貴族に攫われて閉じ込められている」説なんかもあったりして、

とにかくバリエーションが豊富だった。

よく見たら「二の姫はどこに消えたのか？」みたいな謎本っぽいものまで出てるよ？ なにこれ、ちょっとおもしろそう。

どれどれ、と数ページ読んで、私はぱたんと本を閉じた。

……だつれが幼女じゃっ！

なにそれ、しつれーな！ いくら型紙のサイズが小さいからって、そりゃあこの国の人々はおつきいからそう見えるかもしれないけど！ 確かにティティちゃんと変わらないサイズだったけど！ 日本じゃ152センチもあれば、まあ、お世辞にも背が高いとは言えないけど、十分なサイズなもの。きいいい！

しかも、この著者はこの説を証明するためにわざわざ件の「南の小国が保管するという聖遺物」、つまり私の、し、下着を調査しないと嘆願書を提出中だそうだ。一生却下され続けますように！

ってゆーか、いつそアレは自然発火でもして自己消滅すればいい。

燃える！ 燃えてしまえ！（火事にならない程度に）

「どうした？」

「……なんでもないの。疲れちゃって」

私が本を閉じた音は思いのほか大きくて（まあ、腹を立てたからね）、存在を忘れるほど静かにしていた竜胆君を驚かせてしまったらしい。

「ごめんね。色々捻じ曲げて書いてあるから、ちょっとね」

特に、恋愛色のやたら強い物語に仕上がっている本は身もたえするほど甘ったるかっただしね！ 二の姫と騎士の会話とか、にやんだそれって感じだよ。シェイクスピアのお芝居みたいだったよ。（っと思ってたらどうやら劇作家さん監修の本だった）

しかし、20年足らずでよくまあここまで歪んだものだ。当時のことを知っている人達だってまだ生きてるのに。いや、だからこそこんないろいろな説が流布しちゃったのだろうか。みんなが断片的に知っている事をもらすから。

「ただ『二の姫と騎士は、王様に捕らえられそうになったので異世界へ逃げていきました』とだけ書けばいいのに、どれも競って大げさな話にしてるんだもん」

竜胆君はこくり、こくりと赤ベコみたいに頷くだけなので、傍から聞いていると独り言みたいになっちゃって少し虚しい。いいけど。こうやって声に出す事で考えも整理されるし。

「月の騎士がまるつきり悪役みたいに書かれているのもあるし。…竜胆君、ほんとに気をつけてね？」

もいちどこくり。

「……お茶、入れるね」

気分転換するべく、私は立ち上がった。

「正式に決闘することになった」

お茶を入れてテーブルにつくと、いきなり切り出された。

「は？」

一瞬何のことかと呆ける。この世界に来てからこんなことばっかりだ。もしかして竜胆君の翻訳機が暴走でもしてるんじゃないの？ほんとに竜胆君こんなこと言ってるの？と現実逃避しかけている私に、彼はさらに畳みかけた。

「あいつの両親の前で、俺を倒したいらしい」

あいつというのは、きつとタロちゃんのことだよな。なに、さっ

きの真剣勝負の話がそんなに発展しちゃってるの？ 私とティティちゃんがお話している間に？ と思ったけれど、どうやらその話は昨日の夜のうちに決まっていたらしい。

んのおおおおおおお！

「あいつは、『この世界のために』お前が必要なんだと言った。国のため、世界のために」

……深読みすると「殿下に懐かれていい気になるんじゃないぞ。

あいつはお前が好きなんじゃなくて世界のためにお前を引き止めたがっているだけなんだぞ」という意味に取ることもできなくはないけど、きつと竜胆君のことだ。裏なんてない。無いと思いたい。

国語のお勉強の時だって行間を読むことを放棄していたような竜胆君が、そんな高等技術使いこなせるはずが……！（げほごほ）

「神の遣いはこの世界に留まって使命をまっとうするべきで、お前も今度こそはここに残ってほしいそうだ。絶対に帰さないと言われた」

た、たろちゃん、なんて怖い事を！

なるほど、それで「姫をこの世界に奪われなくなかった」に繋が

るのか。

「邪魔をするなら殺す、と言っただ。あんな、子供なのに」

なんて物騒な！ 現代日本でもすぐ「殺す」とか言う子っているけど、そういうのとはきつとニュアンスが違うよね？ もっと重いよね？ 竜胆君も気の毒に。

決闘はタロちゃんの両親の前で。つまり御前試合。ということは、期日まで9日。9日経つ前に、私はなんとかして帰る方法を探すかタロちゃんの決心を曲げるか、どちらかをしなくてはならない。

帰る方法って言っても、何の力も無い私にはどうしようもない問

題なので光山君を待つとして（他力本願で何が悪い？）
、夕口ちや
んを攻略しよう。

懐柔して、曲げよう。ぽきっど。

六月の脇役 その七

「クミ姫様、昨日の『月姫物語』のお芝居はいかがでした？」

「とても（思いもよらんナナメな解釈をされて）面白かったです」「わたくし、あの作品の劇作家と懇意にしておりますのよ。よろしければ明日、我が家で……」

「まあ、ずるい！ 明日は我が家の演奏会にいらしてくださいな」

ちやほやちやほや。

私は同じくらいの年頃のお嬢さん方に囲まれて、お茶を飲んでい

る。いわゆる「お取り巻き」というやつですよ。それぞれの思惑はともかく、見る人が見れば羨ましい状態だろう。

願わくば、みなさんの衣装の色がもうちょっとこう、色とりどりだったらなあ。全員紺色じゃイマイチ盛り上がらない。部屋全体が暗い。怖い。パステルカラーを所望する。

このお嬢さんたちはつまり、月神信仰派の息の掛かっているお家の皆様で、タロちゃんの婚約者候補にティティちゃん（あの子ってばタロちゃんのパパの参謀だった人のお嬢さんなんだから！）を据えたくない、という意図の下に団結している。

とりあえず私とタロちゃんをくつつけとけ、という指示を受けているようだ。

あの子、私もう18歳だし。タロちゃんはまだ10歳だし。私の倫理観では犯罪だから。

まあ、ここもきつと早婚なんだろうけど、10歳児はちょっとなあ。ロミオとジュリエットだって17歳と13歳くらいだったよね、

確か。

そういえばジュリエットのお母様の「私があなたの歳には、もう母親になっていましたよ」というセリフにはドン引きしたっけ。なんてマセてたんだ、花の都ヴェローナ。

決闘カウントダウン開始より早5日。

私は思っていた以上に忙しくて、タロちゃん（の決意）をひん曲げて叩き折る時間を全くとれなかった。前回来た時は一日一回バルコニーから手を振る以外は食っちゃ寝、という生活だったのに、なんだこれ。

現在の私のスケジュールはこうだ。

朝はゆっくり起床。洗面からお着替えから何もかもを手伝ってもらって（というより、じっとしていると自動的に支度が終わっている）、ブランチ。

その後、午後のお茶の時間まで「二の月の巫女姫」に興味津々な神官やら帝国貴族やら遠路はるばるやってきた属国の王族、学者先生との面会。（質問攻め。毎回失言がないかとヒヤヒヤするよ、胃が痛いよ！）

お茶の時間は今のよう貴族の奥様、お嬢様方が押し寄せて来る。このあとは、面会が続行される事もあるし、観劇や音楽会なんかの娯楽に連れ出されることもある。今日は面会の続きだ。神学者の皆様的情熱がすごすぎてなかなか解放してもらえない。

いいじゃんか、私と騎士の関係なんかどーでも。（とは言えない）

次、夜の衣装にお着替えして月の儀式。てっきり宗教改革で省略されただろうと思っていたのにまだ残っていてびっくりした。

相変わらずものすごい量のお酒を神官が飲み干すのをぼーっと眺

めるだけのこのお役目って、何か意味があるのだろうか。そして太陽の儀式ってあるんだろうか。

それから夕食。ここでやっとタロちゃんに会えるのだが、やはり二人きりにはなれないので差し障りのない話題だけで終わってしまう。

あとは、前回と一緒に、お風呂、マッサージ、夜着を着せられて就寝。

中世のヨーロッパと違って、夜は静かに過ごすのが好まれるらしい。だよ、ただでさえ夜は短いんだし、少しでも暗いうちに寝ておけて気分になるよね。

まあとにかく、タロちゃんと二人つきりでお話して言いくるめるための時間がないというのが現状である。

夜中に訪ねていくのもなんだかなあ、お子様は夜きちんと寝ないと背が伸びないというからなあ。それに、夜、私が徘徊していたら護衛のみなさんにも迷惑じゃないか。世間体も悪いし。

とはいえ、このお嬢さん方とのお茶会、決してバカにはできない。噂話を集めるのがとても上手な子が何人か混じっていて、おかげでいろんな事がわかった。

まずは、タロちゃんとティティちゃんの関係。昔は兄と妹のように仲睦まじかったのに、5年前にある事件が起こって以来、ティティちゃんの態度が変わってしまったそうだ。

「あの時は、城中が大変な騒ぎでしたわ」

「ええ、本当に。兵士達が恐ろしげな顔で行ったり来たりして、生きた心地がしませんでした」

「無理ありませんわ。だって、殿下を害そうとした者を探していたのですもの」

5年前、タロちゃんが城の中庭で、とんでもないたんこぶを作って気絶していた、という事件があった。近くにいたのはティティちゃん一人で、他に目撃者はゼロ。

タロちゃんは事件前後の記憶を無くしており、ティティちゃんは頑なに口を噤み、結局何があったのかはわからず仕舞いだった。

「そのあと、ある噂がまことしやかに流れましたの。ルクティティ様が口を噤むのは、お身内を庇うためだ、と」

もともとティティちゃんのパパは、穂積さんではなく旦那さんを皇帝として即位させて、太陽信仰こそを唯一の宗教にしようと頑張っていた人なので、自分が主と仰いで付いてきた人が突如「黒い眼の魔法にやられて」（つまりこれは月の巫女姫に魅了されて、の意味だったのだな）自ら身を引いた事が気に喰わなかったらしい。一時期、謀反を警戒されるほど腹を立てていたそうだ。

……だからってタロちゃんぶんなくって逃げるなんて、セコいマネするかあ？ 参謀なんて務め上げた人が、そんなことするわけないよね。噂ってこわいなあ。

「以来、ルクティティ様は殿下に対して、その、不遜とも取れるような振る舞いをなさるように……」

「殿下はそれでも妹のようにかわいがっていらっしやいますのに」

あとはティティちゃんの悪口大会。うん、不満があるのはわかるよ。生意気だしな。

でも相手は10にも満たない子供なんだからもうちょっとお手柔

らかに。大目に見てやりなよ、たかがタロちゃんのおしゃべりを邪魔されたくらい。

あの子だって必死なんだよ、きつと。

「ところでクミ姫様、騎士様は今どちらにいらっしやいますの？」

一通り、要約すると「親父の権力嵩にきて調子に乗りやがってあの小娘、きいいいい」的な話題が収束すると、また唐突に竜胆君の行方を聞かれた。

女の子の会話というのはとりとめもなく、たまに脈絡なく飛ぶものである。

「お茶会に参加してくださったらよろしいのに。私、お話してみたいですわ」

私も、わたしも、と声上がる。おおっと、竜胆君まさかの大人気。

しかし彼がこんなキャピキャピした空間に耐えられるとは思えない。絶対硬直する。最後まで固まったままうんともすんとも言わずに押し通すに決まってる。

そもそも、私も彼の行動は全く把握できていないんだ。いやほんと、どこでなにしてるの？

「午前中は、いつも鍛錬所でお見かけしますわね。遠目から拝見しましたけれど、剣の扱いがとても美しくていらっしやって」

「まあ、そうですね？ 明日もいらっしやるでしょうか……」

きゃっきゃ、と場の空気が色めく。

あおう、一応「月の騎士」は「二の月の巫女姫」の婚約者っていう前提があるんですけどね？ 学者先生達にも、一応そういう方向で説明しちゃってるからね？ でないともっとややこしくなるから。

「騎士様は、本や演劇で描かれているような方ではないようですね」
「昨日の演劇の騎士様も素敵でしたけれど、私は本物の騎士様のほう
が……」

「凜としたあの黒い瞳で見つめられてみたいですわ」

本やら演劇やらに出てくる月の騎士はやたら饒舌だ。ぺらぺらと
これでもかというほど二の姫への愛の言葉をまきちらす。そして愛
ゆえにコロっとダークサイドに墮ちる。

すっかりしろ、騎士の本分を思い出せ！ と言ってやりたくなる。
(でも騎士って恋愛モノによく出てくるからあんなもんなのだろ
か)

とにかく、そんな性格に描かれているので、演劇における月の騎
士の役者さんはちょっと愁いを帯びた優男である。竜胆君とはだい
ぶ違う。かといって光山君にも似ていない。

光山君は笑顔でごり押しするタイプで、もって迫力があるからな
あ。

竜胆君はあまり表立ってきゃーきゃー騒がれないタイプだったか
ら、こうして彼のモテ話を聞くのは新鮮だなあ。

私は他人事のようにそのピンク色の空間を眺めつつ、微笑むのだ。

六月の脇役 その八

「あ、ほら、あちらです」

竜胆君のモチっぷりを目の当たりにした翌日。

私はお取り巻き達に（強引に）誘われて、訓練所とやらの見学に来ている。

このために早起きさせられたので、まだ頭が働かない。視界もなんとなくはつきりしない。足元もおぼつかない。ねむい。

私が見学する、というただそれだけのために、護衛用の人員配置やら、入場者のチェックなどという余計な手間まで発生させてしまったのも申し訳なくていたたまれない。ごめんなさいごめんなさい！
そしてこんな手間までかけて見に来たというのに、警備上、安全上の都合から、あまり近くには寄れないという。

……意味あるの？

「変わった構え方をなさいますのねえ……」

この世界の剣はいわゆる曲刀に近い形をしている。

武道には詳しくないからわからないけど、普段は竹刀か木刀、もしかすると日本刀も扱ってるのかもしれないが、とにかく、剣道のお作法で戦うには、いろいろ大変なんじゃないかなあ？
アーチェリーと和弓だって、大分違うって言うし。

阻止するつもりではいるけど、もしも決闘が実現した場合大丈夫なのかしら、と余計な心配をしてじっと目を凝らしてみると、おやおや、光山君が腰に下げていたのはなんだか違う剣ではないですか？
曲刀は曲刀だけど、あまり反っていないような。むしろサーベルっぽい形？

「あの剣は……」

「あれは王配殿下のご考案の、新しい剣でして……」

この訓練所の責任者さんが目をきらきらさせながら解説してくれたところによると、つまりあれは穂積さんの旦那さんが、元の世界から持ってきた剣をもとに作られた剣らしい。

曲刀に比べ鞘から抜きやすいので、若い世代に人気だとか。一方、保守的に曲刀を愛する人々も大勢いるので、訓練所にはどちらもそろえてあるのだそう。

確か私のひいおじい様も、戦争の時は家宝の日本刀をサーベル仕様に誂えなおして行かれたと聞くし、きっと曲刀よりは竜胆君も馴染みやすかったんだろう。

ところで、気が付かないふりを通そうかとも思ってたんだけど、竜胆君と打ち合ってるのって、タロちゃんだよねえ？

あれ、決闘って三日後じゃなかったっけ？

タロちゃんがぶんぶん剣を振り回すのを、竜胆君が軽くないなす。なにやら言葉を交わして、タロちゃんが構えなおして、竜胆君が頷く。打ち合う。

……もしかして、お稽古？ 剣道教えてるの？ なんて？

「殿下も、騎士殿の不思議な剣術にすっかり魅せられたようですよ。確かに、凜として流れるようですよ。常世では皆様あのようなの？」

「……色々流派はわかるようですが、一般的には」

ほお、つと感心の溜め息がお嬢さん達から上がる。

しかしね、君達。私から見れば曲刀の扱いのほうに興味深いんだよ。つまり、異文化って魅力的でエキゾチックに映るんだよ。

いや、まあ、竜胆君の身のこなしはきつと大したものなんだろうけど。運動音痴の私には、あまり判別つかんのだよ。

「殿下は母上様のお国に憧れが強くていらっしゃるのですわ。だって、お名前も常世風なのですもの」

「お父上から一文字とって子供に名前をつける、というのは素敵ですわ」

おや。モモタローというのは安直に、日本昔話からとったわけではないのか？ そういやあの方はなんて名前なんだろう。い、いまさら聞けねえ！ モか。モがつくのか？

私はとりあえず曖昧に笑って、頷いた。

私の名前は祖母から一文字もらっている。祖母の名を実^{みのじ}という。だからまあ、その習慣も全くの嘘っぱちというわけではないけれど。異文化って、絶対歪むものなのだろうか。

「わたくしどもはむしろ恐れ多くて昔の慣習にしたがっておりますが、庶民の間では流行しているそうです」

「女の子には、陛下やクミ姫の名前をそのままつけたり、二音の名前にしたり」

「男の子には父親から一文字とって二回重ねて、そのあとにタローと。……父親を超える勇敢な人物になるように、というおまじないなのですって？ 女の子を二音にするのは、どんな意味がありますの？」

しらん！ とは言えない。な、何か考えなきゃ。ごまかさなきゃ。（あれ、それより二文字取ってタロー、の次の世代ってどうなるんだ？）

「私達の国では、文字がそれぞれ意味をもっているのです。マリ姫

……陛下は、（たぶん）あまねく理を正しく学べるように。クミと
いうのは、永久に実り豊かであれという祈りの意味です」
要は、食いつばぐれたりしませんように、という、ある意味原点
に戻った名前である。非常に実用的だと思う。

「まあ、お二人ともなんて素敵なお名前でしょう」

「本当に。まさしく国を治めるのに相応しいお名前ですわ」

よかった、二音にする意味とやらからは話題がそれた。

「まあ、月の世界は随分と風流なのですなえ」

ちやほや、と口々に褒め称える声に、聞きなれない声が混じった。
含んだような、いかにも少女漫画の悪役のような口調。

周りの女の子たちの顔に緊張が走る。自然と分かれてゆく人垣。
お芝居みたいだ。

やってきたのは、オレンジの髪の毛……。

「ルクティティ様の姉君、ナナリー工様です」

誰かがそつと耳打ちしてくれたけれど、それは言われるまでもな
くわかった。だってそっくりだもん。一瞬本人が何かの拍子に育っ
ちやったのかと思ったくらい。

「ごきげんよう皆様。私達も巫女姫様とお話ししたいの。構いませ
んわね？」

ナナーさん（間違ってもナナちゃん呼ばわりできない。水橋さん
とは大違いだ！）は、羽扇をゆったりと揺らしながら、やつぱりお
取り巻きを引き連れて近付いてきた。

うわあい、あっちはオレンジ、赤、黄色とドレスの色が華やかだ
よー、羨ましい。いい加減、この紺色の集団を何とかしたいなあ。

「先日は妹がご迷惑をおかけしました。あの子、殿下の事になると

見境がありませんの」

ほうっ、と吐くため息にさえ、何らかの意図を感じる。あー、こんなおねーちゃんがいたら、ティティちゃんだってキツクもなるわ。

「巫女姫方や殿下のお名前は、とても個性的だと常々感心しておりましたけれど、やはり現世で生きるこの身には理解し難くて……」

ここでナナーさん組の女の子たちが一斉にくすくす、と笑う。そうか、あの夕食の席で笑ったのはこの一派か。

「下々の者達には受け入れられたようで、ようございましたね」
う、うわあ、毒々しい。

「けれども、わたくし心配でなりません。確かに月の都の風流さは素晴らしいですけど、太陽神様のことをないがしろにする輩が、特に民草には多いように感じられますから」

まあここ、元々月神信仰の聖地だし、大陸中央は月神信仰がメインだったんだから、どうしたってなあ。

「ルクティティが后となればあるいは落ち着くか、とも思っておりましたが……。最近また騒がしくなっているようですね」

じろりとこちらを睨む目にナナーさんの本性を見た。怖い！ ティティちゃんどころじゃない！

私も帰りたいたいのには山々なんだけどね。自力では無理なんですよ。

穂積さんが帰ってきたらお願いするとしても、あの異世界跳躍するのは例の遺跡に溜まった謎のエネルギーを利用してるとかで、タロちゃんが使い切った今、また溜まるまで数年かかるとか言われちゃったしな！

頼みの綱の光山君は……いや、それ以前に水橋さんは今頃どうしてるんだろ。ふ、不安だ。

「時期が来れば、治まるべき形に落ち着くでしょう」

私だつて、好き好んで年齢つりあつてるカップルの邪魔なんかしたくないよ。

「そう、願っておりますわ」

ナナーさんは、また笑顔に戻つて、立ち去つていった。

タロちゃんの婚約者の第一候補がナナーさんじゃなくてよかった、本当によかった、あんなんじゃないや喰われちゃうよ、と思つたら、実はナナーさんもすっかり候補に入つていらっしゃるらしい。年齢のつりあいの都合で、第一候補じゃないだけで。

「あの方は本当に恐ろしい方ですの。巫女姫もお気をつけくださいね」

「ええ、本当に。まるで@*+#&*のような人です」

……今なんか、翻訳魔法で訳しきれない未知の単語が出てきた。浮かんだイメージは巨大な青紫色のウツボカズラに牙が生えたような何か「きしゃああ」と叫んでいる図、だつただけ、何アレ。植物？ 動物？

「あの方よりは、ルクティティ様のほうがまだ……」

かわいげがある、と。

ティティちゃん、実は毎日ここに来ていて、タロちゃんの剣のお稽古を見ているんだつてさ。

そういうところは健気だ、というのがお嬢さんたちの言い分だけど、一歩間違えたらストーカーじゃない？

ふと気が付けば竜胆君とタロちゃんの練習試合(?)は終わっていた。しまった、見逃した！ 早起きした意味がないよ、いつもの午後のお茶会と変わらなかつたよ！

これではあまりに虚しいし、タロちゃんはこの後時間が空いてい

るといので、二人をお茶に誘うことにした。（今日の面会はキャンセルだ、キャンセル。質問攻めに疲れたから！）

と、いうわけで、軽食を兼ねたお茶会です。飲茶みたいなかんじ。

……ああ、春巻きが食べたい。小籠包、海老団子、シユウマイ、桃饅頭、胡麻団子。か、帰りたいよう！ と、いかん、意識が飛ぶところだった。目の前の二人に集中するんだ。

会ったばかりの頃とは、タロちゃんの纏う空気が違う。かなり穏やかになってるんじゃない？ これならもしかして、決闘云々は流れるんじゃないの？ ようし、遠まわしに探りをいれてみよう。

「随分、打ち解けられたようでほっとしました」

私が社交で大忙しだった五日間に、二人になにがあったというのか。友情だか師弟愛だかに目覚めた経緯を、聞かせてもらおうじゃありませんか。

六月の脇役 その九

今日のお茶は、香りに甘さがない。おそらく竜胆君にもあわせたセレクトだろう。ダージリンのファーストフラッシュにも似た風味で……。

「騎士殿と話しているうちに、気がついたのだ。母上が常世のことを私に聞かせてくれたのは……」

あー、こっちのパンはなんかこう、私が求めているものとは違うんだけどなあ。たまにはいいんだけど、今私は猛烈にクロワッサンが食べたい。

「……騎士殿は、私にそれを教えたかったのだろうか？」

もぐもぐ、ごくん。

あ、おわった？

長いんだよ、タロちゃんの一人語り。いや、質問したのは私だけどさ、次はもうちょっと手短にお願ひしたい。要点をまとめてから。

この子っいたら語りながらぐるぐるうだうだ迷って、一つの内容を終えるのものすごい時間をかけるんだもの。あれだ、政治家とかに向いてると思う。でも、帝王向きではないなあ。将来が心配だ。

ちらり、と竜胆君を見ると、彼はいつも通り黙りこくって、一見神妙そうな顔でお茶を見つめていた。

きらきらと、「正解にたどり着いたぼくを褒めて」なお目々のタロちゃん、非常に残念だけど、あれはね、彼のニューtralモードというか、省エネ状態なんだよ。電源オフではなくてスリープというか。要は、聞いてないんだよ、何にも。

夏休みに課題図書感想文を書くにあたり、本を読んでいる時間はなさそうだったので仕方なく私が要点をかいつまんで解説した時、その時もあんな感じだった。

そして「という感じのお話なんだけど、なんとか書けそう?」と聞いたら、彼はしばらくあのままで5分くらい固まっていた挙句……。

「すまない、ぼうつとしていた」
ほらみる。

「……むう。またそうやってはぐらかすのだな」
違うつて。買いかぶり過ぎだつて。

まあ確かに、あんな難しそうな顔で、いかにも深い事考えているようなポーズで、まさか本当にぼーつとしてるなんてちよつと信じ難いからなあ。そうでなくとも、仮にも「殿下」のお話を全く無視して聞いていないなんて、タロちゃんにはありえない現実だもんね。

そうか、タロちゃんはここ数日いつも竜胆君相手にこんな禅問答紛いなことをしていたわけだ。そりゃあ、悟りも開けそうだよ。角も取れるわ。

「巫女姫、騎士殿はほんとうにすごい人だな!」
「……うふふ」

なんと答えたらいいのかわからなくて、とりあえず笑つておいた。そこへ、ノックの音。おや、タロちゃんのお勉強の時間かな?

「ご歓談中失礼いたします。……ファイフィーナ様が戻られました」
な、なんですとお!
「ファイフィーナが?」

タロちゃんがパツと顔を上げて弾んだ声を出した。

ファイフィーちゃんが戻った、ということは月の騎士がニセモノだとバレるってことなんだよなあ。決闘の話はお流れになってくれそうな気配だけど……。

あれ、でもファイフィーちゃんは穂積さん夫婦とどっかに行ってたんじゃないかったっけ？

「父上と母上は？」

「ファイフィーナ様だけ、急ぎ戻られたようです。巫女姫様にご挨拶したいと」

そうか、そうだよな。わざわざ視察切り上げたりしないよね。いや、でも、うう、会いたいような会つのが怖いような。(どきどき) タロちゃんが許可を出し、扉が開かれる。

「失礼致します。……ああ、巫女姫様！」

たつ、と音をたてて駆け寄ってくる、真珠色の髪の毛の……、あれ？「お久しゅう御座います、巫女姫様」

あれえ？

「ファイフィーちゃん……？」

「はい、お懐かしい巫女姫様」

ニッコリと笑ったファイフィーちゃんは、凜々しかった。凜々しいって言うか、あれえ？ 誰かに似てない？

長い髪を横に流して下の方を三つ編みにしていた誰かさんに。あの人は薄緑色の髪だったけど。あー、まあ、親戚だからなあ。でもさ。

「男の子、だったの？」

「いいえ、巫女姫様」

ファイフィーちゃんはクスッと笑った。か、かあっこいいい〜！
そうか、ファイフィーちゃんは男装の麗人さんになったのか。ユー

シウス殿下にそっくりだけど、かつこいいよ！ ユーシウス殿下から尊大なところが抜けた感じ。

「陛下をお守りするには、この方が動きやすいので。巫女姫様はお変わりなく」

私がトキメキにきらきらしている横で、タロちゃんがぷーっと膨れて言った。

「フィフィー、騎士殿はお前が言ったような悪者ではなかったぞ！とても立派な方だった！」

はっ、デレデレしている場合じゃなかった。やばい、どうしよう。

恐る恐るフィフィーちゃんの視線をたどり、それがまっすぐ竜胆君に向けられている事を確認し、もう一度戻す。頼むから、うまく誤魔化して！

フィフィーちゃんはなんとなく含むように頷くと、竜胆君に頭を下げた。

「お久しぶりです、騎士殿」

タロちゃんを「お勉強の時間ですよ」と追い出して、ついでに人払いもして、私と竜胆君とフィフィーちゃんは密談を始めた。

「先程は失礼致しました。はじめまして、もう一人の騎士殿。フィフィーナと申します」

フィフィーちゃん、いや、もうフィフィーちゃんって呼んじやダメか。フィフィーナさんか。寂しいけど。

フィフィーナさんは、私に手紙を二通差し出した。

「陛下と……カイト殿からです」

「えっ」

「モモタロー殿下が月の騎士を取り違えたとなれば、国の威信に関

わかります。どうか陛下のご提案に乗ってはいただけませんか」
そう言つと、彼女は「また後ほどまいります」と告げて出て行つた。

「ご提案つてナニ、と思ひながらも頷く私と竜胆君。光山君が穂積さん達と一緒にいるらしい今、他にどうしろと？」

「えつと、手紙、読むね？」

まずは光山君の手紙から。

「『おどろいた？』」

驚いたよっ！

一言目から思わず握り潰しそうになり、呼吸を整えるべく一旦お茶を飲んだ。クールに、クールに行こうぜ。

「『オレのところに連絡が来たのがだいぶ遅かったから、事態はかなり進んでいるだろうと思つてとりあえず穂積さんのほうにどう納めるつもりか確認に来たんだ。王配殿下はなかなか面白い人物で、意気投合しちゃったよ。それで、一芝居打とうということになった。詳細は穂積さんの手紙にあると思うけど……、楽しみにしててね？』」

ぜんっぜん楽しめそうにない雰囲気なんだけどな！　なんだよ、

王配殿下と意気投合とか、どんだけ恐ろしいタッグを組むつもりなんだ、光山君！　本気で魔王になるつもりなのか光山君！

「ふ、不安だね」

「そうなのか？」

残念な事に竜胆君にはこの恐ろしさが伝わっていない模様。あー、そっか、穂積さんの旦那さんを見たことないもんね。

穂積さんの手紙を読むと、その不安は確信へと変わった。

「なにこれ、なんなのこの大人たち！」

芝居の内容は、つまり少年の成長記だ。

生まれた時から帝王になるよう定められている少年。しかし彼は生まれつき孤独を抱えていた。孤独ゆえに人に認められることを渴望した。彼は神話の中の捕われの姫君を救い、英雄になろうと決心する。

ところが、実は神話の裏には隠された真実が……！
と、いうシナリオだった。

どんな顔してこのシナリオ作ったんだろう、あの人たち。自分の息子が、よくわかんないけど孤独に悩んでるの知ってたなら相談にのってやるなりするべきじゃないの？

あんなにウザ……失礼、しつこ……でもない、ええと、ストーリー紛い、でもなくて、とにかく幼馴染がいて、そうでなくとも蝶よ花よと大事にされて、私のかわいかった（過去形）フィフィーちゃんに絵本を読んでもらうような生活してたのに孤独を抱えていた、
というのは理解に苦しむけどさ。

タロちゃんたら、わずか10歳にして大変な苦悩を抱えたものだ。まあ、地球時間で換算すれば13歳の子と同じだけ生きているのだから、頭の中身はそれなりに育っているのかもしれない。

つまり穂積さん夫妻は、国民を巻き込んで芝居を打ち、タロちゃんに自信をつけさせようと目論んでいるのだ……！

六月の脇役 その十

「ごお〜ん、ごお〜ん……」

低い鐘の音が辺りに響き、重い音を伴って城門が開いてゆく。

道を挟んで左右にずらりと並んだ兵士達が、波が引くように順番に片膝をついてゆく。

その間を、艶やかな黒髪の女性を通る。女性の髪は一度高く結い上げているにも関わらず腰よりも伸び、彼女の歩みに従ってゆつたりとうねる。着ている黒いドレスよりもなお黒く、それは吸い込まれそうな闇色だ。

女性をエスコートするのは大柄な男性。その白皙の美貌は眼光鋭く、見るものを否応なく従わせる武器にもなるだろう。オレンジ掛かった金の服にさらりと掛かる金の髪。それは太陽のフレアが踊るさまにも似ている。

二人はゆつくりと、城へ続く道を進む。

……と、ゆー、穂積夫妻のご帰還風景を、お城の真正面にこやかに微笑んでお迎えしているわけですが！

なんか、うん。良い言い方をすれば厳肅なんだけど、はっきり言っただけ辛い。

ふつー国王陛下ご帰還とかいうシーンではファンファーレじゃないの？ 悪いけど葬列みたいだよ、左右の皆さんも近衛兵の正装だとかで半分は紺だしさ。反対側のオレンジさえもくすんで見えるよ。

私の右隣には竜胆君。そして二人の間、ちよつと前方にタロちゃん。

タロちゃんは両親の帰還がうれしくてにこにこしているのに、竜胆君は硬直している。これはご夫妻の迫力に緊張しているためというよりは、見栄えのために久々の超ハイヒールを履いている私を支えているのが原因だろう。女の子に免疫なさそうだからな。

私は、というと、別な意味で緊張していた。帰還を知らせる鐘の音は、つまり「計画」の開始の合図と同義であって……、ああ、もうどうにでもなれ！

穂積さんご夫妻が、丁度三分の二を通り過ぎたあたりで歩みを止める。穂積さんを庇うように、旦那さんが一歩踏み出し、やや大げさに彼女を後ろへ押しやった。

その更に数歩先に、唐突に炎が現れる。そこで初めて、その場が騒然となった。

炎は瞬く間に大きく円を描き、周りの兵士達を跳ね飛ばして広がり、さらに仰々しい魔方陣へと姿を変える。一度ぼうつと白い燐光を放ったかとおもうと、五紘星の形をした光の柱がまっすぐ天に伸びた。

ひいいい、なにあれ、CG？

柱の中を、ゆっくりと舞い降りてくる仮面の男。真紅のマントを翻し、彼はゆつたりと着地した。そしてこちらに振り返って手を差し出し、口元を歪めて嗤った。

「我が姫よ。迎えに来た」

魔王様、ノリノリです。（ウンザリ）

タロちゃんプロデューズ計画……。それは、タロちゃんが心酔している月の騎士にさえ倒せなかった敵を、タロちゃん自身に倒させちゃうプロジェクトである。ほら、あれだ、「師匠の力タキだっ、思い知れっ」ってやつだ。

ついでに月の騎士と二の姫のお話を、修正する計画でもある。

キャスティングは主演、タロちゃん。守られるだけのお姫様、私師匠、竜胆君。そして悪役の魔王様を光山君が引き受けた。穂積夫妻はあくまでも見届け役。

つまり、竜胆君が光山君に倒されて、光山君をタロちゃんが倒す。物語としてはありがちで単純明快なんだけど、それゆえに細かい矛盾点をどう取り繕ってゆくかが問題だった。

手紙を寄越した翌日、計画の詳細を練るために穂積夫婦のもとからこっそり城へやってきた光山君を交え、三人の秘密の会議が始まった。（なんで私達がこんな裏方仕事せにやなんのだ、メインキヤストなのに！）

とはいえ、お芝居の台本作りだと思えばわりと楽しいかもしれない。去年の文化祭は受付しかなかったしね……。

私は「は〜い」と手を挙げた。学級会のノリで。

「とりあえず、みんなの前で派手にやらかすなら、何故穂積さん達が手を出さないのか。この矛盾の解決からなんとかするべきだともいいます」

これに関しては光山君がアツサリ答えを出した。

「そりゃあ、国民を守るために結界を張らないと。魔王の放つ瘴気を封じ込めるのに精一杯なんだよ、きつと」

瘴気放つ気なんか、アンタ。

私がぎよつとした目で見たのに気付いたのか、彼は「もちろん、実際はただ眠くなるだけの空気だよ。それに色をつけるだけ」と補足した。あゝ、どっちにしるその空気に触れたらパタパタ倒れていく、ということね。

つまりかぐや姫のアレですな。

「魔王より弱いのか？」

「まあ、二人は神様の御遣いであって、神様じゃないしね」
ふうん。まあいいや、じゃあ次。

「それじゃ、タロちゃんにやられちゃうのはどうして？」

「うん、月の騎士を倒して、油断してたから？」

「そのへん、なんとかわかるようにアピールしないとねえ。でないと、今度は陛下のご威光というものに関わってきちゃうしねえ」
うゝむむむむむ。

「……俺は、具体的にどうやって倒されたらいんだ？」

おお、竜胆君が珍しく積極的だ。やっぱり、懐かれたらタロちゃんがかわいくなつたのかな？ やられ役だけど、せめてカッコよく倒れたほうがいいよね？

「実際、剣ではオレより強いだろうし、切り結んで負けそうになつたオレが竜胆君を魔法で吹き飛ばす、っていつのでどうだろう？」

「うわ、魔王様セッコ」

「魔王だしねえ」

光山君はにこつと笑った。

「オレには騎士よりこつちのほうがあつてるところなんだよね」
さすが、自分をよくご理解なさっているようだ。

六月の脇役 その十一

「でも、魔法で吹き飛ばすなんて危険じゃ……?」

「もちろん、威力は無いに等しいよ。……竜胆君、ちょっと見てて光山君はすつと指で空中に線を引いた。」

指先の動きを追うように赤い文字が現れて、前方に飛んでゆく。

ほあ〜、特撮だあ……。

「これ、実はペイントするための魔法なんだ。これを飛ばすから、竜胆君はタイミング合わせて後ろに吹き飛ばされたフリをしてくれるかな? 本番はもつと派手に演出するから、効果と併せれば切られたように見えると思う」

「ああ、わかった」

そんな安請け合いして大丈夫なのだろうか。できれば練習しておいたほうが良いと思うんだけどな、殺陣シーンも含めて。

そして何より、竜胆君はうまく「やられたフリ」ができるのだろうか。ああ、不安!

……まあ、その辺は二人で話し合うが良さ。時間は無限ではないし、私の睡眠時間のためにはとつと次の話題に移らねば。夜は短し眠れよ乙女、だよ!

「で、魔王はどういう設定を背負っているんですか?」

「うん、それはモーリス殿下から候補を挙げてもらってきたから……」

モーリス殿下とな? (きよとん)

は、旦那さんか。旦那さんの名前は「モーリス」なのか。

に、似合わな〜い。だって同名の映画のイメージが強くて。モ

ーリスっていうと、こう、線が細くてついでに意思も弱くて流されやすい人っていうイメージじゃない？ あの方とはだいぶ違うよ。

光山君はどこからともなく紙の束を取り出した。どこにしまったの？　なんて、突っ込まないんだからね！

「民間伝承にあるメジャーな悪魔や、幽霊なんかをね。悪役をそっちにシフトさせて、月の騎士の汚名を雪ぐ方針だよ」

汚名を雪ぐったって、実際ここを見捨てた時の様子見てりやあ悪役扱いも無理ないと思……いや、なんでもないです、はい。命の恩人です。（ぺこぺこ）

「で、イチオシがこの『紅蓮の悪魔』ですか」

「月が黒、太陽が金。そうすると、色が映えそうなのは赤だろうって」

確かに、他の候補である「霧の怪人」やら「歌う死神」よりインパクトはあるよね。「歌う死神」ってのも、なんだか気になるけど……なになに、誰もいないはずの森の中で歌声が聞こえてきて、それを聞いた人は死ぬ？

じゃあ誰が存在を世に広めたんだよ！　都市伝説ってというのはほんとに、そういうところいい加減だなあ。

紅蓮の悪魔というのは火事の象徴だそうな。

魔法もない、消防設備もろくにないこの国では、火が出たらおしまい。風向きと運次第で集落が丸々一つ焼き尽くされたりするのでおおごと大事なのだ。怖いね、火事って。

そんなわけで、この悪魔は「ランプの火をつけっ放しで寝ると紅蓮の悪魔が迎えにきますよっ！」みたいな感じでかなり生活に根付

いているらしい。

意外と庶民的じゃない？ 完全に火の用心の標語扱いされているよ？ そんな悪魔を、本物の恐怖の魔王として具現化させようってのか。

モリス殿下曰く「なににせよ、国をまとめるにはわかりやすい国家の敵が存在するほうがやりやすいのだ」ということらしいです。せ、政治って……。

「彼はわかりやすくインパクトの強い悪役を御所望だよ」

それから、台詞回しは大げさで構わないって。と、光山君は付け足した。

……つまりは見世物になれってことね。

後ろ暗い会議をすること三日。

その間も、日中の竜胆君はタロちゃんのお稽古。そして私は社交に精を出し、20年前（になるらしい。私にとっては10ヶ月前なんだけどなあ）に何があつたのかを適当に匂わすような工作をしてまわった。

そして今、幕が上がったのだ。準備期間三日のお芝居なので、とにかくインパクトだけで観衆の度肝を抜き、何がなんだかわからないうちに撤収ということになっている……んだけど、うまくいくなあ。

光山君の衣装は黒い裏地の赤いマント。他は暗めの赤で統一されている。仮面は顔の上半分を覆うタイプで、たぶんヴェネチアンマスケットってやつに近いと思う。

このイカれた衣装一式は、わざわざフォレンジアの王宮お抱えの劇団から借りてきたそうで、姫君三人によるコーディネートだ。

ああ、きゃあきゃあとはしゃぎながら選んでいる様子が目に浮かぶ。きつとこつちにも来たが、ただらうなあ、っていうか、来てないよね？（ときどき）

また卒業式のときみたいにスタンディングオベーションなんてやらかそうものならぶち壊しになっちゃうから、あちらでおとなしくしてくれてますように。

「姫……。20年前は逃したが、今度はそうは行かぬぞ」

光山君改め紅蓮の悪魔が、一步、また一步とこちらへ踏み出すたびに、赤い半透明の空気の波がきらきらと揺れ広がって、それに触れたものがばたばたと倒れだす。

モリス殿下が大声で「いかん、皆、下がれ！あの瘴気を吸ってはならぬ！」と叫んで、いかにも「今はこれが精一杯」的な顔で結界を張った。

半球型の結界は私と竜胆君、光山君、そしてタロちゃんと、あとは護衛の人の一部だけを外から隔離する。これで余計なところからの余計な手出しはできなくなるというわけだ。

穂積さんは倒れた人の治癒（まあ、寝てるだけなんだけどね）をしながら、タロちゃんを時折心配そうに見つめる。演技細かつ！

私と竜胆君にはあらかじめ魔法効果を無効にする術とやらが掛けてあって、赤い空気を吸っても眠くはならない。しかし護衛の皆様はくたたりと倒れ付し、タロちゃんもふらりとよろけて膝をついた。

よしよし、ご両親の言うとおりの魔法耐性が未熟で助かった。プランBへの変更はナシ、と。

私は彼の身体を支えながら、なるべく気丈そうに見える顔を作っ

て魔王を見返した。がんばれ私、女は生まれた時から女優なのよ！

「『紅蓮の君、私は申し上げたはずです。あなたと共に行く事はできません。この世界を滅ぼそうというあなたの手を取るなどありえません』」

魔王というのはとりあえず世界を滅ぼす存在だよ。その裏にはきつと魔王なりの理由があるんだろうけど。

その辺を想像するのは後の世の人のお仕事ということで、割愛。

「ではどうする。太陽の結界を解けばこの場の者は死に絶える。しかし結界を解かねば逃げられぬぞ？ 頼みの騎士は……あの時の傷が、まだうずくのではないか？」

魔王がすらりと細身の剣を抜いた。あー、レイピアちよー似合う

……じゃない、演技に集中！

竜胆君がやはり剣を抜いて私達を庇うように前に立った。

私はタロちゃんの身体をぎゅーっと抱きしめて、あらかじめ光山君から「預かっていた」魔法を起動させる。おー、光った光った。私とタロちゃんが光り始めた。

これで、光山君と竜胆君が戦っている間に時間を掛けてタロちゃんを回復させるらしい。

……今度は、斬り合いを生で見られちゃうんだなあ。（フクザツ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0126r/>

脇役の分際

2011年10月13日21時19分発行